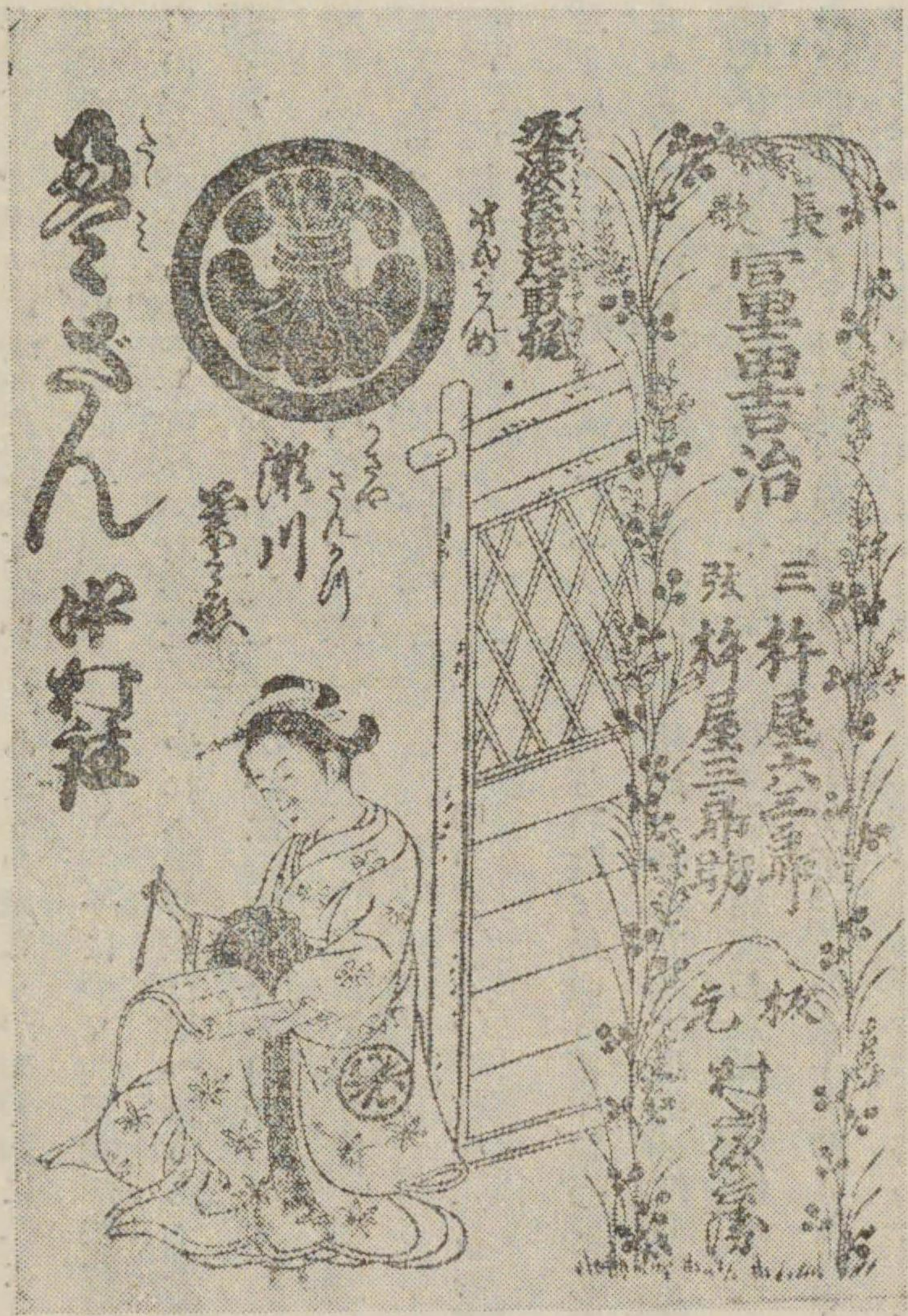


きりくたかつま風俗よしや渡り逢瀬の天の川稀の逢瀬
を待つや待たる、七夕に渡せる橋へ鶴の、羽は紅
葉の照りく添へて、初心恥し人目忍ばし鼓唄花の姿に

山谷土手道衣紋坂面白や、あんまり浮かれりや浮名も
立つにくこれも他生の縁の絲結び留むる君が玉章。
○めりやす壘さん

秋草荻萩も裾が濡
る、ウタ如何な夜
も日も人こそ知ら
ね合情知らぬは徒
人と見えつそれ何
でもお隠れつ合月
の面影うつすか通
ふ姿の伊達模様合
肩は富士なり裾は
田子、千鳥葦邊の
立つ波はウタ、ウ
つ、宇津の山邊
の夢は一富士ナアンオ、それくくそれくそれく
来たのに其方は秋の風徒に吹来る三ツ花は三吉野や、月
は武藏野に何を何と眺に盡されぬ向もよし吉原戀の一、



て合言ひたき心タクシ数々の胸にせまるを言残す、名木
薫らすその節に、忘れぬ君を壘さん。
○めりやすかみ心

明和六年十一月、中村座。作曲者村屋六三郎。
三下り世の憂さは戀と義理とに任す身のカン我は幾せの
物思ひ三ノギンほんに船にも車にも積まれうものか三ノギン
ガハリ何のその廣い浮世を只一筋に合思へばく胸せか
れ、泣いても詫びても叶はぬは、結ぶの縁の三ノギン綱切
れて合三ノギン愛し男と梢の花もオン散るか逢はぬか疊算
ハル憂き川竹のその中に三ノギンイロ末を頼みの二世三世か
けて結ぶや神心。

○楓葉戀狩衣

明和六年十一月、中村座。作曲者村屋六三郎。
手を鳥兜狩衣を肩に打掛け振りかたけ、顔は紅葉の照
りく添へて紅葉いよこの紅葉眺めん、色々の錦織るて
ふ遠山の合焦れ焦る、小牡鹿の妻戀ひねて憂き寝焦る、
ギンカハリ紅葉を合踏分けて行く、行くも紅葉歸るも紅葉又
行く先も紅葉、紅葉の蔭に宿れば露にもあらず雨にもあ
らず況して雪霜霰にあらず亂れ吹下し袂にはらり裳裾に
はらりさらりくさらくさつと落葉朽葉の色も珍ら

し、翳の枝も照添へて、あら面白の樂の音や鼓唄舞の
袂を引留め縁がありやこそ逢瀬もあるに文は千束に積る
思は白雪と消えも果てなん我が心、男持たすば芭蕉葉に
一人寝る合松の落葉にこちやく二人合寝る、散るや
紅葉も心せよ、夜遊の舞樂も時移り合時移りかゝる調は
面白や合太鼓打つ音の響よやく、千秋樂と舞納め合
く興に乗する一奏。

○色鹿子紅葉狩衣

明和六年十一月、市村座。作曲者富士田吉治・村屋作十郎。
名に高尾梅の尾通天龍田川、流れく紅葉の色も、そ
のほどく合紅をさすが美しき、娘風俗徒、髪合結
び髪、顔は紅葉のあ、恥しさ合戀しき殿御とつい新枕交
すその夜はさぞ嬉しかる合女心のくどくと、あどけな
いのも戀には智慧の増鏡合曇り勝ちなる時雨月合出雲に
まします神々を、頼む折節よい男山合、俺が旦那を、
褒むるぢやないが合連歌俳諧歌も詠み候お茶なども合活
花琴の音合胡弓三味線打囃し合舞はお家の武士も戀に焦

る、戀人様を取持つ我等にお禮とは、取附く袂振切れば、戀は曲物く、合やつこのくこの文を御覽ぜよ合手枕の合夢を覺ますもよしや蘆屋釜君の濃茶と載きながら縁の薄茶はこちやく嫌よ、二世も三世も變らじと合わたしや思へど殿御の心は白雪の、積る恨と世界の無理も、きぶねへ溜りし落葉時合梅もえ櫻も春待ちぬらん合花嫁花婿しやんと揃ひし衣紋つき、色を直して金屏の内ぞゆかしき風情なり合朝な夕なに合見る鏡山合いざ立寄りて戀話合私は水仙お前は牡丹、加賀染に陰と日向の二つ紋、着たわいなく、さりとはく末の約束吉野草合いかいお世話も力草冬景色に山々を見渡せば合錦に染まる中に何時も變らぬ松の色合いざや落葉を搔かうよく、里の子供が連立ちて、草薙る笛吹く面白や合尉と姥との樂みも、何れ久しき名所かな合賑ふ門は住吉の松勇みし常磐五葉の松、君と我とは相生の松、小松設けて合首尾の松、枝にも杖つく滋賀唐崎の松を見に、北野の七本松も榮えつ、今を盛り若松の形よし振よし三保の松原ちよと越えて、東にも見ゆ富士の空色、三つの

明け合門松背戸松夫婦松、春の心地や勇む顔見世。

○彩色群高松

明和六年十一月、市村座。作者與風亭。作曲者富士田吉治
藤間勘左衛門。靜御前尾上松助、鷺尾三郎佐の川市松、那須與市大谷廣治。

廣次セリフ 扱も過ぎつる壽永の秋、九郎御曹司義經公、鎌倉殿の下知によつて、平家の一門立籠る須磨の内裡を攻落し、それより四國の波の上、赤間が關壇の浦の船軍こそ目ざましけれ松助一頃は如月廿日の朝風、今日ぞ源平晴れ軍と、響並べ簾をとぎ市松一よき敵こそござんなれと、勢ひかうでぞ見えたりける廣次一かゝりし所に沖の方より、汀をさし小船一艘漕ぎよする松一舟の内にはやんごとなき女房の、柳の五つ襲に紅の袴を着て、日の丸の扇子を杖に挟み、舟の舳先に差上げて、是を射よとて指招く市一判官遙かに御覽じて、敵船の扇的、今日の勝負只此の的の一つなりと、諸軍もためらふその所に廣一その時某辭するに及ばず、下野の國の住人那須の與

市宗高御前に候と、いふまあらせず駒引寄せ、ゆらりと打乗り海に入るヘル折しも北風烈しく吹く。合磯打つ波も高ければ船をゆりあげ漂へば。合地色一中扇も串に定らず。沖には平家船を並べ。陸には源氏の諸軍勢。馬を控へて見物す。廣一その時某腹帯をしめ馬を渡間。浮り船を目あててに弓と矢つがひ南無や八幡大菩薩。別して生國宇都の宮。那須湯泉大明神。扇子の只中射させてたべと祈念のうち。風もをさまる海の面的も射よけに立ちたりける廣次一これこの軍扇日輪月輪市松一サア扇子的は唐土にも大公望が武備の大秘松助一輪を除け射落す事由基が傳親の故實廣一サアその道理を知つたる故要際を一すよけ射切れば要はばらくく。淨り一夕日にうつりて皆紅水は白波立田川。秋の紅葉の。散り亂れ。浮きぬ。沈みぬ流るれば。平家は舟ばた源氏には射たりや與市と譽むる聲暫しは鳴りもやまざりき。松助一かほどゆしき船軍、四國九國切躰け、源氏の御代となつたりしも市松一判官殿の勳功ならずや、さほど功ある大將を廣一イヤくさのみ功ならず、今の話の船軍、源氏の勝利とどよめく

聲々、能登殿無念に思はれて、とても傾く運命なり、敵將義經と引つ組んで、刺違へんと大童になつてぞ尋ねらる松一義經公は船端に諸卒を下知して立給ふ浮り合一そのゆゑ、しさを言の葉に、何に譬へん紫裾濃。コハリ威風凜々堂々と。唐土日本に例なきあつばれ稀代の大将やと、敬ひ申すも理なり廣一能登殿それと見るよりも、判官と見しは僻目か教經が手並の程、いざや勝負と躍りかゝる松一義經につこと打笑ひ、とめて見られよ教經と合一いふより早く能登の馬飛びかゝらんと見えけるが市一安藝の兄弟是にありと教經にひたと組む浮り地一その際に御大將長刀小脇にかい挟み、味方の船へ飛鳥の如く合ひらりと飛んで合舟やぐらにすつくと立つたる早業は八艘飛と末の代に言傳へしも是なるかや廣一越中の次郎兵衛盛次是を見て腹立や我れ義經を討ちとめんと兵船數艘に勢を進め、打寄せくこれを射る一義經諸卒に下知をなし、かゝれやかゝれとの給ひて、眞先に進ませ給ひ、馬の太腹ひたる、迄打入れく戦ひ給ふ廣一盛次是ぞ判官よと熊手をおろしてつぶとこそ打ちかくる浮り地一其時

何とかしたりけん。大將弓を取落し波にゆられて流れしかば松一其折しもは引汐にて市一遙かに遠く廣一流るゝ弓を揮り一敵に弓を取られじと義經駒を泳がせて敵船遠く。フシスカスなる所に廣一盛次は勇みをなし市一義經の流るゝ弓を揮り一取らん引かんと争ひしは合露を含める初花にたはるゝ合蝶をから猫の翼目がけて追廻すも、かくやと思ひ白眞弓。小蝶の羽風合ひらゝゝ。合狙ふはから猫鈴の音鎧の金具。合からゝゝ。地色からまき引かんとあせるうち。義經弓をなんなくも取り得給ひしその振舞。クル上危ふ三重かりける次第なり。

○隈取安宅松

明和六年十一月、市村座。作曲者富士田吉治・藤間勘左衛門。通稱「安宅松」。武藏坊辨慶實は鞍馬山僧正坊化現市村羽左衛門。

次第一旅の心は篠懸の、く、露けき袖やしをらん合都の外の旅の空日もはるゝの越路の末思ひやるこそ遙かなれ合 地カ、リ一東雲早く明け行けば、浅茅色づく有乳山氣比の海合宮居久しき神垣や、松の木の芽山、なほ行先

ても揃うた子寶合一度に問へば乙よ、けさよ合辰松ゆる松だんだらいなごにかいつくばう合ひつゝくばう、かいつくひつづく、しゃんゝ扇に馴染む風の子や、風の木の葉の散々に 三重里をさしてぞセリフアリゆめゝ疑ひ荒磯の、砂を飛ばす土煙、梢木の葉もはらゝゝ、俄に吹来るはやち風、天地も一度に鳴動して、岩石古木ゆさゝゝ合どろゝどつと山風の、風かあらぬかその姿、見失ひてぞ三重立ちにける。

○初深雪都花

明和六年十一月、市村座。作曲者富士田吉治・杵屋作十郎。

一されば都の物語、概略お聞きなされて下さんせ、名所古蹟は筆に及ばぬ神社御寺に戀の里、大内山の面白や合一祇園清水音羽の瀧に、地主の櫻も袖や袂へ散り来る合散り来る散りかゝる合花の吹雪か花か雪かと見まがうて三吉野はさぞなほん、梶が茶見世の忙しや合春は花見の二軒茶屋合色めく賀茂川涼みの景色合秋は月見の安井邊合雪は叡山都の富士と詠むらん一花の姿の御所風俗は合雪

に見えたるは、杣山人の板取、川瀬の水の浅生津や、末は三國の湊なる、蘆の篠原波寄せて、靡く嵐合の烈しきは、花の安宅に着きにけり合方本調子落葉搔くなる里の童の、野邊の遊も餘念なく合こりや誰が目つき、ちつちや子持ちや桂の葉、ちんがちがくゝちんがらこ、走りゝ走り着いて先へ行くのは酒屋のおてこ、後へ退るはおほかみ狐、尼が紅付けて父や母に言はうよ、言ふたら大事かそつてくれよ、坊主坊主大坊主（後に「葉越しのく月の影」と改む）。二上リ下リ一裏のなア、裏の背戸の今年竹合笛にせうもの草笛に、笛になりたや忍ぶ夜の、笛は思を口移し、ア、しよんがいなゝゝ合一忍ぶ合忍ぶその身は安宅の松よ合雪の夜毎の汐風に、揉まれゝゝて立盡し、ありして合これしてしよんがいな、面白や絶えずや合子絶えずや子寶一に千石米藏合常陸の國の角岡に黄金の花が咲いたよさ、につこり合はつこりホ、ゝゝ、合お笑ひ召したは悉皆在所の、庄屋殿だんべい、いつかいつつかい、いつかい俵に酒樽千倍萬倍合萬倍萬々倍打つて置けしやんゝ合一神の鈴はしやんぐゝと、さつ

の柳と三重の帯合吉彌結びはお屋敷風俗、松に積りし雪の顔合町の風俗梅が枝に雪合田舎風俗柴垣に、雪の素足は里風俗の、蔦に雪降るしどけなき、駒下駄履く人西陣に、織出す錦の腰帯や合色なら品なら言葉なら、都育ちのしをらしや、京の観音伏拜み、大慈大悲の高臺寺、育上げたよ姥櫻合盛り久しき尾上の鐘の響くらん合民の賑ひ喜びの、積りゝゝて六つの花合梅の顔見世嬉しけに、御最負頼み上げます。

○春寶東人形

明和七年正月、中村座。作曲者杵屋六三郎。

一目さへ覺むれば稚心のもがにこゝゝにここと笑ひ顔、友達連れて花見せうゝ合あの山見さいこの山見さい、鳥の羽音に散るはゝ合散來るの雪かの合花かの雪も花も嫌々、買つて貰つた玩具はびいゝや、風車不倒翁振鼓羯鼓太鼓の音も面白や、打つや打つゝつんとつとんゝあの子はゝ何して後からちやつとゝ御座いの、三人持ちし子寶の、總領息子は大概で、父の前でも

懐手、ものを言うても返事せず、二番息子は脊高く、三番息子は悪戯で、悪さ盛りの六つ七つ、中で愛しさ血の餘り、肩に打乗せ都の名所、廻れ、風車、稚遊のしどけなく、小倉の合野邊の一本薄、何時か穂に出て亂合ぶ、尾花来いとて招く手許に、露もたまらず散り、んの、裳も袖も濡れ候々、お玉こんがれ焦れて飽果てつらひのつらいのそよぢや、櫻曇りに今日の日も合暮は綾羽のとりぐな、暮は綾羽の貢物、供ふる御代こそめでたけれど、手箱の内にぞ納めけり。

○釣狐春亂菊

明和七年正月、中村座。作曲者杵屋六三郎。通稱「釣狐」。文化七年正月「其佛春亂菊」と改題して市村座上場。

「我は化けたと思へども、只あさましきこの身なり三下り、鶏は八聲を告渡る犬は己が門戸を守る、我は願も有明の、盡きぬ思は畜生の、暫しは離れぬ、姿は伯父の白藏主見えつ隠る、細道、此處に野末の狐釣り合良に鼠をとろくくと、熊の油や木の實の油くさアとろる付けて鼠をかけて、あけて釣手のよいやさ、氣を配りま

だ秋ならぬ春の野に、かけ並べたる狐良、鼓眼なう憎や恨みや獵人の、野干の性根を誑し、切るに切られず抜けられぬ、煩惱の深き思に絆をかけて、身に染渡る夜嵐に、衣紋繕ひ鬢搔撫て、忍ぶ夜の、障は冴えた月影、更行く鶏鐘それに嫌なは犬の聲、ぞつとした姿恥し人目恥し、往なうやれ我が住む森へ歸らん、春の梢も面白や。

○めりやすこゝろの五文字

明和七年正月、中村座。作曲者杵屋六三郎。

三下り、出づる月三ノギン出づる日よりも忘れられぬその憂き事を摺る墨の合中ギン筆の命毛心の思ひ、我のみ知りて白眞弓、引別れつ、過ぐる夜に行暮れて野には臥すとも山櫻合三ノギン散るも徒なる武藏野に、露のこの身の三上置き處。

○山櫻姿鐘入

明和七年正月、中村座。作曲者杵屋六三郎。

「自と申すはそも分ある廓に住馴れて、面影装ふ化粧坂少將の夜の雨、降りみ降らすみ定めなき、替る枕もいつ

その時時致さんに任さんと、女心の一筋に、富士と淺間にあらねども、煙草薫らす疊算、早や黄昏にぞなりにける「思出せば過ぎし頃合箱根にありし兒櫻、はつと梢に舞の袖、移す姿の恥しや、徒し男の徒花ならば、他所に散るとも心の匂合床の色目と薫りくつさつて、口説半で戻るのが、さりとては聞くに思は増穂の薄亂れ逢ふ夜は男の癖に、掛けて打つのと弾く三味線の、手練手管にしたらいで、ヨオあの人はいくちと嗜まんせ外に障のないものか何ぞの様に、アレ悪性えほんの事なら嬉しけれど、嘘ちやあろもの合誓文くつされほんに我は殿御に狂ふ蝶「我が姿蝶や胡蝶となるならば、合何音に遊ぶ合君に逢ふてふ新枕、雌蝶雄蝶の合夜は諸共にふせてふ合敵に向へば鐘蝶合名をば揚羽の蝶の戯れ面白や、山寺の山の合鐘撞く法師の時知らぬ合別れ鳥合春の夕暮来て見れば合入相の鐘に花や散るらん、暮初めて鐘や響くらん三下り、さつさそれく、花のお江戸の宿入り、ふれく春雨に、三蓋笠三笠春日の山は紅葉傘、合きよて形よて、形よてきよておつとり揃へてしやん、合花笠塗

笠目塞笠時雨笠加賀笠待てば甘露の日傘も網代笠合向通れやるお聖の、笠に梅の折枝一重か二重か見事に見事によく揃うた、花の姿の揃ふ見事え三下り、さる程にく寺々の鐘月落ち遠近人に立舞ふ姿恐しや、面色變りて、今は打たでは叶はじと、しもとを振上げ、髪の手に絡まいて追廻りくくくるりくくくるくく、鼓明「世の中はともかくにも夢なれや、醒めての後は白露の、消えても残る戀の道、投節つれなき人の仕業故、添果てもせぬ春秋に、抱いて寝た夜の忘れぬ、わしや忘れぬ、何故その様に愚痴ないナア、わしやくほんほに愛しゆてならぬがいんぐわ合思へて袖に漲る露の玉、貫き止めよ我が夫「謹請東方青龍清淨、謹請西方白體白龍、一大三千世界の恒沙の龍王、哀憫納受哀憫頻んの砌んなれば、何處に恨のあるべきぞと、砂を吹立て梢を鳴しとくくさらく、さつとと定めなき世の徒鐘に恨や残るらん。

○御代松子日初戀

明和七年正月、市村座。作曲者富士田吉治・杵屋作十郎。

通稱「小松曳」

上「萬代とハル三笠の山ぞ呼ばふなる、天が下こそ樂しか
る、事も相生よい子松、待つ間程なく鶴が岡へ、くるく
るく、車の綱をえ、さあ縁の綱、引く手数多の殿御振、
見染めて染めて後朝の。合色咲く野邊の戀草や。合仕方で
知せ目で知せても、合點なされぬあのお顔合ハル如何に御
容貌なればとて、私にばかりは合思せて合思はぬ君が情
なや、まだく聞いて下さんせ合ハル袖は涙かオトシ春雨か
「女子の誠とニノオン玉子の四角はなつけんけれども、縁
のあるのが誠なれ、髪切り合指切り起請誓紙はまだな事、
嬉しがらせて笑をとほ、ようしると思やいの合ニノギンと
は言ひながら初戀の、仲を結ぶの神様次第頼みやんすハ
ル可愛がらんせ此方の人合ラドリ戀と云ふ字を合教へさんし
た人はさぞ粹であらう、さぞ粹ならん、合ニノギン朝な夕な
に心で拜んでゐるわいな、お嬉しからう上々様も我々も、
送る玉章様参るチラシ「齡を授くる君の行末守りて我が神
託の合告を知する松風も梅もハル久しき春こそめでたけれ
合トメ久しき春こそめでたけれ。

○春色鳥追姿

明和七年正月、市村座。作曲者富士田吉治・杵屋作十郎。

「君が代はく、合四海波風静にて、羊齒護葉に新玉の合
年は恵方の方よりも合にこくと笑ふ門へは福神や、徳
神やめでたいく、恵比壽三郎合大黒上々吉日と依積みし
は誠に御藏の開初め合寶盡しをさもさ、に付け合難速十
日は恵比壽市、花の上野の三つの明大黒ゆふくく、の
ふと二福神の難有や合黄金花咲く室の山に合梅は銀蕾は
砂金合花に勝りのく、合てんと庭の景ほんにさ榮ゆる宿
とかや、福神も浮れく、て我々迄も浮れ壽き祝ふ末廣
や、鶴龜松竹梅が枝に合「御所や町々様や色里へ、千兩
や萬兩の鳥追が参りて合お望み次第數々の唄も拍子もし
をらしや合「一つ鴨合二つ梟合三つ木菟四つ夜鷹は葛飾邊
より黄昏に、人目を忍ぶ頼冠り、柳の腰を撫で擦りしは、
又も外にはあらましとしゃんなら。しゃんならくく、
合狙ひ寄つて合梢々の色鳥鳥刺いてくれれば合鳥刺いてく
れよ、刺いてくれようと思つたに、つい逃した、まよよ

暫しは花の蔭合ラドリ「色めく三味の手事聞く合愛し可愛
いの撥當り、さいなく、櫻合三は切れても二世の縁合一
期大事の殿御ぢやえ、さいなく、櫻抱いて音締めを入る
の紙駒「千秋樂には民を撫で萬歲樂には命を延ぶ合相生
の松風颯々の聲ぞ樂む商ひ繁昌、護らせ給ふ神の乗初め
よしや寶船。

○末待誓言葉

明和七年正月、市村座。作曲者富士田吉治・杵屋作十郎。

「抑々神代その昔合鳥が教へし妹春事合今の代迄も絶
えせぬは合雅な同志も戀心合戀は曲者憂き事も合忍ぶ關の
扉明けて言はれぬ戀の願、おはもじながら無理の數々木
綿褌、掛けてぞ頼む神路山、朝日もさすが優しの、しか
も春日の八重花盛り、色も香もある男山、弓矢八幡色な
ら御座れと、彌猛心も吉田山、出雲世界の縁を結ぶの神
集りて、天の岩戸の御神樂や「初日影門松見れば二見湯
合女波男波の中に百千鳥さんざ合「八重霞麓の人は芥子
人形合花を手毎に折りて家苞にせん、行くも歸るも花の

○吾妻振花の關札

明和七年正月、市村座。作曲者富士田吉治・杵屋作十郎。

「華やかにく、花の吾妻の振手の衆、梅の咲分け霞の枝
に、止る鶯春かけて、江戸紫の色も心も深い中ではない
かいな「振手に上中下三段「大手馬場先振分くる、御駕
籠に取付き鶴の羽音に拍子取り、踏む七草の、唐土の鳥
も日本の鳥も、渡らぬ先籠の文の返す書、朧夜も戀の品
憎てらしい程可愛さの、君を待つ身を思ひやらんせ、明
日は關東さへ罷るべいにやな、やれさてな主さ別れぢや
いせぢねあんちうちくだ、ぶんぬきやろさ、いけの鈍龜
ならくんぐるべいとやれさて、づほんほえく、合いけ
すか女郎衆の旅立に、主さ別れては、いせぢね、あんち
うちくだ、ぶんぬきやろさ、池のどん龜なら、くんぐる
べいとやれさて、づほんほえく「春の駒には朧に見

ゆる、月毛の駒よ、様が情の手綱許さじ、松も昔に繋ぎ留めたよ合繋ぎ留めたよ戀の關札。

○めりやす廓 盃

明和七年正月、市村座。作曲者富士田吉治・杵屋作十郎。

盃に映す心も朧月結ぶ誓は神かけて合無理な酒にもよい殿御振急くなするしや浮世は車廻る月日の人傳に、言ふ由もがな廓風は合方ニノギン一嫌な客にも逢はねばならぬ、いつそ野暮ならせう事もツク浪速のツク蘆の品定めニノギン只まゝならぬ花に入相。

○髪かほよ鳥

明和七年正月、市村座。作者與鳳亭。作曲者富士田吉治、杵屋作十郎。

本調子一櫛笥鏡臺イロモツ取揃へ合三ノ上オシ言の葉草の露にはあらでニノギン涙の露に濡髪の場合ハルギン三ノ下その面影を寫してし、顔と顔との鏡山合三ノギン人のしがからさき見えて誰が櫛の齒の半太ムスビ夜の雨降りみ降らすみ定めなき合方半冷ガカリ一身の行末は甲斐なく名をや疊う紙。三ノギン響へ

らごんせ、御簾の隙より小手招き、只難有い山の神ではない合釜の神露拂と一やん面白や荒神のお釜の前に松植ゑて、千代萬歳の君が御神樂、さてく水無月の合てうさやく御神事なれば打笑みて、まだ音に入らぬ音とりぶりの面白やラドリ一我が思ふ男の立てた錦木を、心嬉しく取入れて、待てど男の否諾なく、あつれな、こんこ、りきここまかりきしよかの、さつさなどしよかどしよかの、誠かや塚の浦には實お船が着くといの、艦部には伊勢と春日の仲は住吉四社の神、君が代はく久しかるべき例には、豫てぞ植ゑし岸の姫松めでたさよ。

第三 椀 久

ニより一通り行く今は心も亂れ候、末の松山思の種よ、何時の頃よりあひ馴染めて、通ふ心を可愛いと思へ、さりとほく忍ほかの、はてどうもせいこれくくく受けたとな、あのや椀久はこれさく打込んだ、とかく戀路の濡れ衣、一久し振で塚筋を通つたが、よなみもよいかして、かはらぶきたてつゝ暖簾に月も當らぬよ、ソ

て言はば深山木と都の花の顔佳鳥。カンハルギン粹も不粹も分け白木綿の神々様を、仲立に。誓文くつされ後の世かけて。祈り、うらむし。

○其容形七枚起請

明和七年正月、市村座。作者與鳳亭。作曲者富士田吉治、杵屋作十郎。七變化物にして第五虚無僧名高し。

第一 住吉踊

一早振神のひこさの昔より、神をいさめの御祭、赤前垂に對の笠、皆一様にしやんと着て、袖は白露朝日影、裾打揃ふ紅の、靡くは風の絲薄につこと笑ふ顔は、さても美し夜目遠目、月の召したるかさの内、鬢の解れの雲となり雨と形よし振もよし。

第二 おふく女踊

ニより一五月五月雨壽祝ふ御田植、植ゑいく早乙女、老若揃うて苗代の、晩にや乳守で遊ぶちよ、なめきも今日九重の踊振り、品もやらんせ合後の阿龜が足の重さに、ひよつくりひよこくと、鬢の水に姿映して惚れた

リヤやくく其處な生薬屋の前髪、何をきよろくとしたり、ア、聞えた、ても美しいものかな、びらり帽子に被の姿、供の女人も引添うて、後のお乳母もしをらしく、本手その子見たさに付いて歩くぢやなけれど、お乳母殿の腰付が、ちよつくらちよいとせいハ、、、ソリヤく、調太夫が禿を文使ひ今朝の機嫌も内儀が働き、逢はねば須磨やあかし月を見し時々は沖がとんどろめきや、夜の目もよう寝られぬ、太夫に逢ひたい逢ひたいわい、い三下り乾さぬ涙の露時雨、朽ちなば袖よ今の身も合調カ、リ一法師くは木の端と思ふは野暮よ分知らぬウツ心の花の香をば知らせたいぞや調ア、鉢々この十徳も過ぎし頃所縁法師が一節に地智慧も器量も身代も、皆淡雪と消え失せて、交せし事は變るとも、離れまいぞや君琥珀、我は塵かや身に積る、心の芥胸に満ち、それが昂じた物狂ひ一迷ひ行けども松山に、似たる人なき憂き世ぞと、泣いつ笑うつ狂亂の、身の果何とあさましやと、一人かこつぞ是非もなや、ヤア此處な子は笑ふはく報謝々々報謝も只は受けぬ百貫目で買うた大事の三味線を弾いて

聞かそ報謝くと半々、キ突く杖の紫竹を紫檀の三味線に
詞扇を撥地口三味線の絲調べ詞士佐節太郎冠者が申す様、此
處は名に負ふ武藏の國都に勝る花の江戸、敵當麻もこの
處に忍びあると承る、左金吾様にも廻り逢ひ、並に神社
佛閣や名所古蹟残りなく、ア、イヤ〜これは古い〜
さらばこれから義太夫節でやつてくれよ義太夫節いやとよ
我は世捨人、野山に寝るも厭はねども、今宵は大事の亡
者の爲志す命日なれば、持佛の前に夜もすがら、追善供
養が致したい、處の名さへ三笠村、旅の宿の笠の下、一
樹の蔭も他生の縁と詞オ、尼御の事なり咎もあるまい、
介八が祈禱の爲地お作泊めましや、此方へ問はば奇特奇
特風呂敷包介八が首ぞとは、持手も知らず主も知らず、
亡者の導く宿とはイロオクリ後にぞ〜思知られたり詞コレ
〜行て見や女房と違うて妓の着物は分な物ぢや鼓金欄
緞子や綾や錦や紗綾や、ちん縮緬々々紋縮緬、京の大佛
大いと言へど天王寺には七堂伽藍龜井の水や五重の塔勝
曼の塔、淺草塔門口の戸とんつるてんとんつるてん〜
出替り敷入りつる〜てん〜、芝居は市村羽左衛

事ども、我等が様なる愚痴無智鈍なる智恵なき身には、
思ひもよらず彼方の門へはひよろり、此方の格子へたん
〜〜〜、佇みて合埒もない事戯れ遊べ、いざや歸
らん我が宿へ。

第四 蘆葉の達磨

花開いて示す當に知識のその教唐も大和も難有き、悟
れば直に春景色、花咲く今日の絲遊に、弘誓の船と蘆の
葉の流も清く棹さして、追風の風を眞受に受けて、裾
もほら〜後帯、その青柳のしなやかに、法の方便得脱
の、木魚も魚を象りて、これも悟りて朝夕の勤も名にし
直指人心見證の碎けて土の道直や花咲かば告げんと言
ひし色里の、便の文の候べくと、さつと流して心には、あ
ると愛き世の戀草の思案の法に悟られぬ、その振袖の移
り香に、しんぞ命を曙の、煙吹きくる當事に、思ふ男の
遠ざかり合思はぬ人の繁々は、月に叢雲花に風、まゝな
らぬのが戀の關守りヲドリ牛の角文字歪み文字とはわし
や嫌よ。合直な文字して合寝ようと言うた、ほんにえ、
さいな〜必ずさうぢやぞえ、あゝ恥しやカラウッ合方〜い

門、つるてんつる〜てん〜、サア〜三味線所ぢやな
い行くは〜一挺二挺三枚肩で押すは〜、詞スガガキコ
リヤコリヤ若い衆廓通ひの小袖はぶんにしや拍子鼓えては
肌着の移り香から、大焼餅が怒るぞや詞とかく傾城貫は
六十から七十迄その分心得ッ蒲公英に毛が生えた、き
ち〜くろ〜七折り鼠が掛金外すが大事親の金箱明くる
が大事詞その大事の太夫はどうぢや、せめて禿の女波男
波になりと逢ひたい、コリヤ〜禿よやい三下リウッ拍子
禿々と七度禿呼べど禿出もせて、番太郎めが出をつた、
番太何にしよにやかい、妓のお傍に待つとも御座らぬ、
よいは急きやるな、人目のあるに、はてさそれからそれ
迄さ、明の鐘には必ず忍びて逢はうには、さてそれから
それ迄さ、我が狂亂のなり形、野に立つ案山子そうづど
も使ひ果した蟬の殻、ちつとしごこなうてこんな形にな
られた、その様な事は何々々々、何と〜とんと〜んとい
らぬぞ、措いてたも、ふつ〜りばつたり思ふまい只佛道
を願ふべし、それ一大教主釋迦牟尼如來の説法は、華嚴
阿含方等般若法華涅槃法相律宗などと云へる事難しい
んでべいてれい合いうるへいふせいすせいびん合あふて
ねいぎんでん〜太夫の姿越天樂、秋風樂は格子散茶に端
女郎合只煩惱も菩提にて、一つに寄する色の道、異香薫
じて合花降り音楽奏し、眞如の月はな咲き照りて長き勤
を流連と、靡の言葉の習なり合今を盛りの花の姿え。

第五 虚無僧

次第月は昔の友ならば、〜、世の外何處ならまし語
〜これは諸國一見の僧にて候、我未だ駿河の國富士淺間
へ參らず候程に、この度思ひ立ち富士の御山へ參らばや
と思ひ候ウッ〜風に靡く富士の煙の空に消えて、行方も
知らぬ我が思かな合なう〜それなる御僧、なう今の歌
をば何と思寄りて口ずさみ候ぞ、申しこれ申し御僧さん
え詞鉢々草鞋他飯の所望笑止〜正月しまから何ぞいの
千年を祝ふ松の内合鉢々々喧しい、椀久ではあるまい
し、ほんに時知らぬ虚無僧は、何時も天蓋被るぢやなうハ
ルギン何時知らぬ虚無僧とやオ、時知らぬ、一中ガカリ山は
富士の根何時とてか鹿の子斑に雪の降るらん、山は白妙
海は緑の三保の松風、さらり〜さらり〜さつと、姿の

花の名に寄する、大磯の里に着きにけり、それは昔の西
行の、江口の君と戯を、此處にうつして浪速なる、伊
勢の濱荻こき雜せて合女の縋れる黒髪に大象も繋がる、
人は眉目より只心、廊の色師の戀話。

第六 文七清川

文七節、されば難波に名も高き、戀の分知り花ならば、櫻
と人に宵の口、言葉に色を花曇り、二ノギン文と異名を雁金
の靡く青柳嘘ぢやごんせぬ紋所、通ふちだねを結ぶしこ
なし、詞申し文様何時ぞは私が此方さんに、言はう言はう
と思つてゐるたが、二ノギン今は返らぬ事ながら、彼處では喧
嘩がある、此處では抜いた切つたわと、相手替れど主様は
替らぬ名のみ雁金の文様なりと聞くに付け、三ノギン夜の目
さの目も阿波座の鳥、泣いて明さぬ夜はとてまなし、三ノギ
ンそのつらさよりこのつらさ、乾く間もなき袖の露、此間セ
合方、雁と燕と仲よいは合行くも歸るも別れては、ハルギン
花の盛りを待ちかねて、月に指折る深い中、戀のいろは
も文と書くしよんがえ、ほんに、嬉しいえ、浮名立
つ、アタルシ名の戀衣、拍子、翼なけれど塗下駄の、當る尺

外記、さる程に會我の五郎時致は、春眠、曉、覺えざる、
形を此處に有明の、月の眞弓や張詰めし、心も剛に彌高
き、その富士が嶺の草の戸に、鐵磨いて居たりける、金作
セリン、花が霞か霞が花か、いと冴返る寒さにも、負け
ぬは梅の心ばえ、凍りし水も今朝よりは、解けて逢瀬を
何時しかと、松にかゝりし柳髪、亂合ふてふ蝶々の、主
の心を持添ゆる合せ鏡に映して、牛四郎、虎と見て石に立
つ松門の春。昨日に替へて老も亦、若水むすぶあつ水、
堅きを砕く金拳、父の仇には共に天竺唐高麗地獄の底に
隠るゝとも、すは祐經と見るならば、只一文字にかけと
りの、會我に集るうらさ、を、逃れて此處へ着衣始め、
馬乗初めも弓始め、惠方棚さへそのまゝに、投槍三方く
ひつみ臺、構はぬからは正月に、頓着七種何もかも、春
の儀式を開放題、自問自答の惡體を、申して申さく、先
づ餅搗きは騒々しい、淨瑠璃、とはどうぢや、牛四郎、明けぬ先
からどさくさと、家内餅の粉になつて寒さ厭はぬ杵取り
の、頭を擦る杵の音、淨瑠璃、さて又門の大飾は、牛四郎、出入
る人が引掛けて、正月物に鉤裂をするが嫌さに立てぬは

八當るが最期、戀慕虚空のあしらひに、レンボフリ君が清搔
三味線の虚鈴無禮の善悪も、鶴の巢籠り達引に、あきた
清搔嫌とは言はさぬ、獅子の曲迄吹納め、合弱い者をば避
けたがよい、合強い奴をば投けたがよい、わしやさう思
てるるわいな、さうだんべ、茶種に蝶のしこなしを、
頼みやんすで、合小櫻の、深い浅いも末かけて、ハル名に呼
ばれたる男一流、眉目よき心も花に驚、通ふ神風葺屋町
人の市村、合男達、よき春の賑ひ。

第七 石橋

獅子圍亂旋の舞樂の砌、牡丹の花房句充ち満ち、大筋
力の獅子頭、打てや囃せや牡丹芳、く、黄金の薬現れ
て、花に戯れ枝に臥轉び、實にも上なき獅子王の、勢靡
かぬ草木もなき時なれや、萬歳千秋と舞納め、獅子
の座にこそ直りけれ。

○馴染思の矢のね

明和七年二月森田座。作者瀬井秀助。作曲者杵屋源次郎。
少將山下金作、五郎岩井半四郎、朝比奈坂東三津五郎。

やい、淨瑠璃、禮者の顔もほんのりと、先づ取敢へぬ内曇り、
牛四郎、屠蘇の匂は天邊へ上つて忽ち頭痛となる、淨瑠璃、壽
祝ふ福德の、太夫才藏打運れて、舞納めたる萬歳は、牛四郎
素袍烏帽子でべらほうを盡せばもなく大名の、氣違
ひなりと思召せ、淨瑠璃、子の日の遊若やかに、千代を結び
し小松引半四郎、えて霜解けて滑るけな、轉たら定めて眞
黒に、鳴門の沖の荒波を、乗鎮めたる大晦日、淨瑠璃、暮の
疲のころ、とをの眠も春南、これ幸ひの枕ごと、石
引寄せ無造作に、狂言、留むる思は数々の、書いて送り
し命毛も、消ゆるつらさを何ぞいの、厭ふ心は情なき返
事にいと、彌増る、胸は粹でも不粹でも、迷ふと云ふ
字はそもやそも、お醫者様でも神様でも、惚れた病は癒
れやせぬ、それが嫌なら美しう、生れさんせにやこれ程
に、思ふまいもの情なや、叶はぬ戀と木綿垂の、神様方
も恨めしい、つれない御方と取纏り、まだうら若き初花
の、雨に萎る、風情なり、狂言、淨瑠璃、かゝる所へ和田が三
男小林の朝比奈は、雲に羽を伸す鶴の丸、朝日に舞ふや
素袍の袖、開く武運もあらたなる、その咳の逞しき、

坂東武者の勢にて、左右の髭を搔撫でく邊を睨んで
 立つたりしは、牛四郎一鬼か三津五郎一い、や金作一人か三津五郎
 一ウム、やい番瑠璃一小林の三津五郎一朝比奈だもさ番瑠璃一
 すさまじかりける次第なり此間 狂言 金作先づ第一に尋ねるは、
 お前の頭に着さんした烏帽子は何であらうなア 三津五郎一
 烏帽子の色はまつ黒に、黒い處が初春の、朝日に向ふ初
 烏金作一さて又次に中啓は、三津五郎一これ御覽なれ年徳の、
 棚に上げたる神酒の口、開けば初夢富士の山、逆に吊せ
 ば削掛金作一そんなら次に太太刀は三津五郎一反つた處が弓
 始め、横に直せば柳橋から洒落乘りに、それ火繩箱舟宿
 の内儀アが突出す猪牙の舐先は、磁石の劔先、北へく
 と舟乗初め金作一さて又お顔の隈取は三津五郎一横に引いた
 る初霞、子供騙しの春袋金作一左右の髭は三津五郎一これ門
 松此間 狂言一結ぶの神と頼みてし心の底を打付に、言うて
 貰ふの樂も、泣いて明すは夜ばかりか、晝は噂に取分け
 て、思ひ出汐の捨小舟、便 渚を彼方此方と、恨みかこ
 つぞ道理なる此間 狂言 唄七五三三三十一歳二十五歳の式
 事の拍子を押取り、御橋の上へ御靴の音が、からくか

思ひ草、逢うたその夜の嬉しさは、千度に思ひ別れては、
 静心なく花散りて、なまなか馴れて苦の世界、それも様
 故わしや苦にならぬ合方一花の情の契と書けど、誠なし
 とは世の人の面憎や、梅の薫も闇がよい、只一筋に芋環
 の、繰返しては巻返す、心の内を思ひやらんせ可愛く
 と泣くや東雲。

○葉櫻園團扇

三下り一花車風流を團扇の模様、墨繪の彩色心浮き繪に紋
 盡し、召せやく團扇召さんか一夏木立青葉繁りに風和
 かに、そより合そより合吹く風に、様が便かなつかしや
 山時鳥一聲に、さつと降來る村雨に合濡れて嬉しき籬の
 花と、飾立てたる團扇の模様合五十三次に隠れない名所
 名にし近江の八つの景合此處に寫して風戦ぐ、奈良の小
 川に飛ぶ螢、ちらり合ちらり墨繪に書いてく送りし玉
 帚、引く手數多の徒事に合一吾が思は合砂山合躑躅合寝
 入ろとするを揺りく起されてせうがえ合砂山つじ合
 寝入ろとするを揺りく起されてせうがえ合色々の繩張

らく、タツホ、からくタ、ツボく、さて初春には
 商始め、物始めやしよめく、京の町のやしよめく、
 甘い胡椒辛い胡椒積んでみや此間 狂言 番瑠璃一いざ來いやつと
 時致が日頃の勇力百倍増し、勢込んで突立てば、劣らじ
 ものと小林も、力足をどうくくくくくくと踏鳴
 し、傍に繁る松が枝を、えいやうんと聲をかけ、根がら
 みぐつと引抜いて、打つてかればまつかせと、互に揉
 合ふその力、さしもに高き富士が嶺の、土も揺ぐが如く
 にて、すさまじかりける次第なり此間 狂言 番瑠璃一御聲の下よ
 り不思議やな天童團扇差上げて、虚空を招けば忽然と、
 赤色無雙の肌脊馬、只一散に駈來り此間 狂言 番瑠璃一乗鎮めた
 る馬上の達者、敵の館へ一散に、勇み進みし有様は目ざ
 ましかりける次第なり。

「以下十四篇、明和七年六月刊行の「新版増補常盤友」に
 收めたるものにて年月未詳の分」

○梅が香

一袖ひぢて結びし水の凍れるを、春の風にや解けて心の
 り繁く鳴子繩、引けば合小鳥がはつと立つとの合鶺鴒や小
 雀や四十雀、駒鳥三光鳥合住吉も合此處に移して玉垣の
 神の御前に合聲張上げて、一入に團扇召せく團扇召せ
 合賑ひ嬉し宮居繁昌。

○八千代の釣竿

本調子一此處に年経て住吉の、神かと紛ふ白髪翁一人、
 有明の月合出夕も日の明日も釣する業を營みて、この浦
 波の島々に合隠れ長柄の釣竿を、かたけて歸るその人は
 浦島と世に呼びけらし一かゝる折柄不思議やな、見渡す
 沖の波間より、玉を延べたる装に怪しの女現れ出で一件
 の龍女が與へたる薬を服すと見えけるが、空より紫雲棚
 引きて頭にかゝれば浦島が、老いたる形引替へて、忽ち
 兒童と現れしは、不思議なりける有様なり一折から龍女
 は先に立ち、あらゆる江河の魚ども、我もくと出來
 り一各々守護する有様は目覺しかりける次第なり。

○髮梳露の玉くしげ

二上り一親は空にて血の涙の、露の玉櫛笥手にとりくくの

物思ひ、思ひ草なる稚子の、後れの髪や神々に、祈る子故の常陸帯、結ぶ甲斐なき玉の緒も、誰が水差して水櫛の濡れて乾かぬ秋の夜の蟲も哀を誘ふらん。

○旅路の勝杵

「憂きを浮世の一節に、唄うて今ぞ擔ぎ賣とつと冷い越後の水、餘所の雪水の寒晒し、夫婦事なら轉合ひ、色で丸めしいしくのいしくも扮すなり形田舎訛の聲揃へ」今の世の中は仲立やいらぬ、しつちくばつちく繼煙管、刻み煙草が仲人する、やれもさうややれくさてなア「昔昔その昔、菅相承のその昔、筑紫の配所へ跡追ひ、この團子が飛んだる故飛び團子とはなうそれ如何にも知し召せ」俺と其方はゆるくどつこい、ゆるわの團子えまろうて轉合うたる仲なれど、とんと捨てたよえ、えいくくくくくくえいな、分ある仲ぢやえ、分もなや麴々屋津々濱々も、囃す拍子はやれ杵の音、とんくとんくくくくくく飛出るく飛び團子、名代評判處繁昌。

○四季染軒の花

行て見りや嬉しえしどもなや「行きかふ人の袂を控へ、花を集めし花燈籠、數々掛けし秋草に、蟲盡し草盡し、貴賤の心寫し繪や半時ばかり賣廣む。

○揚屋入曲輪誰袖

「いざさらば廓の話信濃梅、匂ふやれ顔も紅梅と合我れ白梅の酒氣嫌、雨の夜雪の朝ほらけ流連なんども昨日今日、二日酔その袖の梅合小棲をしやんととりく」に向の人や頼みんす、拜みんす御内儀さん、御亭さんさる方へ文を届けて紅の品を槍梅遣手や禿、新造道中よいく仲の町え「浮名が立と、何のその、戀の仲立、聞様粹様合忍ぶ夜に合出て下さんすなお月様とは又どうぞいのく」合はて戀の邪魔、月を憎むも戀なれや、「通ひ廓の衣紋坂いそくやれく」さつさ押せく「船も吉原三吉野の花咲く仲の町櫻時君待合の辻の賑ひ。

○東誘賤妻木

「花の都のしをらしや、賤が手業の黒木賣合黒木召せく」黒木召せ御所や町々お得意様へ母様の言傳合四季に

三下り「軒端く」に見交す顔の、花を作りし燈籠の、東女子のしをらしく、燈籠召せく「切籠召さぬか「恥しのもりて餘所にや憂きことを、賤が苧環繰返し、籬に招く朝顔の、露の命の置所、飾り立てたる燈籠は、先づ春なれや櫻川、流に花を掬はんと、皆花受くる花の網、漏るな漏らすな花の波、名のみ残りて櫻川、瀬々の白波繁けれど、霞を流す下水の濁るも掬ふも花の波花の水嵩は白妙の、波かと思れば上より散る櫻か雪か波か花かと浮立つ波の川風に、されば誘ふ、誘へばぞ散る花葛、かけてのみ眺めしは、花を青柳の絲櫻合此方は夏にして洲濱に池を掘らせつ、池のその中には浦島太郎が釣の舟、とうなんかぢよが虚舟五色の絲にて繋がれたり常樂我淨の風吹かば汀に寄れと繋いだるは何時も夏かと作りたり、右は秋にて到らぬ山はなけれども、況して名高き山蔭の、月見る方へと山廻りの、燈籠も心を籠めし冬景色、雪花が散るわの、空に花が散るわの、散來るくちりくくばつと散來る面白や「四季の眺を燈籠に、映して來て見れや人の心をア勇む戯れて御座んすのんよえ、それさそれ

咲きし色々合お土産に上げる花なども匂うて來るは炷物小原木かはひく」と合殿様達の悪洒落も辛氣氣の毒あ、まよよ合卑しき賤が舞なれどお目なさる、身の譽、心いそく「御座の間へ行くも難有やと「妻戀坂女坂男坂行けば合吉野坂江戸見坂越えて山々廻りくくくるくくく合車坂屏風坂人待坂や浮れくく合勇み勇んで神樂坂見坂は石山寺へ合上ればさつさ合下ればさつさ合愛宕の坂の小娘などが土器投げ合見ゆ酒事に顔赤坂の老の坂行く衣紋坂「名取りの祇園町踊え先づは松坂踊えさん櫻々合花を飾りて木曾踊住吉踊合葛西踊の品やる手踊のさん櫻々合打つや太鼓の拍子よさ、題目踊魂の祭の夜は燈籠踊「小町踊をほめ夕立は實に理や皆笠踊鹿島踊の合振出すく「槍踊合見事に合揃うた合對の法師の嵯峨踊合春は御座れや伊勢踊「なうく「布は色増す「晒しのや晒して振を見せ参らしよく「さつさ車の輪が切れてく「何れ思は何方にもく「合晒す細布手にくるくくくるく」と巻きぞ納むる千代の壽。

○丹管つゞみ男風俗

千代の春合野も山もその名程々色も香もある花ぞ咲く
合春風の合吹かば花の邊を過ぎて吹けかし、風だにも
合さりながら合戀風が吹かば靡かん合吹かば靡かん青柳
の合いとしをらしさ柳髪の合徒髪の合徒の憎からぬ合花の姿
よいやいや堪らぬ柳腰合よい〜よい〜よい風俗は合
男とも見え又女とも見えつ隠れつ花の山合下戸も上戸も
花には浮れ合眺惜めど早入相の合鐘撞く法師は憎まる、
合憎まる、合櫻もさぞや憎むらん合花が見たくば吉
野へ御座れよ合今は吉野の花盛り雪か花かこれは〜と
ばかり花の吉野山實に面白や花が見たくば吉野へ御座
れよ合今は吉野の花盛り雪か花か合これは〜とばかり
花の吉野山俺が旦那は〜すんど伊達者でござんすや合
緞子や緋紗綾ちん縮緬織出す合染出す合花の顔合勇み勇
んで人の山〜。

○色競梅の玉垣

美しや花の姿の色も香も、戀路に争ふ有様は、實に花

三下りお前と私とが馴初めは、初雪の頃裾濡れて、寝笹
恨みて氣味合ひて合通り筋をばな可愛い男の聲して知
す騒き唄、さりし近江の八つの景、常に縫はせて染めさ
せて、只親方にはりつよき矢走の私が歸帆をも思廻せば
憂き勤ばかりにかゝる片絲の、さては千曳の石山に、秋
の月とは忌詞女心の果敢なきは、同じ事をば繰返し露の
玉銚くど〜と二上り現落に打つ波の堅田に落つる落
雁も、落つる滴に争へり、身は川竹の流とて、客の數々
僞に合きつの瀬田の關所ぞと、思廻せば夢にさへ、
へんし粟津の晴嵐と、身に染む風の我が思、比良の暮雪
と降積る合其方薄雪おれや小夜千鳥合風に揉れて亂れあ
ふ〜、降るや雪見の揚屋入り合戀に引かれて來る編笠
の合猪牙に乗せられ合遣手の口拍子合揃ふ全盛花の顔
見世。

○壽妹春萬歲

徳者に御萬歲とはお家も榮えましんます愛敬ありける
新玉の合年立返る朝にはりいしやう侯が玉の冠を頭に戴

軍とも亂れ髪、結れ勝ちなる女氣は、悋氣妬も在原の、
業平様にも負けはなされぬ殿御ぢやものを、いや嫌々、
何の其方に添はさうものぞ、負けぬ心の三重の帯、解け
て逢うたら二人が仲に儲けし子寶の花は折りたし梢は
高し、私にあの子が花折らせたがりやるしよんがえ、え
いとう〜えいとうそれはえい〜そりやと〜えいな
今迄仲よき女同志も、悋氣〜のあさましや、無理を祈
るが世界の無理も溜り〜し貴船詣の夜もすがら、星か
あらぬかはら〜水に映るふ我が姿、見る人聞く人
これは〜とばかり花の邊を過ぎて吹け〜。

○むらさめ

子を捨てる藪しいあれども身を捨つる、淵瀬に變る昨
日今日、哀と見るやこれやこの、緞子だてとは呼傳へ、
讀終りてもどれをどれとも分難き、我ばかり物思ふもの
は、又も嵐に散る紅葉合一葉二葉と數へる身にも縁々な
れやせう事が涙の種、檣の板戸に落す村雨。

○里の雪姿八景

き、あやんが太刀を佩いて、はくんやの護葉を口に銜へ
て五葉の松を手持つて、寶の君の御殿造りの結構には
瑠璃や珊瑚の玉の殿、一本の柱は一陽來復合二本の柱は
二町町繁昌合三本の柱は棧敷も土間も色めく毛氈、誠に
めでたう候ひける合先づ初春の山々に、花に小鳥の色
音よく、先づ鶯の聲立てて合改りぬる四方の空、藤の下
行く逝く春風にちりり〜飛廻るは、何燕のあちりなこ
ちりんな、あちりこちりゑりくりゑんじよの尾の上木の
上も面白や合鶉がふけるは〜ち〜くわいとませいゑい
えい〜〜〜ころ〜〜〜くるみにふける駒鳥
雉子きす〜手捕りにしよ〜合笠被せ〜て笠被せ
〜てつつと逃したはやれ〜さて〜面白や四方に賑
ふ御嘉例の、萬歲が壽を祝うた〜が定には福徳延命
〜幸ひ心に任せた喜びありや我この處よりも外へはさ
らりつともやらじとぞおんもふ合神に誓の二柱、妹脊
結ぶこの盃で合色珍しく棲珍しく小棲を取つてしどけ形
振たよ〜たよ〜と翳す扇も鼓の音振る振袖の愛
らしく二世の妻ぢやと思ひやれ幾久しかれ君を壽き家

繁昌二人連れ、もう大夫才若若い、萬歳はこの因縁、
五穀成就の秋津島 合國民々の道妹脊の道、祝ひ納むるめ
でたさよ。

○潤色放下僧

臨〱面白の花の都や筆に書くとも及ばじ 藤職セリフ〱東に
は祇園町筋繩手石垣ちよんちよめかせて戀の浮世に墨
染の 廣〱坊様達迄花扇煩惱即ちほだあして、ゑぢかり
またの御見をと佛をはがすはくやけいこのまん〱仲居
か 藤〱戀を渡せる四條の小橋 三下リウタ 〱鳥屋又兵衛がナ
家鴨を流す我は浮名を流し目に心有頂てんつるてん 合そ
の二上りが氣上りに、夜いたく更けし睦言は、色の世界
と白々明けに、別の客の合ちんり〱 廣〱西の方には先
斗町西石垣の初會から 藤〱口説仕掛の無理酒も 廣〱廻ら
ば 藤〱廻れ 廣〱水車藤〱水も漏らさぬ相惚にウツ〱ほんに
變るな川波川原隔てて呼ぶ千鳥 合簾目映く西上り、招け
ば招く團扇の手も妙に、その水無月の夕涼み、思ひ〱〱
の染帷子、好いた模様は何々 廣〱川柳は水に揉まる、藤

へ花火賣弘む。

○めりやす星 明

明和七年秋、中村座。作曲者杵屋六三郎。

三下リ〱時なれや空に妹脊の二つ星、その戀草の種蒔初め
て合染めて亂る、秋草の、露のこの身の置所方様ならで
ギン便なし合方〱ならぬ事なら惚れまいものを思ひハル切る
ならなんのその、心がさつぱりせうがえ、やれさつぱり
せうがえ、さはさりながら苦の世界。

○關東小六後雛形

明和七年秋、市村座。作曲者富士田吉治・杵屋佐次郎。通

稱「淡島」

本調子 鼓〱夕々の。品定め。仕着小袖の〱様に。着連れ
て連れてさ渡る 雁の。空さへ秋の定めなき浮世を渡る
その中に合方イロ調〱加太淡島の修行者の籠が許に鈴の音
の振られ〱て。逢はれぬ戀も願へば何時かあはしませ
んとの御誓願。女郎衆の張の強いのも。つい折針や打解
けて。仲を結ぶの合締め括りざる浮世袋の。花形や雛形

〱枝垂柳は風に揉まる、廣〱新造禿はしたてに揉まる、
藤〱花車が折檻腹立ち顔も 廣〱脹雀は竹に揉まる、廣〱
毎夜さ見世に賣残されて茶臼は挽木に揉まる、藤〱オ、
實に誠〱忘れたりとよこきりこは 合放下に揉まる、こ
きりこの、二つの竹のよ、を重ねて、打重なりたるトメ御
代ぞめでたき。

○風流 香具賣 花火賣

明和七年秋、市村座。作曲者富士田吉治・杵屋作十郎。

〱初秋や見渡す四方の景色かな、稻の波風靜にて、納る
御代の繁昌は、實に我々も喜の合あるが中にも香具賣、
花火賣、お望みあらば ギンガハリ 色々品々今の浮世の伊達
姿繪もッシ有明の月は一つ影は二人の商人も、お召しな
されて下されと、言葉に花を咲かせたり 合〱月を見ばや
とて武藏野へ 合行くも歸るも松虫の 合露に育つかや虫の
聲々しをらしや 合カン萩は 領く薄は招くそよ〱袖に、合
む嬉しさ戀風の〱厭はぬ道草名もなき花の、秋は咲きけ
り合あら面白の町々や、色里御所方香具賣合トメ御子様方

並ぶ妹と脊を結ぶの神とはこれならん セリフアイロ調〱抑
々紀州名草の郡加太淡島大明神の由来を詳しくたづね奉
るに。潜上な大盡の。初會にはまつて裏約束。第三會目
の姫宮にて張さへ手練女郎と申し奉る本地は即ち虚空無
天の御容貌にて。良の御方は一代男を守り。本尊と掛け
られて腰より下は地に付かず。とんとはまるが浮世川。
空船やら山谷船意見で何の山屋が豆腐の耳に残りし睦言
かごと。言葉の綾の巻煎餅御神樂。太鼓のからみそば。
味喰占めての流連に長居ふらちの病となつても、金をば
水の淡島と使はせんととの御誓願、天上界の一廊 手練手
管のよこばんじん敬つて申すと戯る、 此間ニセリフ 〱君は
春咲く梅の花。合香ゆかしき閨の戸にハテ合戀ぢやもの。
小六〱。小六突いたる竹の杖 合もとは尺八中は笛。末
は女郎衆のヤッコリヤ妻戀ふ鹿の筆己が名のみを。泡沫
の淡島なりと戯に。人々興に入相のかねてもふけの月の
暮。トメ樂しかりける次第なり。

○面影葵の上

明和七年冬、森州座。作曲者杵屋作十郎。

何となく亂れ心と夕顔の合宿の破れ車遣方なきこそ果敢なけれ合浮世は牛の小車の合浮世は牛の小車の廻るや報なるらん、せめて暫し慰むと、月を眺め明すとも、月には見えじ陽炎の立寄り憂きを語らん出雲社はえいえい／＼／＼な、小春は神の集り如何なる縁でも結んでやろとの御誓願、御利生あらたに嬉し事ぢやな合一嗟峨のお釋迦はえい／＼／＼な、浮世は愚か未來迄焦る人なら添はせてやろとの御誓願、御利生あらたに嬉し事ぢやいな合一思知らずや思知れ、恨めしの心や合一あら恨めしの人の恨の深くして憂き音に泣かせ給ふとも合生きてこの世にましまさば、水聞き澤邊の螢の影よりも光る君とぞ契らん恥しや此間狂言一枕に立てる破れ車、打乗せ隠れ合打乗せ隠れ行かうよ。

○狂須磨友千鳥

明和七年十一月、中村座。作曲者杵屋六三郎。

一枕物にや狂ふらん／＼、寝るも寝られず起きもせで、

共に濡れたるや村雨も、袖のみ濡れてよしなの恨、恨みかこつもわざくれと、とかく君には逢ひたさの、つらい相違もあ、何とせう、松に吹来る風だにも一思に憧れて合又憧れて忍び来た我を、のんさてつれなやの、露のお情に君に逢ふ夜は鶏鳥に、立別れ因幡の山の峰に生ふる。松とし聞かば、松とし聞かば歸り來ん、須磨の浦曲の松の行平合立歸り來ば我も木蔭にいざ立寄りて磯馴松の合なつかしや合ラドリ一九重の都上りの置土産、烏帽子狩衣取集め泣いづくどいつ友千鳥、君は知れかし我が心、それも誠によう言うた、一忍ぶ夜の君と我とは藻汐焼く、晝は終日夜は終夜、未で逢ふやら逢はぬやら、せめて問へかし我が心、それも誠によう言うた一鳥と鐘とは恨むまじ一あら面白の遊樂や／＼合一輪も下らず萬水も上らず合鳥は池邊の木に宿し合魚は月下の波に臥す、遠の眠の皆目醒め、君と二人が臥猪の床の長枕よい／＼さつさよいさつ／＼、月の都に入り給ふ／＼華やかなりし一奏で。

理や枕の跡より戀の攻來れば、安からざりし身の狂亂を木枕なりけり一あれや笹の張枕主ぞ戀しかりけり、その主こそ戀しかりけりウツガカリ一實にあさましや我ながら、心亂れて自ら合風興じたる花の山、よしや枯れたる梢にも、花咲くべくは未だ若木の尋ねる人に逢はゞどうしてかうしてと合何時か思の晴るゝなら、心涼しき駕籠枕、轉寝枕をしみ／＼と、語る手枕袖枕、じつと引締め引寄せて、摺れつ纏れる夜すがらに、現寝入りの現にも、一人かこちて君待つ程に、夢も結ばぬ病葉に、唐繪の屏風よ立てた姿のよければ、オ、和御寮はいたいけな事言うた、定家葛か離れ難やの、締めつ緩めつ解けつ纏れつ戀しさよ、又も亂る、亂れ髪、亂れ心や狂ふらん一汐馴衣袖狭き浦わの寒き夕かな／＼、千賀の鹽釜しをらしく、振々袖のしやな／＼／＼と、どれがやんれ姉やら妹やら、裾も小褌も濡れ／＼汐の、二人連れたる磯千鳥、鳴いて友呼ぶ磯千鳥、アレ嬉しやあれに行平のお立ちあゝる松風と召され候ぞや、いで參らう、うたての人の御姿、身にしみ／＼と忘れぬ、それがかうじたこひ衣。

○水仙對丹前

明和七年十一月、中村座。作曲者杵屋六三郎。

鼓唄一萬物閉ぢて花も寂び、木には色香もなき中に、春待ち顔の室咲きやウツガカリ昔を此處に寫し繪や、畫く姿より立姿、しやんとり、しく白柄譲りの水仙花鼓唄一改めて若男ウツガカリ嬉しめでたの松梅竹よ、やんれ若緑、老いせぬ我も戀には合誰も角取れぬ野暮な所が丸額合譯を立て髪毛柄大小腰巻羽織憎うない振當世姿、せめて一夜は寝と御座る合右へ一振り左へ踏出しや足もしどろ、酔うたか、足がしどろ合もどろ花と紅葉を一つに合せて揺出す二より一氣轉きさくな奴が受込み、色の傳授は受けねど／＼、そこらは氣轉でやつてくれよ、戀がなければえい／＼さ口舌もないに花なき枝に心止ろがわつちや野暮かえ、木の芽峠の茶屋のナア／＼縁端に腰打ちかけて、西をきつと見たれば、月は出もせで拍子波は大磯の磯に寄るとナアン雪の／＼振袖ちらと見初めたナアンオ、それオ、それ／＼／＼／＼、またとて其方は北時雨

く時雨降れく晩に忍ば、この笠被いで忍ばんせ合人がなんぞと言ふなら、野中の案山子と言はしやませ、成程左様に申しませう、おもはゆく花の顔見世貴賤行交ふ袖を列ねて押合ひへしあひぎつしり一杯黄金箱入り對の丹前。

○めりやすうき枕

明和七年十一月、中村座。作曲者杵屋六三郎。

三下りて徒人の、憂き事問ふも身のつらさ、何の因果に婆に來て、心盡しの人の花ア、さてうたての夜の雪三ノギン解けぬ心の帯解いて、由なき浮名濡衣の合乾く間もなき君が袂を、二人敷寝も何時の夜に、いつそこの身は露と消えなん、夢の夜毎のうき枕。

○翁草霜舞女

明和七年十一月、市村座。作曲者富士田吉治・杵屋彌三郎。通稱「菊三番」

人ヨセ七千早振神の園生やその菊菊に、しも月しも翁草、千歳汲むなる菊水の、久しかれとぞ岩櫛や

三ノギン指の紙縫にも結び逢ふ夜の手枕に寝よとの鐘のつくぐと思ひ明してゐたわいなせめて一度は逢坂の關の隙より松の色、後の心に比ぶればいと尙いやましの思ひ草、葉末の露の露程も情の花の色に出て會釋に餘る紅葉の靜心なく見ゆるらん二上り合方「なんくくく」情の道ならば、雪にも雨にも通はんせ籬に立ちてこれ申し、何ぢやえ何時もの客衆か馬鹿らしい好かぬぞえと言はれてぞつと腹は立たいで可愛さの一つ呑んでは合憎いくは可愛の裏よちよくけにまちよけしてこめく茶碗酒、下戸ぢやくと思つてゐるに、夕一座の話を聞けば、呑みやるよ呑みやるよ酒を呑みやるよなよくえ調天目でぐいぐく孫左衛門よいかなうく國も傾く花の嗜みヲドリ合方「君ならで合誰にか見せん梅の花合色をも香をも知る人ぞ知る、縁を結ぶの神垣や「俺が旦那のく」肩身を見れば、石部金吉上下仕立て左様然らば、そこを和く室咲きの、野暮をも粹の手管にて合上拍子いなにはあらぬいな船の五ちんく違ひのお手枕ウク拍子「何時か小梅を咲分けの知る人ぞ知る香をとめて合トメ賑ふく花の顔見

天つ空なる少女の花と、契り草とはたれ岩菊の、菊の百夜に名も残る菊、忍び黄菊も夜は白菊に、亂れ菊かや狸々菊の、都は紅葉こちや恥しの弟ぐさかや菊重。

○梅顔壽丹前

明和七年十一月、市村座。作曲者富士田吉治・杵屋彌三郎。

二上り合方「花の顔見世一様に合貴賤の袖の積る山花の盛り三ノギン三吉野も勝る色香の葺屋町合拍子ハル手を引連れて潔や、入來るく櫓太鼓の合初鶏を天の岩戸の開初め、來て見よくさても見事え鼓吹吉次「窓の梅の北面は雪封じて寒しとは、その唐歌の景色よや「室咲きのさて咲初めて冬の梅、その投入のしやんとしてどうとも合かうとも合言はれたものではないわいな合家の一振一流はサクギン園生に見えて隠れなき大小さが長羽織、襲も崩さで水仙の、きつと着綿積りし戀の姿を見ばや三味線のひく手合數多に合音じめの絲のしんぞ嬉しき君が玉章合方「恥しのもりて他所にも白梅の、色もおほくにもぢくく」と、言ふか言はぬの袖の波ハル三下モギン忘れぬ世。

○髮梳十寸鏡

明和八年正月、中村座。作曲者杵屋六三郎。

三下り「春風は花にはとんと憎まれて怪氣に縫れ亂れ髪、梳返しぬる水櫛の、水にうつろふ顔と顔、逢うたその夜の解き櫛に髪も涙もはらくと、鏡に櫻の散りかゝる思は黄楊の櫛々と結ふに結はれぬ我が黒髪の、亂れて今朝の憂き別れ、愚痴な心の泣いてゐるわいなア私を可愛と思つてゐるや、月も入るさの障子より三クリ上漏れて浮名の十寸鏡。

○花姿放下僧

明和八年正月、中村座。作曲者杵屋六三郎。

ハル「さても青陽三下ギンガハリ東にして事入新玉の初音の空珍らかなりし鶯引の合竹の林に。聲立て、花の盛りを告げん顔なるハル山里いかで春を知られん合三ギン木の間隠れに合ちらくくつく零れ梅合いさやれ君達三下クリ上御座れく花折りに合行かうかの合三下戻ろかの打連れく

合野道山道御存じならまつびら目覺し三ギンひらくニギン
か合言うてせかせ悪口三ギン春々で出會うた合三ギン人の
心は憂や彌生の頃かいの移り易きものと思へど我はその
色々を現して只澄む月を山に見てゆひを忘るゝ思あり浦
の湊の釣舟は魚を得て上を捨つ合これをばかれを聞く時
は峰の嵐や谷の聲夕の煙。朝霞皆これ三界唯心の理な
りと思召せ、心を悟りまませや君の爲とて立舞ふや、
羯鼓拍子の華やかさ三上り面白の合ハル花の都や合筆に書
くとも及ばし東には祇園清水落來る瀧の合流れく末
で添うやら添はぬやら三ギンガハリ誓文くつされそれは結ぶ
の神の心え三世の譬へ三實に誠焦れたりとよこきりこは
合三放下に合採まるゝ、こきりこの二つの竹のよゝを重
ねて合打納りたる御代ぞめでたき。

○めりやす仇ざくら

明和八年正月、中村座。作曲者杵屋六三郎。

三上り一筋に合思合うたる袖の露合カン濡れてしつほりクリ

様と書散す、牛の角文字たらくくくと、來て見よ梶の葉
の唄に揉まれて川の塵、面白や天の川原に立つ波も、妹脊
は盡きぬ天の川岸、比翼連理と語ふ仲も人が水差しや薄
墨に、書いて細々送りし文を合見るにつけ聞くに付け、
他所になり行く身のつらさ合愴氣くは女子の癖よ、浮
かぬ顔する悪性男の、顔が見たさに憧れて、行かんとす
ればお待ちやれ暫し合逢ふ夜は今宵く星合ひ妹脊星二
上り天の川深き思の立上り、袖そほ濡るゝ村雨の、降來
る傘は紅葉帳に差しかけさせて鼓唄三忘れて年を経しも
のを、又古へに歸る波のちかのからはし名をのみぞ、月
宮殿の白衣の袖、三五夜中の新月の色もよし伊達姿、
あら面白や曲水の、盃受けたりく木綿布の袖三下りひ
よつと浮かれてやつこのく合やれくそれく合今宵
や星合ひ愛想もよくて合戀も品よきとりなり奴合招く手
許に浮かくされて合一節揚屋の流行唄合俺が若いとき
や文や玉章附けられた。今は年寄りましたら、杖突きの
の字に樂をするくのよえ浮れた花を紅葉と眺むる空の
合廻る月日の才、やつくるくく合峰の錦も花よ紅葉

上三下ギンカ、リ春雨の二人が仲に降りかゝる添ふに添はれ
三ノギン
ぬ身となる事も三ツマニギンどうしたぐわちな神々様に合
縁の結ぶの綱切れ果てて飽かぬ別れと明けぬ間急ぐ宵の
三ノギン
庚申道知邊明日は浮名の仇櫻。

○主や誰十重襦

明和八年正月、市村座。作曲者杵屋彌三郎。

サガリハガカリ三梅の姿のしやんとして、櫻の顔のあてやか
に合縁の眉や柳腰、襦褌風俗品もよし合裾や裳の紅は、
吉野龍田も及ばじな、いづれ目かれぬ花の盛りえ。

○妹脊星紅葉丹前

明和八年七月、中村座。作曲者杵屋六三郎。

三上り七夕にく渡せる橋は鵲の橋、實に紅葉の照添へて
今日も見事え、やよ實にも見ごとえウタガカリ三下り紅葉
なんく、橋渡りようて逢ひようて、色増る合天のなん
くナア川つま迎ひ、船渡し船漕けやえいさらさ、押せ
やえいさらさ、逢瀬の波に沈む年に稀なる契とて、今宵
ぞ嬉し戀の鵲鼓唄三敷島の道も清けき和ぐ文字に、七夕

よ色紅葉、面白やな何鵲の橋となり、紅葉重ねて橋とな
り合重ねく二つ星、實に末長き契かや。

○拾貝眞砂翹

明和八年八月、市村座。作曲者杵屋彌三郎。

三下りこの浦里に合住馴れて、狩り漁りを營みて世渡る
業と駿河なる、その名所の多き中合打出で三保の浦景色
押出づ船は風早の浦田子の浦合秋は一入月清見湯明けき
影は波に黄金のひらり合ひらり合ひらりく漂ふは言
ふに言はれぬ絶景と心も浮きに浮島や合磯行く袖に松
吹く風か、ざざんざの蛤踏みにく貝の色々色も盛りの
姫貝の、裾もほらくあ恥しや合見るとそのまゝぞつ
とした戀風と思はんせく、それくそれよえ一
筆書いて送りたいらけいたら貝、寝もせて一人赤螺の合
物や思ふと人の海松食、忘れ貝合世に二人寢の常節は合
身に蜆貝嬉しかる合嬉しかる共々語る蟹人の、名所名
所は種々薩埵山合面白くこそ聞えける。

○雪花噺系圖

明和八年十一月、中村座。作曲者杵屋喜三郎。在原業平芳澤崎之助。

カ、リ一撃早セリフさすが問はれて今更に、在原の業平が家の系圖を口任せ、語るもさすがなりけらし三絃合方一人皇五拾五代今文徳天皇の御代、そも千早振々神代の昔隠れさんした悪戯神、戸隠様のお情で、戀と情を在原の、その業平の女舞、先祖と云ふもおはもじい大小三絃入一島の千歳若の前、綾の白地に白鷺を白絲にて逢はせつ、白き水干立烏帽子、拍子を揃へ舞ひける故、白拍子とは名付けたり合かの千歳の末孫に、辨財天満屋お初は十九、徳兵衛様は二十五の、菩薩に九代観音の落し子にて、佛も元は妹脊の中宿申すも中々鶏の合まだきに鳴いて兄を遣手が裾に茜屋半七三勝根元なり、系圖正しき業平とは、親達夢にも白綾り、内の子飼の久松を、ちよつと見染めお染とて、實と誠を本田義光、女房彌生は閻浮提金の如來こそほんに、乳兄弟合粹と不粹と入相の鐘の供養に參らんと、かの清姫は一人者、狂ひ、物狂ひ合小姓狂ひのお七とて、その弟に八百屋半兵衛お千代に浮名

に合せて振出すお供に取附く引附く僕は日本一の剛の者、山だ合坂だ足踏出しや、萬里の道もくるりくるりくくくくく合車の中の輪に唄ふ、ひぐりしよくりしよがいな、ばつとしてさて又も振出す大鳥毛、宵は逢瀬のナア忍ぶ管槍、枕槍、さゝんさ笹槍引掛けて、外へはやらじと紅白の合樽太鼓の音に寄來る。

○冬牡丹園生獅子

明和八年十一月、中村座。作曲者杵屋六三郎。

「あら面白やく、拍子に連れて狂ふや獅子の峰に駈けりて谷に降りて、又は岩根に取附いて、頭を振つて合戯れ遊ぶ彼方へ寄りつ此方へ寄りつ降りつ登りつ様々に合園に咲添ふ牡丹の合花を目がけて狂ふ、又は胡蝶を目がけて狂ふ、蝶や胡蝶や男獅子女獅子の花に亂れてひらひらく、合飛上りてはひらり合跳返りてはくるりさながら獅子の物狂ひ、見れば美し五色八色九色の奮迅の獅子頭、石橋を踏むたんしくと亂曲を踏む雲の足取り合虚空を渡るが如くなり、今は太鼓の調に纏れ、解けぬ心を締直

の毛氈の、紅を奪ひし緋の袴、女三の宮は鐵漿親、品々色々一口に、言はんとすれどどぎまぎと、人な咎めそ狩衣、着つ、馴れし業平の家の筋目を出放題合減多系圖とホ、敬つて申す。

○めりやす鳥のね

明和八年十一月、中村座。作曲者杵屋六三郎。

三下り「思ふ事叶はねばこそその人の口なし鳥の物思ひ辛氣「辛氣の集め草しをれしをる、袖袂「拂へば積る白雪のふり行くものは我が身にて、消えも果てなんあだ心。

○紅白勢丹前

明和八年十一月、中村座。作曲者杵屋六三郎。

鼓唄「和歌の道澄むと濁るを散し書、筆の命は日を以て數へ、墨の命は夜を以て數へ、大和唐土つかみ差し二上り「室に一夜はとめたき花の、花の姿のしんなりほんじやりと揺りかけ合揺りかけしやんととり、しき男山、見せば角袖きりくく、高樓風俗よしやく、吉野も龍田も此處に見ても見飽かぬとんくくとりなり花も紅葉も一つ

す緩まぬ調の太鼓の音色、打てば拍子をとんからくく拍子に乗せて打つは八つ撥太鼓の拍子も尙亂れて、獅子頭を擔いでエ、舞はうよう八つ撥を打たうよう、吉野龍田の花紅葉、更科越路の月雪、獅子團亂旋は時を知る合雨叢雲や奏すらん、餘の曲の面白さに、尙々廻る盃のく酔を進めて舞ひにける「浮れ出でて共に狂ふや獅子の曲、さすがに色も深見草、木蔭は蝶の宿かや、見返る袖に搔纏れ、惜しや散すな牡丹花の、色よく咲いたり色ある様に、心引かれて戀の山、繁き小笹露踏分けて、はるく此處にしどけなく、どれがどれとも夕日影、さすが女の心から合どうした縁を松が枝にじつと離れぬ蕙葛、そのよい仲を憎やく、邪魔な小鳥があるわいな羽風に散し嘴にかけ縁を嫌ふとするわいな、障勝ちな世の中や、月に叢雲花に風、それが浮名の種ぢやいな「ドドリ「思ひ寝の心からなる夢ぞかし、又現か現なや、ちらとばかりの面影を、御簾の追風さらく、更に忘れもやらぬ身のつらさく、三下り「様に來連れて誰に思を掛香の、匂満ち來る貴賤の中に、目に立つ風俗貴船祈るも戀

の風、愛し殿御の末を祈るや千秋萬歳萬歳千秋と謡ひつれく暫し此處にぞ着きにけり。

○花角力里盃

明和八年十一月、中村座。作曲者杵屋六三郎。

三下り前舞 雪の降るときや童の花よ、雲交りにやんれ面白や合野山一様に眞白くく白妙の雪を丸めてころころくと悪戯盛りのしどもなく合足の冷い草履買うてたもれの、向のや小寺はや誰が建てた、八萬長者の乙娘くく、くるりくく合蜻蛉返り水車走るときりきりやくく悪戯狂ひに合怪我するな、狂ひ遊べば雪散つて出づるや相撲の寄せ太鼓揃うたりなく相撲男のその華やかに、東は白き銀山や西紅の諸手綱きりくしやんと結上け既に土俵へ合取りける相撲は何々ぞ、四つ手崩しに花槽鳴の羽返し腰車合負投げ空穂投げ雀の小踊り水車引捨て爪反り腕反り合百手を砕く面白や繕れる綱には曳かる、曳船、安藝の宮島よさんや廻れば七里浦はよさんや七浦七恵比壽合いつそ初手から勤めが優しちや、嫌な禿

の憂き勤め嫌な酒をも無理呑みに、笑うて呑むも廓の癖酒に數多の合奇特が御座る、霜夜の酒の暖かに、初の人合にも馴るゝは酒の威徳なりとかくやとかく憂き世は呑めや唄へや諸共に、しけれ松山ざんざん濱松の音はざざんざ濱の眞砂は盡くるとも、よき盡きじく、夫婦妹脊の縁は異なるものよ合俺と其方と其方と俺と、夜さりや参ろと約束したが、ちいと仕損うてこんなりになられたく按摩痲痺く捻ろ、さりととはく捻ろ合やるかしなのく信濃越後の雪よりも、冷いこゝな詞傾城の誠と卵の四角と云ふ事が、措かしやんせ廓離れて心のまゝに、末の縁も神心替る枕の憂き勤めヲドリ稀に來るのにく寝たとはつらや添はれぬ身なりや是非もなし、ア、まゝならぬ月見ぬ君が名こそ惜し、添寝や添寝の枕くうつゝなや、通ひ廓の深編笠に粹も不粹も有頂てんてつとん花を飾りし今日の今様。

○咲分籠

明和八年十一月、市村座。作曲者杵屋佐次郎。

淨瑠璃何劣らぬ若木の花の白眞弓彌猛心の花に引く弓筆の名こそ妙なれやく猛く勇めるその中に媚しくも振袖の丈長々と長髪合黒髪匂ふ梅花の香どうとも合かうとも合其方とも何方とも定めなき世の習には飛鳥の川の淵瀬と變る實の誠がわしやくきつと合聞かまほし星照るや合闇はあやなし早咲の合仄く香合それかあらぬかたらされて合室に咲く梅共に合君と一夜さ寢と御座る合しよんがえア、恥しやく初心らしし時昔の春の梅の花盛りなり一枝手折りて籠に差せば固より雅びたる若武者に相逢ふ若木の花葛隠れば籠の花も我も眞先駆けん先駆けんと心の花も立舞ふ風情も合花々しくぞ見えにける。

○雄舞縁寒菊

明和八年十一月、市村座。作曲者杵屋佐次郎。

前舞 奈良坂のこの手柏の二面合表裏なき小車や合土の車の我等迄合豊かに住める神事の車合重くとも力車や七車合飾る車の見事え囉してたべや人々よ及ばずながら奏でんと扇取る手も尋常に、柳の腰のたよくと、まだ

うら若き振の袖、誰か結ばん戀草や、若しや萬の舞の曲、名に在原の男舞、昔男の戀ひせじと御手洗川にせし禊、神は受けずもなりにけるかなと、聞えしは思ひ切られぬかこち言、思ふ殿御にこの烏帽子譬へて言はば初戀に、幼馴染みの筒井筒井筒筒にかけし鷹が丈老いにけらしな妹見ざる間にと詠みて贈りける程に、その時女も比べこし振分髪も肩過ぎぬ、君ならずして誰か上ぐべきとく堅い約束末かけて、變らぬ私を疑うて、それその素振は何ぢやいなう合但しは外へ移り氣のありての事かいさ白波の龍田山行く二道は措かしゃんせ、ならぬえと恨むも戀の誠なれ大小合方浮かれてく其處をとりなすしやらくらに合機嫌直しのお盆、間の抑の合も一つせい合續け呑み合ぐいとせい合弘誓の船に棹差して、共に語らん法海誦ふも舞ふもひたすらに、讚佛乗の縁ぞかし合彌陀頼む合人は雨夜の合月なれや合雲晴れねども西へ行く合阿彌陀佛やなもうだと合誰かは頼まざるべきく合神佛一如と聞くからに合恐れみ敬ふ神の庭、一切衆生餘さず合漏さず合救はせ給ふ佛の誓合實に難有き教かな。

○梅の笑粧癖

安永元年正月、中村座。作曲者杵屋六三郎。

三下り一勢四方に隠れなき、曾我の五郎時致が、惠方に向つて念願の、鎧着初めて草摺に、取付き邪魔な女子輩、其處立去れとぞ怒りけり一その時月小夜からくと打笑ひ、女子とは事をかし、今日の座敷の小林の義秀なるはこの素袍、雲に羽を伸す鶴の丸、素袍捌や髭捌き、左右の袖を搔撫で合搔撫で合鎌倉風の今様に鬢薄からぬ男振り、力勝りの時致を、放しはやらぬと取付けば、五郎は苛つてア、面倒なと振放す、その手を取つてならんぞ往しやせぬ、宵に雨戸の縁先で、言はしやんしたを忘れてか一措きやあがれ、あれく春の太神樂合蜘蛛舞の綱の上に、まめなるものたちる、下戸の建てたる藏もなし、彼方からはとりんぼう、此方からはとりんぼう、野撫子に野石竹それはふるくく、切口はすんだ四本かゝりの毬の曲、彼方の軒端合此方の軒端飛びや違へて一向も怒つて駈出す、小腰に取付きこりやく、押せども動

者には大山合く丹後丹波の境なる鬼城と聞えしは、天狗よりなほ恐ろしや合さて京近き山々は、愛宕の山の太郎坊、比良の峰の次郎坊名高き比叡の大瀧に心うつして面白や、始めて三保の松原越えたえ一讃岐に金毘羅、眞平ゆるせの酒機嫌合通り流れの身ぢやものを、私が心はあのさんが、とう白峰の太郎さん合飯綱の三郎いつまで無理をゆひ立ての櫛の齒にまでかけられて合弾く三味線の音じめよくオトシ聲を播磨に室山鬼が崎、紀伊に焼山みたしいさん合又もにちつく日輪坊霞がくれの木の間にも、都あづまに霧雨降らば、わしが涙と思ひやれ、先も見えぬにさ、思ひ切れさ引一狂ひ亂れて心もたゞ狂亂のしどもなく、或は野に臥し山かつら、柴を褥の草枕合若紫の春野のしばしとてこそなだめけり、正體もなく見えにけり。

○春遊驛路駒

安永元年正月、中村座。作曲者杵屋六三郎。

三下り一勇む心の手許に花を飾る春駒合夢に見てさへよい

かぬ金剛力、月小夜力はそれぎりか、まだく力は御座りやすで御座りやす合方一月小夜呆れていらぬないらぬ、若衆の力立よなあん、せめてなや、とんとんやハイヤせめて一夜は添寝せにや置かぬなあん合とてもなるなら大きな事しやれ、奈良の大佛の横抱にせい、こしやんとせい、お蔭でさ、ひけたとサ、互に争ふその勢、須彌の四天に阿修羅王の、荒れたる氣色もかくやらんと、貴賤上下押並べて感ぜぬ者こそなかりける。

○狂亂雲井の里言葉

安永元年正月、中村座。作曲者杵屋六三郎。曾我十郎市川八百藏。

鼓眼一雲にかけはし及ばぬとも、願ふは人の戀の闇、亂れ候く、柳の絲のもつれもつる、我が心、法師に見え、又は廓のその濡姿通る妓衆は誰々ぞ、手越喜瀬川雛鶴や、そなたへは參らぬか、こなたへは行かぬか、夢か現かうつなき、もぬけの殻とぞ見えにけりウツヒ一先づ筑紫は彦の山合、歌カ、讃岐に松山降りつむ雪の白峰や合さて伯

よいく風俗も、東育のしやんとしたくしやんと結んだ黒襦子の帯合解いてくほどいて春の雪、さつと梢に積らねど、我が思は積れかし合戀の重荷を乗せて行く此處にも嬉し春の駒合愛しき君を乗せて行く花のお山の花盛り、幕打廻し香明し合差いつ抑へつ抑へつ差いつ合盃の数も重なり酒宴長じて三味線に浮れて揃ふ手拍子合つらいく勤も何のその様故に厭はぬこの身合でも心待ちして來ぬ夜は憎やく、雨の夜障勝ちで御座んすく合外にく悪性は何のその、せまいとて騙して置いて合それその文わいの、隠すも憎やく戀こそ障勝ちで御座んすく、これで戯れ遊ぶ春野のうららかに合振るや驛路の三下り鈴振れば鳴りもよし合關の戸も開くや、梅の花の春合賑ふく鈴の音色に尙も賑ふ、それくもまんく誠え、實に誠合手綱搔繰り鞭打ち急ぐ、隙行く駒の足速みはいしいどうくくるりくくるく車にあらぬ曲馬の輪乗り、あつばれお馬の上手と上手が乗つたか乗つたぞ、面白や合心浮立つ今日の春駒。

○わかくさ

安永元年正月、中村座。作曲者杵屋六三郎。

雉子鳴く野の若草も、摘捨てらるゝ味気なさ、萌出る
枯るゝも知らぬ野邊の草、何か春の夢現、さめて跡なき
泡沫の哀れや實にも人心、ア、ま、ならぬ苦の世界、何
時か曇も晴行く空の、東雲知らず鷄の聲、己が塙に又も
歸らん。

○曙鎌倉名所

安永元年正月、中村座。作曲者杵屋六三郎。

三下りて畏つて候とやがて合名所を語りける、さればその
頃この處に不思議の杉の二本の茂りて、合今此處に吾
妻の森とや合言ひ傳ふ、神の擁護の難有や、貴賤の諸願も
かけまくも、忝くも産土と、汐見二の宮梅澤の、神社は
殊に面白や合山鉾飾りて合神の御前の獅子石振立て、身
は三尺の劍澤も悪魔を拂ふ合御標繩、袖を列ねて化粧坂
おほいそがしき濱つたひ、見渡す景色えいゝ江の島、
これも神垣ほのゝと、霧に交る安房上總、出で入る船

○撃鬚梅物狂

安永元年正月、森田座。作者塚越栄陽、作曲者杵屋作十郎。

工藤祐經中村富十郎。

兵次鼓唄 何時しかに、亂れ心と夕霞、上の空なる風だに
も、花の邊を避ぎて吹け 三人へ入相頃に散來れば、雪の
吹雪と三吉野の 兵次へ被く袖笠肘笠の締緒に露のしつほ
りと、抱いて寝た夜は忘れぬ、私や忘れぬ、何故そ
の様に愚痴ないな 三人へ尙も愛着輪廻の絆、切つても切
れぬ水の月影、さらさらさらさらさらさら、姿恥し
我ながら、他所目にそれと夕月夜、あけて言はれぬ我が
心へ千代の春見渡せば、園に色よき咲亂れたる花、あれ
くあれを見よ、竹に鶯、櫻に雀の、ちやわくく合ちや
わくく合ちやわくくくとオン何を夕日の面白さうな
義大夫ガカリ小鳥ども、花に戯れ狂ふらんモツ我もフシガカリ心
の狂ふらん 兵次色詞へ情なや誰あらう、工藤左衛門フシハル
祐經様の身有様、これ申し正氣になつて給はれと 三人へ
袖やカン袂に寄り添へど、振放し、はれやくたいも泣い

の数合數に、遠帆の歸帆これならん汀の鳥のとりぐに、
番々が羽を休め群れるて遊ぶその風情、平沙の落雁面白
や、あれに見えしは難有や、千代に八千代の鶴が岡、曇
らぬ御代を神神樂、合嵐木枯さつと吹け、笠にや笠に木
の葉がはらくと、江天の暮雪まのあたり、遙に高き御
山は、何時も鹿の子の富士の山、麓は田子の入海や、沖
に漂ふあま小舟、棹の雫に袖濡れて、聲面白く拍子どり
沖も靜かに唐船の音が、いざや出て見よ様ぢや様ぢや御
座らぬ磯打つ波よ、あたら辛氣や辛氣の毒や、月に廿
日は沖に住む、妻を持つたも名ばかりと、涙で暮す船の
内、これぞ誠に瀟湘の夜の雨とも云ひつべし、雨の晴れ
間は綱を引く、引くに靡かぬつれなさよ 下りて君はつれ
なやな合とは思へども情に合隔ては合なきものを、今の
つれなきごしん文字わたしや忘れはせぬわいの、山市の
晴嵐面白や日も早西に入相の合極樂寺の鐘の聲、三井の
晚鐘かくやらん、聞きしに優る名所古蹟、今見る如く奏
では、花々しくこそ聞えける。

つ笑うつしどけ形振いざく花見に行こわいやいへ櫻の
く幕の内合カン色めく品めく姿見ゆ、戀盛り合宿
借る袱紗帯の合カン締めて解いて妹春事、蝶胡蝶飲めや、
謡への一節に 踊へ北へ行こやれ南へ行こかいな合二ノ上西
は音羽の通ひ路も合東風が吹來るモツ顔振袖の、色深川の
三味の手事にわれ人も、柳よ柳やなオトシぎ髪へ狂人狂へ
ば不狂人も、共に狂ひしその風情、追廻りく梅が枝、
松が枝櫻の木蔭を行違ひく廻逢ひては如何やはせん武
士も亂れ髪梅の物狂ひ。

○初戀富士太鼓

安永元年二月、市村座。作曲者杵屋佐次郎。

三下りてさて又千代や萬代と、民も榮えて安穩に合打治り
し四海波、沖も靜に青海の青海波の波返し、返すや袖の
折もよく合めでたき時を越天樂、謡へや謡へ梅が枝に、
來鳴くや花の春鶯轉合梅が枝にこそ鶯は巢をくへ合風
吹かば如何にせん、花に宿かる鶯を合面白や合鶯の鶯
の合聲に誘はれて花の蔭に來りたり 合我は戀路に引かさ

れて立舞ふ舞の今日のまへにその戀人を見るからに、これこそ女の夫を戀ふる想夫戀合言はねどそれと秋波に合零れ易さよ花の露合つ君故に合消ゆるばかりの思のたけを、言ふも恥し言はでさて合止みなんとすれどひたすらに尙も思の増すわいな合外に増す花うつろふ色のあらうかと辛氣もやく後や先案し過しも戀の癖合つ積る思は富士の雪合見ゆる思は浅間の煙合何れ思はこひの山合上り詰めては空にも靡く浅間の煙え、夜はしつほりと合逢ふ瀬嬉しき富士の雪合つ管絃も既に關に合くさも華やかに花衣差す手も引く手も伶人の舞の曲合風情ありてぞ合奏でける。

○めりやす色見草

安永元年七月、森田座。作曲者杵屋作十郎。清玄比丘山下金作。

「華かざる姿も今は色衣浮世を悟る清玄御前、戀は曲者美しき、桂男子の顔見れば、迷ふわいな、迷はにやならぬ色盛り合いとし可愛と女氣は、なほ恨みかずく、貴

船へたまる露のあけほの色見草。

○初歌舞妓女花鏡

安永元年九月、中村座。作曲者杵屋六三郎。操踊の所作若井半四郎。

二上りつ振りやれお振りやれ、大鳥毛の振りよし花の合姿も四季に咲く合先つすつと伸してありやんりやこりやんりやりややり梅の合櫻翳して山吹槍の黄金花咲く十文字、咲いた白藤若紫の藤、オ、えいさかよ、ひごさしは夜の藤、其方思へばの色上り藤、オ、えいさ、松にか、りし亂れ咲合秋や桔梗も萎へてかたる、振込めくよいやお國歌舞伎は今候よ、ちよつと見初めて逢初むる、君に逢ひたさに瀬田の長橋、とんくくやとんとんと、渡ろとすれど合足がしどろで渡られぬ合あら面白の今の花槍。

○笹びき

安永元年九月、中村座。作曲者杵屋六三郎。

三下りつ世の哀れ搔き集めたる秋草の、中に繁れる竹切り

て、搔上げ載する笹の葉は、亡き魂送る輿車、轆も細き千尋の竹、肩に打掛け引く足も、しどろもどろに定めなき、淵瀬と變る世の憂さを、身一つに降る涙の雨に路のべの草葉もひたす袖袂、泣くく、辿り立出づる。

○舞扇名取月

安永元年七月、森田座。作曲者杵屋作十郎。

「月を見ればやといでその頃は、秋の最中の盛りみゆき菊さへ夜は白菊の白拍子、口笛吹いて男舞、女の身にしさも憎からぬ匂危きやさし扇返すくも舞の袖つ實に面白や春の花見に惜しめども合入相の鐘に花や散るらん、野路も山路も秋の入相に散らぬ楓も可愛らし合松蟲の合鈴蟲の音色もよしや勇む聲々



響蟲つ廊通ひ粹ちやと人様方よい皆おしやんすけれど、野暮な私は何時迄も合殿御一人を力草、朝な夕なに祈る心は、正直日天様かけて、牡猫なりとも抱きはせぬ君の齡の幾萬年も、替らぬ替らぬ御代なれや、御祝儀祝うて喜びの、日にますく繁昌も、御最負惠の難有さなう心の舞扇。

○めりやす白たえ

安永元年十一月、中村座。作曲者杵屋六三郎。

木蘭子三ノ上つ憂しと見し合夜半に降積む白雪の、中にしよんほり嬰兒の合可愛いくの聲聞けば、父母の事思出す合つ義理と戀路の仲田圃、戀慕流しにむかひぢの、耳に漏れ來る合物哀れ合カンつ水鶏の鳥のニノギン物思ひニノギン今宵ばか

りはくひくと、さのみ心は有明の、つれなく残る庭の
白妙。

○雪の一夜室亂咲

安永元年十一月、中村座。作曲者杵屋六三郎。

三下り雪に眺が数々御座る、木々に降積む春咲く花と、
見ては樂む中を憎や嵐の吹散す、眞白妙に降りかゝる、
花の宴や寺々の、鐘撞く法師の憎や、夜中の鐘の音
に憂き別れせしその人の、先へ抜敷行方なく、私にはそ
れと候べく候かしこと残す一筆も、讀めぬ仕方ぢやない
かいの、何か心の亂れ髪合御乳や乳母の癖として、脊
に子を負ひ寝させて置いて、犬の子くとほとくと叩き、
川舟に乗せて連れて御座れや神崎へ合さてもくと和御寮
は踊振りが見たいか、踊振が見たくは北嵯峨へ御座れな
う、北嵯峨の踊は對の帽子をしやんと着て、先づ嵯峨の
踊振りが面白い、吉野初瀬の花よりも、紅葉よりも、愛
しき我が子が見たいものぢや、所々お詣りやつて疾う下
向召され、とがをばいぢやが方へ參らしよ、詣り下向の

手に風車西へひらり合東へひらりくとする時は
心浮れてひよつくりひよ合ひよつくりと二上り
竹馬轡がりりんくく輪乗りは大事くそれで戯
れ遊ぶえ合ヲドリ待つ宵は三味線弾いてきんきぶし、泣
いて別れし後朝の、袖よ袂よ恨侘び、末はどうなる事ぢ
ややら、よんやさくびんと拗ねては見すれども、つい
謝つて張弱きなせ女子には生れたぞ、よんやさく、こ
れも憂き世の習に合心は物に狂はねど、君故迷ひ亂れ
心の遺瀨なく、物狂はしくぞ見えにけり。

○初霜信田笠

安永元年十一月、市村座。作曲者杵屋佐次郎。

前彈露時雨、降りみ降らずみ故郷は、信田の森や一村
の合裾野に咲くは蘭菊、繁る尾花に招かれ、足爪立てて
ちよこくと、人目まばゆき笠の内合忍ぶ身の障は此
處の人里、彼處の往來それに嫌なは犬の聲、ぞつと身に
しむ野邊の風、葛の葉毎にそよくと、恨はもとよりあ
さましき合八十氏人の種ならで、苦み深き身の上を、言
見えずみ立姿、其方が走らば此方も走ろ、走りく走り
廻りさりと走廻る畦道細道踊舞うて往なうよ、里も間
近き森の木隠れ。

○月都誓鹽竈

安永元年十一月、市村座。作曲者杵屋佐次郎。

陸奥の何處はあれど鹽釜の合羨しさは浦人の、女夫ら
しいが辛氣なく、思の色や鳥羽玉の合冠裝束あてやか
に、戀の諸譯もしんぞとほるな月の顔、月も都の最中か
な見え渡りたる合名所は合此方に當りて音羽山、音に
聞きつ逢坂の關の合此方と詠みつれどそれは音羽の山
隠れ合彼方に見ゆるは歌の中山清閑寺合今熊野とはあれ
ぞかし、松葉色付く稻荷山、あれこそ夕ざれに鶉鳴くな
る合深草山合伏見の竹田淀鳥羽も見えたり面白や名所
くを眺めるて合忘れたりとも蚤人の合長物語よしなや
合先づいざや潮を汲まんとて、持つや田子の浦東からけ
の汐衣寄せ來る波に裾を浸して、さらくさつと袖に満
ち潮荷ひつれ合賤が手業の遺瀨なや忍び逢瀨の磯枕、

ふに言はれずたどく、歩む野道畦道畑の鳴子のからこ
ろり、若し狩人やあるやらんと、周章で驚き振返る、森
に八重立つ夕霧に、姿見紛ふ草隠れ憂き世を渡る狐釣
りく今宵も狩に出ようよ合さらばこれから君待つ宵の
あわの木蔭にやつころりとんと寢腹這うてつくくと遠
寺の鐘に野末を見れば合星か螢か賤が焚火かいや合さう
ぢやない、かの様の道しるべ何ほ化かそとさんしても、
此方の手管はこれくこの鳴子は何と打込む戀の
淵合ライジヨ此處に手業も狩人の報を知らぬ狐良、とり
くしつらひかけ置きたりなう嫌やなう、嫌やなう、
鳴子繩は他所に見捨てて歸らう、なう往なうやれ、歸ら
うなうとは思へども、さすが又合煩惱の絆に引かされて
行きては歸り合歸りては、行きつ戻りつ戻りつ行きつ、
暫し彷徨ふ合小田畷合色は思案の合外ぢやとよう言う
た合逢うて顔見りや他所の意見も身のよしあしも合とん
と忘れてなこれな、え、措かしやんせ邪魔になる合何
がお邪魔になるぞいな、さあそれは、それを言はぬがて
んと白癩戀ぢやもの、さうかいなく定めなや見えす

變らぬ合誓神かけて合契は千代の鶴の丸、離れぬ仲は八重九重に、結びくし結綿と、言はせて置いてその様に合さりとはくつらいぞえ合磯邊の波のかねごとを、これこの耳に菊蝶の番離れぬ戀の山ヲドリ枕三つある合床の内色も優しき合三日月の合影を舟にも譬たり合徒な男の合口車、女子たらしの釣針と疑ふ合引く手數多の袖袂弓の影とも驚く合數も合三五の月の色、神様かけて變るまいぞと木綿襷聞くと飽かじ冬の夜の、鳥も鳴き鐘も聞えて早や明方の合雲となり合雨となる戀の峠や情の淵瀬、千代の盃光添ふ、黄金は日々に永當く合入るや入來る花の顔見世。

○めりやす談の雪

安永元年十一月、森田座。作者壕越空陽。作曲者杵屋作十郎。

一締めて寝し夕の床に變らねど、心を鐘に鳥が啼く、吾婦あづまの廣い世界に又とない、男夜着に恨のある様に、蒲團に利めある様に、寝巻のまゝの冷さは、小夜の千鳥

も、商ひ繁昌取分きて、顔見世繁昌續く大入り。

○雪花縁狩衣

安永九年十一月、森田座。作者壕越空陽、作曲者杵屋作十郎。

一恥しき習はぬ舞の舞扇、開く香も早咲の梅の花、眺に飽かぬ狩衣の、主はさぞや、殿御風俗見たいものぢやくく合一ほんにお前も戀しかろ合烏帽子狩衣面影を合今見る様に思ひ草、露の間も忘る、隙はありなんと、袖や袂に涙かも一妻の爲にとて淺草の、観音様へ七日なんなん七夜さ、雨の夜も雪の夜毎も、通は、御利生あらたになんよえ、罪淺草をさいな只頼め。

○羅浮梅戀圓

安永元年十一月、森田座。作曲者杵屋作十郎。下巻は大薩摩。

三下り一花の顔見世町々さまや御所がたの、御最負なされて紅は園生に植ゑても隠れなき、戀の山下りこう女房

の一重帯アイノテ此方の心を白絲の、瀧の數々繰返し、岩にせかれて嵐に連れて、惚れてもつれし髪ぢやもの、誰か結ばん夢枕。

○戀懸針

安永元年十一月、市村座。作曲者杵屋佐次郎。

一賑はふ顔見世この市村彼處の町々、賣來るく針賣合一先づ都には隠れなくその名優しきみすや針、御簾や几帳の玉の床、綾や錦の上々様も合又は深山の隅の合小隅のゑりくりゑんじよ合つりさせてふ機織り賤が細簾合竹の簀子の伏屋迄合卑しき高き隔てなく、女中様方召さねばならぬえ合一えいくく縁は異なるもの合今此處に商ふ品は變れども、連立つ袖の振合せ一樹の宿一河の流底意明して語らはん他生の縁の假初も、假初ならず打解けて浮れ浮る、二人連れ合一戀をさせたや合鐘撞く人に合様を待つ夜の夜半の鐘合首尾のなる夜の明の鐘合何方も思ひやりがない合おしやればそれもさうぢやえくく、これも世過ぎのしをらしや一盡させぬ繁昌何時迄

の可愛らしさよ、嵐三五の月の顔とかほ、嬉しい中の子寶や、行末祈るも親心合昔思へば恥かしや、お前を見そめしその頃は兵次一かまくら山ときく櫻、今を盛りの殿さんに、惚れたけなやら相惚れに、これ幸ひと抱いて寝衣の移り香は三人一今に忘れぬその時に合つらからば只一筋につらからで、情交りに偽りぞうき、可愛いくもひと盛り兵次鼓唄一わしに隠して悪性を、するがなる富士のお山にこんたんは合一覺えないくくなくくくやつこのくこの男兵次一いやくく私に隠さんしても、そこ聞き出すも女の役、だまつて聞いてるさしやんせ合某お山に成り代り、一問答仕らん合大事のく主様を、何のそなたに添はさうと、此の世は愚か未來永々夫婦ぢやと、悋氣につる顔容、恐ろしくも亦をかしけれ。

〔下〕淨りつさる程に、胡蝶の夢の邯鄲の、枕に鐘の驚かす、その一炊のかりの世を、仇なる身ぞと悟りもせず、日本唐隔つれど、變らぬものは戀の闇、悋氣の雨や雪の肌、せいらの三界おふちをゑいじ化したる姿ぞ現れたり一怪しや無明の音をあげ此間枕の此方を音づつて、物申

さんとはのめけど、其の答さへ嵐吹く、たそやたそ假寝の夢を驚かす、心覚えはなきものを、思ひ寄らざる勅使やな、いともかしこき位山、何と登らんおほつかな、いざやそれへと夕波の、寄せて寄せ来る波がへし、手の舞ひ足の踏みどなく、番屋をさしてぞ。

丹前 二上り一名所の櫻も梅も冬ごもり、中に色ある水仙の合花のよそほひいよ憎くからぬ、伊達な風俗見ても見あかぬ戀ぞます、お前に逢ふたら何から先へ、恨みの數々、ほんに舟にも車にも、それはそのく積まれればせまい、かはゆがらんせ我が妻に、變らぬ中と祈る神様を、頼みの力草、はやくお立ちと夕紅に朝紫は東方、染出す都は織出す錦はいろく飾る丹前。

さくら ひめ 道行初鶯 上

安永二年正月、中村座。作曲者杵屋六三郎。次の「馴初の段」と合せて上下をなす。

三下り前唄一逢ふ事の、尙片絲のよるとなく、戀にはとんと結れて合解けぬ心はその人に、枕も解かず帯解かず、夢

す合松の葉越しに影零す、初鶯の鳴く音合あどなやしをらしき、君に逢瀬を伏拜み所縁の御寺に着き給ふ。

○愛護若 馴初の段 下

一おんいたはしや愛護の若、伯父の御坊に世を忍び一佛に仕ふ閻伽の水、枝折り添へし花手桶、手に携へて唄傳ひ、心細道迎らる、一姫は遙かに見るよりも、なう懐しやと走り寄り合お前に逢ひたいくと、思ふ心に遙々此處へ来たわいな、男心のむごらしや合それより便宜音信も合聲も聞かねば顔も見ず、我は秋鹿夫戀ふる、可愛と云うて吳羽鳥合一愛護の若も今更に、姫に心の遺瀨なく、我も都の父上の、お許しなれば移られぬ、御身はこれより立歸り、都の首尾をよい様に頼むくとばかりにて、差俯向いてぞおはします合一姫は涙と諸共に合それはあんなまり洞窓な合お前に別れしその日より、うつらくと物案じ、夜はな臥所や床の内、枕一つに捨てられし合一恨も合つらみも顔見れば合過ぎし競馬の馴初めに、二世と交せし縁の絲今は真紅の亂れ絲ヲドリ一言はす語らずな

も結ばぬ春の夜に、名たてがましや二人寝と、憎や寝もせぬ短夜を合明の鳥の告渡り宵の島田もそのまゝに置惑せし旅姿、今日九重を立出るその名ゆかしき櫻姫にほひ氣高き御所櫻、薄樺櫻緋櫻に、思憶れ八重一重、二世とかねたる稚兒櫻、二種の實の越度より、見えさせ給はぬ御跡を、慕ひ行方は東路の、鎌倉山と音にのみ、聞きしを便たどくと、慕ひ行方は東路の鎌倉山と音にのみ、聞きしを便たどくと道行く人に物問へば知らぬ山路に入相の鐘に音添ふ風につれ合里の女子の白挽き唄合白は挽かれて快う廻る合道は田のある合山坂を、早越ゆ峰に見暗せば、向ふは遙か波清く、千船百船漕ぎ渡る合沖に江の島磯邊に千鳥、濱千鳥の友呼ぶ聲はちりやちりちりくくやちりくと、散飛ぶ處はあれくそれく、其方を見れば賤の女が、髪に載く白砂や合そなた思へばく晒しの白くよいの合とかく搗かれてようやれ、君様を十九や二十でいと愛らしく、帯の結びの品者よやんれ品物よ合我は野に住む雉子よのほんくさてくさてくさてくさて雉子合心一つに諦めて合行けば恨もあかねさ

アみんな心で捌いて置くわいな合なう絡車の絲合一纏れた筋をみんな心で捌いて置くわいな合置くわいな纏れ纏る、葛葛あれく御寺の勤の鐘と合急がせ給ふ若君を、放しはやらじと袖袂、控ふる姫君詮方なき妹脊の初戀合わりなき仲にご見えにけり。

○めりやすかきつばた

安永二年正月、中村座。作曲者杵屋六三郎。

二上り一物思ふ頃は何時しか明けやらぬ合聞につれなき時鳥、ほんに一聲消えにし後の一霞合夜半に物憂き誓文の、罰も當らば神様の、誓に立てし入黒子合方一今は徒なれ、あだなる契と諦めて、残す一筆散し書、薄き縁は合うす墨に、露の命の惜しからん、二人の仲が水漏さじも、落つる涙のはらくくと、言ふに言はれぬ心の戀路、君を御無事と燕子花。

○初昔文の仲立

安永二年正月、市村座。作曲者錦屋金藏。唄浄瑠璃。

本調子カンハル一はとは誰が書初めし封じ文合解いて披い

て谷の戸出でて合三ノギン驚誘ふ梅見舟、焦れくくてオンカン待合の合カンハル辻占聞けばあやにくに合風も朗に伽羅の香合ハル地カ、リゆかしや、よしや振の袖花の姿の八重一重江戸ガカリ今日九重に類なき合三下リ一思ひつく寝ればや耳へ染絲の、元の元の白地が今更戀ひし、戀と云ふ字の書初めを合湯島に書けし筆の花、八百や萬の神様に、堅く誓ひし縁結び、必ずやいとオトシ寄添へば合三ノギン一さすがにそれと岩本の、神かけてとは正無事、外に約束あるとの事を、わしやよう聞いて徒な、浮名そしりの恥しや合三ノギン一あのみあ憎らしい何ぢやいな、その美しい顔佳鳥タ、キ三千世界を尋ねても合私が殿御と見る人は、吉様ならで呼子鳥義太夫ガカリ深山鳥も白鷺も、我が夫鳥は知るものを、惨いお方と振の袖合カン一濡れにし仲と人の目に、かゝれとしてしも黒髪を合剃らねばならぬこの身の上、放してやいとつれなくも、言ふに言はれぬ言の葉を、戀に筋む芋環の、繰返しぬる繰言を、巻返したる封じ文、筆に思をオトシ土筆合ヲドリ一花と柳はどちらが可愛い合分きて言はれぬその仲なれど合番唄花の誠はどうやら薄く、

みに紫應寺合讚岐には松山合オン降り積む雪の白峰合扱伯耆には大山合なほ京近き山々はオン愛宕の山の太郎坊比良の、峰の次郎坊合名高き比叡の大嶽はあふといふ字の耳にたつ心横川のオトシ流なり合葛城や高間の山合山上大峰釋迦ヶ嶽難行苦行のすたく坊主すたく一うてぞ加持しける。

○蝶鳥千年藤

安永二年正月、市村座。作曲者錦屋金藏。五郎市村羽左衛門、朝比奈尾上松助。

三下リ一勇ましや會我の五郎時致は逆澤瀉の重鎧、輕けに提げ駈出す、その勢は鬼神や合鬼を欺く小林が合ちよつとお邪魔と鎧の袖手をかけ合鳥帽子鶴の丸、左右の袖に天津風、今日葺屋町押合ひて、引けども合押せどもその風情、動く氣色はなかりけり合平家時致笑つてア、笑止、いらぬ悪戯止めにして妨げせずともそこ放せ、ならぬぞ放しやせぬ合柳千本の枯れる迄しよんがえ合一そのまゝ恐らしい顔わいなア、ちよつと見初めしその日よりギン

浮氣らしいぢやないかいな上實のあるのは脇目から見ても、柳はなよくと靡く姿の可愛らし合オン一嘘も誠も手枕に甲斐なく立たん合トメ雨に染井の里の曙。

○姿の亂咲

安永二年春、市村座。作曲者錦屋金藏。八百屋お七瀬川雄次郎、辨長市川團三郎。

一憂きことを引三ノギン彌生かさねし春の色空も霞か瀧の糸亂れて名をやオトシ流すらん色詞なうくたそや物問はうフシ年もいざよふ月びたひ合花も及ばぬ若衆振しかも上々吉様に調若し逢ひはせずかいナアッわしや戀しうて合逢ひたうて見たうてゆかし心が亂れ咲き合花に狂ふはつがひの蝶の合ア、羨し合アノ蝶々の合跡や先なる女子氣に行かいつくとギンガハリしら糸の結ほほれぬるまさな言合それくそこへ美しい合三ノ振の羽織に袴をしやんと如月彌生の花ざかり二人並んで花見て戻ろ合く合しんどろもんどろくくしどろもどろの言の葉に泣いつ笑うつオトシ伏しまろぶ三ノギン一まづ筑紫には彦の山合ふかきたの

うつらくと焦れし甲斐も大磯や合結ぶ縁のわりない口説他所の見る目も恥しや上嫌でも一應でもシバガキ一引かにやおかぬと取付けばなん合事ともせず時致が合しつかと踏みしめ駈出す、力自慢の小林も呆れ果ててぞ見えにける、これぢやならぬと和けて、留める手管の拍子唄合ヲドリ一タ根こじの合初櫻合見染めて染めて墨染や、神の誓の伊勢櫻合一變らね譽家櫻合一その男氣の江戸櫻合粹な姿の吉野菊、戀は曲者徒名草ぢやほんに一互に争ふその勢前代未聞當世無雙、後代無二の評判は、あつばれ古今の若者やと、貴賤上下押並べて感ぜぬ者こそなかりけり。

○鎌倉風咲分丹前

安永二年三月、市村座。作曲錦屋金藏。重忠尾上菊五郎。景清市村羽左衛門。

鼓唄一それ紅白花開く煙雨のうち一その詩を和けし三十一文字や秋津國合其の名も高き橘の千代を重ねし末廣や色をも香をも一對の花の姿の梅見月盛りつきせぬ眺かや

合しやんとさいたる大小も下オンさすが風流寛濶に合意
氣あり合張あり合ずんど伊達する信濃梅美しみめも愛敬
も合いふにいはれぬとりなりは何れ梅とも櫻とも譽れ劣

霞えにしを結ぶ夕霞、花の盛りは一重二重か八重霞、戀
なと何とせう合引かばなびかぬ袖袂オトシ面白や貴賤男
女の打連れく入りはますく御最負かはらず、えいと

うく打込太鼓花橘
の今日の賑ひ。

○めりやす女夫水

安永二年三月、市村
座。作曲者錦屋金藏。

かさね尾上菊五郎、
絹川五右衛門坂田半
五郎。

「さても憂き世の憂
き事に二ノギンいと
思の増鏡合カン映せば
映るハリとりなり

も、辛氣辛苦を比べごし二ノギン涙の玉の櫛笥水、露も漏
さぬオンハズム夫婦水合仲もしつくり合砥にカンハルかりや
繋がる黒髪も、ほんに千筋の絲車トメ廻り逢瀬を語り明



合なんくなんでも
お伴行列揃へて合點
か下馬先靜かに振込
めさ合ずんどくす
んと通り者合けふ
は廓へ旦那のお伴合
いつもの茶屋のあけ
簾銚子もて來い煙草

盆はては口説になり振もつい背き寝の其の中を酒が取持
つ床の海、深き情も戀の里、花のお江戸はいつも繁昌え
合し霞初めたか早くもきにし合初霞合くだけかけ告ぐる朝

かさん。

○初戀姫小松

安永二年春、森田座。作曲者梓屋作十郎。

「大内の御祝儀祝ふ君が爲、春野に出て若菜摘む、實
にも優しやこの小松、四季に變らず枝葉も榮え、松を太
夫と名付け初めけるも、理や御所の御座に名にしおふ右
近の橘左近の櫻、見れば夫婦の様に思はれて、可愛らし
いぢやないかいなど、寄添へば此これくくく大事の役
目ぢやと行くを引留めて合私にばかり思はせて、思は
ぬ君が恨めしさ、何故その様に、嫌はしやんす程思の増
鏡、曇り勝ちなる女氣の「其方ばかりが誠らし事を、言
やれど女氣と、川の瀬は夜の間に變るたとへ草、露の
情のあるならば、末はかうぢやと脊叩き、二世も三世も
宿の花、嬉しさ心いそくと、此方の人様女房と變らし
やんすな變らじと、「私とお前が物好模様、花の都の染
色に、影と日向の二つ紋、着たわいなく、合吾妻紫色も
香も、難波の梅に鶯茶、二人が對に着たわいなく、こ

び茶風俗といはな色「千代に八千代に君が代の、變らぬ
變らぬ小松も榮え、若菜の御祝儀大内山に、黄金の花咲
くお家も繁昌、盡きせぬ春こそめでたけれ。

めりやす春の雨

安永二年春、森田座。作曲者増山金八。作曲者梓屋作十郎。

「つらかりし花に嵐の夕暮も、昨日と替る武士の、今日
は忍ぶの數々を、誰に語らん胸の中、身に染む風を恨み
ても、ほんに返らぬ世の習、思ふとは何が浪華の古へも、
人目堤を行違ふ、雁と燕に問うて見や、餘所にも知らぬ
袖ひぢて、むすべる絲の青柳を、傳ふ涙や春の雨。

○めりやすひとつみぞ

安永二年春、森田座。作曲者梓屋作十郎。

「三下り一間隔てし戀の闇、鴨居は高う使はれて、見ても
深いが羨し、敷居は何の因果やら、常に踏まれてその癖
浅い、思や不思議の縁の脇、わきと云ふ字の憎てらし合
カ「濡れて手水の水臭く、汲まれぬ仲ぢやあるまいけれ
ど、日の本の神かけて、襖一重に幾瀬の思ひ、君は鴨居

よ、わしや敷居深い浅いも一つ溝。

○京人形 三扇雲井月
後の雛

安永二年七月、中村座。作曲者杵屋六三郎。岩井半四郎七
變化所作事。

第一 花車

三下り「曳けや」花の眺の花車 合梅は名に負ふ八重
紅梅や薄紅梅の香懐しき 合句櫻や風に品よき青柳のたよ
「と」しやなく歩む歩めや曳けや合この車 鼓頭「山
の名の音は嵐の」花の雪に深き情を人や知る「四季を
奏つるその戯にわきて春立つ花盛り、花に勝りしよい風
俗は可愛らしやの」尙浮立つや袖の色うつろひ易き人
心、思へば「春の夜の、夢ばかりなる手枕に、うつらう
つらの朧月、朧々と見も分かぬ、明けては散りなん、暮
れては散りなん、散ればこそ花の色も香もいづれそよ吹
く春の風、吹かぬその間の一盛り惜しや散すな色なき人
の、情は暫し花の縁、名残は雲に吹閉ぢよ、留めて甲斐
なき花の顔。

第二 花傘踊

二より「開いた」花傘が開いた、待てば甘露の日照り笠、
紙傘は形よく差しかけ「妓達に持せて二人つく」連
立ち相合傘の、どうで片袖濡れたらまよ、よ、とても
濡れよならしつほり濡れて塗笠の、御所の上藤衆は戀も
情も網代傘、人目の鬮や目塞笠、忍ぶその夜はふか編笠
で通はんせ「」通ふ道芝蝶の羽重、二蓋三蓋花笠、
見事に「」さつても見事に揃うた笠の内ぞゆかしき君
が顔合「花と見紛ふその装、風に散來る遠山櫻、ちらり
」ちら「」塵の煙か春霞、霞に紛れて失せにけ
り。

第三 傀儡師

三下り「うき世を渡る事業も、數々多きその中に、國々修
行の傀儡師、又冴返る春雨に、樂屋を被る風呂敷に、深
き思を籠めて打つなる箱鼓、打鳴してぞうかく軒端に
立寄りて「小倉の野邊の一本薄、何時か穂に出て尾花と
ならば、露が妬まん戀草や、俺が女房を譽むるぢやない
が、物もよく縫ふ機も織り候、綾や錦や金欄緞子、折々

毎の睦言に、私が思ふ様に樂むならば、二人連立ち花の
山、花見に行こぞ花が見たくば吉野へ御座れの、今は吉
野の花盛り、花見て戻ろく歸る春野の面白や「鶉山雀
春の小鳥の囀る様は、ちんちくくく」やちしやふしや
ぜんそろや「、ちてつからくく」ちりつくり「三
羽か四羽か、すんへんほん、ちりつくりとも囀るべい
とは、何より以て面白う存するべい、このえいこの春の
景色やな、えいこのなく、山里迄も樂しがるらん合「
早暮近き黄昏に、いざく我も歸らんと、裾搔袂け身繕
ひ急ぐと見れば、忽に姿は消えて失せにけり。

第四 神子

「池水に面影映すよい」顔佳花、顔も所體も作り
なき白絹や、千早振るく袖振る鈴の鳴るか鳴らぬか鳴
りそな色か、ならぬ操の絲筋に、その弓張りの梓神子「
やん面白荒神の御前を見れば、松植ゑて黄金の井戸に水
も湧出で、松諸共に内ぞ御繁昌、末繁昌の千代の御神樂、
これぞ誠に心も晴れて、雲晴れ渡り天津御空の神遊び「
神々様のお許しのある妹脊仲、又戀と云ふ字の曲者に、

迷ふは女子の癖ぢやもの、ア、まゝならぬ愛き世ぢやと、
心で心取直して見ても思ひや増す戀の道「これ私にはか
り物言はせ、物も言はずにるやしやんすのは、私が心を
疑うてかえ、起請誓紙はまだな事、お前故ならこの身を
捨て、捨て、甲斐なき果敢なや我はと言はんとすれど
短夜の、早や東雲になりにけり。

第五 娘踊

「初秋やまだ色付かぬ生娘の、口説けば顔も薄紅葉、赤
前垂の茶屋娘、洒落た風俗それ」里娘、こちや「よ
い首尾で「姿なら言葉も田舎小娘の、手業に骨を扇屋の、
娘なりやこそ繪も書き花も結ぶや、それ」花娘、こち
や「よい首尾で恥しや「憧れ焦れ小牡鹿の、裾野が原
の萩や薄や、桔梗萱萱色々の、花も千草を踏分けて、臥
所定めす啼く聲に、嵐の傳に誘はれて、見えつ隠れつな
りにけり。

第六 切禿

「野も山も皆白妙の雪景色、中に愛しき幼児の、雪を丸
めてしどもなや「餘念なき顔に笑顔や愛敬ものよ、頭振

かむりしほの目、頭てんく夜雪やこんく、霞やこんこ
ん、足が冷い草履買うて給れく、降積む雪はさながら
に、梢々の花盛り友達語ひ悪戯盛り、祭りくちんが
らこく、此處迄御座れ手車に乗せてありやくこりや
く不倒翁犬張子、猿の相撲は上つたり下つたり、え
いくく、如何なる悪戯遊びも、此方の町へ御座
れの、張つてく張人形、金平だんべい坂田櫻に猿が三
匹、ふらりと下つて俵轉びやこりやくこりやくと
滑らしやんすな、おそれさてもものく、愛も増るや顔
の笑幼な心のしをらしや、駒の足取真紅の手綱に、煽
を打つて遠乗り、曲乗り、賀茂の競馬の面白や合勇む足
許大手馬場先櫻の馬場に合翁遊びの數々に、行きては歸
り歸りては、彼方へ誘ひ此方へ連れ、深山嵐にさらく
さらくさつと雪散つて、姿は見えずなりにけり。

第七 猫

鼓頭一敷島の大和にあらぬ唐猫の君が爲にと現れ出で、
つれなき人のその爲に、身は亡軀をさりとは、叶はぬ
戀に迷來て浮みもやらずあさましや、この世からさへ畜

安永二年七月市村座。作曲者錦屋金藏。

三下り一僧は歸る夜船の月レイセイガカリ我は故郷を出船の、
弘誓の船の水馴棹、差す手引く手に徒人の、送る千束の
玉章も、明けて言はれぬ我が身のつらさ、悟れば清き法
の道、迷へば濁る戀の淵合渡りかねたる憂き世の中を、
捨て、姿も何時しかに、合墨の衣に心も澄みてオトシ面白
や文彌ガカリ一過ぎし彌生の花の山合往來も多きその中に、
愛しらしうて可愛うて合朝な夕な物思ひ、ア、思ふま
じ憂き世オトシやな合一その美しいその姿思切るとはどう
ぞいの合私が言ふ事聞かしやんせ合私も昔は戀路に通ひ
合色と情はえてものなれど、今は心も墨染衣、靡かしや
んせとオトシ寄添へば一措かしやんせ、何ぞいの、私もお
前も菩提の道に合入るや入るさの山里越えて、廻りく
て修行で暮す身ぢやものと、おいて袂を振放す一いやと
よそれは世の中に、情を知らぬ山寺の、合鐘撞く法師の
戀知らず合只世の中は戀の道、釋迦も達磨も情知らいで
住まうかいな、これも昔の物語合一さればとよ釋尊はか
の耶椰陀羅女の妹脊中、羅睺羅尊者を生み給ふ、戀は菩

生の、その唐猫の性を受け、未來の程ぞ怖しや一煩惱業
苦の娑婆の顯證今此處に目前見するあさましき懸垂地獄
の苦みは、きう中にて身を切る事千斷して血は狼藉の萬
死萬生果しなく劍樹地獄の苦みは手に刃を持ち、指を切
り髪を切つたる誓の罪科、胸の焔は焦熱地獄々と燃上
れば、堪へかね悶え木蔭へ寄れば、梢は劍の雨霞と降り
かれば、朱に染まりて立迷へば、鐵の牙ある犬、我を
目がけて攻來る聲の、逃れ難さに詮方なく、打てどもく
煩惱の、我と我が影邪淫の罪、人を焼きたる焔は冥火と
なつて、打ちかけく逆巻けば、徒に契りし誓紙の鳥、
兩眼目がけて立迷ふ姿、此處に免れ彼處に現れ、無間永
沈阿鼻大紅蓮、氷に閉ぢられ振ひわなき苦み受けるも
身の罪と、天に叫び地につく息、山風土風さつくく
ささつと吹來る疾風風吹立てられてくるくく、あら
堪へ難やと言ふ聲に松風ばかりや残るらん松風ばかりや
残るらん。

○道行法の蘆分船

提の種ぢやいな、菩提も浮氣の種ぢやもの鼓頭一あら面
白や法の聲、打つや木魚の拍子よくウツ一謡ふも舞ふも
法の道ラドリ一衣打つ里は遙に遠碇合風が合誘へば尾花の
波が打つは現の旅寢の枕、夢も結ばぬ小夜碇セメ一絶え
ぬ御法や老若男女、袖を列ねて永當く、佛法繁昌芝居
繁昌、變らぬ代々の盡きせぬ御國ぞめでたけれ。

○めりやす月のまへ

安永二年七月、森田座。作曲者杵屋作十郎。
三下り一夕風は誰が恨か身に染みて、偽りならぬ言譯も、
秋の千草の咲いて吹かれて亂れ髪く合赤い顔して名を
流すなら、龍田川ぢやと言はうぞえ、それもそれも、憂
き世竹のひとよの物思ひ。

○仇浪鴛思羽

安永二年八月、市村座。作曲者錦屋金藏。
一秋の夜の合千夜を一夜に重ぬとも、言葉残りて鶏の、
鳥と鐘とはどちらも憎い、況してきらひは合鳥の聲、鐘
は待夜の伽にもなるが、まゝならぬ夕合朝の川風も、身

にしみくくと萩の上行く上の空、戀しゆかしき我が夫鳥
の、霧間隠れの三つ瀬川に浪に揺らる、合物思ひ合人よ
り鴛鴦の増鏡、うつり變りしとのつらさ合とても沈まば
諸共に、諸羽並べて憂目を見よに、飽きも飽かれぬその
仲を、情知らずの人心、思廻せば味氣なや浮草の寄る
べ定めぬ浪枕、移る易さは世の中よ、月の夕は睦じく、
二人樂む棚なし小船、他所の悋氣はア、辛氣、まゝなら
ぬ、娑婆の睦言今ははや、その思羽の劍羽の、呵責の責
の遺瀨なく、常に見馴れし箒は、大叫喚の車となつて、
くるりく追廻り合打來る波は氷の刃、紅蓮の地獄の苦
みは、かくやとばかりあさましき、かくやとばかりあさ
ましき。

○めりやす月の弓

安永二年八月、市村座。作曲者錦屋金藏。

三下り中ギン「憂き事を、思へば繁き袖の露合カン日には百度
又千度、濡れてぞ戀の遺瀨なき三ノ上心二ノ中ギン二つを並
べて置いて、いづれをそれと月の弓合方「引きぞ煩ふ女

何々ぞ合頃しも秋の山草花たちばなの匂を含むく、酒
の響じつと抑へて「今迄此處に佇む女カンとりく、手
管の姿を現し、或は悋氣に心を焦し、又は虚空に萎垂れ
かゝり、咸陽宮の煙もいそよ、七尺の屏風の上に、尙餘
りてその丈一丈の、地踏み角も折れかし、面も向けぬは
恥しや、惟茂少しも騒がずして、南無や意氣地の大菩薩
と心に念じ、煙管を持つて待ちかけ給へば合口説になさ
んと飛んでかゝるを、飛違へ煙管の眞中持添へ給へばカ
ンその手を引締め何なくお敵に従ひ給ふ、紅葉の威勢は
面白や「紅葉散りしとなあ合暮松風に合可惜紅葉の散る
はく、散來るはく、合笠にとんく、留まれば合とんく、
留まれば尙愛々し腰を締めたや抱かれた寝たや、おてん
とてんと紅葉を敷くや褥に合寝んくくくく、寝
と御座る、寝と御座るえ合現なや「所は山路の菊の酒、
何かは苦しかるべきと合人々興に入給ふ合華なりし風
情かな。

○めりやす錦木

氣の、つい結ほれし二ノギン絲薄、解けて解いて、解いて
ほんに何時か晴れなん今日の霧雨。

○むつの花紅葉狩

安永二年十一月、中村座。作者櫻田治助。作曲者杵屋六三
郎。

諸ガカリ「月待つ程の轉寢に夢打覺ます夕時雨カン「四方
の梢も色々に、錦彩る谷川に、風のかけたる箒は、流
も敢へぬ紅葉を、渡らば錦中絶えんカン「よしや思へば
これとても、前世の契淺からぬ、深き情の色見えて、か
る合折しも道の邊の三ノギン「草葉の合露のかごとを
ば、かけてぞ頼む行末を、契るも果敢な打附けに、人の
心を白雲の、立ちわづらへる景色かな、諸ガカリ「紅錦繡の
山装をなす「これなる紅葉の下枝に、落葉搔寄せ薪と
なし合酒薫らすその景色、詩の心の面白く、いざや酌
むべしく、合「面白や時雨急がん紅葉狩合牡鹿の角の束
の間も合唐土の朱買臣な錦の袂合會稽山に翻す七賢が樂
みも合酒にせい合銚子持て來い盃持て來い、さてお肴は

安永二年十一月、中村座。作曲者杵屋六三郎。

三下り「此處は山蔭森の下、月夜鳥は何時も鳴く、我は君
故泣き明すカン提子の水の沸返り、胸に迫るも女氣の、
思ひかへく、オ、さりながら合カン我が身のえにし薄紅
葉、涙の露の亂れ髪、亂れそめにし陸奥の、誰が手に觸
れんしづが錦木。

○亂菊稚釣狐

安永二年十一月、森田座。作曲者杵屋作十郎。

「冬木立合此面彼面に霜の花、戯れ遊ぶ折もよしや、此
處に掛けよかの合狐良合これくこの好物もので合つん
く釣出さうとは思へども合人を化す狐さへ、人に喰は
る、夜半も有明の、月に浮かれて、たんく狸の腹鼓合
拍子に乗來る狐良、かゝる憂き目も我が商賣の、罪も報
も後の世も、忘れ果てて面白さうな、狩人も今やくと
松蔭に「花の盛りや小娘の、形振合映す水鏡人迷せて嬉
しの森の小夜嵐合「鳴子の音や犬の聲ぞつとした、い
やくくなく怖しや、人に見せまじ我が姿、衣紋繕ひ

鬢撫でて合品やる風俗に狩人も、惚れたけなやら相惚れに、可愛らしいぢやないかいな合前百迄わしや九十迄、それえくその名高砂尉と姥と、云はるゝならば御祝儀の、橋を染めけん戀の橋、小春頃とよ出雲の社へ神集りて縁と縁とを、結ぶの神様頼むにえ、末はかうぢやとさうなる迄は、とんと言はずにくゝえ樂む仲ぢやえ戯れ遊べと何時となく今は歸るぞさらばよ、さらばと行くを引留め、君は歸るか恨めしや、暫しは馳走によるこんぶ、茶ばかり合今様譽めし花の顔見世。

○色見草相生丹前

安永二年十一月、森田座。作曲者杵屋作十郎。

眞一名にし負ふ、月雪花の姿三吉野冬景色ウツガカリこれはくゝとばかり櫻の梢々も墨繪になりふり、男とも見え女とも、見交すく顔佳花美しや、君の御容貌さてどうともかうとも言ふに言はれぬ我が思ひ、誰に語らんこれ幸と、招けば領きないくゝやつとめに御用のおんもじは戀かよと花の顔見世御馳走に眞中は色も香も

や合伊達らしや合拍子とりくゝその尾に取附き此處迄御座れ合よいもの取らしよ合後なが先になれ竿になつて御座れ帯になつて合御座れ帯になつて合御座れ天氣よかれ日和よかれおうらくひうらく鴨を刺してくれよと思つてこれものに構へて待つこれものに構へてひよつと刺いておつ取つたこれを來て見よかしのえ合引いた袂のく性悪顔のそのく目許合結ぶ誓の縁の紫。

○わがなみだ

命を論ずれば、江の畔に繋がる舟合身を觀ずれば岸の下邊の根無し草、春の牡鹿の妻戀ひに夕を待たぬ朝顔の、果敢なき譬病葉に、残る枕に鬢の髪、零れかゝるや合我が涙。

○平戸名所物語

三下り住馴れし合平戸の名所物語り合耳馴れ目馴れ浦里の合數々多きその中を、概略覚え候と、憶せぬ體にて語りける先づ名に愛でし鯛の浦、この僕も江戸浦を合離れぬ様に妙見浦え色々の合たのみをかけていつまで

ある梅の花二人は松竹、三幅對の掛物名代物、眺めに飽かぬ床の間に、花を池の坊、水際の華なりし顔見世は、老若男女勇み來て、永當く、えいゝゝ、今日も大入明日も大入。

〔以下八篇安永三年正月刊行の「唱歌新聲常磐の友」

（明和八年以後の作）所中の年月未詳のもの〕

○松朝日鳥指

野道山道浮つかれくゝてきし竿擔けひよつとつん出た僕は合今日壽の初役の初心は御免刺してくれよ合刺いてくれ梢々に小鳥小雀戯れ遊ぶ中につくどのは合まじくで御座る御座れく子供衆合鳥を刺いてやろぞ色なら御座れ戀でも御座れ濡れもちつくり合えてもので御座る合比翼合鴛鴦變らぬ契合さりとくゝしをらしや合あのや女郎様にやナア我等もちつくり打込んだほんに一夜の假妻に合ラドリ今宵忍ぶの昔の笠さんさ合花笠雪笠よう似ようたではないかいなそんなれも誠によう言つた合降りく春雨合春日の山の紅葉笠着よや形よや見てもよ

も、御最負受けて名を橋に永坂や君を思へば合滑河を渡りてく園崎瀉計らず大崎ずんど田中のおの瀬戸小瀬戸合晩にござらばまんく窓から忍んで御座んせ窓は擴かれ、やれさて身は細れ合忍びくゝの轉合ひラドリ色が黒いとて婿にせさまよ、どうでこの身は汐馴れ衣、いけぬ池田の事わいな合書いて口説かば三十字一文字歌の浦合面白や所繁昌く入りは大島長浦青浦野田にしほとや浦々迄も榮盡せぬ御代なれや。

○月黛芹摘姿

三下り打連れて來つて袖も軽々と合秋の野山の道草喰うてさあさ行こやれ仲よい同志の合小雀山雀四十雀浮れてく餘念慰む愛らしや合隠れん坊に交らぬものは乳や子持ちの母様へ合連れて參ろの神様幾つ十三七つ合まだ年行かぬ我々も變らぬ千代や月の友稚遊びのしをらしや合ラドリ姿優しき合女郎花合寝よけに見ゆる白萩の合露に纏れて下紐の解けて解けて又結ほれて憂き世廻りが憎らしや秋の野山に色附き色附く花野に合咲くや合七

嬉しさは帯紐解いて土俵枕にさあく寝て花の顔え君を
思へば待つがよい合振込めく土俵入り時に行司も中
に立ち合土俵の合内は二間一尺四分四方土俵の外は十六
羅漢に譬たり西と東の花相撲ヲドリ春と秋とは何方がど
うちやえ粹と不粹と誠と嘘と張と意氣地とその諸譯柔突
出し捻出しありややく合よいやさ合夏と冬とは合何
方がどうちやえ合實と浮氣と初心と伊達と野暮と浮氣の
その諸譯鳴の羽返し河津掛けありやく合よいやさ合
我もくと走りていざやくと立向ひ弓矢八幡男山合
負投げ合掛投げ合播磨投げ鴨の入首膝車四十八手の相撲
の手を百手を碎いて取結ぶひらりく合裾を拂へば飛退
り此處や彼處と駆廻る牡丹に蝶の狂ひ遊ぶもかくやとば
かり面白や合江戸市村とその名勝閑

○琴花散里

安永三年正月、市村座。作曲者錦屋金藏。

二上り昨日迄ギン眺めし花も何時しかなどや甲斐なき
入相の合カン上豫てや散るとは知るものを知らず果敢なく

も皆淡雪とカン消ゆるばかりの物思ひ、一人焦る、獨り
言合戀しき人に逢はせて見や合とかく心の遺瀨なき合身の
果何とあさましやと暫しまどろむ手枕は、この頃見する
トメカ、リ現なり合松山出二ノギン行水に合うつれば變る飛
鳥川合流の廓に昨日迄セリフはてウタフ勿體つけたえ合誓
文ほんに全盛も、我は廓を放し鳥合籠籠は恨めし合心く
どくわくせくと合戀しき人を松山はやれ末かけて襦袢
しやんとハルしやんくともしをらしく君が定紋伊達羽
織、男なりけり又女子なり合片袖主とオトシ眺めやる合
思差しなら武藏野でなりと合何ちや織部の薄盃を、よ
いさ、しようがえ合戀に弱身を見せまじと、ぴんと拗ね
ては脊向けて合くねれる花と出て見れば合女心の強から
で諸ガカリ跡より戀の攻來れば、小袖にひたと抱付き合申
し椀久さんセリフさつてもつたりお日和様合方へふら
れず歸る仕合の合スカシ松にはあらぬ太夫が袖月の漏る
より闇がよいカンフいやくこちや闇よりも月がよ
い、お前はさうかと寄添へば合ギタガカリ月がよいとの言草
に、粹な心で腹が立つわいなセリフもうこれからが口説

オン夢の世や合二ノギン袖に涙の乾く間も泣いて明して物思
ひスカシ憂きを見するは恩愛の合カンハル別もいと涙川合三
ノギン何惜しまぬ春の風合避ぎて吹けかしせめてもの合花
散る里のハルつれく合絶えくの琴の音合トメ永くもがな
と祈る神々。

○其面影二人椀久

安永三年五月、市村座。作曲者錦屋金藏。通稱「二人椀久」。椀久市村羽左衛門、松山瀬川富三郎。

二上り昨日迄行く合カンハル今は心も亂れ候合末の松山思の種
よ合あのや椀久はこれ合これさ打込んだハルとかく戀路
のオトシ濡れ衣三下り干さぬ涙のしつほりと合身に染み染
み合ハルと可愛さのそれが昂じた物狂ひ合投節とても濡れた
るや身なりやこそ、親の意見もわざくれと、とかく耳に
は入相の、鐘に相圖の廓へ行こやれく、さつさ行こや
れ合昨日は今日の昔なり合坊様くちと嗜まんせ合拍子墨
の衣に身は染みもせで戀に焦る、身は浮船の合寄るべ定
めぬ世の泡沫や所縁法師がその一節に中カ、リ智慧も器量

の段仔細らしけに座を打つて合舞ガカリ袖尺着尺衣紋坂
鼓合ガカンハル初冠りの投頭巾、語るもオトシ昔男山諸ガカリ拍子
間にと、詠みて贈りける程に、その時女も比べこし、振
分髪も肩過ぎぬ、君ならずして誰か上ぐべきと、互に詠
みし故なればハル筒井筒の女とも聞えしは、有當が娘の
古き名なりしぞセリフあ、古いく女郎買も鹽が辛うな
つたお茶の口切沸らす目元にとりつけばセリフあ、何
ぞいなウタフ手持無沙汰に拍子揃へて、わざくれ拍子按
摩痙癖くさりととはびきく捻ろ合地體某は東の生れ、
お江戸町中見物様の、馴染み情の御最負強く、按摩痙
癖朝の六つから日の暮る、迄セリフさりととはく忝い
合按摩冥利に叶うて嬉し、按摩痙癖く合ラドリガカリ
廓の三浦女郎様ちるごちえ合袖をそつと引かばおう靡
きやれ、構へてよいく女郎の顔をしやるな、ちるごち
え合袖をそつと引かばお、靡きやれ構へてよいく女郎
の顔をしやるな、ちるごちえオトシ二人連立ち語るもの合
廓々は我が家なれば、遺手禿を一緒に連立ち急ぐべし

遊び嬉しき馴染へ通ふ合戀に焦れてちやくくと、ちやくと
くちやくつと行こやれ合可愛がつたりがられて見たり
無理な口説も遊びの品よく、彼方へ言抜け此方へ言抜け
合裾に縫れてじやらくらしやらくら、悪戯の合花も實も
あるしこなしは、一重二重や三重の帯トメ蒲團の内ぞ候
はし。

○めりやす庭のおち葉

安永三年十一月、中村座。作曲者杵屋喜三郎。

二上り一幾夜明石の浦の波、寄せては歸る折柄に合庭のハル
落葉か村雨か、搔鳴す琴の音の、他所に知られぬ我が袖
に、餘りて漏るゝ涙かな合種智延命の明石渦、迷の雲も
打晴れて、八重咲き何時か九重の都に歸る嬉しさよ。

○初霜楓姿繪

安永三年十一月、市村座。作曲者錦屋金藏。

一下紅葉夜の間の露や染めつらん合上カンあれ見渡せばあ
かねさす合入日まばゆき山紅葉、その名も高尾通天の三ノ
ギン 中に一入取分きて、浮名龍田の川紅葉、飽かぬ眺の

面白や合色に出候合色に出候我も戀路にとんと合この身
を任せて置いて合口説けどく合君はつれなやつれなの
心合焦れく待ちかね山の、上り下りのお手をちやくち
つとも控えた合それその様に何ぞいのまゝにならぬは
憂き世ぢやもの、思廻せとオン捨てられぬハル愚痴な女子
の心から恨みかこつも實からほんに合仇し男の面憎や、
逢うて寝た夜は騙してそして外の浮氣はせまいぞと言う
てハル眞實らしい事わいの、さりとは合カンハル濡れて乾
かね沖の石、耐へぬ涙や時雨時雨一君はこの花わしや
水仙よ、雪の内より咲初めて、ほんに笑顔も愛敬も、言
ふに言はれぬ花の兄、それえく合さうぢやえ何劣ら
ぬ合そのとりなりは、花車な姿や水仙の何に譬へぬ風俗
は、てんとおてんと可愛らしそれえく合さうぢやえ、
しをらしや合立舞ふ袖と諸共に合裾を拂へば合彼方へ走
り此方へ廻り、互に争ふ有様は、花々しくぞ合花々しく
ぞ見えにけり。

○空今櫻吹雪

ル一假令愛き世の言の葉に、かゝるとまゝよ何のそのそ
の厭ひはギンガハリせまじ合かゝるとまゝよ、何のそのそ
の厭ひはせまじトメ返すくも頼む神々。

○八千代丹前

安永三年十一月、森田座。作曲者杵屋作十郎。

一冬木立何時も替らぬ松竹の、色も榮えて戀盛り、美し
や衣紋付き合伊達姿顔をみ吉野花に勝りしその風情合憎
からぬ一野路も山路も錦に染める、ア、しをらしや合梢
々も霜の花六の花合積りくし富士のお山を合都育ちの
優しさに、我もく皆殿方の、嬉しがらせて偽ぞ愛
き、ほんに憎いぢやないかいな一お使などは様々御座
る合文のお使合春にもなれば合佐保姫などを見て来いと
ある御難題合やつこのく合點ぢやく、山々谷々尋ね
行けども知れないくとお供先合華やかなりし顔見世の
御最負頼み上げますヲドリ一梅とさんく櫻はえ合冬は墨
繪に形振も合春は盛りし花に歌、結んで解いたり縫ふ蝶
の妹春事一君の恵はく萬代不易、千代も八千代も一

安永三年十一月、市村座。作曲者錦屋金藏。

鼓唄一されば浮みもやらすして、迷ふ心の遺瀨なや 諸ガカ
リ 固よりこの身はあさましく、輪廻に引かるゝ、鼓合後髪
合本調子一ヶ月夜よし合カン櫻が合本のその姿いと心の亂咲
弄舞ガカリ一ヶ月夜よし合カン櫻が合本のその姿いと心の亂咲
き彼方へさらりギン 此方へさらりく、さらくさつと
袖を古巢の合ゆかしなつかし分もなや三下り一風誘ふ合地
主の櫻がちりくハズムばつとはんま櫻や 二ノギン 鹽釜櫻、
散るはく合友呼ぶ櫻合散りやちりく散飛ぶ花のオトシ
名残惜し此間セリ一立舞ふべくもあらぬ身の合風に従ひ合
雨をそほち、山路の菊の一重二重三重四重七重合奈落へ
沈むこの苦、共に連れんと踏鳴し合附添ひ廻る有様は、
怖しかりける次第なり。

○めりやす夕時雨

安永三年十一月、市村座。作曲者錦屋金藏。

一降積るオン雪は三ノギンこの身に比べこし合髪取上げて解
き櫛のレイセイガカリ解いて亂してナホス結直す 二ノギン 心もそ
れと黄楊の櫛合無理な願を一筋に繰言ながら夕時雨カンハ

の森田の當りくゝて又七里の繁昌くゝと、勇む拍子や神樂月。

○めりやすえんさだめ

安永三年十一月、森田座。作曲者杵屋作十郎。

三下り逢ふは別と豫ては知れど、縁を結ぶの神様、いかにお世話もほんに母様のお譽めなされた針仕事さへ、今は縫はれぬ身のつらさ、それ何故に主の言付け背かぬ私が心中立、可愛いと云うて紅に染めて見初めて見初めて染めて、染めて逢初めて、思廻せば元の白地が優しぢやものえ。

○梅楓御法扇

安永三年十一月、森田座。作曲者杵屋作十郎。秀衛娘宮城野中村富十郎。佐藤忠信松本幸四郎。

富十郎抑、この武藏坊辨慶が、幼き時雲州鰐淵山に身を寄せ、眞言不思議の窓に向ひ、うたゝ顯密の秘法を極む幸四郎「まつた白拍子の始りは、往昔鳥羽院の御時、島の千歳若の前とて、未だ白齒の大振袖、白き扇の手を盡し、拍子

を揃へて舞ひける故、白拍子と名づけたり「つらく金胎兩部を探り、大日如來の眞言には、おんころくびせんざい舞子そはか幸「その千歳の末孫に萬歳の娘とて、差渡し他人多聞天のおいとこ吉祥天女は行逢ひ兄弟、辨財天満屋おはつは十九徳兵衛は「おんひら野屋心中男かの生玉の蓮池へ、首だけはまつた濡者にて、いつの紋日も我一人、あびらうんけんせんせいそはか幸「そはかよたれぞ常々から佛御前のお叱りにも、朝な夕なに世話やいて、舞の稽古を清少納言は名つけ親「勢至菩薩は鐵漿親黒いは護摩のふすほりにて、不動は廿八日の御縁日やら物日やら、小柄男にせい高連の生臭はんだばさらだ、せんだまかろしやなくと幸「つかみからけの道中は、夕霧松山名も高尾「文覺法師は荒行の、瀧に打たれてほてれん小腹はつたやの、えつちく「幸「えちがりまたしが従弟は三勝湯谷朝顔はおんでもなく、松風さんは乳兄弟、その松風の戀男、本地は即ち福一満虚空むてんの御器量にて、色も情の在原の、かの行平の中納言「三年はこゝに須磨の浦、この程馴れし松風に、形見の鳥

帽子狩衣を、源「われと思つて折々の憂さをしのけと出で給ふ、袂にすがりてコレ申し忠五郎「そりやむごいぞえ行平さん、常から主の仇心女子たらしのお生れに源「惚れての多い大事な殿御「繫がぬ船の汐干潟、手放して置かれうものか、忘れうか忘れた事は、思「ないわいな四人「せめて暫しと物狂はしく、あれくゝあれに戀しき人のお立ちあるが幸「松風と召され候ぞや「どれくゝどこにハア、あれは首尾の松ぢやわいなう幸「サアその首尾の松こそ戀の中立、富「松葉屋の松風さん、お逢ひなさるゝお客さま幸「かの舟宿のか、アが猪牙に「ひらりと飛乗る火繩箱、幸「味噌を揚げしほ勇みに勇んで「おせやれ男、幸「椎の木ぢや、しつちやつほう、半分ぢや、はらゝつほう「二挺立、三挺立、押して勝手は

臺見附、箱崎くづれ橋且那すつべり白癩お久しや、そこで花とれ勘五兵衛頭巾は入らぬぞ、編笠持てこい、押せくゝくゝ浮いた浪とよ花川戸、こゝ淺草の觀世音、三社權現伏拜み、今戸の橋をくゞるは夢か、送ればくゝ江戸町二丁目角町しん町京町の籬々をぞめき歩くは五丁目の

實ぢやえ、浮氣に花の戀の中の町「いつしか色にそみかくだ、ついしきえんの行者の教、幸「ほんに一夜の草枕に、心亂れし野上の花子、しで切りかけし笹の葉かたけ、ありや笹のはり枕、枕物にや狂ふらん「こそ行者の法力なれと、數珠さらくゝと押揉んで「當分こゝへござんせ女房、南方ぐんにやりきやしや風流、西方色事やうほう天女、ほつとりやさ女房、中央大日大事の風俗、さんけくゝぞつこん愛敬なむ風よし女房、生臭はんだばさらだ、眞言祕密で責めかけくゝ數珠のありたけえいさらさくゝくゝ、えいさらくゝくゝさ、辯舌までも爽かに、面白かりける風情なりくゝ。

○御所望釣狐

安永四年正月、中村座。作曲者杵屋喜三郎。

「春の野に出て、若菜や葦咲く菜種の花に群れつ纏れつ蝶の羽風のしをらしく我も心の移ひて、思はずとんと突く杖に、この身を任せ只うつとりと、見惚れくゝて夕暮の、早や寺々の鐘の聲、諸行無常と響けども、知らぬ人

こそ多かりき、況してや果敢なき畜生の、知るも知らぬも逢坂の、關の扉開く鳥の音も、又里近き犬の聲、ぞつと身に染むばかりにて、立煩ひてぞるたりけり「暮待つ鐘と諸共に、我が家を出でて行先は、難所切所の嫌ひなき、心も強き狐釣り、此處らがよかると繁なる、木蔭に良をかけ置けば「見るに驚く狐良、悲しきかなや我々を、狩取るとての業ならずや、狩する人の恨めしき、よしよしこの身は狩らるゝとも狩する人を誑し、今宵の憂きを春風に、裾もほらくしやなく歩む、しどけ形振さながらに、人の心を浮れ女や、浮々傍へ寄添うて、見れば思ぞ眞柴垣、扉にとんと隔てられ、つい隔りし垣一重、二重廻りの扱帯さへ、憂き世の中を觀すれば、解くに解かれず、とかく浮世は戯れ遊べえ「夜も明けば狐にはめなで、鶏の、まだきに鳴きて背なをやりつる、あゝさりとほく味氣なや「早や明近き東雲に、狂ひ亂れて纏れかゝれば、彼方へ潜り此方へ飛退き、畦道しどろに我が棲む森へ歸らん、あの山越えて、この山越えて、人を迷はす憂やつらや。

合カン蓮臺寺合湯の島合湯が原合修善寺や合ハルこれも名高き温泉なり合三ノギン「雪解して合二ノギン箱根の山もやうく合カンまだ早蕨の面はゆく、笑顔も梅の花娘、情盛りや戀盛り「中ガカリあれ宮の下堂が島三ノギン主の心は底倉も、知らねど此處にハル塔の澤、さりとほんにきにが採めて二ノギンよし蘆の湯や湯本の里、麥搗く杵の拍子よく合二ノギン「鎌倉の道を通れば椿植ゑて育て、合カンハル日が照らば休み床雨が降らば雨宿「麥搗いて小麦搗いてお手にまめが九つ合カンハル九つのまめを見れば、親の在所が戀しやオトシ謠ふ小唄の面白や「何處田舎も合戀の沙汰、分ある方へ靡かんせ、縁は異なるものほんにほんに誓文さうぢやえ合カン「何處田舎も合戀の沙汰、一筆書いて送らんせ、返事ないとてほんにほんに誓文さうぢやえオトシ果しなや合「さて又數ある温泉や、言葉に花の色深く、概略覚えし物語り合方盡させぬ春こそ久しけれ。

○妻戀春亂菊

安永四年四月、森田座。作曲者杵屋作十郎。

○めりやす比翼紋
安永四年正月、市村座興行の「嬉青柳會我」第二番目に出す。笹の三五兵衛中村助五郎、二の町尾上多見藏、作曲者杵屋佐吉。
「二世かけてかはず誓紙の。ちぎりてしばしは。別れもありそ海。などや昔はまゝならぬ、戀しゆかしは日に千度合「よしなき夜半の村雲に。へだてられたるうさつらさ。いつそやほなら憂目はせまい。末の契りをたのしみに。よそ目にあまる比翼紋。

○温泉山路鶯

安永四年正月、市村座。作曲者錦屋金藏。

カ、リ「さて國々に到りては合數々多き温泉の何れ愚かも荒金の、土打つ童に至る迄、命を延ぶる打上「奇特かな舞ガカリ「先づ四國には伊豫の湯や合さて五畿内に到りては合カンハルその名も四方に隠れなき、奇特有馬のギン「二の湯、その外熊野因幡に香山合又美作に湯原但馬に湯の島や合ハルさて又伊豆に到りては合花も嵐も伊東熱海に
「その水上は稻荷山、我が棲む里は妻戀の、森に久しく名を得しが、固よりこの身は畜生の、苦み深き有様をウツガカリ「映して見んと水鏡、ぞつと身の毛も立姿、男なり振又女子とも、人を迷す狐塚、菜種「蝶胡蝶、戯れ遊ぶしをらしや「櫻の「幕の内、色の盛りや花盛り戀盛り、とかく憂き世は飲めや唄へや、君と我とがお手枕、戯れ遊べえ、あんまり躍れば浮名が立つに。いざや歸らん妻戀社を只頼め。

○めりやすわか草

安永四年正月、森田座。作曲者杵屋作十郎。

三下り「雉子鳴く野邊の若草摘捨てられて、人の嫁菜と何時かさて云はるゝならば嬉しかる、嬉しかる、心は二つ身は一つ、まゝにならぬ憂き世ぢやえ合「袖は涙か春雨の、かゝる憂き目に遭ふ事も、曾我のお爲と思ひ草。

○めりやす花散鐘

安永四年二月、中村座。作曲者杵屋喜三郎。

「憂き世とて憂き事多きその中に、人の心は遠山櫻、霞

に包む夕暮は、入相誘ふ鐘の聲、よしや撞かねば何のその、撞けばこそ鐘が鳴るやら撞木が鳴るやら、あゝそれぞと胸も須磨明石、春は朧の月の顔。

○めりやす春の夜

安永四年二月、中村座。作曲者杵屋喜三郎。

二上り一包めど漏る、我が涙、袖のみ濡れて乾かぬ思は、今日の前にまだ頑是なき、七つ八つ九つ心の氣も弱り、見れば見る程いぢらしや合一もう泣くまいと思へども、急き来る胸の苦しさを、撫下し撫擦り、諦めて見てもいと哀れさ勝る春の夜の、夢に夢見る夢の世や。

○めりやす葉櫻

安永四年 月、中村座。作曲者杵屋喜三郎。

三下り一筋に思詰めたる男氣の、せめて心を明すにぞ、筆に言はせて筆すさみ、筆のすさみもたよくと、思ひ甲斐なき假名書に、つい散し書散されて、薄き命を薄墨に硯の海は浅くとも、深き心を書き残す合一我はこの世に亡きとても、思ふ念力岩より堅き一心を、籠めて梢に

残る葉櫻。

○めりやす秋の露

安永四年八月、中村座。作者喜立、作曲者杵屋喜三郎。

三下り一宵夜更けて、遠き野末に鳴く蟲の、聲聞くだにもさては涙に濡れ衣の、露を便りの身ぢやものを、風に散らされ置く露も、泣いてくよく思ひ寝の、枕に咎や亂れ髪。

○めりやす蜘蛛の絲

安永四年八月、中村座。作曲者杵屋喜三郎。

三下り一恩愛の深き血筋の絲による、寄邊の月に誘ひ来る、水の流に憂きことを、豫て結びし縁と縁合二世の契や三世の絆、繋ぎ繋がれ引かる、縁、逢ふ夜の首尾を繰返す、そのさゝがにの蜘蛛の絲。

○袖模様四季色歌

安永四年八月、森田座。作曲者杵屋作十郎。中村野驢四季

の所作事。

春 番獅子

の樂みこれならんと、罪も報も後の世も、忘れ果てて面白の心、いそぐ宿の土産にラドリ一私が若いときや合袖褌引かれ合つし新枕交す夜毎も恥しかつたにさ合今は年寄りましたで、初夜もぼんに獨り寝、辛氣らし合括り枕を友として、合さりとはく面影の變らで年の積れかし。

秋 都大踊

一千代の始の一踊り、先づは松坂越えたえ一園に色よく咲きし菊作り合柵の籬に七重八重菊合御所御紋の菊は九重合菊流しにしようがえ合化粧紅菊付けてよい小菊合廓の名取りやつるの禿菊合間抑へともりし菊酒、菊流しにしようがえ合一黄菊さへ夜は白菊菊合せ合中に名を得し數も吾妻菊合紫の色は百菊合菊流しにしようがえ合一花の都の盆踊り勇んで合勇んで合仕出し踊りの華かに花笠雀小娘の踊振り一面白やく合あら面白の音頭町く。

冬 蟻通

一和歌の心を道として合和歌の心を道として所も住吉玉津島に參らんと合いでその頃は雨もやみ合雪の降積る合

一春毎に變らぬ花の色も香も、吉野の三里三輪の邊合菜種に遊ぶ蝶胡蝶合しをらしや、結んだり解いたり蝶の妹春事羨し、實に打眺め合時移りて、實に石橋の匂満ちく、牡丹の花の咲亂れ合朝日さすが優しや、頭をうなだれ、牝獅子牡獅子を見れば仲のよさえ合花に戯れ狂ふらん合色音可愛き鶯の一梅と櫻は何れが姉やら妹やら合分きて言はれぬ花の色ぢやえ合牡丹芍薬は何れ兄やら弟やら合分きて言はれぬ合花の色ぢやえ一花の盛りは皆留守なれや、花見て戻ろく花には憂さも打忘れ、入相惜しむ花見連れ。

夏 團扇賣

一夏木立合梢々に蟬時雨、風になうその身は暑し團扇賣合團扇色々お望み次第合さも美しき歌舞伎繪姿紋盡し、御最負なさる、戀風も、ぞつと身に染むえと笑ひ草、見れば戀増すあのお顔附と、寄添へば合福ぢやくとしなだれかゝる合これはくくと夕顔の、身も世もあらぬ風情なり合昔々の話し草、爺は山へ柴刈りに、婆様は川へ洗濯に合行くも歸るも釣竿の、さび鮎提げし心地よさ、老

鳥居玉垣實に面白妙の景色やと合誰かこれを譽めざらん
合中にも貫之は御書所を承りて、古今迄の歌の品を撰
みて合悦びを述べし君が代の、直なる道こそ難有や合
六の花匂のあらばさぞ嬉しかる合雪を載き雀も辭宜する
え合水仙寒菊山茶花の合柳の枝にな雪折れはなし合雪轉
し雪丸め合雪見連れ合梅も櫻も野路も山路も初雪おと雪
たひら雪合山は富士の嶺、何時も雪景色眺むらん四季
折々に御見物様方、名残りの御最負を頼み上げます壽
なり。

○翁草戀種詩

安永四年十一月、中村座。作曲者杵屋喜三郎。通稱「種詩
三番叟」

「装ひ飾る錦の袂、翳す翳の手馴草、その舞扇大様に、
隈なき月の光かや、右と左にしやんと坐したは雪やら花
やらしをらしく、月雪花の樂みを、今日の前に見る如く、
今様姿とりくく」に「とうく」たらりく「たらりあがり
たらりとう、ちりやたらりや、女子たらしの目許にとん

くも面白や、厭でも應でも是非に一差御舞ひ候へ、あ
あらやうがましや、さあらば鈴を參らせう「その種詩の
種詩きて、鳴るは驛路の鈴の音も、盡させぬ御代の壽を、
謡うてやがて、やがて扇を納めけり。

○めりやす六つの花

安永四年十一月、市村座。作曲者杵屋十郎。
三下り「つらからば合只一筋につらからで情交りの偽ぞス
カス合憂き世の中の義理と云ふ字と戀と云ふ字を誰が書初
めさんしたえ合上「辛氣辛苦の合染糸もクル元の白地がギン
勝ちやもの合中朝な夕な物思ひ合積りく「て六の花。

○茶花香室早咲

安永四年十一月、森田座。作曲者杵屋正次郎。
「召せや召せ」室咲きの、今を盛りの梅盡し花盡し「
時しも今日の初昔、花の顔見世寒林、宇治も名高き茶の
加減、花香も吉野の初瀬山「今日お目見えの愛敬を、春
待ちかねて早咲きの、咲くや此花冬ごもり、薫も春と疑
はれ、降れども梅の風さへも、君に迷うて避きて吹く、梅

と打込んで、文は千束に及べども、否諾のなはいはざりと
はく「辛氣な事ぢやえ、筆の手前の恥しく、今宵は逢う
て心根の、なるかならぬかなうこれなうなるかならぬか
「鳴るは瀧の水く、日は照るとも絶えずとうたり、常
にとうたり君の千年を経ん事は、天津少女の羽衣よ、鳴
るは瀧の水「凡そ千年の雛鶴は、萬歳樂と謡うたり、又
萬代の池の汀に龜遊ぶ、甲に三極備へたり瀧の水冷々と
落ちて、夜の月、鮮に浮んだり、渚の砂さくくとして、
朝の日の色を潤ほす、天下國土安穩長久と君を祝ひて千
早振、一差舞はう萬歳樂「おさえく「喜びありや喜びの
玉章貫うて始めて所知に入り「にけり「相撲の拍子鳥飛
び、潔くこそ見えにけれ「さても見事や振もよし、舞の
姿の可愛らし、様の召したる烏帽子をば、何と申す烏
帽子ぞ、仰の如くこの尉が着たる烏帽子は千代かけて、
君を祝ひの立烏帽子、きりつとしやんと風折烏帽子、
右折烏帽子左折り、さて數々のおめでたや「十二の子寶
座敷にづらりと並べてく、お直りあれかし、乙よけさ
よ辰松いる松たんだら砂に取付く引付く少女の袂、返す

に劣らぬ殿振の、好いた水仙水際に、惚れた私が心中立、
出雲で結ぶの神様も、無理と思ひはさんすまい、顔に紅葉
の恥かしや合「降積る合雪はさながら合花なれば千年の坂
を又越えて合柴取る道も何ならず、眺め妙なる景色かな
「ドリ「鷺を鳥と云うたが無理かいな合雪と云ふ字も墨で
書くわいな、お、それえく、それさうぢやいな合雪と
云ふ字も墨で書くわいな、お、それえく「それさうぢや
いな、踊る拍子のオトシ面白や、四方の梢も一入に合句満
ちくる冬牡丹、情の道の誘はる、色を含むや冬牡丹。

○一奏菊の粧

安永四年十一月、森田座。作曲者杵屋正次郎。
上「實にや名に聞く菊の露合カン流を汲むや汲交す交す枕
のモツ重ね菊、中に小菊のいたけ盛りねんく「ころ
く「ハルねんく「ころく、枕の咎や亂れ髪合傘は雲井
の花の宴、時めき廻る盃の合二つ三つ四つ五つ衣、睦ま
じ仲のレイセイガカリ七重八重垣、今日九重を今此處に、移
すいろはも恥しや合カン禿菊とは、籠のませた形振可愛ら

し合波むや盃重なりて、盡きぬ泉はこの菊の水合へ呑めばそのまゝ顔に日が、白いも赤いも酒の咎、後は互にちん鳥足に、酒宴半のオトシ時の興合へ見る樂みは合上もなぐ、菊の下水合面白やく、合一入興じて酒は花トメ花しくぞ見えにけり。

○破車簾追風

安永四年十一月、森田座。作曲者杵屋正次郎。

忠五郎鼓眼 へ恨めしと思ふ思ひのともすれば、元の心に歸りぬる、憂き世は牛の小車の、廻るや報なるらん、昨日の花は今日の夢、驚かぬこそ愚なれ、是非に往なせはせぬわいのと、車引寄せ付めりウタガカリへ思ひ寝の、心からなる夢か又合ちらとばかりの面影を、過ぎしその日の白菊に合御簾の追風さらく、合衣紋流しの秋波に、忘れもやらぬ身ぞつらき合文玉章を書き口説き、かゝり求めて仲立に合やれば嬉しき返す書、茂れる軒に寄生木の連理の契淺からず、我も忘れじ主も亦、思出せよ今宵こそ、光る君とぞ契るらん 臨ガカリへ我は蓬生の元あらざり

堤を行違ふ合袖に情をく、合へ憂き数々の會我の里、人が合語れば親の身も合心の杖に従ひて、暫く疲を休めけり。

○めりやす貌と貌

安永五年正月、市村座。作者笠縫専助。作曲者杵屋作十郎。

へ亂れては千筋を誘ふ青柳のいと、思の涙と涙あゝまゝよ合春の雨濡れて乾かぬ顔と顔合へ蹇を泣いて返らぬ同胞の、肌の單も會我くと、會我のお爲の今の身に、誰を恨みん憂き世かな。

○琴うた琴とはば

安永五年正月、市村座。作者笠縫専助。作曲者杵屋作十郎。

琴重忠にて松本幸四郎、三絃大磯のとらにて小佐川常世。二上リウタ常世へ身の程を知らずと人や思ふらん、繁き人目を忍ぶ川、永の行方の様々に、流れもやらぬ薄氷、解けぬ心を明してそれと、言ふに言はれぬ片思ひ、片輪車の綱手繩 此間セリフへ今の憂き身のオイサ恥しさ、葎の宿の旦暮に、寝ても覺めても戀しきく昔 此間セリフへ袖も乾か

し身となりて、忍びくの通ひ路もヲドリ變る枕は數重れど、わしや君故にうき枕、ざりと戀しき長枕、焦れく、て千草宿借る、床とん取れ涼しき駕籠枕く、二つ枕は相生のへ降るは時雨の雪にはあらじ合散りかれば合室咲きの合知らぬ闇ぢや白眞弓、引かば返さぬ武士の、彌猛心の増鏡合雪と見よ合花と見よ合枕に立てる破れ車打乗せ歸れ、行かうよ合正體なくこそ伏しまるぶ。

○梅 廊の灸する

安永五年正月、市村座。作曲者杵屋作十郎。

へうらゝかな、日に羽を伸すや鶴の丸、申さずとも御存じの、小林の朝様の御無事を祈る艾だに、据ゑて嬉しさ紅鐵漿化粧坂合へ少將の名取川、深い浅いは誠と誠、堅い約束元のおの字に、なるならば、手鍋提けても思ふ方様へ。

○めりやす歸る雁

安永五年正月、市村座。作者笠縫専助。作曲者杵屋作十郎。

へつらかりし合花に嵐の夕暮を、歸る雁來る燕、人目

ぬ春雨に、啼く音も憂しと驚の 此間セリフへこがひの鳥の母に後れて便りなき 此間セリフへ身は何とせうどうせうぞいな 此間セリフへつらいぞ憂いぞ世の中の、人の心は芋環の、絲のもつれを繰返す。

○神託千早の振袖

安永五年春、森田座。作曲者杵屋正次郎。

鼓眼へ被ひ給へ潔めて袂も千早振ウタガカリへ千早振々鈴音も、鳴るか鳴らぬか神託に、任せて知らず胸の内、千本の花の面影を、見初めにしより我が心、春を見捨て、行く雁も、番離れぬ女夫仲、ア、羨し振の袖、何時か留袖世帯して、辛氣辛苦をするとも、可愛い殿御と添ふならば、枕に榮華があるわいな、惨い心と寄添へば誠に文は閨の友、いよし御見と書いたるは、ほんに誓文嬉しさの、幾世の夢を結び文、祐様參る櫻より、思ひりくべくと、分の盃色めいて、分きて泉の思はくは、只逢ひましてく、又の縁を待つしヲドリへ迷ふ面影忘れぬいざ床取らん春の夜の夢驚かす 鶏の、その後朝の物思ひ

恨みかこつも戀の咎合いざ床取らん春の夜の、夢驚かす
鶏の、その後朝の物思ひ・恨み嘆つも戀の咎、逢ふ夜
嬉しき袖枕チラシ一分のありたけ心のたけ語り明してその
まゝに、神は上らせ
給ひけり。

○めりやす柳の

糸ゆふ

安永五年春、森田
座。作曲者杵屋正
次郎。

「世の中の忠と義理
との二筋に、千筋の
糸のさても憂き、人
の命は片糸の、結び
もとめぬ青柳の、言
ふに言はれぬ心と心合「雨に降られて散る花も、せめて
後から起臥の、匂勝れる紅梅を、避きて吹けかし恨む春
風。」



○色見草月盃

安永五年七月、森田座。作曲者杵屋正次郎。

「物思ふ立舞ふ
べくもあらぬ身の、
袖打振りし心迄三人
「うつろふ秋の色見
えて合この身を何と
夕間暮、時雨る、空
を眺めつ、浮れ出
でたる道の邊の、草
葉も共に下紅葉
「夜の間の露や染め
ぬらん 此間セリフアリ
面白や頃は長月末つ

方、四方の梢も色々に合錦彩る山々は、花の吹雪のそれ
ならで合五色の雪と降る紅葉分けつ、行くや丈夫の合彌
猛心の梓弓、引くや知るべの駒の足並、谷川の、流れ絶

えせぬ紅葉を、渡らば錦中絶えん、時雨を急ぐ紅葉狩此
間セリフ「見捨て給ふかつれなやと、袂に縋り留むれば合
さすが岩木にあらざれば合心弱くも引留められて合所は
山路の菊の酒、酌むや流の憂き身にも、愛し可愛いのよ
い殿御振、ほんにお前を誰が抱いて白膠木の紅葉色見草
他所の戀路の妬ましや「そもや誠が露程あらば、二世も
三世も神かけて、忘る、際はないわいな三人「深い縁も
月に雲、花に嵐の戀すなる、月の盃差す袖も、雪を廻ら
す舞の曲此間セリフ。ヲドリ「秋の木の葉の色に出し、紅葉踏
む鹿憎いと云へど、戀の文書く筆となる、可愛らしいぢ
やないかいな合「秋の千草の色に出し、菊と薄はよい仲
なれど、露が知らせて濡れを知る、可愛らしいぢやない
かいなア、羨し「今迄此處に色ある女、忽ち化生の形
を顯し、紅葉の梢も火炎となつて古木木の葉もさら／＼
さら目覺しかりける次第なり。

○露時雨

安永五年九月、市村座。作曲者杵屋作十郎。

「萩と萩とは何れ兄ともおとよ草合分きて言はれぬ花の
色合盛りの身にしも世のつらさ合「思ふ願ひも何時か何
時、本望遂けて嬉しい顔の、見たり見せたり話し草、誰
に語らん我が思、袖は涙の露時雨。

○めりやす寝ぬ夜

安永五年十一月、中村座。作者塚越采陽。作曲者杵屋作十
郎。

三下り「寝る間の身、愛し男を忘れんと合カン心餘りて寝て
見ても、おほねきづかふ片心合人の前では憎いと言つて、
他所では、譽めさせ聞く嬉しさは合櫻ほのめく月影の、
夢は憂き世のかへ名ぢやさうで、迷うては覺め覺めては
何時か、戀し懐しと思ひ草え。

○めりやすきせ綿

安永五年十一月、市村座。作曲者杵屋正次郎。

三下り「三津瀬川淵は瀬となる深草に、積る思と白雪の、
身に振りかゝる絲車、廻る因果はア、何とせう、エ、ま
ゝならぬ人心合ほんにつれないかねさびて、鳥に別る、

契もあらうか、消えなば消えん玉の緒の、數珠の數々繰返し、風が知らする小夜砦。

○めりやすすくな文字

安永六年正月、中村座。作曲者杵屋作十郎。

三下リ一戀に寄る花も思の一曇り、雪とは降らで涙の雨夜、濡れぬ昔がア、まゝならぬ一かうも愚痴にもなるものかいな、辛氣辛苦の縁の絲結ほはれたる鬘の髪、枕一つに恥しの、もりてやつらき月の顔、可愛くくと告渡る合方鳥羽に書く言の葉の一解けぬ思を摺流す、墨と筆とに神かけて、祈る縁の心の誠一神や守らんすくな文字。

○めりやす言の葉

安永六年正月、市村座。作曲者杵屋正次郎。

三下リ一偽と引胸に誓ひて取る筆も硯の水に添ふ涙、情をかくる音信に引合カン一我が戀染むる命にも、末は徒なる苦の世界、別れて後のもの思ひ合方江戸節ガカリ一今は只馴れしその夜に増鏡浴泉結びもとめぬ元結の結ふに結はれぬ亂れ髪、曇る心の朧月。

ぶ都鳥と合扇流して舞納む。

○こと唄廻逢瀬

三下リ一つましあれば、きつ、馴れにし戀衣合かさなる中一つ身のギン小だちの衣は襦袢より合別れくの裏表、うすき合一重のなつかしな合こんな辛苦なつらさ思へば、逢はぬも増しかとゆふも浮世ぢやえ合中ギン一めぐり逢ふ瀬は賤機帯の合上ゲ解くに解かれぬ合わが思ひ引合さゆゑとかれぬ合わが思ひ引いつか晴れゆくころも春雨。

○めりやす時雨月

安永六年十一月、中村座。作曲者杵屋作十郎。

三下リ一紫と傾城風は東の名取川、深い浅いは君と君、逢うて見たなら面白さうな殿御ぢやと、思ふかひなき捨小舟合一戀の湊の時雨月、濡れにし袖ぞ涙雨、かゝる憂き身に残す筆、返すくもくどからず候。

○今様雪花車

安永六年十一月、市村座。作曲者杵屋正次郎。

○御酒宴左扇

安永六年春、森田座。作者中村重助。作曲者杵屋六三郎。山田の三郎中村仲藏。朝比奈坂東又九郎。

又九郎セリフ一なうく船人あれに白き鳥の見え候が名をば何と申し候ぞ、仲藏一浮世の事は白波の嘴と脚との赤き鳥沖の鷗と申すなり又九郎一何鷗とや、忠五郎鼓唄ハル一我が思ひ子は東路に、ありや合なしやと問へどもく答へぬは、ア、うたて都鳥鄙の鳥とや云ひてまし引舞アリ三下リ一實にや船ぎほふ堀江の川の水際に、來るつゝ歸るは都鳥一それは難波江これ此處は、此處は武藏と下總の、中に流は濁らで清き、隅田川原の舟の内合方すみく墨染櫻愛し子櫻がナア、いたいけな事言うた合忠五郎中ギン一文がやりたやと言うたの、彼の主様へ文がやりたやと言うたのオオ恥しギン一笑はば笑へちつともそつとも大事な、此方や大事もないよの抱いてねじめの駒形に、はるく來ぬる業平の、橋場庵崎きつ、馴れにし唐衣合一ころくからころり合拍子とりく紙砦合霜に妻呼

二上リ一様に合出立ばえよき綱手繩、引けや引けく花車、春の心地やいそくと、見るに揃ふえんの綱一色添へて梢もうつるカンみ吉野の、川の流も堰きとめて、積る思ひのとけぬ程合カンといて見たらば嬉しかろ、かはいというて紅の、しぐれて渡る深山へも、里も冬たつ合景色かな三下リ一戀ひわたる合山も幾重になるやらん合雲の上こそさぞ花ざかり合ちらくく霜にハッハ तरीそふ合紅葉は、錦織出す引風情なりヲドリカン一しをらしや袖をかざして立寄れば合これは木々の早咲や、姿とりなり信濃梅一筆書いてやり梅や引たが袖の香の匂ひ梅、いづれをわきて折添へん、初音聞きたやゆかしやな一神に祈りのかなひなば、御最負ますく行末の、頼みをかけてみしめ繩、長くや世をもつきすまじ、動かぬ御代ぞ久しけれ。

○めりやす雪の梅

安永六年十一月、市村座。作曲者杵屋正次郎。

三下リカン一戀しさの寝ては忘るゝものぞとは言へど合カン

現に如何なれば情は空に吹雪して、立ちも離れぬ面影の、身に添ひながら白雪の引合カカンハル積つるおもひも君故と、憂き世恨みし人ぞつらけれ。

琴歌 關の笛

安永六年十一月、市村座。作曲者杵屋正次郎。

二上り平家ガカリハルさる程に御曹司は合ナホス淨瑠璃御前の閨の戸に忍びてこそはおはします 合方カカンハル仲露出ハル松に言問ふ一時雨、霜のよすがのギン袖の香も、偽りにだに頼めよと、仰せありしを誠ぞと、通ふ千鳥の寢覺して、扉に暫し立ち給ふ。

〇めりやす男文字

安永七年二月、中村座。作曲者杵屋作十郎。

三下りハル櫻時よそも隣もみんな留守、我は思ひの十寸鏡、曇りがちなる男氣の、いつか晴れなんことどうき折にふれては花の里、行く武夫もお顔が見たさに、思ひ思うて籬まで、合圖に來たわいの、それも戀の手習え、假名で書いても堅い男文字。

〇道行 力竹箱根鶯

安永七年春、市村座。作者中村重助、作曲者杵屋正次郎。

二上り祝經ガカリハル春は來にけり春風の、去年とや云はん旅の空ニノ上ハルつろふ雪と谷の梅ハル枝と枝との夫婦連れ引開くは何處しすがに、あなたとくし岩間水ハル半五郎出ハル袖ひぢむすぶ草鞋の、紐は解けてもまだ解けぬ、箱根のこしの鹿の子して引カハル富士を手に取る冷かさ、氷る袂ハルに力竹ハル誓は末の世にも變らじ末の末迄眞實の、くどうもく返すくも變らぬ中の二子山。

〇其紅葉懺悔物語

安永七年七月、中村座。作曲者杵屋佐吉、高尾亡魂岩井半四郎。

鼓頭ハルそれ娑婆電光の境には、恨むべき人もなく、悲しむべき身もあらざるに、何時ハルさてうかれ初めつらん情ないぞや恨めしや、實に世の中はまゝならぬ、廻る月日は様々に、露の浮世の戀無常、衰へぬれば朝顔の、日影待つ間の有様や、唄ハル紅葉の青葉に繁る夏木立、春は昔に

らくハル颯々と、閨の櫛に残るは夢の、松風ばかりや残らん。

〇道片輪車

安永七年八月、市村座。作曲者杵屋正次郎。和州葛城の山中村仲藏。

二上りハル奇特ある引道を行くのも人の手に、かゝれく引く車、ともに願ひも有難や合仲露出 祝經カ、リハルそも引先の世の報いにや引張具ハルキかゝる因果も猿澤と、はるく思ひ立田川、姿の池も三笠山、クルけにそのしるし興福寺、門前にこそ引休らへり。

〇めりやす心づくし

安永七年十一月、森田座。作曲者杵屋六三郎。

三下りハル忘れられぬ身は降る雪と消えもせよ合何の因果に思ひ初め合心盡しのナア浦濱千鳥、泣いて焦る、登小舟、かにもなき世と思ひはすれど合方胸の迫りし恨の數は、提子の水と湧返る、馴れまいものを今更に、馴れまいものを女子氣に、乾く間もなき袖の海。

なりけらし、世渡る中の品々に、我は親同胞の爲に沈みし戀の淵、浮みもやらぬ流の憂き身、憂いぞつらいぞ勤の習、煙草飲んでも煙管より、咽喉が通らぬ薄煙、泣いて明さぬ夜半とてもなし、人の眺めとなる身はほんに、辛苦萬苦の苦の世界、四季の紋日は小車や幾春の眺は何時し變らねど、我は思の増鏡、夏の曙つれなく見えし、別の鳥の軒の燈籠二度の月、菊の節句や年の暮、人の喜ぶ日と言へば、尙も恨めし男氣の、我を仇とて慘らしく、つひに煙となしたるは、腹立ちや妬しや、思知らせん思知れハル女は三世の罪深く、迷ふが中の迷とは、千々に物こそ遣瀨なや、懺悔に罪も晴れなんものを、さりとては語る身はなき陽炎の、娑婆の約束二世三世、蓮の臺も皆徒事よ、あだし男の徒花に、散らされかゝる涙の雨、はらりくくく、降りかゝる身にしみ堪へで、木蔭に寄れば刃の責に煩惱の、我と我が影邪淫の罪、あだに契りし誓紙の鳥、嘴を鳴して羽を叩き、兩眼めがけて舞下る、冥火の焔えんくと、此處に現れ彼處に消えハルあら堪へ難やと言ふ聲も、木魂に響く枯木の嵐、とうくくさ

○めりやす短夜

安永八年正月、森田座。作曲者杵屋六三郎。

三下り〱亂れし髪をすき返す合カンいとし男を水ぐしの合も
らすまいとて筋立ての合結ふかひもなき短夜に合別れを
さそふ時鳥合手〱向ふ鏡に顔とかほ、うつればうつる世
のつらさ合間夫はつとめの力に待つ身、月をかぞへて疊
算、合うたまことをつけの挿櫛。

○引連樹春駒

安永九年十一月、中村座。作曲者杵屋佐吉。

〱めでたや〱花の顔見世よいとや申す〱、勇む心の
手許に花を飾る春駒、駒も勇んで乗りよや〱世に習の
心、四季折々と咲き變る花に心を慰めて、面白や春は先
づ咲く八重梅の、顔懐しみ鶯の、聲も吉野の山櫻、花見
がてらに後はさぞ、野道山道手を引連れて、いざやれ君
達御座れ〱、花折りに行かうか打連れ〱て、はる〱
で〱出逢うた人の心はナア、移り易きものと思へど、
我はその色々を現して、只澄む月を山に見てゆひを忘る

る思あり、只忘れぬは其處な人様の心ねが、なるかな
らぬかなりそなものか聞かま欲しさよ頼むにえ〱おつと
心得合點手筈の仲よい方なら話なら又とあるまい其方の
此方の、君様性悪者の御大將、文の數々色紙短冊送れど
〱否諾のないのはほんにさりとは氣の毒、君はつれな
き絲なき三味よ、弾くにさ、弾くに弾かれぬ我が思ひ、
三は切れても二世の縁、繋留めたよ戀の仲立〱朝な夕な
にナア木の下蔭に落葉の食今朝白々と富士の顔、袖の匂
も若やかに、揃ふ姿の憎からぬ、移し心の移り香を、留
めて甲斐ある新枕〱君も豊に五穀も實り民の秋、冬にも
なれば自から、不老門の押開き、御藏に運ぶ繁昌は、
言ふも愚やこの君の、齡の道は日月も、光を遅く照させ
て、壽命を伸ぶる御神樂を、奏する少女が華かに、岩間
を傳ふ苔むしろ、めでたかりける次第なり。

○めりやす關の戸

安永九年十一月、中村座。作曲者杵屋作十郎。關の小まん
岩井半四郎。

○陸奥千賀の鹽汲

安永九年十一月、市村座。作曲者杵屋正次郎。

〱美しや合思ひ〱に連誘ふ合草苺童華かに合花の顔見
世待ちかねて合春を迎ひの室の梅、兄が弟が花よりも合
紅葉よりも尙合可愛らしやの可愛らし〱都にも合移す譽
れや陸奥の合千賀の鹽汲む優しさよ合馴れし手業も戀路
には合しと〱に濡る、汐衣、いざや汐を汲まうよ合まつ
や千賀の浦、これには月のありけるに合これにも月の入
りけるに合月は一〱つ影は二〱つ三〱つ鹽釜の浦傳ひ、かの行
平の須磨明石合立別れ因幡の山の峯に生ふる合松と云ふ
のを岩手山、やがて宮城野よいこの小島、脊に阿武隈磯
々傳ひ、末の松山嬉しさよ〱君はつれなき淺瀬と知れど
合此方の思は合深い瀬なれど、顔に恥し紅葉の瀬、オ、
それぢや誠にえ合それぢや幾瀬も渡る瀬と逢瀬變らし妹
脊川〱あら面白の遊樂や〱、雪を廻らす雲の袖、今様
壽く神樂月、陸奥千賀のしをらしや。

○松六花雛鶴丹前

〱待たる〱と、待つ身ぞいと小夜嵐、ちら〱雪の景
色など、眺めし事もありしに、今は思の種ならん合〱始
の誠後の嘘、嘘と誠の戀の二道に關の戸明けて言はれぬ
中々は、氏神様を御存じの、頼み〱て末は世帯子。

○霜の花戀の手くだ

安永九年十一月、市村座。作曲者杵屋正次郎。

〱恥しや實と徒との憂き勤合流忙しき川竹の、間夫に苦
勞な筋は合遣手の關に隔てられ、今は野澤の〱つ水合
思はぬ人の憎らしや合可愛い男に逢ふ夜はほんに、長い
終夜も合睦言に、つい鳥の聲往なうよ戻らうよと、言う
ては雪の流連に、暖め酒の合温め鳥、野暮になるのを樂
と合何時か廓を離れて二人、手管忘れて話したや〱君
は朝日か私や積る雪合解けて流れて合顔紅葉、さりとは
男は悪性者〱君の心に私や積る雪合解けて流れて合水と
なるさりとは女子は悪性者合花の姿の愛しらし〱色の諸
譚の概略を彼方へ寄添へ此方へ誘ひ合騒き清掻とり〱
に、上詰めたる戀の山、色の仲の町盛り久しき。

安永九年十一月、市村座。作曲者杵屋正次郎。

見渡せば六の花合錦染出す七重八重、花の顔見世初目見え合しをらしやあの山見さい合この山見さい、花も及ばぬ合峯の雪、降出す寒さにも合負けじとずつと枝振も、梅の大小さす形もよし合實に丹前の二葉振り、坂東一の己の手柄愛敬よしの合伊達らしやお召に従ひ今日歸り花合氣味よく咲くや紅の、そのをに取付く髭奴合御意に叶ひて御用も繁く合褒美は仙名かつちけない合俺が旦那はあやかり者よ、袖引く褌引く御最負強く、花の姿の合しどけなや咲亂れたる、冬牡丹品も合形も合色も香も春を含むや雪の顔見せて嬉しき積る大入り。

○橋霜月長刀

安永九年十一月、市村座。作曲者杵屋正次郎。

三塔一の荒法師合武藏坊辨慶は合五條の橋に毎夜昔に變らぬ曲者あり聞きに合せんは卑怯なり、今宵變化を平けんと合夕の空も長月に合まだ宵闇の暗紛れ、雲の氣色に朧々と、いたくも更行く橋の上、怪しや見れば人

そろびきだした松の木の大木合其處で若衆見事に揃うた合如才は御座らぬえ合長刀やがて取直し飛鳥の翔の手を碎き、木の葉返しに嵐も落つるや花の瀧波合枕を疊んで戦ひしが、よしや吉野の花盛り、今見る如く花々しくゆ、しかりける次第なり。

○菊紅葉色中同士

安永九年十一月、市村座。作曲者杵屋正次郎。

降積る雪に恨のあるならば、解けて寝よとの鐘の聲、恥しや我ながら合つれなき方と白雪の、浅き情の浅香山合歌で口説いて鶏の、泣いて明してて見ても、無理はさら／＼荒磯の、其處が宿世の縁ぢやえ三下り男心を汲みかねて、胸の鏡に合延紙の、甲斐も渚の虚背貝合藻に埋る、身ぢやとても、つらい趣向ぢやないかいな合それその様にこの私も、さのみ情は白露の、稀に逢ふ夜は打明けて、實と誠と嬉しさと、色に出にけり紅葉の、言はぬ心を結綿の、濱の眞砂や粹の世の中。

○雛雪牛王杖

第四 新編江戸長唄集

こそあれ合よく見れば女なり、我は出家合夜陰の見參笑止氣の毒何とせう、既にその夜も明方の合月の出汐と辨慶が、得物は突きし大長刀、真中取つて打被き、ゆらり／＼と出でたるは、ちと／＼自慢で我が身ながらも、ぞつとしたさも荒げなく進みけり、薄絹被ぎ義経は合ちかく武藏が長刀の、手許をはつしと蹴上ぐれば合すはしれ者よ一打ちと、見れば女か男なり合これ程の子童合ひつちやうてもひつちやうべい、擔ぐとも擔ぐべい合小鍛冶が打つたる長刀の、手並の程と切つてか、れば飛上り合中にて結び又ほどく、眞向になつて拜み打合切つたと思へば姿もなし合此處や彼處とくる／＼、思もかけす後より、疊重ねて丁々々合これや叶はぬぞ少し騙さぬ合うからかさんと扇を翳し合やんれか、れ／＼／＼／＼か、れな、そつこで中綱きり／＼しやんと縮上げて、間の拍子が揃うた合本來國元は關東の者なるが、今年始めしほが七里合八里合九里から十里から峯から谷からあれからこれ迄えいやらやつさら／＼／＼／＼／＼／＼

安永九年十一月、森田座。作曲者杵屋源次郎。

駿眼兵治東雲も吾が告げずば物足らじ、別の戀に憎まる身には引反哺の孝心に長三郎親孝行と鳴く鳥の。上命を取りしその恨み兵治晴さん爲の合百羽搔、春毎に合梅やさギンくらの彩れば、可愛らし手折りもせんや人心、流の水に誘れて合上浮氣に響く廊の鐘、聞けば心も澄めやらぬ合宵の口説に無理な私語合言はず語らず胸迫りオン豫て合上退かうと思つてゐるさんす心かえ、さうかいなア合ぬめた男の面憎や、オ、好かん／＼合明けて後なき春霞オン花の木蔭に着きにけり、在所なれどもながらが名所それギン梅の合上梅の花瓣六つあるといな合歌で和ぐ驚の、ほうほけきやう合言ひかけられて囀るは、高いも合低いも合先次第、それが誠と言ふかいな、實ほんかいな嘘かいな、こちやお前の氣が知れぬ恥しや振亂れたる黒髪の、亂れ心の遺瀨なく、彼方へ寄れば牛王の烏の身をせめて、銅の爪を磨立て鐵の合方嘴を鳴らして五體を責むれば、こは如何に合詮方なくも武士の、狂ひ亂れて臥轉ぶ。

○我脊子戀の合槌

天明元年十一月、中村座。作者櫻田治助。作曲者杵屋佐吉
大薩摩との掛合。通稱「蜘蛛拍子舞」

淨瑠璃(大薩摩)「それより世々の帝に到り、傳はる鍛冶の道
廣く、天國の座神息が、太平治國の靈けん治る御代
の神寶ッッ千早振りにし昔より、戀に片刃の片思ひ、
浮寝の鳥も寢覺して、氷に映る劍刃は、冴えた中子とよ
い金性を、枕詞に眞金吹く吉備の中山なか〜に、千束
に餘る文ならで、留めて留木の移り香も、昨日の夢を袖
疊み、二人寝る夜は帯解いて、屏風にかけし様參る、二
人が仲はりの寢姿に、ひざりながらも夜着させて、宵
の笑は曉の、涙の露の起別れ淨瑠璃「謹上再拜謹上再拜
は陰陽和合を象り五行五體を堅めの槌文の直燒き武の亂
れ、文武二道は二柱拍子舞菊之飯セリフ「サアちよつと姿を垣
間見に、檜垣鑪は天がい重俊 松助セリフ「さて薙刀は當麻
の少將金剛正枝力王「王宗十郎セリフ「これ等は名に負ふ大
和鍛冶「松「利劍寶劍名作物六百九十四振なり 菊「九十
四振は九十九夜、或夜その夜の廓通ひ、色に亂れし業物

と、名乗りて和泉の加賀四郎「松「さて又相摸の新造五郎
新造五人引連て、紋日物は月詣り「宗「月山森房雲頭
菊「初行平を眺めんと、猪牙で長船四つ手に則宗「松「や
う〜三條宗近と「宗「客は女郎に寸延びて、他所で口説
を島田の義助「菊「座敷も新身の付け焼刃「松「文殊四郎の
智恵借つて内外の手前兼光が、まだ流連はさりと長光
大酒に青江の四郎が捻ぢ上戸「菊「ちよつと助光「文字、
腹立上戸仁王三郎「宗「相手に長門の左利き、左文字や方
々よ、あいと石見の酒盛綱「松「心安綱「宗「友成が三人
君萬歳とぞ打つたりけり三人「打納まりし床の山、締め
て音締めの一節に二人「様に逢ふ夜は月影に合丸にいの
字を結綿に合重ね扇の比翼紋離れぬ仲ぢやないかいなさ
いな、それもよう言うたく〜合「様と一夜の契さへ、
笹龍膽に抱柏、誰が睦言を菊蝶の、離れぬ仲ぢやないか
いな、さいなそれもよう言うたく〜、離れぬ仲の嘆言
「不思議や火炎烈々と、空中に翩翻し落つると思へば忽
ちに、身はさゝがにのいと凄さ、一人六臂のその姿、臍
が仲に立迷ふ鼓眼「我が脊子が來べき宵なりさゝがに

の、蜘蛛の振舞豫て知る我が身の上ぞ遺瀨なや合葛城山
に年を経し、世にも名を知る女郎蜘蛛淨瑠璃「盡ぬ恨の心
の錆や怨念力の張弓に、射て落されん連理の枝ッッ「噴
悲邪慳の斧鉞、打立て〜しつてい〜、代木丁々々
淨瑠璃「枝も梢も打切り〜ッッ「打折り〜打拂ひ淨瑠璃
「魔道に沈んで浮む瀨もなき我が眷屬、長き奴とせんも
のと、又引立つれば恐しやッッ「渦巻く炎漲る白波、庭
の梢もさつ〜、池の水音どう〜、天地翻つ
て逆上り、高天碎けて落つると見れば、猛火盛に燃上
り、電光激して雷神凄じかりける次第なり。

○室馨鳥毛生先

天明元年十一月、森田座。作曲者杵屋巳太郎。

「扱も見事な花槍、石突しつかとよんやさ、振込め〜
と〜んとドッコイ〜と〜んと〜とととまらぬ人の
山、鐘は名に負ふ坂東一の黄金槍、おれと其方の眞中思
や、世界の女のくせに、宵に待たせて夜中に恨み、ア、
浮世、戀は恨みの種ぢやもの「まつは色あるなん〜あ

やかり物ぢやといな、藤に巻かれて寝とござるチ、嬉し
せよき〜ほんにえ〜しどけなや「華の吾妻の名をと
めて、振つて振出す一文字、皆様頼む御最負は合外へは
やらぬ神樂月。

○めりやす雨の柳

天明二年春、中村座。作曲者杵屋佐吉。

二上リ「摺る墨に薄き縁を思はじと思へばほんに硯より乾
く間もなき袖の露筆のすさみも跡や先様に〜し〜取
散したる玉櫛笥黄櫛の小櫛もく〜と解けぬ同志の目
に持つ涙、片寝枕に癖付けて、さいな辛氣な事わいな、
我が身より降る雨ならば、晴れて纏る、風の青柳。

○花遊小鳥囀

天明二年春、中村座。作曲者杵屋佐吉。

「難有や正八幡の宮造り「千代や八千代の鶴が岡、曇ら
ぬ御代の神神樂、氏神詣りに君達が、袖を列ねて化粧坂、
大磯がしき濱傳ひ、見渡す景色えい〜江の島、これも
神垣ほの〜と、霧に交る安房上總、出入る船の数々に、

沖も静に唐船の音が、いざや出て見よ様ぢや、様ぢや御座らぬ色打つ波に、可惜辛氣や氣の毒、月の廿日は沖に住む、夫を持つても名ばかりと、涙に暮す船の内これぞ誠に瀟湘の夜の雨とも云つつべし、雨の晴れ間は網を引く、引くに引かれぬつれなさよ鳥刺し、刺いたく見さいな、鳥を刺いた見さいな、しやんと出立つとりなりは、花に譬は、男は梅よ、梅は諸木の兄とは云へり、道理で鶯宿を借る、雀海中に入りて蛤となる、腐草化して螢となる、田鼠化して鶉となる、なるもならぬも君達の、心鶴の渡す川蟬連雀目白舌の草莖匂ひ鳥、雲雀山雀四十からく、小雀日雀頬赤ひさぎ一つ、鴨、豆鳥椋鳥鶯鶯吉原雀の色鳥に、通ひく、て羽抜け鳥、水鶏の鳥の物思ひ、鶯鶯と燕は何方が可愛い、鶯鶯にや思ひ羽、燕は子迄なしたる仲ぢやもの、思合うたる女夫仲、何の鳥が口悪で、鳴いて告げたよ東雲の、馬、君の御遊の御棧敷、皆家々の幕の紋、板屋貝は岩崎様、網の手は菅原様、舞うたる鶴は豊崎様、木爪輪違ひ花岡様、その上名取りの新造衆に、大一大萬大吉日と、年増に勝る立鳥帽子、白一文字黒一

心隔てなみちよ草、ほんに浮世は吉野草、夢見る度の草ならば、その曙を頼みてし、何時女夫の親子草、睦しや、春は花心移りて面白や、匂も深き花の色、八重一重咲亂れ尙九重に散來るは、散りく、類なき山も幾重に花見月。

座頭

三ノ中ギン、罷出でたる僕は、ニノギン生得綺麗な生れにて夕忍んだ仇櫻、名にし大津の繪空事、杖を力にお江戸さへ、出申したる座頭坊、珍かなる鶯の、花の盛りを告げん顔、此方は香で春を知る、ほんほにそれもさうだんべい合我も昔は、雁の、室の供君打連れて、通ひし廓の星月夜、逢うて嬉しき文枕、様が來る夜は籠に佇み、別を惜む明行く鳥の音くん、廓のしててん太鼓に素見ぞめきも浮きに浮かれて、入來る、心變るな櫻花合。

「なまいだくくく、南無阿彌陀南無釋迦彌陀佛く、願へば願へばなア、怖しき姿に心引きかへて、昔男の芥川、鬼一口とは野暮らしや、今の浮世は皆色衣、

文字、竹に雀は陸奥の、名も高橋の紋所、習ふ方なき色比べ、彼方の軒端此方の軒端、枝に小鳥の群る處を、刺いてくりよと思つて刺いて取つたは面白や。

京偶昔繪容

天明二年正月、森田座、作曲者杵屋巳太郎。飛驒内匠八形市川團藏。左甚五郎人形坂東三津五郎。

鷹の若衆・藤の花娘

鼓頭「こうらんてい長閑けき春の印かや、ヌエ、實に名作の立姿、見事に据ゑし鷹の居や、我も又東に染めし紫や、一枝手折る藤色の、二人連立つ箱入人形、可愛らしさよ大津繪姿合、頼まじな徒なる花の下紐は、解けてなら嫌君が下、鎌倉山の御所櫻、只人ならぬ装に、年の三津瀬を待たびて、何時迄藤の花心、長くもかけて寄添へば、さすが岩木にあらざれば、主の市紅に絆されて、他所目忍ぶの里馴れて、それかと匂ふ藤浪や、愛想の森も何時しかに、つい解易き男氣と、互に思ふ戀の山、愛しらしさよ櫻頃、馬、行通ふ心隔てな春霞、雲井櫻や千年の櫻々と語はれて、手毬櫻の美しく、何時女夫と家櫻、行通ふ

かけて結ぶの御佛は、朝日の如來難有や、なまいだくく、實にも佛の教には、飲酒殺生偷盜邪淫妄語の五戒を保つ事、これ十善と名付けたり、打つや鉦鼓の音も澄みて、歌舞の菩薩の舞の袖、今華やかに打鳴し合、此處に居侍る立盡し、さつても面白や、心浮かれてひよつくりひよくくく、ひよつと出たればあいたしこ、撮まれた花の盛りは室町筋へ、ちよと御座れの文の傳戀ひ話合、君が代にく、飛驒の工傳を今此處に、例は代々に盡きすまじ、箱の内にぞ入りにけり。

春霞袖梅枝

天明二年春、市村座。作曲者杵屋正次郎。

「恥しながら賤の女の、拙き身に立上り、あれくあれを御覽ぜよ、都の富士と名に高き、比叡の御山は春ながら、残りし雪のとけしなき、麓は田子にあらねども、霞に紛ふ花の顔、ちらりくくと振袖の、嵯峨や御室のよいさん櫻、梅の名所は多けれど、いでや古今の添へ歌に、難波津の梅が枝と詠じ給ひし御代も尙、久しき例なると

かや、ともかくにも都にも、名所古蹟は多けれど、花に心の春景色「花は櫻よ「實は橘よ、廻る月日のオ、やつくるくる」二木二本、花も木の實も千代萬「幾久し「繁りゆききの梢の花を、折添へ」手品やさしき花賣りの、數々召され候へと暫し興にぞ入りにける。

○楓幣色「隨意

天明二年九月、市村座。作曲者杵屋正次郎。

「千草刈る合里の童のしどもなく合尾花招けば領く薄、合點「ちんがらこ」合愛らしや「見渡せば合「様にまだうら若き紅葉を合手折りて肩に掛烏帽子合娘盛りの花紅葉、色に心は通天の、はしたないぞと笑はれて、袖に隠すや顔紅葉、鹿の命毛君ならば「露置いて朝の菊の美しや合西と合東に花の關、分けて争ふ合菊相撲徒合負けぬわつば菊、さりとはいよ子のこの小菊こつちは見事な紅に、劣らぬ色の源氏菊、入亂れ菊「潔や「須磨と明石合はどれが月やら合名所やら、どうやら合かうやら、分きて色分ちなく合どれが月やら名所やら合こちや「何の

私等が知るぞいな「花と紅葉は何が龍田の名所やら、どうやらかうやら、分きて色分ちなく、何が龍田の名所やら、こちや「何の知るぞいな「恥しや「今様とりく「神垣の、その間に間にも舞扇、差手も引手もしをらしや「實にしをらしく舞納む。

○めりやす村さめ

天明二年九月、市村座。作曲者杵屋正次郎。

本調子「村雨の露も涙も黒髪も、解けて亂れて亂れて解けて言ふに言はれぬ胸の内、曇りも何時か晴してどうぞ、心合砥鬢水に、映る面影桂男様を眺め明さん秋の終夜。

○めりやす霞の華

天明三年二月、市村座。作曲者杵屋正次郎。

「春立つや合霞の間より山櫻、嵐も風も待たでその合散ればぞいとめでたしと、大宮人の言の葉に合かゝる折にや捨小舟、揺れ「遺瀨なや、繋ぎも留めぬあだし身を、どうぞ彌生の花の色々。

○めりやす秋の夜

天明三年六月、中村座。作曲者杵屋正次郎。

「合せ砥に、かゝる思のあらうとは、神ならぬ身の白髪この身、剃るべき髪は剃りもせて「祝うて落す前髪を、涙で揉んで剃る髪も、老の拳の定めなき、秋の月さへ曇勝ち、いと「物憂き夜の雨。

○乗來戀入海

天明三年六月、市村座。作曲者杵屋正次郎。

「蟹の荻藻に住む蟲の合我から濡る、君故に、引れて來つ、馴れ「し、持つや田舟の裏表、なきこそ戀の本意なれど合男心はさうぢやないもの、昔思へばやことなき雲の上なる桂男も合三年は此處に須磨の浦、苦を數寢の假枕、一夜逢はねば戀しさの、又の逢瀬を松風や、逢うて別れて別れて逢うて、ほんにそれ又戀ぞ増す「別を思へば村雨の、袖に置く露隔なきをぞ色と云ふ、戀とも云は「夕顔の、花の都を振捨て「二人連立ち手に手を取りて行先に合賤が伏屋に鳥の聲、東育ちは鄙びたる、戀の言葉をひつしよなき、江戸紫の花の色「俺が兄アはそん

れはさ、昨夜來べとてなアちくぶん抜いた、ようも騙した性なし男合しみく「憎いぢやないかいナア「忍びく「にナ合約束すれば、忍ぶや脊戸の合戸が明かぬ、ようも騙した性なし女しみく「憎いぢやないかいナア憎てらし「落花狼藉許しなき合引くや引る、後髪、電光石火の水の月、ありとは見えて姿は又、手にも取られず陽炎の稻妻夜嵐波の音合物凄くこそ見えにけり。

○道しこく「行兒櫻戀淵瀨

天明四年正月、中村座。作曲者杵屋正次郎。稚兒白菊中村此藏、隨徳寺和尚市川綱藏。

「此處に浮名を留めしは、蕾の花の稚兒櫻、人目白菊忍出で、まだ咲かぬ間に情なや、散りて行く身の二人連れ「墨染め衣濃きその後朝に引更へて、夜寒を凌ぐ頬冠り、手に手を取りて纏合ひ、死出の道さへ助合ふ、戀の淵瀨と樂みて、辿り「漸うと、暫く休ひるたりける。

○咲競梅丹前

天明四年正月、中村座。作曲者杵屋佐吉。風の彌太郎中村勘三郎、侍女初雪中村兼治郎。

「冬枯れや四方の山々皓々と、降積む雪のなほ深く、木の梢も色を變へ、花の吹雪と合つ野は木枯しの吹荒びて、木立鋭き枝荒びて「梅も櫻も分ちなく、姿變らぬものとは、雪を支へて松竹や、齡久しき千代に八千代を細石、動かぬ形現せり「明けぬる春の轉る聲の美しさ合立つや霞の内よりも、色を染出す梅の花、南枝北枝の初薫り合長閑に風を合含みつ、折を待得て櫻花、匂も深き桃園や、末葉く々に千代籠めて、萬々歳と君が代を、長生殿とぞ祝ひけり「戀は曲者皆人の、戀は曲者皆人の、迷の淵や氣の毒合氷して合滋賀の唐崎打解けて合小波寄する春風に、立つや霞の八重一重、今日九重の花衣、雪間を分けて愛しらし、霞の眉のにこやかに、筆に書くとも言葉にも、初心に一重咲きしより、二夜合三夜四夜打解けて、花の下紐八重千夜、花もの言はぬ世なりせば、他所に散すな漏さじと、じきに隠して百羽搔、君が來ぬ夜は細目に明けて合待つ夜の谷の谷の戸に、蕾々の星月夜合

尾上の松は、羨しさと隔つれど、妹香戀らぬ住吉の、四社の御前の神松は、幾代久しき千代かけて、萬々歳と舞納む。

○馴染船の内

天明四年三月、中村座。作曲者杵屋正次郎。

三下り「花筏乗せて色よき振の袖。しやんとり、しき梅柳。眺も戀の二瀬川。岩井の水に市川の、流も清き隅田川。心に移して船の内門之助「痴話か菊之巻「イ、エ門「口説か半四郎「イ、エ門「色事かウタ「相合傘のしをらしや二挺立三挺立、汐は上げるぞその氣で持て來い。面舵合點ぢや。椎の木ぢや。やつしつし合「並木駒形花川戸。あれ淺草の觀世音合浮氣波立つ待乳山。今戸橋から乗込め合乗込め合とろさになつてやつしつし。且那お早い御來臨合丁度夜見世の清搔に浮立つ戀の色の仲の町此間セリフ。忠五郎「ありやなしやの物思ひ。假名でしつほり逢ふ夜の相圖。君と主とのその戀仲は。岩より伊三郎「石より堅い誓言誓紙の數も合解けぬ思を細々と封じ籠めたる玉章は「く

其方思へば照る日も曇る、縫うてふ笠はありながら、濡れて通ふが悪いかと、初音がましき痴話事も、花に宿かる鶯や「ちよつとお邪魔に形振を、言はうなら語らなら、其方の此方の君様性悪者のお大將、先づ歌人の詠には、一本を二本とも君と連ねし言の葉の、それは老木のこれは又うつす若木の奴のこの膝の節松の節、これを千歳の下枝と、すつと出せし片足は、慮外千萬千貫松、天津少女の羽衣も、おかけて乾すてふ片枝は、雨露時雨凌ぐなる、三笠と申すは三蓋松、差す腕には壽福の枝、不老の枝、徒に撓む一枝は、雲や雪や溜れと茂り合うたる常磐木の青々と色増す戀増す、それくそれ、俺が且那はくずんと物好き、夜晝分たずどつこいく朝からぞめてどつこいく、浮氣の波押せく、どつこい、押せくどつこい、色と情の縁は變らぬ、千歳萬歳萬々歳、祝ふ銀杏のめでたさよ「相生の松に來もせて會根の松、見れば赤松顔の照り、私が心は武隈のまつ夜はつらい唐崎の、闇の枕が一つ松、ほんに麻布の松かいな、待つに來ぬ夜の憎てらし、君は我待つ我は君待つ夫婦合、されば高砂

筆の海合忠五郎「戀をする身は濱邊の千鳥。夜毎く々に袖濡らすしよんがえ「深い淺いの愚痴と無理。恨も解けて春の雪、盡ぬ縁の睦まじや。

○朝日の舞鶴

天明四年三月、中村座。作曲者杵屋正次郎。

「あアらめでたさの三番候や合春の翁の花の顔。白きは深山櫻木の合ちりやたらりと邊も花の雪とのみ合絶えず飛んだり鶴の丸、丸く納むる今日の、式三番のこの尉が、手管を籠めていざく「奏でん「妹香結ぶのこの島臺に、千年を延ぶる鶴と龜合三足飛んで鳥飛び松と竹とはしよきく合しよきくくと祝ふ壽酌むや盃抑へた「僕が、外へはやらじとつばい小林新朝比奈が千秋萬歳萬々歳と、謠ひ囃して舞納む。

○めりやす色増袖

天明四年三月、中村座。作者等縫專助。作曲者杵屋正次郎

平野屋徳兵衛市川門之助、平野屋久右衛門松本小治郎、げいこおふさ岩井半四郎。

「中々に合花見ぬ里に住むならば、愚痴と無理とに目を送り、惚れた男もあるまいに「分と云ふ字を書初めて、他所の浮氣は霽ほど、此方の誠は雨の夜に合濡れて色増す合門田の早苗」二人は濡れて行く道の、逢はでは歸る袖の三日月。

○めりやす黒

かみ

天明四年十一月、
中村座。作曲者杵屋佐吉。

「黒髪くろかみの結むすほられたる思おもには、解とけて寝た夜の枕まくらとて、一人寝る夜の徒枕たもだ、袖は片敷く妻つまぢやと云うて、合方「愚痴おろちな女子むすめの心も知らず、しんと更かけたる鐘の聲かね、昨夜おとよの夢ゆめの今朝けさ覺さめて、ゆかしなつかし遺瀨いせなや積たると知らで積たる白雪しらゆき。



○狂亂雲井袖

天明四年十一月、桐座。作曲者杵屋正次郎。通稱「仲藏狂亂」。出羽郡司小野義實中村仲藏。

鼓頭「いざさらばありし雲居くもいの花の袖、思へばかゝる執着ていかくの、定家ていか葛かの離れぬ伸を、隔へてられてもそもやそも、思出おもひだすとは忘るゝからよ、何の忘れよぞいたいけ盛り「さてもく我御寮わがごりやうは、踊る振が見たいか、踊る振が

見たくば北嵯峨へ御座れの、北嵯峨の踊は對の帽子をしやんと着て、踊る振がよいとの、吉野初瀬の花よりも、紅葉よりも、君が面影現にも夢にも見たやなつかしや

忠五郎「古りにし事を聞くからに、比翼連理の契さへ、花に嵐の情なさけなや、更に別わかれなかりせば、千代も人には添ひてまし、よしや草葉くさばに忍しのぶとも、色にぞ出でし我が恨三人「千草も冬枯れて、雲の彼方に春や来て、風に散飛ぶ雪の花、散りやちりくく漂ふ君が袂たもとに積るも嬉し、千々に心も亂れて「戀しや昔ゆかしやと、彼方へ走り此方を慕あこがひ、別の床とこの臺うたなごと、人目も分かず伏轉ふしまわぶ。

○女夫松高砂丹前

天明五年十一月、桐座。作曲者杵屋正次郎。通稱「高砂丹前」又は「高砂」

次郎「今を始はじめの旅衣ころも、く、日も行末ゆきすえぞ久しき三上さんじやう「高砂や木の下蔭かげの尉じやうと姥おば、松諸共に我見ても、久しくなりぬ住吉すまぎの、この浦船うらふねに打乗りて、月諸共に出汐いでしほや、これはめでたき代の例「老木の姿引替へて妹春あはわりなき夫婦松、葉色は同じ深緑、見れども思の盡つくきせぬは、誠なりけり戀衣こゝろも、實に戀は曲者くまもの、假令萬里は隔つとも、慕ふ心はそりや言はんすな、朝な夕なに空吹く風も、落葉衣おちばの

袖引纏ふ、思ふ殿御はつれなの身にし、晴に残る徒枕「さても見事になア振つて振込む花槍は、雪かあらぬかちらくちらと白鳥毛、振れさどつこい振れさどつこい、袖はひらく、臺笠立傘戀風に靡かんせ、すんど延してしやんと受けたる柳腰、しやなり振槍秋波は、可愛らしさの色の宿入り三下り「松の名所は様々に、あれ三保の松羽衣の松にかけたる尾上の鐘よ、相に相生夫婦松、中に緑のいとらしさの姫小松、二蓋三蓋五葉の松、幾世重ねん千代見草、しをらしや「西の海青木が原の波間より、現れ出でし神松に、降積む雪の朝香瀉、玉藻薙るなる岸蔭の「松根に倚つて腰を摩れば「千年の緑手に満てり、指す腕には悪魔を拂ひ、納むる手には壽福を抱き「入來るく花の顔見世、貴賤の袂袖を列ねて、颯々の聲ぞ樂むいさぎよや。

○拍子舞寫繪雲井弓

天明六年十一月、桐座。作曲者杵屋正次郎。通稱「高麗藏拍子舞」。

微睡む隙もなき内に、あらたなりける夢の告、驚く枕に雷火亂れ、眼平「不思議や今迄ありつる女、どつこい中、寒風閉ぢて霜となり、又雪となり氷ともなりては峰の梢より、映せば映る紅葉も、花の鏡のちらり、ちらり、と衣紋崩る、しどけ形振恥しや、眼平「惟茂少しも騒がずして、歌「南無や八幡大菩薩と、心に念じ劍を抜いて待ちかけたり、微塵になさんと飛びかゝる、揺潜りては丁と受け、脊けて右に飛向ふ、裾を拂へば、足溜めす、宙を拂へば、飛上り、飛鳥の翔の手を盡し詰めつ開いて揉合ふ風情花々しくも面白や、眼平「こりや最前から戸隠山に準へて女懷中へ手をさつかけて何とする、登代「サアこれはな山ぢや、眼平「何と登代「恨がある、眼平「何と登代「山程ある、眼平「何處に登代「其處にそれ、二人「そつこでせい、戀の戸隠山々に胸の煙の淺間山積る恨は富士の雪ほんに辛氣な戀の山二人しつほり合の山花の顔見世人の山チラシ「かくて時刻も移るや空に、空に嵐の聲する、散るか眞橋の葛城の、神の契の夜かけて、月の盃差す袖も、雪を廻らす杖かな、絶えず紅葉紅

天明七年九月森田座。作曲者杵屋彌十郎。瀬川菊之丞の楊貴妃、羽突禿、白酒賣、女助六、黒木賣、うかれ座頭、七變化の所作事。その中で名高いのは「羽突禿」と「白酒賣」とである。

羽突禿

三下り「戀の種蒔初めしより色と云ふ、言葉は何この廓に、誠籠りし一廓、丸い世界や粹の世に、嘘とは野暮の誤りと笑ふ禿のしをらしや、禿々と澤山さうに、言うて下んすな、こちや華魁に戀の諸譯や手管の譯も、教へさんした筆の綾、よう知ると思はんせ、オ、恥しや恥ししどけ形振可愛らし「文がやりたやあの君様へ、取りや違へて餘の人にやるな、花のかの様のサテ花のかの様の手に渡せ「朝のや六つから「上衣下衣引重ね、禿は袖の振初め突く、庭に羽根を突く、一イ二ウ三イ四オ五重に七重に事は三十四十五手はま置く二十一イ二ウ三イ四オ合見よなら「松を翳して梅の折枝、それさこれさそれ好いた三味の手、此間拍子「梅は匂よ櫻は花よく、何時も眺は富士の白雪。

葉狩、實に興ありける次第なり。

○菊壽の草摺

天明七年正月、桐座。作曲者杵屋正次郎。通稱「いきほひ」三下り「勢和朝に名も高き、曾我の五郎時致が、逆澤瀉の鎧蝶、裳に縫る鶴の丸、素袍の袖を搔撫でて、留めるは鬼か小林の、朝比奈ならぬ優姿、女の纏れる黒髪に、引かれて留まる心なら、やらじと引けば時致は、日頃の本望父の仇、妨すなと突飛し、くるわの戯とは違ふぞよ、放せ留めた、此間草摺「留めてよいのは朝の雪、雨の降るのに去なうとは、そりや野暮ぢやぞえ待たしやんせ、起請誓紙は嘘かいな、嘘にもじやれにも誠にも他所に色増す花眺め、そして騙してそれ、その顔で怖い事言うて腹立てさんす、其方向いてるさんしても、顔見にやならぬ末を頼みの通ふ神「かよわき少將朝比奈が、力は素袍の袖添へて、互に劣らぬ有様は、貴賤上下押並べて、感ぜぬ者こそなかりけれ。

○摸露菊數品

白酒賣

三下り「今朝の便りに文書き添へて、昨夜巻いたる玉章も日本めでたき廓の名の、分吉原へ通ひ路の、駕籠と船との山川や、末白酒の擔ひ賣、此間セリン「そもく白酒の始まりは、神代の昔素盞鳴尊と云ひし大盡の合かの足名椎手名椎の二人の末社に詔り合八しほかもして作るとかや出雲八重垣妻ごひに合堅いお客も葡萄酒の、お腰の物は船宿の合戸棚の内に霰酒、笹の一夜を呉竹の、くねるは癖の男山、つい後朝の七つ梅、茶屋が迎ひの玉子酒、濡れてるよとの霰酒、ア、ま、よ合いつそ伊丹の濁り酒合末は諸白諸共に合千年不老酒養命酒人の池田も合みりん用ひぬ氣ま、酒合今白酒のほに出でて、赤きは酒の科ならぬ合身は習の奈良酒屋、兒の手柏の二人寝は、盡きぬ縁の樂と、打擔けてぞ詞「白酒く急ぎ行く

○壽萬歳

天明八年冬、市村座。作者瀬川如阜・増山金八、作曲者杵屋正次郎。

かに。ほんに大谷かの二人に五に仲のよいこの合く戀
 奴合しんぞう行列お供を揃へ、殿のお馬に引添うて。轡
 捌きは家の定紋。振つて振込むはいどうく足取はしと
 く一入面白さく。此間拍子合方さやけき色は雪よりも
 合月花よりも美しや。何に譬へん合梢の錦照増す戀増す
 君ならばほんに誓文どうぢやいな。まんざら嫌ぢやない
 わいな、結ぶ神風葺屋町、變らぬ花の顔見世や戀に堅田
 の石山も、文唐崎へ三井寺の、假令粟津と返事を矢橋、
 思は比良の雪よりも、積る話を二人して、語り近江の
 勢田い事オ、嬉しくそれが誠であるならばこちやくく
 くよいわいな恥しや打つや太鼓の拍子に連れて入來
 るく。貴賤群集の人の山、ぎつしりく積るは六の花
 盛り榮 賑ふ江戸の市村。

○めりやす雛 草

寛政二年正月、中村座。作者櫻田左交。作曲者杵屋彌十郎。

三下り賣る梅に雛もやつれて三日の月、硯の海へ散りか
 る、花もあだなき徒名草、八重はもどかし一重は嬉し、

の、ア、様故迷ふ女氣の、松の風迄も我が身の上と汲み
 て知る、汐馴れ衣袖寒き、浦曲の秋の夕かなく、松に
 吹來る風も興じて、落葉を拂ふ我も木蔭にいざ立寄りて、
 磯馴松のなつかしや汐の干瀉を行く袖に、松吹く風か
 ざんざん、蛤踏みに二人連れ、裾や小褌はしよほく濡
 れて、ちらと見初めし姫貝に、ちよつと一筆送りたいら
 け、板屋貝名立てがましき移り香も、梅の花貝櫻貝、見
 ても美し花比べ風更け行く秋の夜の、空澄渡る月影に、
 差す潮時も早過ぎて、際も押照る波の花。

○唄淨 濱廂松掛糸

寛政二年冬、市村座。作者扇頂。作曲者杵屋彌十郎。藤房
 息女吳羽の前中山富三郎、三位の局大谷徳治。

本調子此處に戀路を留めしは、身のあやにくの科ならめ、
 吳羽の前のはるくと、慕うて沖の小島瀉實三郎出合方傳ふ
 濱邊の道の邊に合裾打拂ふ沖津波、行くも歸るもわたつ
 みの合ゆたのたゆたふ起臥に、寢覺も合幾夜肌寒き、千
 鳥は物を思はする、これは情も徒波の、碎けて千々の我

ほんに涙の紙抑へ今宵限りと薄墨に、書く玉章も雁が
 ねの、鳴いて別のをしま月、短き筆の命毛に、任せ參ら
 せ候し。

○今様月汐汲

寛政二年秋、中村座。作曲者杵屋佐吉。

月も早や出潮になりて鹽釜の、浦さび渡る景色かな、
 千賀の鹽釜しをらしく、振る振袖のしやなくと、裾も
 小褌も濡れく汐の、二人連れたる磯千鳥、鳴いて友呼
 ぶ磯傳ひ昔を此處に蟹人の、拙き業を須磨の浦、汐汲
 む桶の重たきに思をかけし狩衣、これを見る度に彌増し
 の思ひ草、きつ、馴れにし合我が夫の、配所を訪へば山
 梶の、色に狂ふがをかしか、をかしか笑やちちつと
 も大事もない、こちやく大事もくくないよの、色に狂
 ふぞ道理なり我も戀路に迷ひ浮かれて、村雨も道理道
 理、松風様つれなき人に見せたきは、風に靡ける鹽釜の
 煙、靡けやく徒なる花よ、村雨も袖のみ濡れてよしな
 の恨み、恨みかこつもわざくれも、とかく君に逢ひたさ

が心、恨み顔なる晝の月、此間上上の空ふく八重の汐
 風。

○對面花春駒

寛政三年正月、中村座。作者増山金八。作曲者杵屋正次郎。

めでたくや春の始の春駒なんぞは、夢に見てさへよ
 いとや申すく、オ、くそれくよい振袖の梅と櫻の
 その中々は、姿も年も愛敬も、對のとりなり可愛とや申す
 く、しやんとり、しき出立ばえ八百馬それ青馬は陽獸
 にしてよく春の氣を則り菊之盛春の始のめでたさを、門
 出よしや室の山半四郎賣の船の波の音、轡の音も乗初め
 よしや、三つ葉や四つ葉の殿造り八百庵の内に木瓜の
 半紋日物日の約束堅き菊ほんに顔見て八百嬉しと申
 す大寄せ奥野のその狩くらに、伊豆と相模の殿様方は、
 愛澤八木下瀧口北條柏が峠にお並びあれば、廻る盃よい
 中村と、名にし大庭の朝歸り菊之盛先づ一番に海老名黨
 半四郎二番大樂平馬さん八百馬遙か後陣に引退り降る
 は時雨か村雨月毛 菊半それを聞くさへ無念と申す菊半

「コレ二入」コレ鎮めて「しと」召したる駒の手綱の色は赤澤山紫竹の竹馬三人「ハイ」淡竹の竹馬先退け「退け」駒が勇めば心もいそ「響の音がりんがら」蹄の拍子がつとんと此間拍子「壽祝ふ花の袖匂零れて咲く梅の枝移りして鶯の囀る聲の拍子を揃へて七草薺」これ人日の白馬の節會春の小馬の潔く八百「賑ひ會我の二入」對面と「唄ひ囃して祝しける。

○めりやすうは帯

寛政三年正月、中村座。作曲者杵屋和吉。

「花咲かば散るとは豫て知りながら合憂き世の義理に絡まれて合問ふ人もなき我が心、涙は袖に包めども、ついで旋びる青柳の合絲繰返す露の玉、風に散らすな初櫻「契は浅き水鏡、見れば流の淵瀬川合どう言譯を杜若合三世の縁も一筋に、切らねばならぬ身の因果合「情に染めしこの胸を、さらりと解いて繻子の上帯。

○所いとし夫節波楓

寛政三年九月、市村座。「竹吉原雀」の下巻として出す。

○千早振袖の梅香

寛政四年正月、河原崎座。作曲者杵屋正次郎。

「限りなく照させ給ふ大神宮。岩戸開きし神樂歌。天の鈿女の舞の袖。傳へて巫子の神勇め。巫女が鼓の拍子を揃へ。ちんりからりやひやうるりひやうろと。吹いた笛の音のよさ聞けば。誠に「ほんに誠にえ合翻す袂の恥しや。「やん面白や荒神の。御前を見れば葉も茂り。松の緑の勢に。黄金の井戸に水も湧き。瀬川の水の流れよく。これの「御家は御繁昌と。板ひ潔めし鈴の音も。千早振る千代の御神樂。「なるかならぬは目許に愛の。零れ易さよ梅が香の。香ゆかしき花扇。ひらり「と合手もたゆく。「盡させぬ御代の壽を。祝ひ奏でしとりなりは。しをらしかりける風情なり。

○杜若七重の染衣

寛政四年四月、河原崎座。作者増山金八。岩井半四郎七變化所作事。作曲者杵屋正次郎。

小町（玉だれ小町）

第四 新編江戸長唄集

澤村宗十郎の名殘狂言、足利頼兼の役にて、高尾幽魂さんげの所作。唄松永忠五郎・芳村伊三郎、三絃杵屋彌十郎・同三郎助。

三下り「忠五郎」罪障の山には。いつとなく煩惱の雲あつく。生死の海には。無明の波合伊三郎身に吹きかへす秋の風。うつ「にもまた宇津の山。その下紅葉合 忠散つて合 伊流れて、谷川の水の、堰にせきとめられし、我が思ひ「いくよ逢ふ瀬のいとしさを。思ひ出でそよ忘らりよものか 伊はでな嘘よりぢみな合まことが合こちや「合 忠こちやよいわいなアさりと伊「ほんに 忠今は返らぬうき世川 紅葉の橋の中絶えて兩人上に亂る、寝亂髪は、下に解けずと人は知らずや、浅ましま「吾が住家は草葉にすだく、露を枕にさはらば落ちよ。鳴いて夜毎のつまほしさに。殿御戀しき機織蟲よ。よ。鳴いて夜毎のつまほしさに。殿御戀しき機織蟲よ。晝は物うき草の蔭「無慚や高尾は世の人の。思ひをかけし涙の雨の。はんらく「はら「はら合方 我ゆる迷ふ戀慕の闇の。あやし恐ろし物語。

二上り「玉簾の内や懐しき七重八重、今日九重の戀櫻「小町櫻の花の色、紅の裾たをやかにけに大内ぞゆかしける、雲井櫻の袖の香に、翳し眩ゆき檜扇や、薫もそよと春風の、うつりにけりないたづらも、鸚鵡返しの文車 合通ひ車の三つ扇、思の増すわいなその約束は筒井筒、井筒にかけし稀人を、焦れ渚の濱庇 眞砂の數や和歌の道、三十一文字や慕ふらん。

手習子

三下り「今を盛りの花の山合来ても三吉野花の蔭、飽かぬ眺の可愛らし「遅櫻まだ蕾なり花娘、寺子戻りの道草に合てんと見事な色櫻 合雜草結ぶ島田鬘、はしたないやら戀ぢややら忠五郎「肩縫上げのしどけなく、紙捻喰切る縁結び、解けか「りし繻子の帯、振の袂の零れ梅、花の笑顔の愛しらし、二つ文字から書初めて、悋氣恥し角文字の、直な心の一筋に、御師匠様のおつしやつたを、ほんに忘れはせぬけれど 忠五郎「ふつつり悋氣せまいぞと、嗜んで見ても情なや忠五郎「まだ娘氣の跡や先、あづまへもなきあどなさは、粹なとりなり目に立つ娘 忠五郎「娘々と澤山

さよ、笛や太鼓に乗せて〜吉野初瀬の花紅葉、櫻翳して歸りけり。

石橋

「清涼山を見渡せば、雲よりかゝる瀧の絲、巖岨々たる巖石や、譬へば夕陽の雨の後に、錦をなせるその風情、又弓を引く形にて、幾代苔蒸す石橋の、面は尺に足らずして、下は泥犂も白波の、音は嵐に響くらん今を時とや咲満ちて、富貴の色を深見草花をめぐりて舞遊ぶ、蝶の翼の閃けば、戯れ遊ぶその風情、己が友呼ぶ獅子の曲、暫く待たせ給へや、影向の時節も今幾程によも過ぎじ獅子團亂旋の舞樂の砌、牡丹の花房匂満ち〜、大筋力の獅子頭、打てや囃せや牡丹芳〜、黄金の薬現れて、花に戯れ枝に臥し轉び、實にも上なき獅子王の、勢靡かぬ草木もなき時なれや、萬歳千秋と舞納め〜、獅子の座にこそ直りけれ。

○梅紅葉重弓

寛政四年十一月、河原崎座。作曲者杵屋正次郎。

三下り打連れて背に負うたる早咲の合梅の花籠木枝よ

ば合梢は霜か雪の花、冬至の梅の色盛り、合香ゆかしき花の袖合彼方へひらり合此方へひらり合櫻に紛ふ雪景色 忠五郎
「初戀の人目恥し花紅葉、忍ぶの山の下紅葉、薄いは嫌よ戀衣、結ぶ縁は神様の、お仲人ではないかいな、今宵逢ふとの合圖は何ぞ合妻戸叩かば誰そとも言はで、明け霜夜の睦言も、只心なき鶏鐘に、いとと思ひの増鏡、合せ鏡の比翼紋二下り玉簾の内やゆかしき御所車 合それえ〜合筆に思を文車、返事美し花車合くるり〜くるり〜花車合積る夜の通ひ車や雪車、それえ〜合忍ぶ車の君と我、扇車や戀車、くるり〜くるり〜戀ひ車をらしや振込め〜初雪の、中に見事な花の槍合振の袂に戀風がよれつ纏れつ合ちら〜と合さんさ時雨に濡れ〜初めて合揃ふ槍の手花の山、飾り立てたる伊達なとりなり〜只何時迄もこの舞臺、變らぬ花の顔見世や、所繁昌河原崎、賑ふ御代の里神樂、千秋萬歳萬々歳と豊にこそは舞納む。

○めりやす室の梅

り、散來る落葉をいざ搔かうよ〜、ごんせ〜と小手招き、仲のよい同士道草の、里の童の愛らしや〜小鳥の跡を慕ひつ、弓矢携へり、しげに、その出立は小佐川の、分きて姿も水仙の、花の顔見世可愛らし合射たりや射たり合當り外さぬ追鳥の、羽風にばつと散飛ぶは、花か錦の下紅葉、野邊の眺も面白や〜松の合松の二葉はあやかりものよ、青葉はまして落葉さへ、二人離れぬ仲ぢやもの、それえ〜それぢやいな、誠に羨しく、千代も變らぬ常磐木や、實に室咲の色盛り、月雪花の派手模様、三幅對の装は、花に劣らぬ風情かな。

○花車岩井扇

寛政四年十一月、河原崎座。作曲者杵屋正次郎。通稱「花車」

三下り曳けやひけ〜姿も霜の花車、白紅の染手綱、しやんと着なした戀風織の、烏帽子狩衣男舞 此間セリフ 鼓叩
「今日今様の壽を、祝ひ奏づる三つ扇、その舞ひ扇手もたゆく、實に梅檀の二葉振此間舞〜冬の半に山里を見渡せ

寛政四年十一月、河原崎座。作曲者杵屋正次郎。

「増すは何、室の梅さへ他所に見る、男心のつれなさと、恨む涙も露凍る雪がましか、紅葉も花と言ふぢやないかいな愚痴と思ふも女子の常よ芽えた空にも村時雨。

○月顔最中名取種

寛政五年九月、河原崎座。作曲者杵屋正次郎。通稱「鬼次拍子舞」。松の前若井喜代太郎、長田の太郎大谷鬼次。

ウタ「頃は壽永の白拍子、祇王祇女とて二人あり、雲居の刺繡の後帯 喜代太郎「水干着たる舞ひ姿、烏帽子鞘巻佩く時は「男舞とも名付けたり鬼次「その頃加賀の生れにて、佛御前と名にふれし、舞の上手ぞ出來り、西八條に召されつ、「いざよふ月の眉がかり、人々興じ望みけり 忠五郎鼓叩「君を始めて見る時は、千代を経ぬべし姫小松鬼「こりや何をする喜代「さアこれはお前にナ鬼「俺にどうした「サアお前の池に龜浮び、鶴も群れるて千歳經る、羽袖を翳すしをらしや、開く扇のとり〜に、三度翻して奏でける鬼「サアそれはさうと今の返事はどうだ喜代「そりや誰にえ鬼「難波殿へ、喜代「サアそれはな鬼「どう

だ「問ふも憂し問はぬもつらし武蔵野と、掛けたる謎に
愛敬の、零れかゝるや花薄、君蟋蟀と男野花、返事松蟲
齧嘶「お前にどうぞ扇蝶、此方はしやんと合轡蟲、鬼一
口と寄添へば、置いて袂を振切つて、胸ぐら取つてコレ
男善三郎「さう言はんすりやお前一人が眞實で鐵五郎「私が
心にあるとあらゆる神かけて忠五郎變る心はないものをお
前は嘘と思はんす、それでもわしや尙可愛い三人「辛氣
な事と寄添へば鬼「それやア何だ 再代「茶々上らんかい
なア「出花の花が汲んで来る、水も漏さぬ水茶屋の合味
な縁も今更に、月待ち日待ち大待ちを、そゝる山伏の錫
杖を、しやんぐぐくと振立てて合懺悔「ぞつこん其様
に惚れて「惚抜いた、それ様の御容貌を、今で譬へて
言はうなら合浪華高島菊本も、跣足詣りの代詣り、辨財
天と打込んだ君が色香の蘇民書札、御茶の数さへ三千合
三百合三十三杯、うつかれ浮々戀は曲者靡かんせ、これ
どうぢやいな再代「コレは鬼「それを二人「どつこいヲドリ
「悪性な程尙思ぞ増鏡、見るに付け聞くに付け、男の心
と秋の空、縁のあるのが誠なれ、嬉し腕の命とは、心で拜

○めりやす五大力

寛政七年正月、都座。作者並木五瓶。作曲者杵屋彌十郎。
三下リ「いつまで草の何時迄も合生半見え物思ふ 合假令堰
かれて程経るとても、縁と時節の末を待つ合何とせう合方
「互の心打解けて、上邊は解かぬ五大力 合さはさりなが
ら變る色なき御風情、やがて逢はうぞえ合語ろぞえ惜し
き筆留めそろし。

○めりやすわかれの雪

寛政七年正月、河原崎座。作曲者杵屋六三郎。
「書く文も涙ににじむ硯墨、筆の命毛頼みなきこそ憂
き世く、憂きを隠せし志賀の浦、胸打つ波に様々の、
夢のさめ行く春寒や合カン「柳は立ちし振もよく、霞は山
の薄化粧、解いて流すは雪解の水の朧月 合映せば映る増
鏡、袖に宿るは留木の薫、これが形見と残らん。

○めりやす心の木枕

寛政八年正月、都座。作者櫻田左交。作曲者杵屋和吉。
三下リ「雨の憎さは宵に降り合夜中に晴れて胸の闇、なま

んでるわいな闇に残りし枕が物を、言は、悋氣の種と
思ひ草 喜代「サア長田の太郎と名乗つて笛を渡しや鬼「
小癩な女、其處退け二人「イヤどつこい「互に劣らぬ千
種の盛り萩萩枯梗葛葛、裾もほらく吹返し、さらく
さつと秋風に連れて梢の花紅葉露の玉散る風情かな。

○琴唄小夜ごろも

寛政六年十一月、桐座。作曲者杵屋和吉。
二上リ「松風の便もがなと人傳に合夕々の袖時雨、露の涙
の草枕、常世の廓を何時しかに、雁の玉章繰返し、心堅
田の初霜に合方「結び替へよと無理ばかり、ア、何とせ
うどうせうぞいな、思ひ重なる小夜衣。

○めりやす木毎のいろく

寛政六年十一月、河原崎座。作曲者杵屋六三郎。
「生半濡れて甲斐ぞなき、深山木のこがれて變ふるそ
の色も、知る人ぞ知る涙の雨の合「いつそ染まぬが眞柝
葛、とても焦る、仲ならば、色ぢやくと言はれて見た
や合「纏付いたる葛の錦木。

じ濡れずば物思ふまい合そりや思ひ寝の新枕、明日より
袖の曇り勝ちなる。

○琴唄 閨の友

寛政八年七月、桐座。作者松井由輔。作曲者杵屋彌十郎。
二上リ「初秋や手向の調娘氣に合私は織姫その人様は合牛
の角文字愛しとも、言ふに言はれぬ星合の、濱の眞砂か
戀草に、義理と情の二瀬川「と渡る舟の楫の葉に、笹の
一夜の合天の川、深き心は七夕の、顔は紅葉や鵲の、翼
の橋に渡初め合いく久松の色變へぬ、胸の思は山家屋の、
契も他所に解く帯の、枕恥し閨の友。

○對面花事觸

寛政九年正月都座興行の「江戸春吉例會我」の第一番目六
建目。作者木村圓夫。作曲者杵屋和吉。十郎市川八百藏、
五郎若井半四郎。

八百藏「抑常陸國鹿島明神の神體は。武甕槌の命にして。
七十五度の祭禮の中にも、男女睦月、常陸帯の神事なり
半四郎「其事ふれを舞の袖。神はかんじん要石、ゆるがぬ

御代を萩の萬度。金鳥玉兔を畫きしは。コレ陰陽の形なり
 八百一鳥は夜明けて空に飛び。兎は夜陰に地を走る半一は
 する月日も十八年。待ちに待つたる初見夢 八百一初鶏初
 夢初曆半一ひらけば神よし 兩人一神いさめ 鼓唄一千早振鈴
 は驛路の春の駒。いさむ拍子の神ころ 唄一逢ひたや見
 たやを。神へ祈の初戀なんぞは。思ひ出雲の名に大社合
 賽の柏手峠に。岩戸隠れの恨みのかずは。五つや三つ
 羽の。小弓に覺の。きりくくきつて。鳥居や御幣な
 んぞは。人の噂にゆふ四手も、じつとしづめる心の湯立
 八百一胸の榊葉半一飛びか、つて八百一コレ半一テモ八百一
 ハテ 拍子舞一とかく時節を待つが戀。待てば甘露の五月雨
 半一目當は違はぬ殿作り。庵の内に木瓜は 唄富士の裾野
 の裏模様。そのあだしづまあだし人。こがれよるべの浮
 島が浪。返すくも約束を。忘れまいぞや。忘れぬく。
 忘れじと堅い契りの二人連。つれて音頭の 合沖は和波よ
 うて。なんくこれわいな。室の船が鹿島浦にまつしろ
 合くしろく白金の帆に。法花經の巻物や 合追ひくる
 風のどつと打つ 半一打てや打てく 當の敵 皆一敵とは

エ、八百一サアかたき唄一かたきえにしも鹿島浦邊に引く
 網の。寄せて押来る白波に。煙草くゆらす沖の方 合追風
 神風さらくさつと。さざれ岩根の合霞が浦に。漕ぐや
 小舟の眞帆かけて。櫓權の合音が合からくころくか
 らり合ころり拍子とりく面白や。海土が戀すりや綱引
 帯引一布引く。引けや手んでにがつてんがてん 八百一必
 ず合圖に忍入り。取つて抑へて心もと半一恨みの血まぶ
 れ起請文。その時本望新枕 八百一先づそれ迄は帯と帯半
 一といては寝られぬ縁定 八百一これぞ神事の半一常陸帯
 八百一事ふれ出立も半一春の興 八百一吉例會我の半一對面
 と八百一ホ、兩人一敬つて白す唄一神すしめぞいさまし
 き。

○神樂歌絶夕四手

寛政九年秋、河原崎座。作者村岡幸次。作曲者岸屋六左衛
 門。くりから太郎東文藏、白太夫娘櫻木中村吉太郎。

一紅葉夜の間の露や染めつらん、薄い男に女氣の、戀
 と云ふ字の伊達模様、しやなく歩む風俗を、憎や野分

○姿花穂七種

寛政九年八月、都座。作曲者岸屋正次郎。岩井半四郎四季
 七變化所作事として、小町・手習子・座頭・傾城・木賊刈・面
 かぶり・石橋を演ず。「木賊刈」名高し。

木賊刈

一面白や梢は何一葉散る、嵐や音を残すらん 三下り一木
 賊刈る 合園原山の木の間より合磨かれ出づる 合秋の月、
 露分け衣袖濡れて、牡鹿鳴く野の行末と、それは信濃路
 我は又、老を養ふ 樂に、心を磨く種にもと 半四郎一ハア
 頭を擧げて山月を望み、頭を垂れて見る地上の霜 浮世
 を秋の老の身も、昔を思ふ月の眺ぢやナア、一いざや
 木賊を刈らうよ 合今宵の月を友として、昔話の獨り笑み
 市十郎一昔爺と婆とがあつたとさ、爺は山へ柴刈りに、婆
 は川へ洗濯に、互に跡を見送りて、山と川へぞ出でらる
 る婆は尾上を見やりつ、北山嵐の烈しくて、さぞ寒か
 らう愛しやと、我が身より尙爺殿の身の上思ふ諸白髪、
 打連れて急行く、一俺が元氣はナア若い者にも合いつか
 なく、合滅多にや負けぬ、九十九折なるるりくりるんじ

が裾吹返す 合裏表なき眞實を、疑ふ君に草に置く、せめ
 て露程知らせたや、憎い男と袂から、ふつとり抓められ
 板縮の、下着に残る紫や一神は非禮を受け給はず、直な
 る心明かに 合天の鈿女の舞の袖一やんら嬉しやんら樂
 しや戀ひ話 合あの子やく、娘々と皆人毎に、文玉章で
 口説かれて 合措きなさい措かしやんせ、おうさてひつこ
 い何ぢやいな 合辛か思ひが報はうぞ 合引手数多の身は遣
 瀬なや、あつちら向けや袖を引く、こつちら向けや袂を
 引く、しみく私に嫌ぢやにえ一さてもめでたやく、秋
 津國黄金樹にて 合米量といの、量るといの 合樹はいらい
 で箕ではかるといの一これのお庭にく、井戸掘れば 合水
 も湧出で金も湧くといの一紅葉くも美しき 合枝は
 折りたし梢は高尾 合折るも摺の尾くア、合眞間の紅葉
 を散し書参らせ候も野暮かいな末は夫婦にせうとう寺面
 白や一樹の蔭や一河の流 合皆これ他生の縁と浮氣と粹
 と野暮との取合せ 合佐太の神慮に叶ひし恵みすしめ給
 へ 合神樂合ますく願ふ江戸の御最負。

よの山道なりと合いつかなく、滅多にや負けぬ、九十九折なるゑりくりゑんじよの山道なりと、足はしつかり腰を反して杖いらぬ浮世語となりけり。

○(仙臺ぶし)吾妻唄

寛政九年十一月、中村座。作曲者杵屋和吉。

二上り白波の寄する渚に世を渡る蟹の袂のそほ濡る、露の柳の腰蓑や、竹の目籠の数々を、数上ぐれば何々ぞ鮑榮螺小蛤踏む足許も可愛らし、晩に御座らば脊戸屋の口に、植ゑたかうじはよい辻占よ裏は生垣合とのさ殿が何處から来やつた、仙臺から罷つた、仙臺の田甫道はあじよや田の畔くるりと廻れば、澤の流にちよろゝにえ裾や小袂を濡した、濡れた仲なら誓文く波越さぬく此方のお國の松が見え候、さすが園生の出立榮、結ばぬ髪も美しき、花の顔見世花の顔見世。

○めりやす峰の松風

寛政九年十一月、桐座。作者取木五瓶。作曲者杵屋彌十郎。

佐野源左衛門澤村宗十郎、源左衛門妻瀬川菊之丞。

さつても水仙冬至梅、今咲出しの花籠に合とりなり輕き蝶鳥は、君に所縁の江戸の花、花の笑顔を引きや最負の花の袖、坂東市川優男、仇な中山初戀に、水を岩井の徒盛り、色盛り花の盛りを擔來る三下り先づ東は春なれば合大庾嶺の梅の花寄生竹に合鶯の、朝毎には來れども、逢はでぞ歸る住家にはけい、ほろ、の雉子の聲、南は夏の景色にて、池を洲濱に作りなし、蓬萊方丈瀛洲とて、三つの島をぞ築かれけり新殿、此方は西か秋の空面白露に初紅葉、纏付きたる蕙葛、逢はぬその夜は文柿紅葉、逢うて恨を岩蓮華、來れば焦る、しがなくさ兵衛、外に眺めもあらざと、心で心ハ雲草、風の芭蕉に私や招かれて、思へば憎い男郎花、秋の空ではないかいな、詞、北は元より眞面目にて山嶽峩々と聳えたり、何時も常磐木色變へず、木々の花咲く六の花、四季を一目に見渡せば、類新の殿造り、鼓唄、正月は注連飾り、門には門松脊戸には脊戸松、客を待つ合竹に當りし突羽子を、盆で受けたよ禮の供、つくどんつくどんがらり、何時もどんどとおめでたや、手先づ遮る手毬唄、三上り一つとサア

三下り世は定めなの、習ひかや、頼みに思ふ同胞の別れ路の、辛氣まことに事絶えて合二世も三世も白雪の、問へど答へぬ亡き魂の合いつそ共にと消えもせで、こがれこがる、身の行方合つまよくと呼べども峰の、峰の松風音ばかり。

○めりやす結び文

寛政十年正月、桐座。作者並木五瓶。作曲者杵屋彌十郎。

玉屋新兵衛市川八百藏、三國小女郎瀬川菊之丞。

三下り梅にほれ櫻にうつる青柳の、そのいとしさに合いく夜の夢を結び文合元さままるる御存じと、思ひまらせゆべくの、わけの盃いろ見えて合ながしんきの種ぢややら、任せぬ首尾の思はくも、又の御見とまつし

○瑠璃邯鄲四季の花道

寛政十年三月、中村座。作者龜玉。作曲者杵屋和吉。

本園子花召せ、四季の花召せ合野暮な風は避けて吹け、何時も木華開耶姫、情、南ふ桃の媚、澤邊の眞菰水増して、何れが何れ花菖蒲、よう似たく、黄菊、籬弟草、

ノヤアノヤ人して御見を待明し、二つ二人で三つ蒲團、嘘ないわいな色ぢやもの、四つとサアノヤアノヤ引四つ打てば此方の幕、五つ何時もの色一座合六つ合無理なるひざり言、嘘ないわいな色ぢやもの、七つサアノヤアノヤ七つ何でもない事を、八つ遣手の目を忍び、九つ格子で話します、嘘ないわいな色ぢやもの、十に問はれぬ花競べ、實に邯鄲の假枕、花の袂を翻し、夜晝となき樂の、堺町喜見城とぞ祝しける。

○めりやすゆかりの月

寛政十年三月、桐座。作曲者杵屋彌十郎。藤屋伊左衛門澤

村宗十郎。

本園子、うしと見し流れの昔なつかしや合仙十郎かはい男にあふさかの關よりつらい世の習ひ合手裏思はぬ人に堰きとめられて今は野澤の一つ水合仙すまぬ心の千中にもしばし三人すむはゆかりの月の影合忍びてうつす窓の内、廣い世界に住みながら合狭う樂しむ誠と誠、こんなえにしが唐にもあるか、花咲く里の春ならば、雨もかをりて名や立たん。

○めりやす四つの袖

寛政十年春、桐座。作曲者杵屋彌十郎。夕霧瀬川菊之丞、伊左衛門澤村宗十郎。

三下り「うき中の習ひと知らばかくばかり 合花の夕の契り
となるも、始めの情今の仇 合いつそ逢はねばかうした事
も、ほんにあるまいよしなやつらや合あだに暮せし月日
の程も、いはで思ひの涙の雨に、いとど朽ちなん四つの
袖。

○玉兔難波産

寛政十年七月、森田座。作曲者藤間勘左衛門。

「賑ふ聲を擔ひ来る 合町々様方御最負の、聲を松蟲名取
蟲、實に市川や三五の月と 合稻子鈴蟲黄金蟲 合色香音に
鳴く品々を、召せや召せく 蟲の数々 伊三郎鼓眼「病葉に
問ふべき人は須磨明石 合寄る白波に荒男波、どうと寄せ
てはさらくさつと「袖や小棲の濡れたも嬉し、合濡り
よならく 合戀に和ぐ和ぐ目許合可愛らしさになア、愛
しらし味やらしやんすな 嬬らしやんすな、憎らしい合人

結び 合末の約束今日掛初めて、又の御見も通ふ神合見抜
いて立てる仲ぢやもの、嬉しからうぢやないかいなしを
らしや「三升見て三がの津での見ものとして、棧敷の中の
間切落し、ぎつしり合一杯我先に合入るや入来る三升ま
すく。

○めりやす鴛鴦名姓

寛政十一年十一月、市村座。作曲者近松門喬。作曲者杵屋彌
十郎。源左衛門女房白妙瀬川菊之丞。

三下り「鴛鴦といふ深い妹脊の水に棲む、心は更にすみか
ねて合にこす涙や袖屏風合見せじと隠す無理酒の、氣を
かりそめの二世の縁、切つて一世の放れぎは合「思ひに
沈む片羽鳥、なく音も波にうき身の末は、定めなき世の
ふちせ川。

○めりやす縁とえん

寛政十二年正月、市村座。作曲者近松門喬。作曲者杵屋彌十
郎。小いな瀬川菊之丞、半兵衛嵐雛助。

三下り「あだと見し合人目まがきの梅の花 合たが折りそめ

目近江の浦にさへ女波 合男波の女夫仲伊三郎「假令片手で
なけりやとて合我唐崎へほんにまあ、言はれうものか恥
しや合比良でもちよつと三井寺の、堅い石山砕かれて、
瀬田いの粟津は今の今の思はあるまいものを「移る矢走
の渡し船、寄邊を辿る風情なり 鼓眼「秋到つて世塵を拭
ふ、既に互寒の月に近し「桂の露に濡初めて、蟲さへ
情あればにや合戀の重荷に夫をのみ合嫉む心の螻蛄や、
かの合七夕の契にも、唐珍しき戀衣 合己が營む織姫の、
砧の拍子「折しも風に誘はれ「草葉に蟲の音を添へ「拍
子を揃へて廻るや砧、くるやく「砧の拍子、くるりく
「打つや砧の音も冴えて二上り「君様を君待つ時やよのん
やとさのさ、せいく「じよなめきやれ「いきれ強くも袖
引いて合くれよ合背戸が嫌ならよのんやとさのさせいせ
いじよなめきやれ合初夜撞く合圖にべつたりえ、しつか
りえ合べつたりしつかりべたつきやれ恥しや「花や紅葉
に戯れ遊ぶ誠にさ 合伊達や浮氣の細絲の、細絲のさ花野
にてふはくしどけなや伊三郎「これを來て見よかしのえ
オンド「身にぞ知る、徒な戀路も姫百合の 合その思出の縁

て投入の合だいてねじめに八千代をこめて合「たまく
椿色ふかく、もらさぬ仲の身にそへて、かたみ意見の入
れほくろ。

○春の雪

寛政十二年正月、市村座。作曲者杵屋彌十郎。

本調子「二世までと合誓ひし花もあだ嵐、散りて返らぬ人
の身の、姿に積る白無垢も合消えて行方や春の雪合「保
ちかねたる涙の雨の、降りみ降らすみ定めなき、雪の浮
世や蝶小蝶。

○めりやす心の筆

寛政十二年三月、中村座。作曲者杵屋正次郎。

二上り「思ふ事、思はぬも亦憂き世なれ、胸に數書く心の
筆も、墨も涙に薄曇り合「月さへ分かぬ朧影、せめて一
聲訪れて、啼け時鳥我も友鳥。

○めりやす夏の夕

寛政十二年閏四月、市村座。作曲者近松門喬。作曲者杵屋彌
十郎。

三下り「世の中の合心の外に又ひとつ合道の曇りや卯の雪の、消ゆる思ひは積りて夜半の、かねて頼みし文のつてかへりおほせの一言を、待ちてあかせば合あけ遠き合空に初音の山時鳥、さらに嬉しき合圖の戸ほそ合叩くは合たそやいつも来る合水鶏のはしに夢さへそとる合二つ枕の合仇ならでその情こそ浅からぬ、浅澤もとのかほよ花、手折ればぬる、縁ごと「誓結ぶの神ならで、粹な菩薩の合導きに、つい假そめの中垣も、とけて契りの男ゆび。

○もつれては 相の山

寛政十二年七月、市村座。作曲者杵屋彌十郎。

二上り「咲くからに合散るとはかねて青柳の合櫛笥鏡臺取揃へ、鏡にうつる合佛の合昨日にははる浅瀬川合露の命毛水櫛の浮世の義理や蕪かづら、つけの小櫛のつれなさつらさ、恨みがちなる秋の空相の山「諸行無常の鐘の聲、寂滅爲樂と響けども、聞いて驚く人もなし合野邊よりあなたの友としては、血脈一つに數珠一連「後夜の鐘を聞く

屋總治。

本調子「逝く水に流れの苦界果てしなく合いとしかはいの明暮も、うつらくと思ひ寝の、つい假そめの女夫ごと合末はどうなと仇枕、よその手にはをつくばねの、するぞ積りてぐち合ぐちとなる。

○めりやす 唄 えにしの橋立

寛政十二年十一月、河原崎座。作曲者杵屋六左衛門。

二上り「大江山合生野の道の合遠ければ合まだふみも見す天の橋立、端なくも合別れ程經し垂乳根は、其方の空よ雁がねの、聲もなつかし音信の合よすが知られぬ世の中ぞ憂き、世の中ぞ憂き。

○三代扇手 每梅

寛政十二年十一月、河原崎座。作曲者杵屋六左衛門。

「春毎に梅や櫻の彩れば可愛らし、薫りもやせんと人心合流の水に誘れて合浮氣に響く廓の鐘、聞けば合心も澄めやらぬ「宵の口説に無理な私語、言はず語らぬ胸迫り、豫て合退かうと思つてゐさんす心かえ、さうかいなく、

時は是生滅法と響くなり、これが冥途の友となる。

○めりやす 蕪紅葉

寛政十二年十一月、中村座。作者並木五瓶。作曲者杵屋佐吉。

「降りまさる、時雨の袖や木枯の、今日を限りの言の葉に、結ぶ妹脊の蕪錦、色に出にけり面はゆき、戀の中垣隔てなき。

○めりやす 氷面鏡

寛政十二年十一月、市村座。作者近松門喬。作曲者錦屋總治。

三下り「さそひゆく合水に流れて浮き鳥の疇定めぬあだ夢の合結ぶとすれど情なや、思はぬ縁のつい假枕「とけて亂れし黒髪の、もつれもつる、心のたけを、言はんとすれど今更に、つとの後れのばらくと合涙の時雨臺らする、浅き瀬川の氷面鏡。

○めりやす 仇 枕

寛政十二年十一月、市村座。作者奈川七五三助。作曲者錦

悪性男の面憎や、さうさうかえく「紅葉くを踏分けて鳴く鹿の、妻を慕うてるわいな文の合便に焦れてるさんす心かえ、ほんかいな、實かいな合惚れた女子の愚痴ぢやもの、なう好かんく似たりや似たり親子草合よく讓葉の年時に、叶ふや三舛めでたき。

○飛鳥 川

享和元年正月、市村座。作者奈川七五三助。作曲者錦屋忍

三下り「うき名を流す堀江川、流れて淀む捨小舟合つながらぬ縁は是非もなや合戀路の鬼か丹波屋のつまに通ひしかねごとの合昨日は今日の飛鳥川、いたづら髪にとめ伽羅の、あさき薫りや香具屋の、花となりしと聞くよりも合涙の時雨古手屋の合仇と悋氣をとき分けて、薄き契りや八郎兵衛が、妬みの剣とき立てし、われと身を割く鰻谷、親の諫めと世のそしり、耳を突抜く入相の合鐘諸共に忍び出で、秋風寒く身にしむも、今の恨みは長堀と、人目を包む頬被、にくや腹立彌兵衛を、今宵の内にやつきり

きりくいな、切殺し合浮世の夢も鮫鞘の合鯉口くつろけ
落差し、はや初夜の鐘指折れば、一つ合二つや三つや四
つ、四つ橋四筋四つ辻を合ふきや濱邊をはまべさし、あ
がりつおりつ幾度か、やもめ鳥のうろくと、啼くは冥
途の鳥かえ。

○めりやす沖の石

享和元年春、市村座。作者杵屋扇頂。

二上り「さり」とも思ひし事の今更に、春の氷のとけかね
て合解けぬ言葉の後や先合含む涙にくり返し合方「いふに
言はれぬ硯の海の乾く間もなき合沖の石、よるべ定めぬ
捨小舟。

○めりやす竹の露

享和元年七月、市村座。作者近松門喬。作曲者杵屋彌十郎。

二上り「思ひきや、夢の浮世に見る夢か、浮世の夢にうき
事を見るが浮世の習ひにて合ありし昔の弓張りの月こ
え合日越え一年を、數へて暮す身の行方「水の流れに
くらべて見れば、どちらが深い淺ましや合その日あした

の煙さへ、細き色音の合竹の露、のほりつめては今更に
なんと心の置き所合なせに浮世が夢ならば、あだし思ひ
のさめぬものかは。

○めりやす冬の月

享和元年十一月、市村座。作者近松門喬。作曲者杵屋彌十
郎。

二上り「雪や空、散りてはもとの深山木の合花と見るかの
景色さへ合さそふ風の通ふらん合思へば夢の浮世にて合積
りしうきも朝にさめて、夕はかなき冬の月。

○めりやすまはし枕

享和二年三月、市村座。作者福森久助。作曲者杵屋彌十郎。

「よしや世の、義理に心も春雨の合晴れよとすれどまた
曇る、思案のほかと夕月に、愚痴と未練をくり返すまに
小夜更けて合方「あだな八つのかねごと、まはし枕に
かこつ憂き戀。

○めりやす葛裏葉

享和二年八月、市村座。作者並木五瓶。作曲者杵屋彌十郎。
葛の葉狐瀬川路考。

三上り「野邊に咲く千草にちの思ひぐさ合名にしら露の
おき合別れにしきぬくの合鶏はものかは事とはん又の
逢ふ瀬は定めなき合方「心はくもる月は澄む合しのぶ涙に
しぐれして、身をかこちたる袖袂。

○めりやす雪ぞら

享和二年十一月、市村座。作者福森久助。作曲者杵屋彌十
郎。

三上り「折ふしの空も合あやなき雪明り合晴れぬ思ひは女
子氣の、ぐちと心は二面合方「この手がしはに身はなら
の葉の、うすい縁とは何とせう、どうせうぞいな、袖も
かはかぬ沖の石。

○三重霞嬉敷顔鳥

享和三年正月、中村座。作者櫻田左交。作曲者杵屋正次郎
通稱「三重霞の傀儡師」。富本齋宮太夫とのかけ合。朝比奈
坂東三津五郎、五郎尾上榮三郎、少將中山富三郎。

淨瑠璃さる程に時致十八年の天津風、そうくとして自
ら、雨にきくなる少將が、素顔も雪か化粧坂富三郎出 歌「
見みえそめにしその日より、言はで思ひの十寸鏡、櫛笥の
露にうつろはぬ心が花のかほよ鳥富三郎セリフ有リテ 淨ろり「か
いる處へ朝比奈が修行のたいぬ傀儡師三津五郎出 淨ろり「お
はもじやまだ紅筆も初霞、未申ぐま巳午の間、向へばよ
ろづ義盛が、臍つかぶりの大さはひ、こゝまでのたくり
木偶まはし、お許しうけてやつてくりよ合方歌「すいてふ
ゑいちやく、すいやいく、みんちゃんおてきやん、
そふはらぎやんそふ、花が見たくばお江戸へござれ、上
野飛鳥の花盛り、心ばかりで拍子さへ、阿波の鳴戸も何
くれと、小歌をこめて箱つゝみ、手越の里へと浮かれ來
る此間狂言あつて 三津五郎 淨ろり「かけまくも日本堤を天照か
拍子舞になる エヘン「 淨ろり「いはくす舟に突出しの、まだ
よふ神代の其昔合方三津五郎「いはくす舟に突出しの、まだ
おいらんは若惠比壽、ごんすやんすも白幣、間夫の男にあ
をにぎて、正月三日の揚屋入 淨ろり「第三回目の事かとよ
栗「しかもその日は全盛な事代主、惣仕舞神も色にはふ
かみ見草、廿日ながして惠比壽講 歌「夜も蛭子の床の内

三歳足立ち給はねば 三つ天の岩戸の迎ひ酒、西の身あがり流連は、粹なおさんちや、ないかいな 三津二階もとんく、内證もどんぐりの辻子宮川町 三つ恵比壽の辻子祇園から 三つかけて頼む三津夕たすき 結んで解いて釣竿の、糸より長き年のうち、羨しさに鶴鶴もかたい顔して浪枕、船乗りぞめも吉原や 三津おせやれをのこ合二挺立三挺立 歌見附箱崎くづれ橋 此間拍子事三津椎の木ぢやはらつほ、歌半分ぢやしつちやつほ合ゆたのたゆたにこがれ行く、戀は曲者く 三津三人持ちし子寶の、惣領息子は太磯へ、通ふ千鳥の初紋日暮るり 三津まだとりかぬる乙の雪、もどかしらしいぢやないかいな、箱の内外の目を忍び、二人から子に囁いて、廻し座敷を戀の闇 歌小倉の野邊の一本薄、いつか穂に出て尾花とならば、露が妬まんア、なんとしよ暮るり 三津小倉の野邊の恵比壽紙文に嬉しき様まるる、女子心を汲みもせて、ほんにいらへも茶種さへ、言はぬ色香の憎らしや 三つ恵比壽三郎左衛門祐經、歌いつか神樂をうつゝにも、我が念力の通れとて、三つ羽の征矢かつる柏 堅き

巖に手束弓三津これ兄さん馬鹿らしいぞよ 三つ心の内を言はぬが花 歌十日夷のお宮には、鍵玉にたばね鬘斗、はぜ袋にさい槌、立烏帽子入升俵、大判小判笹をかついで千鳥足暮るり 三津見れば見る程よい花嫁の、心よさそなみ様ぢや、心よさそに引かされて、今宵くるわの敷ぞめや 歌綾が千反錦が千反、錦欄緞子紗綾や縮緬くくめん目出たい鯛を此髭が、釣つたる鯛を見さいなだモサくく 暮るり 三津あれ曉の明星が、ちらりくく 西の宮歌 三津月もなさけに傾きて暮るり 三津はや東明の朝迎ひ 此間セリフ 三津 三つとめたくくとめたわいなア 歌とめてとめ木のナアきぬくくに、君が禿の袖袂合とめて梢の朝の雪、清見が關に三保の月、ちよつと湊へかゝり舟合方草摺引ありて 面白や暮るり 三津折から逃げ来る裸背馬、時致得たりと引寄せて、乗鎮めたる馬上の術、手頃の大根千里の鞭、曾我中村へと急ぎしは、ゆ、しかりける次第なり。

○めりやすぬれ翅

享和三年二月、中村座。作曲者杵屋彦次郎。おちよ中山富

三郎、半兵衛坂東三津五郎。

三つ世の義理と徒には書かじ男文字、今宵限りと摺る墨も、煙の末と消えがてに、涙零れて筆の海合妹脊の縁深かれと、祈らぬもなき神無月、内外の人目忍ばしく、軒に時雨の濡れ翼。

○琴 唄あを葉

享和三年十一月、市村座。作曲者錦屋總治。

三下りこは情なの所業やな合さのみ人にはつらかりそ、悲みの涙、眼に遮りて、西も東も白波の、寄るべ定めぬうたかたの、いつそ泡とも消えもせて、こがれこがる、身の行方合青葉くと呼べとも濱の濱の松風音ばかり、松風濱の松風音ばかり、そよとばかりの便もがなと、恨み歎くぞあはれなり。

○めりやす雪

文化元年三月、河原崎座。作曲者杵屋淺吉。

本調子花も雪も拂へば清き袂かな合ほんに昔の事ならん凍る衾に鳴く音もさぞな、さなきだに心も遠き夜半の鐘

三つ聞くも淋しき一人寝の枕に響く霞の音も、もしやといつそせきかねて合戀しき人に罪深く、捨てた浮世の山葛

○琴 唄山の端

文化元年十一月、市村座。作曲者杵屋和吉。

二上りおきそふる霜の朝の日の色は、梢に残る薄紅葉合時雨する夜の笹竹は、戀しき人の音づれか合つたより待ち得し玉章の、雁がねさむき冬の月、山の端もる、夕まぐれ、けに心ある友に見せばや。

○鶯の巢の時鳥の俤 法花四季臺

文化二年三月、中村座。作者櫻田治助。作曲者杵屋六左衛門。二世路考三十三回忌追善としての三世瀬川路考四季の所作事。

廬 生

鼓唄菊は東籬の許よりも、閨秀の袖や薫るらん二上り 三つとけしなき君が姿もねむの花合一聲雁の音づれて、たが玉章の返り言、しんぞ嬉しと繰返し、合櫻に待ちて香に匂ふ、露の情の男もじよめば廬生の夢心 昨日はるが

き合花結び合今宵は月の入る方も、物ぞと聞くはおしま
づき合星をひたして水葦の、跡とふ法の手向ぐさ合花
燈の夕白無垢の、雪も櫛子に積りては、天の醬の二日酔
四季の臺も邯鄲の、枕に暫し夢結ぶ。

(春) 鹿島踊

三下り一晩の寝酒にやな、二合半買うてたもいの合俺らも
いしごきでぐいと一杯しよんがえ合さても見事にサよう
咲いた合花の春來べいとて常陸の國から諸國諸在所へ、
ヤレくナさてくナ、神のお告げがござりや申す、お
ぢやりや申すとなア一心うきすの宮雀一雨の宮にも通は
んせ、風の宮にも通はんせ、月讀日和下駄がけで合通ふ
十二のはしたなく合めがめをがめの乾く間も内外清淨ぞ
つこんそ様に合要石合ゆるがぬ私を疑ふか、男一人を守
らせ給へ、守らせ給ふ様が託宣一御代はめでたのナア、
ナア、エこれわいな一御代はめでたのさんさ若松様よ一
おやもさく一鹿島浦にはナア、ナア、エこれわいな一
鹿島浦には寶木船がつんついた、おつやがとつ様抱いた
ら放すな、辛抱どころだおやもさく一今年や世がよう

合いかにぢらすが癖ぢやとて、無理な口説に夜を明かす、
此のまあ枕に何なる、鶏と鐘との心なき一賤が伏屋で
絲よるよりも、君の心が取りにくい、さりと合實に誠
と思はんせ一縷子の袴のひだ取るよりも、主の心が取り
にくいさりと合實に誠と思はんせ一しやほんにえ一し
どけなりふり風薫る。

(秋) 黒木賣

(冬) 座頭

一折添へて秋の眺めや花紅葉合我も思のあればこそ、君
ゆるほんにやせの里、嵯峨や芹生の野べの色一賤がやう
なる賤しき身にも、朝な夕なに物思ひ合戀の重荷はさり
とはつらや、牛の綱ひく男七夕、空に知られぬ妹背事、
かはひノかはんせ、これなう戀ざかり一位取るとて都
をさして、座頭の坊く、合ついでながらに名所や古跡搜
り歩いて合寒の師走も合厭はぬ氣丈、杖を力にそれさこ
れさあぶない所も合合點だ合どこぞの拍子でけつまつい
てあ痛しこ合心よさそな草枕合二人ねんくねがちに引
締めて合まこと明石の浦ならば、我にも見せよ人丸様よ、

て、穂に穂がさいて、升にあまつて箕ではかるく、お
かたがおいどがでつかくなつたと、こゑも高まの腹鼓一
鳴るかならぬか、ひいても見やれ合しめてよいのは縁結
び、はづかしうござる合おとましようござる、たび事お茶
たて参らしよ、参りや腰膝くたびれ申す、こちはお許し
やれ、そべりや申す一すしめ給うて、女子の姿は春の
花によそへて。

(夏) 螢狩

一春過ぎて夏來にけらし合青柳の合水にうつれば縹帯
娘盛りの裾もほらく、ほの字嬉しき螢狩一袂すしき
うら若葉一笑顔こほれて卵の花も一白齒愛らし可愛らし
一たがわけ島田太郎がけ、エ、有難や合夕闇に思ひ餘り
て空高く、ちらくちら合くるり合ひらくくるりく
と舞遊ぶ、ちりくばつと飛ぶ螢、團扇で追うて行く道
に、三つ四つ袖に露の玉、水に流れて星のかけ一戀に此
の身がほたるなら合よしやこがれてのきよともまよ、
男ゆるぢやと思へばほんに、泣かでこがれてくよくと
合雨持つ空の物思ひ顔、千度待たせて初音を惜しむ時鳥

ほんに見たさは限りなや一八瀬や小原の片山里に、沈や
麝香は持たねども、匂うて來るは炷物合小原木くかは
ひく黒木召されよ、てうりやうふりやう、ひやうるり
る、りやうふやらり、ひやらるるりてう、ふりやう合麻
の中なるひと蓬くよれてかゝるも縁で候もの、親ぢや
子ぢやとて、なうさのみに人なしめし候、しばしイむ下
紅葉三下り一立てる錦木綾の竹合あやとる拍子砧の音の合
情あるなら小夜更けてござんせく合枕並べて語ろぞ
え、さいな合思はく様の空見ればく合一共に流る、我
が心一かざす袖笠紅葉笠もじ笠、人目恥かし目せき笠、
月には忍ぶ隠れ笠合百夜も通へ車がさ、ぐるりやくや
つくるくく車笠、江戸で名取りのつま折笠ぢやえ
く合四季の花笠見事さよ一瀬川帽子のほまれかな。

○琴村時雨

文化二年十一月、河原崎座。作者福森久助。作曲者錦屋總
治。
一よしや世の憂には袖の村時雨合晴れよとすれど又曇

る心の月に比べ来し一降りみ降らすみあゝもどかしの婆
婆世界合方一風に任する空事も思の雲を避けて木枯し。

○七字の花在姿繪

文化三年二月、中村座。作曲者杵屋六左衛門。四世岩井半
四郎七回忌追善として五世半四郎の演じたる七變化。その
中「小町」「手習子」「座頭」は「杜若七重の染衣」と同文。

田舎巫子

三下り一京で小原合下で大阪の綿屋町、江戸で龜井戸梓巫
子合締めつ緩めつ鈴振る手の内、なるかならぬかなりそ
な目許、三つ扇合戀の手管に手の筋も、始めて文の封じ
を開く。天の岩戸か大日如來、御手洗木船が漕いで來る
手振り袖振り鈴の音は、からり合ころりからりころり、こ
ろりくくくと草枕一十符の菅菰三布にも寝たが今は七
布に誰を寝させよえ、戀しうてくならぬ日とてはない
わいな合他所の女夫も面憎や、かく迄心盡せしに、思込
んだようかくえ合憎やく何處から來やつた何時の晩
け出はつた合其方を負うて藪の中、虎臥す野邊を越すと
ても、千里走れとはこれやヤア無理だえ恥しや三下り一お

龜やくお龜くと皆人毎に、文や玉章下んした、おち
やつびい何ぢやいな、お、さてくおちやつびい、親の
代からその名を繼いで、引手數多の身は遺瀨なや、彼方
向いちやにこく、此方向いちやにこく、やん面白や
合色廓通ひ合弾くや三味線の合見世清搔の互違ひの床の
内、水も汲んだり手鍋も提けましょが、しんぞ嬉しかろ
ぞいの世界の色もかうかいな、心浮れて面白や一戀には
千早故郷を、急ぐと見えしが忽ちに、形は消えて失せに
けり。

人麿

三下り一難有や持統文武の聖朝に仕へ、齡も長き和歌の徳
一眺め明石の朝霧に合千船百船眞帆片帆、島隠れ行く浦
千鳥合むらぐ千鳥亂れて遊ぶ合ちやくく友呼交
す磯千鳥ほのくの歌柳本人麿の名は有明の月も雲井に
映る小波。

草薙

一高音吹く笛を力に童の、野飼の牛の脊も弛む、春の若
草薙集め、しやんと乗つたる可愛らし一脊に目籠腰に鎌、

差してよいこのく、髪髪子戯れ遊べ、いつちくたつち
く鯛の目、お、やれさてやれさて、そんなわえちつちや
子持ちの母様を連れて参るか神様へ、さても神樂の面白
や一鳴るは夜明けの櫓のたん太鼓、今の目許はなる目許、
羯鼓銅拍子振鼓、さいなオ、それくさいな、今の目許
はなる目許、てんとおてんと愛しらし、さいなオ、それ
く、さいな子どもなや、今日は賑ふ初午詣り、お土産
給るか給るなら、踊ろおさへく喜笑顔の子寶三番、稚
な踊に浮れく、花に遊ば、なア吉野の山よ花の木蔭
に隠れん坊、駒どり目隠し、野邊の遊びは芽花抜こく
土筆、道草喰うて如月も、足の冷いに草履買うて給れ、お
ぢやれ友達ちやつとおぢやらば褒美を取しよ愛盛り一乙
よけさよ辰松いる松、たんだらいなごも打連れく、頑
是なく潔くこそ見えにけり。

○舞扇菌生梅

文化三年十一月、市村座。作曲者杵屋正次郎。通稱「舞扇」。

伊三郎鼓唄一媚くや今も昔の男舞、返すや袖の折もよく、

差手引手に自ら木調子一あの山見さい合この山見さい合曙
匂ふ紫の、引くよ霞も所縁とて、春告鳥も花に來て、謡
へや謡へ梅が枝伊三郎一春の心地や花の顔、見せつ見られ
つその日より、千代も逢瀬の姫小松伊三郎一三度もくどう
返す書、思の奥ぢやないかいな、逢うてふ夜半も言へば
えに、残る霜夜の鐘の聲、恨み勝ちなる時雨時、君に扇
の要の契合雪の白地は扇の縁、班女が閨の花扇、その檜
扇の翳の袖に、ひらりく、木々の錦や繪に書く山の櫻花、
散らぬ嬉しさ何時迄も、扇車のくるり品よく廻れ、末廣
かけて開く八千代の手馴れ草一青海波濤青海の、元より
鼓は波の音、打つなりく長地にも、結び柏の妹と春は、
色も變らぬ松と竹、枝を鳴さぬ御代なれや、萬歳とぞ舞
納む。

○濱松風戀歌

文化五年八月、中村座。作曲者杵屋六左衛門。通稱「濱松
風」。

謡一あはれ古を思出づれば三下り一懐しや船路長閑き海原

や四海の波を汲みて知る、見れば月こそ桶にあり、月は
一つ影は二つ満汐の、よるべ渚に立出でて、いざや汐を汲
まうよ、磯馴松の夕煙り、三年は此處に須磨の浦、寄せ
ては返す片男波、それは行平さんを合待明し波に漂ふ捨
小舟、漕がれて渡る甲斐もなし待つはつらいと皆おし
やんすけれどもナ、忍び待つ夜は樂みに、締めて寝松と二
葉の松の、仲に小松と思ひしに、それくくさうぢや
え、松に添寝の葛葛慕ふ心はナ、皆元通り今宵やいの
と文柿の本、首尾を見合せ逢ふ中臣の、最早夜半は權中
納言合様に別は坂の上の是則様への心中立、おうよい事
のくく恨み顔にてナ何にも言はず、壬生の忠岑氣を春
道の、つらき憂身に大江の千里、假令何方が水差さうと
も合深い縁は在原の業平様への心中立、おうよい事の
く、磯馴松の懐しや松に吹來る風も興じて、須磨の
高波烈しき夜半の山嵐、さらりくさらりく合關路
の鳥の聲々に、夢も跡なく夜も明けて、村雨と聞きしも
今朝見れば、松風ばかりや残らん、く。

枕にも、戀を知らさぬ肱枕 兩人 泣くな聲すな明の鳥、
夢ばし覺し給ふなよ花は吉野よ紅葉は龍田、春と秋と
の眺さへ、酒が中人するわいな、船は涼みよ雪見は野山、
夏と冬との樂みも、酒が中人をするわいな恥しや分上
る道は様々戀の山、煙比へん淺間山、積る恨みは富士の
雪、ほんに辛氣な床の山、きぬく山のつれなくも、又
の逢瀬を待乳山、齡久しき千歳山 不思議や紅葉の色見
えて、霜にも負けぬその風情、雪かあらぬかちらくく
く、袖や袂に飛向ふ、飛鳥の翔り手を盡し、花々しく
も深く謡ひ囃して舞納む。

○めりやす相の山

文化六年三月、森田座。作曲者杵屋六三郎。

三下り 諸行無常の鐘の聲、寂滅爲樂と響けども、聞いて
驚く人心、昨日も過ぎぬ今日暮れぬ 黄昏に顔が見難の
目せき笠、三筋四筋に相の山 後夜の鐘を撞く時は、是
生滅法と響くなり、これが冥途の友となる。

○めりやす紫

○琴 女夫が波

文化四年六月、市村座。作曲者杵屋巳太郎。
二上り 雨露霜雪の四つの時、花月さやけき西山に 合羅綾
のくものわだつ海、琴柱の岩に碎かる、合方 女夫が波
は十三の、いとし小波の 合うねる小夜風。

○色紅葉由縁狩衣

文化五年十一月、市村座。作曲者杵屋正次郎。
伊十郎鼓唄 面白や四方の景色も色々に、錦彩る夕時雨、
雲の文もる谷川に 風の架けたる 簞は、流れも敢へぬ
紅葉の、濡れてや袖に照添ふる、裳眩ゆきひも鏡、映るふ
姿今様に、今日顔見世の 出立榮 召され候へ、えい
鳥帽子の 數々やんれそれく、なんなう早く持て來い、え
い ぐいどうでもせ急がば廻れ、急くな急きやるなく
んく 車の、我ながら心浮れて來りける伊十郎 一河の流
を汲む酒を、いかでか見捨て給ふぞや 新編 玉の盃そこ
ひなく、解けて逢ふ夜は嬉しかろ、オ、嬉しかろぞいな、
假令人目に陸奥の伊十郎 忍ぶ振摺誰ぞとも、浮名厭うて

文化六年四月、市村座。作者松井幸三。作曲者杵屋正次郎。
三下り 紫の水に逢うたる杜若、開くや花の五丁町、露に
零る、この涙合 夏書の夢は合濃い墨と、ならぬ契の薄
墨か合夜目には讀めど讀めかぬる、合濡れて寝よとの合
時鳥、暫く空にも告げにけり。

○四季折々手 邯鄲園菊蝶

文化六年四月、中村座。作曲者杵屋六左衛門。二代目瀬川
路考三十七回忌追善として、四代目瀬川路考演ず。

傾 城

オキ歌 千歳 菊は東籬の許よりも、閨秀の袖やかをるらん
くとけしなき君が姿も合歡の花、一聲雁の音信れて合た
が玉章の返りごと、しんぞ嬉しと繰返しく 合櫻に待ち
て香に匂ふ、露の情の男文字、讀めば廬生の夢心 文が
やりたやあの君様へ、取りやちがへて餘の人にやるな、
花のかの様のさて、花のかの様の手に渡せ 華燈の夕白
無垢の、雪も櫃子に積りては、天のこんすの二日酔、四
季の臺も邯鄲の枕にしばし夢結ぶ。

(春) 子守

「いて解けて、今日明けそむる谷の戸に、まだ里なれぬ初戀の、聲は紛れぬ春の鶯合田舎なまりの可愛らし「いて結うたやら投島田、戀の盛りをつくね髪、肌にははれて一人で笑ふ、ほんによい兒の目に立つ程に、誰に惚れてか品やる目許、守よ子守と澤山さうに、言うて下んすな私やお子と、晩に添寝のく枕ころねん、ころねんころえ、ころねんころえせましか、負うた此の子と語ろぞえ「昨夜言うたこた皆ありや嘘か、むごいつれな男づら合此の頃野らで噂を聞けば、脊戸で何がなをかしけな山約束の口もんど合あそこのくねでは泣いたのと、人の噂をよく聞きめすならば、たまけやもう腹が辰巳の年の朝、門で羽根つく敷へ歌「一二三ごに三わたせば四のえ、五か殿御の逢ふせもあらば、六ねにときつく七んな八さよえ九つこゝで新枕、十で鐵漿つけ袖をとめ「梅は匂ひよ櫻は花よく、松は常磐の色は變らじ。

(夏) 女達

よしあしの喧嘩のあとの中直り、すまぬ出入も達引に、

に身を寄せて、清川はまる濡髪も、つい白柄神祇組、ぞめき仲間の女達、花やかなりしけしきかな。

秋 小 棧 重

「いとし可愛のそのかた様を、乗せて参るか百夜の車「殿御いとしゆて月とも思ふ秋の眺めの花車、牛の車のこととはに、誰をやさして引綱の、ひげやく、此の車、もとより長き黒髪の、亂れ心が結ほれて、氣違ちやと人さんが笑ふとまよくちちつともそつとも大事もない、わしや大事もないよさ、よれつもつれつ糸柳、心すずしき秋の風 鼓吹千鶴「吹きたゆむひまこそなけれ散る柳寝亂れ髪の面影「寺々の鐘つくやつめは憎や、まだ宵ながらごんくくと撞くにまた寝られぬ、雨の降る夜は一入ゆかし、待つ身は一入やるせなや、暫く佇む山の端に月が、葉越しのく月見ればくしばし曇りてまたさゆる、もはや迎ひのかご島田髻のよさ、あけの別れの合せ髪、宵の口説の茶笏髪 よう知ると思はんせ、く、様が来る夜は籬に佇み、別れを惜しむは明け行く鶏の音、くくくるわのしててん太鼓のどんがらいよこののほん

さらりと私に下さんせ「色の浮世になんほ色氣を去つたとて、腰に挿したる尺八の一節切とは曲がないではないかいな、さうだんべくくく「エ、戀をせうなら新町橋へ、難波名取の女子たち、都女郎のやさ姿、ちよつと下にももらひ度い、下にもたがどうぢやいな合わつちやお前にほの字と書いて、いうた言葉の投頭中、何あて事もない事をく、好いた殿御に嫌はれても、外の殿御は持つまいと、心で立てる女子達、袖褌引いて下んすな、謹上再拜こちやいやく、金平娘と言はれても、ぬるいせりふはせぬわいな、如何に女子の相手なればとて、柔てくるのは好かんえ、褌を取るとは大膽な、後抱とは宗旨が違つて迷惑、締めてやるとは口ばかり、誤らしやんすは知れた事、弱い相手であるわいな、肩ふりしんなりしやなくく、ぞめき歸りの夕涼み「花の東屋心も吉原、助六流の男伊達、色の意氣地にのほりつめ、京も難波のよしあしを、出入の湊黒船忠右衛門、磨き立てたる心の底は荒五郎、これは金神長五郎、只世の中は夢の市ぢやと判じ物喜兵衛に物はいやれども、みな雁金

ほ、戀も情もあるものを、誰か引かなん振の袖「打つや太鼓の拍子とりく、音もすみ渡り拍子揃へて一踊り「古へ聞けば染寺の、濁りにしまぬ蓮葉の合そめて五色のいと櫻、雲の合絶間の法の糸、中將姫を思ひ出す。それくさやつとや、心がらとぞうやつらや合「人の心のみぞつらやく、なんとしよか、どしよかいな「古へ聞けば筑紫潟、唐土船を慕ひゆく合女子心の磯の石、堅い約束松浦潟、その佐用姫を思出す、それくさやつとや、心がらこそうや辛や合人の心のみぞつらやく、何としよか、どしよかいな、女子心の一筋に「春ならで秋の野にひらめきて、蝶よ胡蝶よ、花に戯れ面白や、戀すてふく比翼連理のく羨し「花を目がけて合つがひ放れぬ、それ蝶胡蝶可愛らしや「露の情を合忘れやらぬがそれ戀ぢやもの、放れがたやの合彼方の方へはひらりくるりくこなたの方へはひらりくるりく合牡丹にあらで秋草に、寄せ集りては羽打交し扱も見事にちらくく、と見えつ隠れつ、花に胡蝶の舞の袖、戀の胡蝶の物狂ひ「わしは流れの憂き勤め、なうさてなう合實もえ誠も有

明の月、なうさてなう合眞晝中ぢやと言立つる合きつれ
てつれた仲の町、わが身ぢやない間違ぢや出て招くちよ
いくな、ア、さうぢやかえ、さらりと文をやらしやん
せく、今は昔と語り明かさん「我は武藏の野菊八重菊
たれ白菊の合盛り久しき花にこそあれ。

冬 山姥 (足曳の山姥)

「足曳の山高うして海近く、峰の梢は雪折れの、すはや
陽炎夕月の、影も臙に山姥が「歸るさの道惑はじと折る
枝も、八重降積る雪の足合水の流の音絶えて「眺は花に
優れども、今日の寒さを如何にせん「笠漏る雪を打拂ひ
合間ふ人のなき身の氷柱、暫し晴れ間を松の蔭、足曳の
合山路烈しき九十九折、辿りく「て来りける「柳は緑花
は紅の、色々さて人間に遊ぶ事、或時は山賤の樵路に
通ふ花の蔭、休む思ひに肩を貸し、足柄山へ分入りて、
又山神へ誓を立て、心盡して育てし我が子合敷へて見え
ば幾年か、松の緑も苔むして、細石巖となりしを見れども
變らぬ我が姿、只鬼女とのみ里人の、我を恐る、恥しさ
髪は荊棘を載きて、合我が子と共に力業合夫の菩提や我

が子の爲にのみ、よし足曳の山姥を慕ふ我が子を呼子鳥。
金太郎

「雪やこんく丹波のこ雪、こ雪集めてころくく雪
轉し合足の冷たいに草履買うて給れく、あらくれない
のがいとしをらしや合「おのが様々餓の上にひよつく
り雄鳥さ、岩根の藤で智慧の輪の、猿が杵持つ大山の、
白でつくくでんく太鼓、不倒翁振鼓、羯鼓拍子の
音も潔や、つんとく跡なが先へ、ちやつとくおぢ
やいの、處馴れたる悪戯や「俺が住家は足柄の山奥で
んぐりく杉の木の、木の根を枕にころり寝もし寝まえ
猪でも熊でも来たならば、引抱いてえらい目に遭はそえ
船となり帆となる人の氣心知りやせまい、冬の鶯言ひた
い事も、ほうくとはかり稻負せとり持つ顔で呼ぶ鳥、そ
の手をびつたり水遊び、思や異なもの空なものよ、味な所
に世界がありて、嬉しい團栗しやくなき杉の木面白や「
乳房離れしその日より、力試しのありやくく、こりや
くく松を引合ふその内に、中よりほつき捻切りしは
目覚しや「暇申して歸る山の、山は元山水は元水塵積り

て山姥となれり、春は花咲き紅葉も色濃き、夏かと思へ
ば時雨して、四季折々を眺めつ、萬木千草も一時に、
白妙の面白やく、鬼女が有様見るやくと、峰を駆り
谷に響きて、今迄此處にあるぞと見えしが、山又山に山
廻りしてく、行方
も知れずなりにけ
り。

○美面より

文化六年十一月、
市村座。作者櫻田
左交。作曲者杵屋
正次郎。

鼓唄「姿の花の香に
迷ふ三下り「姿の花の
香に迷ふ、浮氣ぞ戀
の一盛り、美面よりは心の色や誠なれ、見やしやんせ、
梅の笑顔も美しい、仇な櫻に皆様が、つい移り氣の八
重一重、咲いてゐる時や明日もと云うて、逢はぬ夜の間



に何處へやら、誘ふ嵐に散るわいの伊十郎「松の契は何時
とても、霜がかゝると深雪が降りよと、操涼しく立通し
「變らぬ色の深緑「とても懸路にな遊ば、吉原猪牙で押
させよ、四つ手で飛ほか合木幡の里ぢやなけれども、風
味馬道召せやれく
合家苞によい世の中
も人は美面より。

○めりやす八重やまぶき

文化七年三月、中村
座。作曲者杵屋六三
郎。

「春の夜の闇は文な
しそれかとよ、香や
は隠る、梅の花、散れど香はなほ残る、袂に伽羅の煙り
草きつく惜めどその甲斐も、亡き魂よばひほんにまあ
合方柳は緑紅の花を見捨てて歸る雁がね。

○めりやす木の下やみ

文化七年五月、中村座。作曲者杵屋六左衛門。

二上り「憂しや只世は偽の夢なれや、せめて寢覺を垂乳女に、哀催す時鳥鳴く音に變る年月もなし。ア、何とせう「いへばへに言はねば我を問ふ人も、もしやと此處へはるく」と、のりのみち路に休ひぬ。

○奉掛色浮世圖畫 (黒木寛)

文化七年八月、中村座。作曲者杵屋六左衛門。

三下り「私が在所は風雅に出で、むくつけにねまるべいと、語ふならば嬉し甘露の桃や柿がぶらさがり、九十九匹の意地悪猿に、追立てられても笑はれても、ねごんす惚れたが性根ぢやえ、黒木買はんせ黒木召せ合方千蔵「戀には八瀬の里育ち、軒の簾のゆかしさは、玉だれ髪を取上げて、誰に見しよと夕化粧三郎「私が容貌は譽めもせで、姿がよいの生際が、宵の口説に無理なひざり言千蔵「私程優れた女子を嫌ふお前の氣が知れぬ」三郎「エ、女子冥利が盡きようぞえ 四人「機嫌直して君と我

の歌右衛門。

○きのふ見た目にめし七枚續花の姿繪

文化八年三月、市村座。作者櫻田治助。作曲者杵屋正次郎。坂東三津五郎七變化所作事。

猿廻し

二上り「さてもめでたやめでたやな合お猿も共に脊に負うたる猿廻し、御代の榮の祝ひ唄、黄金樹にて米量る、人も計りて山々を三つ大の紋夜の泊は何處が泊ぞ、室か明石か何處である、室が泊の花の顔、浮れく来て来りけり、土手の景色も今更に、人目を包む頼冠り、行かんとするをセリ「これはア「はまり易きは粹の淵、深いものぞと思へば胸も、セリ「エ畜生め伊十郎「ほんに心の遺瀨なや言四郎「今はこの身に愛想もこそも、月夜の空や鳴く鳥四人「辛氣らしいぢやかいかいな、先駆けも兄と譬へん梅の花、氣まよ、育の枝振さへも合笑ひ上戸に紛らせて、仇な微風留木の香合エ、泊らんせ伊十郎「お猿はめでたやな「婿入姿ものつしりとく「セリ「さりととはく「のほよほよほよほえあるかいな、さんな又あるかいな「嫁御の晝寝も

共に落ちよもの我が里へ「とかく思ふ様になア浮世がならば、可愛い殿御と野の末迄も、絲も繰ります機織蟲よ此間「誰を松蟲焦れてすだく、つゞれさせてふ馬追蟲の、合方「長き終夜を泣明すく、草葉にすたぐ鈴蟲の、振るや古野の「三重合方「「振れやれお振りやれ剽輕男の、又とないく「一代奴「合ありやんりやく「合こりやんりやく「何でもせ合「國で評判男山合方「お國界の松の木の下り枝危い「合お腰を屈めてく「合振りやれく、その月雪や花の槍、見事にさ合開いてさ合見事に開いた振もよし引かば靡かん松の木越しよ振れさ合振れさ振れく「お先揃へて殿は所知入り合方「駄目な事ばし言はしやる合明日は關東さへ罷るべいちやなやれサテナ、主さ別ちやなア伊勢路へあんちうちくだ、ぶん抜きやるさ、池の泥龜ならむんぐるべいと、ハアのほよほよほえ、あいかすか女郎衆の旅立ちさ、主さ別れちやア伊勢路へあんちうちくだ、ぶんぬきやるさア、池のどん龜ならむんぐるべいと、ハアサテ實だんべい「掛奉る實前に、名筆名畫の徳は目前、今日の前に合外に中村人

ころりとせい、ヤアハアえいあろかいな、さんな又あろかいな、起きたら互に抱付きやれ、オ、それで機嫌が直つたぞ、キヤツく「えいあろかいな、さんな又あろかいな、くるりと翻つて立つたりな、立つてくれこれれく「く「く「立たしやませ、序に日和を見て給もれ、よい女房ぢやにく、ハアのほよほよほえ、あろかいな、さんな又あろかいな、合日和を見たらば落ちてたもく「お猿はめでたやな四人「心の駒も引留めお猿めでたや「潔や、意馬心猿もかくやらん。

老女

本調子「九重の花の昔か夕の月か合雲井に残る面影も散りほひ添ふる袖の露伊十郎三下り「極樂の内ならばこそ悪しからめ合この世はかりの夢の花合四人「現に散りて百年に合一年足らぬ九十九髪、かゝる思のあればにや、羅綾の袂引替へて、苦に垢付ける破れ衣伊十郎「憂き節繁き吳竹の吉四郎「杖に縋りてよろくと、立出で見れば逢坂の、關の清水に影映る、老の姿はあさましや、哀れ果敢なき身の行方伊十郎鼓唄「うつし心と世の人の、何とよ我を合狂

よ合思ふ方へと入船なれや、エイ〜〜〜エ、〜〜〜
さうぢやえ〜忍ぶその夜はナ杖突きの字がおきらひ
か、杖突きの字が嫌ならば探りながらもお寝間の後か
ら行こかいな、サアサ行こかいな、それでもヤハ、戀に
や目のない通り者と譽められた、野暮で浮世が渡られよ
か、それもさうかいな〜〜、氣も軽々と見えにけり
〜浮れ者ぢやと悪戯するな〜、悪戯しやると浮名の種
よ〜合止しやれ離しやれおじやれ許しやれ。

業 平

三下り〜九重の都の空を立出でて、野にも山にも春霞合月
も朧の旅路かな、古跡に暫し轉寝の、歌枕せん名所や〜
唐衣着つ、馴れにし妻しあれば、遙々來ぬる在原の態も
形も風俗も、一際目立つ透額、伊勢や尾張の海面に、遠
山松の色こそ勝れ藤波の、名に打寄する津の國の、鼓が
瀧を打見れば、下にはたんほゝの音も澄渡り〜元より鼓
は波の音、千里も通ふさつさ小波女波男波が打寄せ〜、
青海立つ波高波四海波風どう〜、磯打つ波に揺れ
揉れて、さらり〜さらり〜、打つや鼓の拍子に連

の葉のよにこん濃かに、弾いて唄ふや獅子の曲〜向ひ小
山の紫竹竹枝節揃へて切を細かに十七か、室の小口に晝
寝して、花の盛りを夢に見て候〜見渡せば〜、西も東
も花の顔何れ賑ふ人の山〜打寄する女波男波の絶間
なく、逆巻く水の面白や〜晒す細布手にくる〜と
〜いざや歸らん己が住家へ。

橋 辨 慶

三下り〜三塔一の荒法師、その名は四方に隠れなき、七つ道
具を飾立て、武藏坊辨慶は五條の橋桁踏鳴らし、ゆらり
〜と出でたるは、ちと〜自慢で我が身ながらもぞつ
とした、鬼神よりも怖しや、避けぬものこそなかりけり
〜先づ宵闇の暗紛れ、もしや總嫁の口明に、そつと後で
袖を引き、コレ申し遊ばんせ、一切り遊んでお出でんか、
お僧様え、すはや痴者ござんなれ、これ程の小童合ひつ
てうともひつてうべ、擔ぐとも擔ぐべい、才槌で打つて
くれよ、鐵棒で毆立て、鋸で引切るべい、熊手で搔寄せ
よく〜見れば女子、我は出家、夜陰の見參、笑止氣の
毒、何と所作も荒けなき、辨慶も心浮かれて扇を開き〜や

れて面白や〜名残は盡きじと夕煙、遠村里へと急がばや、
露けき袖を打拂ひ麓をさして入りにけり。

越後獅子

三下り〜打つや太鼓の音も澄渡り、角兵衛〜と招かれて、
居ながら見する石橋の、浮世を渡る風雅者、謠ふも舞ふ
も囃すのも、一人旅寝の草枕、俺が女傍を譽めるぢやな
いが、飯も炊いたり水仕事、麻よる度の樂みを、一人笑み
して來りける〜越路湯お國名物は様々あれど田舎訛の片
言交り、獅子唄になる言の葉を、雁の便に届けてほしや
合小千谷縮の何處やらが、見え透く國の習ひにや、縁を
結べば兄やさん合兄ぢやないもの夫ぢやもの、吉右衛門〜來
るか來るかと濱へ出て見ればノウほいの、濱の松風音や
まさるさ、やとかけのほいまつかとな〜好いた水仙好か
れた柳の、ほいの心石竹氣は紅葉サやつとかけのほいま
つかとな〜しんく甚句もおけさ節、何たら愚痴だえ牡丹
は持たねど、越後の獅子は己が姿を花と見て、庭に咲い
たり咲かせたり、其處のおけさに異な事言はれねまりね
まらす待明す、御座れ話しませうぞこん小松の蔭で、松

んれか、れ〜か、れ〜引綱、元來國元は關東の生で、
今年初めてやア役にさゝれて熊野の山へ登つた、熊野の
お山はしほが七里八里九里から十里から、峰から谷から
あれからこれ迄、えんやらやつさら〜そろ〜
〜、引出した松の木の大木、其處で若衆見事に揃
うた如才は御座らぬえ〜既にその夜は明方の、月の出汐
と辨慶は、柄も四尺双も四尺合せて八尺の大長刀、眞中
掴んで飛上り、風にかつ散る花車、よしや吉野の花吹雪、
目覺しかりける次第なり。

相 模 蟹

二上り〜在所ながらもナめん名所が御座る、相模女子の笑
顔もよしや、振袖の模様は濱の貝盡し、目籠に拾ふ海松
房の、ふりさけ見ればまん〜と、月も宿借る武藏
野の、空も一つに契りこし、眺に飽かぬ景色かな〜晩に
や待たしやんせ、御器洗うて仕舞うて、牛に水くれうと
言うてでん出合をのらさ嫌なら磯端でなりと、苦を敷寝
の舵枕、戀に焦る、遠帆の鷗、波に浮寝のその仲々は、
番離れぬ戀すてふ、あれあの花を見るにつけ、何故に見

捨てて歸る雁、跡は嵐の吹こともまよ、よ、花吹雪合雪の
吹雪は富士の峰合それを見や、見てからく、戀にや心
もなかつくのお詞に、ハツト騙されてそれで寝もせで
泣や明す、これ誠に瀟湘の夜の雨にも濡れて来る、千
兩取るとも馬方止しやれ、なん何故に、腰にや馬柄杓手
にや又煙管、吸附煙草でじらすのか、此方の大事の男を
ば、ほてつばらめ何とするエ、何とするのぢやえく、
唄ふ小唄の貝盡し三下り、君が姿を見初めて初めて、引く
袖貝を打拂ふ、戀は鮑の片思ひ、徒し徒波櫻貝、櫻の花
貝その身は粹なく、す貝は男の心、此方は姫貝一筋な
女心はさうぢやないかいな、何時か仰を常節に、逢うて
離れぬ蛤の、その月日貝馬蛤貝と、言ふを頼の妹脊貝、
未だ戀に板屋貝、日も早や西に入相の、極樂寺の鐘の聲、
耳を貫くばかりなり、由井が汀に寄する波峰の嵐に揉合
はせ寄する波はどうくどつとくどつとく、打つてはさつと引く
日本無雙の名所や、雪の下へと急ぎ行く。

朱 鍾 窟

三下り、寶劍の影凄しく、日月梢を拂ふが如くなり、合悪鬼

ないぞえ思ひ草、解けて恥し心の謎に、稀の逢瀬や積る
白雪。

○岩井月緑の松本

文化八年十一月、中村座。作曲者杵屋正次郎。

二上り、色も香もまだ室咲のいはけなき、梅の笑顔やとり
く、今様姿可愛らし、初音懐しき鶯の聲ぞとや云は
ん調かな、ほうほけきやうの初目見得、ちよつと色氣を
取敢へず、戀の棧、そこらが氣轉と弾く三味、踊の手管
酒が教ふる花心、浮れ浮れて面白や、それ甘泉殿のその
昔、李延年が一節を、この日の本に和けて、島の千歳和
歌の前傳へて代々の舞扇、差手引手に拍子を揃へて、笙
笛琴箏篋謡ふは太平く、太平樂と鳴るとかや、實にも絶
えせぬ舞の曲三下り、雪を廻らす雲の帯、長き終夜を引締
めて、寝よとの鐘と打付も、言葉の花ぢやないかいな、
逢うて嬉しき心の月も、差合ひ聞き床の闇、袖に時雨の
色見えて、濡れよなら濡れよなら戀を増す深き契ぞ羨し
、見渡せば沖に群居る夕濱千鳥、風に揉る、磯千鳥ばつ

の亂切拂ひ、國土を守る誓の形相合實にも鐘窟の合精靈
たり、風を起せば自ら、山川忽ち震動す、人かと思れ
ば人ならず、神かと思ればさにあらず、果敢なきものは
陽炎の、映るが如きその姿、悪鬼の眷族齒嚙をなして、
身振ひしてぞ居たりける、天に現れ地に蟠りて、國土
安穩とその名は代々に輝けり。

○めりやす青 葉

文化八年五月、中村座。作曲者杵屋六左衛門。

「こは情なの仕業やな合さのみ人にはつらかりそ、悲し
みの合涙眼に遮りて、西も東も白浪の、寄邊定めぬ泡沫
の、いつそ泡とも消えもせて、こがれこがる、合身の行
方、青葉く」と合呼べども濱の合濱の松合風音ばア合か
り合松風濱の松風音ばア合かりそよとばかりの便もがな
と、恨み嘆くぞ哀れなり。

○めりやす浪 枕

文化八年十一月、中村座。作曲者杵屋正次郎。

三下り、浪枕假の縁も千尋の海の、深い願も一筋な、遺瀬
と立つてはむらく、群千鳥、友呼ぶ聲のちりやちりく
ひやうるり拍子と蘆の葉の、笛を吹き波の鼓の音も澄渡
る小夜千鳥、ドリ、君ならば雪も霰も厭はぬ野邊の草枕、
思ひ焦る、文枕、戀の重荷を載せて行く、船に揺られて
楫枕、夜半の嵐の浪枕、鳥に恨の手枕に、結ぶ縁の長枕
、掛巻くも大和唐土押並べて、御最負願ふ神能には繁る
松本枝葉迄、いはひ奏で、舞納む。

○千代の春緑末廣

文化九年正月、中村座。作曲者杵屋正次郎。

「しをらしや立舞ふ袖の一奏で、女子なりけり男舞、し
やんと着なした風俗に、扇取る手も要の契伊十郎、變らぬ
色や三つ扇、翳す袂にその移り香の、嫩葉に芽出す戀草
の、可愛らしさの深緑、ちよつと一筆墨染櫻、櫻々と謡
はれて、花の盛りは花盛りは、花のお手引合うて嵐山風
厭はで北山、吉野初瀬の花の吹雪か、散るはく、散來る
は、装ふ山の春景色、ドリ、二上り、飽かぬ眺の花の色、合柳は
素直枝垂れ合ひ、夏は涼しき團扇に靡く、合風にちらく、

螢狩 合秋は千草に日を暮す、宵の小雨も何時しかに合妻
戸明れば皆白妙に、積る話の六の花、動かぬ例君が代の、
廣き恵を敷島の、大和の春の、壽を謠ひ奏でて舞納む。

○戀男調松風

文化九年六月、森田座。作曲者杵屋六三郎。通稱「勇次郎
沙汰」又は「調松風」。

三下り、妻琴の音色も此處に松風や合心盡しの形見とて、
その面影の派手姿、出訪はる、人も戀しさに、寄るべも
遠き磯傳ひ、汐の重さは堪へもせうが、戀の重荷は遺瀨
なや、エ、何とせうぞいなアえ跡に男波の聲高く、共
に浮立つ蘆の葉の、まだうら若きとりなりに、連れて濱
邊を歩み來る、論ガカリ喜三郎、旅人は袂涼しくなりにけり、
關吹き越ゆる須磨の浦風の便も空嘯いて、合結ぶ煙は鹽釜
に、胸の隈こそ添ひぬらめ喜三郎、月の口説か螢の悋氣、
纏れ纏れて解けかぬる、君が一夜の情はつらや合結句思
の増鏡、今は恥し亂れ髪、取上ぐる間も荒波の、寄せて
は返す遺瀨なや、戀の奴のそれならで、憎てらしさの顔

わいの 此間セリフ、首尾を船首にそと舵枕え、拗ねた錨は
沖の石ぢやといの、しよんがいな、思ふ片帆にちよと寄
る波のえ、合花を咲せし床の海ぢやといのしよんがいな、
面白やあら恥しの我が心、狂ふ濱邊の松に等しきこの姿
合とても離れぬ一念の合徹れと峰の雲の袖、忽ち風に裏
返り、てはさながらに合形は慕ふ戀衣、合既に焦る、舞
の曲此間舞、波の鼓の音高く躍る眞砂のどうくくくく
く、勢ひ告ぐる須磨の浦合千代を壽く松の枝振り。

○昔今志賀山 三番 叟再 春 菘種蒔

文化九年九月、中村座。作者榎田治助、作曲者杵屋正次郎。
通稱「舌出し三番叟」又は「志賀山三番叟」。千歳市川高麗
藏、三番叟中村芝翫。清元との掛合。

番頭、そのむかし秀鶴の名にしおふ志賀山風流の三番
叟、似せ紫もなかく、に及ばぬ筆に寫し繪も、いけぬ
汀の石龜や、ほんに鶉の眞似合からす飛び、とつば
偏に有難き、花のお江戸の御最負を、頭に重き立烏帽
子、似つばも己が師匠へは、錦と着なすお取立、をこ

がましくも七歳の、番り、けふぞ名残に、ウタ、八、さむらふ
よウタ、天の岩戸のナ合神樂月とて、合祝ふほんその年も合
五つや七三つ見しよと合縫の模様のとさまま、合竹
に八千代の、壽こめて、番り、松の齡の幾萬代も、替ら
ぬためし鶴と龜、ぴんとはねたる目出鯛に、海老もまが
りし腰のしめ、四人、寶盡しや寶船、やうく、目出た
いな、四海波風納りて、常磐の枝ものほんよえ、
葉もしゆる、えいさら、鯉の瀧登り、牡丹に唐獅子から
松を見事に、唄、さつても見事に手をつくし、仕立ば
えあるよい子の小袖合着せてきつれて参ろかの合肩車に
ぶんのせて、乗せて参ろの氏神詣、合巫女が鼓の合で
んつくでん、唄、笛のひしぎの、合音もやえたりな合やえた
目もとのしほらしき合中の、中娘をひたつ長者が合嫁
にほしいと望まれて、藤内次郎が橡栗毛に乗つてエ
イ、えつちらおつちらわせられたので、其の意に
任せ申した、唄、さて婚禮の吉日は、縁をさだんの日を
選み、送る荷物は、合何々やろな、瑠璃の手箱に珊瑚の櫛
笥、合玉をのべたる長持に、數もてうどのいさぎよや、

「様はナア百までナアエわしや九十九までナア、エ、
共にナア白髪、のナア、エ生ゆる迄ナア、エ、嫁とは
いへど世間見ず、駕籠の内外の思はくがはつかしみ、
案じられ、袖に添寝の新枕、かはす言葉も何とゆてどうし
た宵の口と唄、めをの銚子の盃も、呑まぬ内から殿御
にのまれ、耳より先へ染めて濃き顔も紅葉の色直し、そ
れから床に差向ひ、こはさ半分嬉しさも、先へは出です
跡じさり、互に手さへとりかねの、聲が取持ちやう
く、と明行く空を月にして、唄、妹脊結んで女夫中、睦ま
し月といはた帯、やがて孫曾孫やしや子を儲け、末
の樂しみ此の上や、唄、あら喜ばしの尉が身と、心浮
立つ踊り歌、唄、花が咲き候黄金の花が、てんこちない、
今を盛りに咲きにほふ、てもさつても見事な黄金花、
「欲しかおましよぞ一枝折りて、そりや誰に、いとし女
郎衆のかざしの花にホオヤレ戀の世の中、唄、じつ戀の世
の中、面白や、すぐにも歸り御目見えを、又こそ
願ふ種蒔や、千秋萬歳、萬々歳の末までも賑ふ芝居
と舞納む。

○暇申てか紅葉袖名残錦繪
へる山の

文化九年九月、中村座。作者櫻田治助。作曲者杵屋正次郎
常磐津との掛合。山姥中村歌右衛門、怪童丸關三十郎。

淨瑠璃「浮世を廻る一節も、狂言綺語の道直に、行く年波
も月と過ぎ、花と暮して又何時か、名残の秋と形振も出
「盛り老けたる女郎花、野山の色もうつろひて、櫛せぬ
髪のいたづらに、縫れ次第の絲薄、鳶の錦の衣さへ、よ
し足曳の山姥と、人や我が名を夕月に、軒の瓦の鬼ぞと
もいはば、岩角九十九折、苦もなく蟲の聲添へて、呼ば
れ招かれ快童は 唄出「めでたやくく代々を籠めたる竹馬
なんぞは、何時も見てさへよいとや申す、よいとや勝り
の小鷹のこの子、峰の猿や兎を友に、草履隠しの馬か牛
木とつつき常念坊、松のちりりてあいたし木立に隠れん
坊、悪戯腕白わやくな道を、ハイくくくお山の大将俺
ひとり、遊び戯れ聞かざものセリフ淨瑠璃「茶の木の枝にくぜ
る山雀、胡桃に耽るこめ鳥、虎斑の狗兒、不倒翁、振鼓
笛や太鼓の拍子に合せて、山家踊は何と言た唄「俺が在

一重は花の眞實に、冷き足を太股で、暖め酒の寒椿、と
は甘い八つ手と抱締めて唄「互の胸を冬至梅それも浮氣
の一盛り、今は色氣もふつり捨てて淨瑠璃「浮世の外の
唄「山廻り淨瑠璃「廻りくく唄「深山への淨瑠璃「頭の雪
の唄「姿恥し淨瑠璃「呼出す内に二匹の獸 持前裸の土俵
入りセリフ唄「むづと渡りし四つ足の、三つを取るより熊
の膽取るなさは猪の獅子、獅子の洞入り向づけ、引捨て
負投げ腕反り、櫓四つ這膝櫓、捻り爪取り大越や、鴨の
入首腰車、あしらふ坂田が取組は鳥居が筆にや残らん。

○戀畏奇掛合

文化九年十一月、森田座。作者櫻田治助、作曲者杵屋正次
郎。通稱「犬神」。豊後路清海大夫（清元延壽太夫）との掛

合。
淨瑠璃 蠅營たる狗苟と韓非に載せられし、卷尾けんてい自
ら、この身に受けてあさましや唄「我も北斗を拜しては、
心のまゝに姿をも、映すや池の水鏡、潜く玉藻に梳る、
その通力も 忽に淨瑠璃「蘭奢の香の馥郁と、薫に恐れ本
性を唄「見るに恐さも忍ばれず、野干の形現せし淨瑠璃「

所はナア奥山の、爺打のでんぐりくく栗の木の、木の根
を枕にころび寝もし、寝間へ猪でも熊でも来たならば引
抱いて、コレえらい目に會はそえ面白やセリフ唄「枝の鶯
絲繰り綿繰りほんぞ息子によい着物着しよと淨瑠璃「織る
や手業のきりはつたりてう唄「きりはつたりてう淨瑠璃「
からり唄「ころり淨瑠璃「千聲唄「萬聲の淨瑠璃「砧の聲も
四手打つや唄「現ない程可愛いさに淨瑠璃「いと遺方亡
き夫の唄「昔思ふぞ淨瑠璃「哀れなる唄「春は梢に咲くか
と待ちし、梅が笑へばア山笑ふにこ羽子板の音もよく
二子に二子見渡す方も睦じや、露の姑嫁菜を連れて、桃
や櫻の彌生山、我も柳の愛し子連れて、霞を分けて山廻
り淨瑠璃「秋はさやけき影を見て點す燈籠の盆踊り、夜明
鳥は可愛い鳥ぢやいな、此方の別に聲添へて、可愛く
と鳴くわいな、鶯はしには雲をの客も一河の流酌交す、
川崎音頭夜と共に、月に浮れて山廻り、冬は冴行く時雨
の雲の唄「ちらくくくちらくくくくと、散るは紅葉か
かつ散る木の葉の鐘の音凍る閨の戸に、立盡したる水仙
の、笠木で霜にしつほりと淨瑠璃「濡れて思は室に咲く、

果敢なの己が有様や唄「野末の草の葉隠れに、葛の恨の
恨めしく、親の敵を現にも、夢にも忘れ遺方も泣いて明
してくよくくと、焦れて燃ゆる狐火は淨瑠璃「焔となつて
去りやらぬ煩惱の犬の如何にせん、絆に繋ぎ絡はれて、
臥して見寝て見執着の、向去りやらぬ思に寄り唄「我は
化けたと面影を、慕ふに餘る口惜しさ酬はんものと立寄
れば淨瑠璃「毛衣さつと振亂し、眼鏡に息巻きて、寄ら
ば喰はん勢ひに唄「ばつと飛退き振返り、エ、言ひがひ
もなき涙の雨の、はらくくはつと目に添ひて、かゝる憂
き事なき身ならば、花を飾りて品繕うて伊十郎「嫁入く
里の子に囃立てられしつほりと、露のかごとを草枕、一
人葎の床の内淨瑠璃「眠るとすれど犬塚の、ちやつと起立
ち身を振る尾花唄「此方は尾を巻き狙ひ寄る淨瑠璃「寄せ
じと猛れば唄「飛退いて慎恚の劍淨瑠璃「憤怒の牙唄「研
立て淨瑠璃「研立て挑み合ふ鼓唄「親の別のその場より所
定めすうろくと、戀しゆかしはさながらに「人間より
も百倍の、思ひ重なる胸の内 合淨瑠璃「仇も報も白眞弓、
犬追物や唄「鼠良かゝるも知らぬ輪廻に引れ淨瑠璃「引れ

引れて唄へさは言へ親の恨の咎と菊押取り打つてかゝれば
淨瑠璃寄付けず、貞女を守る張然犬、楊清李信が犬と
ても、かくはあらじと耳逆立て吼れば唄へ叫んで駈向ひ、
淨瑠璃追つ唄へ返しつその風情、往なうやれ我が故郷
へ戻ろやれ淨瑠璃その名玉をと立ちかゝるを、頼賢やら
じと引留むる合唄へ千枝狐が歸り咲き合淨瑠璃姿の花や六
の花合唄へ木毎の花の顔見世は、めでたかりける次第な
り。

○めりやすはつ櫻

文化十年正月、森田座。作曲者杵屋正次郎。

二上りへ嬰兒の育も木々の緑遊に、霞が生める初櫻へ蕾の
花も水加減、咲かずと燃ゆる夕餉、何憚らん世の中にへ
心の煙立ちかぬる、薪涙に濕す伽羅の香。

○四季眺寄三文字

文化十年三月、中村座。作曲者杵屋勝五郎。坂東三津五郎
十二月の所作事。常磐津・富本との出し物。

傾城 (門傾城)

鳥森、別れに後の一杯が杉の森やら千鳥足しどろもどろ
に來りけるへア、酔うた〜〜五勺の酒に一合飲んだ
ら出來心へつい袖引いて轉び寝にこんなこの子のいたい
け盛り、ねんねこせい〜ねんねが守は何處へ行た、山
を越えて里へ行た抱けば泣出す下せばじれる、お猿が守
とはこの事か、願かけたる色々の繪馬も榮あり午祭へ姉
も妹も仇者で、私に靡ことじやらついて、實かと思へば
つん逃けた合俺が來た時や來もせず、奴が來た時や酒
飲んで、泣いたり笑つたり嘘つきめ、締めろやれ〜中
の綱合ヤアわつさりと殴りかけ何でも此方の方々合赤い
ものに取りては、南蠻辛子唐辛子、取上婆が右の手、未
も赤いは山王の櫻の木にお猿が三萬三千三百三十三匹下
つた、お猿のお尻は眞赤いな、ヤア締めろやれ締めると、
春の幸先もよしや世の中面白や。

俄鹿島踊

へさても見事な神勇め合思寄せたる宮雀鈴振る袖振る振
もよし、態も吉原全盛遊び、浮れ〜〜これわいな合御
代はめでたの何々なアえ、これわいな、御代はめでたの

木調子へ門に立添ふ吳竹に松の位のしどけなく、間夫は勤
の憂晴し、此方故なら私が身を合捨てるも二重三重襷、
かけてもほんに變るとは、言うてもおくれなつく〜と
合思や勤の嬉しい縁、此處より外で主に何時合逢はれぬ
仲に書交す合上々様の痴話文も、別に變らぬ様參る、つ
いたらされて女氣の、辛氣〜に空眺めへ霞む夕に見渡
せば、土手を四つ手の通ふ神、淺茅が原の月の夜も合待
乳に濡る、雪の日も、來るとは梅に鶯の、ほうほけきや
うのほの字とは、知つてゐながら水に住む、恥しの初蛙
エ、しよんがえへ更けて寝る夜の閨の戸を、叩くは夏の
水鶏が打つとは秋の狭衣か合袂に残る移り香を締めて、
伏籠の埋み火に邊の春のうら若菜七種添へて幾千代も、
榮え榮うる例かな。

半田稻荷

へひよつくりひよ合〜合ひよつくり〜ひよひよ
つと出でたる修行者の合辰巳上りの一調子、疱瘡も軽い
痲疹も軽い、祈るは葛西金町の、半田稻荷の幟竿、意氣
地に立てる三圍や合その妻乞合に王子さへ、つい後朝の

さんさ若松様よ、枝も榮えて葉も茂る、鹿島浦にはなん
〜なアえ、鹿島浦には寶船がつん着いた合波に黄金の
花が咲く拍子とり〜來りけるへこれは廓の色競べ、花
魁達の道中は、雪の素足の雪の顔へヤレ富士の白雪は朝
日で解ける、解けたらどうしたえ、娘島田はサア寝て解
ける、その取持は幫間、練るか練れぬか栗餅の、これは
根元名代〜合私はこの白お前は手杵合思ふ所をとんと
突こ、突くべいと思へど、其方の顔見りや手を突く、白
と杵との拍子よく、これも俄の里神樂、廓の遊で面白き。

木賊 菊

へ園原や伏屋の里に秋更けて、吹く風いと夜寒なるら
んへ實にや處も信濃路の、木曾の棧かゝる身のへ浮世
を渡る習はしに、棹馴れ衣鹽たれて合露に宿借る秋の夜
の、月の影をも刈添へて、いざや木賊を刈らうよへ園原
の伏屋とは二人が昔閨の床合それさへ今は帯木と、名さ
へ變りて打つや木曾の麻衣、夜の砧の槌の音、澄みこそ
勝れ秋の空、過ぎ來し方のなつかしやへ秋の夕霧立籠め
て、尾上も峰も朦朧と、空定めなき雲は時雨の山廻り、

早や暮深き鐘の聲、木賊を脊に老人は、歸る家路へ急ぐらん。

鶯 娘 (常磐津との掛合) 作者瀬川如阜

浮瑠璃 一 妄執の雲晴れやらぬ朧夜の、空さへ更けて鐘凍る峰の吹雪に風寒く、結ばぬ夢か幻に、立つ甲斐もなき妹脊鳥、雪の上毛の濡れ翼、暫し宿も嬌柳の、枝垂れて重き戀風が、吹くとも傘に雪持ちて、積る思は泡雪と、消えぬ恨にくらぶ山、忍ぶ文なき胸の闇、果敢なき戀に窶す身をせめて哀と道芝も、皆白妙にちらく雪の振袖白鷺の、姿しよんほり可愛らし迷ふ心の細流、ちよろく水の一筋に、思ふ殿御の愛しさと、逢うて嬉しき睦言を、神かけて願の外は白鷺の、水に馴れたる足取も、濡れて雫の乾く間も、涙は戀の常なれど、枕に語るかこち草、これも恥し振ぢやえ唄一鳥はものかはナア合別の扉明くるはつらやしやほんに、更行く鐘に比べては、何方がどうともこちやくこちや言はぬ、心比べの片思ひ吉四郎一春は野山に浮れ心の色見草夏の夕暮禊の袖にッレ一風も涼しき留木の薫、びえた月夜にほとく行けば、辻占千

鳥氣にかゝる合それ氣にかゝる合生る様で生らぬ冬の梅
浮瑠璃 一 振もよしやの卷羽織、花の大小摺差し、振出す練出す娘丹前、可愛らし唄喜三郎一忍び姿も思へば花よ、浮名立つのも厭はれぬ、鈍な私ぢやないかないな浮瑠璃一女子の嘘は口紅の、跡から剝けるいろには合蓮華經と鶯の口に任せた上の空千鳥一浮氣譏りの仇付きを、知らぬ白地に戻らうならば、とても候べく候しッレ一盡ぬ縁を願ふもの一振れさく振れく振込めさ、お先を揃へて華か宿入り下馬先所知入りはつちりちちつともそつとも寄つたら大事ぢや、先退けく花を飾りて花の所知入り一花紅葉色も時雨の降れやれく一振つて振り浮瑠璃一振つて振込む伊達槍、おさて合點ぢや槍はぢよん女郎様の花の槍合唄一花に太鼓が浮きく合浮きに浮れた合浮氣な風が浮瑠璃一競ふ吉野の花櫻唄一龍田の楓紅の浮瑠璃一裾もほらく川波に唄一渡らば錦中や絶えなん一歌の言の葉末長く、眞橋の葛絶えず合傳へて毎日榮え堺町歌舞伎の花とぞ祝しける。

金太郎

一 一 それ年毎の追儼、悪鬼悪魔を降伏の、方相氏の面を借つて、これを行ふ例かや、我も百魔の山姥が、育上げたるほんそ子の、力自慢のいたいけ盛り、今日の追儼の年男一福は内へと人の山、おうさへく鬼は外、我がこの處より外へはやらじとぞ思ふッレ一思ふ時節に青木が原の、波の鼓の音のよさ、拍子揃へて呼連れて合数の子實はイエイくく辰松いる松入来るく、朝は六つから鳥飛び合袖を翻して源氏無雙の大勇士、拳堅めて恵方に向つて當り任せと敷打つ豆に、悪魔外道は堪りかね、許させ給へと言ふ聲を、此處に追詰め彼處に追駈け合拂ひ清めて萬々歳長き櫓と祝ひける。

○ 閨茲姿八景

文化十年六月、森田座。作曲者杵屋六三郎。市川團十郎八景の所作事。

浦島の歸帆

三下り一海の都を過ぎて浦島が、波の花道出汐の、跡に引る、戀衣、濡る、も夢と父母にのりぢの海の船唄や一小

手招く風の便の眞帆片帆、ゆたのたゆたのよんやさ影戀し、海邊離れて木曾路川、寢覺心地に辿り来る一果敢なき齡を延ぶる明暮に合心の水の泉迄、老いせぬ例合汲みて知る合玉の釣瓶に玉の井の、内に影差す火々出見の、尊も戀に引かれ来る一その釣針の愛しさに、同じ流の結び目も合堅い約束汐満ちて別れを惜む波枕、浮名は高き乙姫の、情も深き物語一問はず語りも忘れぬ、舞の一手の優しさに、せめて一差面影を此内舞一玉の簪に合桂の鶯合月の照添ふ花の姿の眩きに合雪を廻らす袂かな一白波汐路をさして合通詰めたる戀の海、ほんにくく逢ふ夜は嬉しさも合何時か二重の越の海、行かんとすれど老松や一實に百年の波路を越えて、睦しく盡きぬ契を語る家苞。

心猿の秋の月 (心猿)

作者櫻田治助

鼓唄一それ意馬心猿の、心の駒は六塵の樂に走り、猿は五濁の枝に戯れ、唄一中に動かぬ法性の、柱にこれを繋ぐとは、人を教への譬へ草、結ぶ願ひのなにくれと、神の

御前に掛巻くも、繪馬にや映す神馬引合手綱許さぬ口
 取の、劍立烏帽子大幣も、人にはまさるのまめやかに合
 社詣での歸り足合しやならしやならの大振袖を合人目蜜
 柑や合桃や柿より甘いお尻にお馬も太鼓を現抜してちよ
 つと袖を引く、引かれざ木遣てじゆんわり引いてくり
 よ、よい／＼よんやな赤いものにとりてはなんば辛
 子に唐辛子、よい／＼までも赤いかな山王の、櫻の木にお
 猿が三萬三千三百三十三匹、ぶら／＼下つたよい／＼、
 下りや下つたがな、只も下れかし重荷に小附と小猿を抱
 いて下つたよい／＼よいや、中綱ヤア締めるやれ、よよ
 いさ／＼、よいこれわのさつても及ばぬ水の月かや面
 白や合此處に浮名は曾根崎の、森にお初はしよんほり
 と、姿映せし水鏡／＼ぼんに寝る、一筋に、毛はまだ三筋
 皆様に、足らぬ私が生れ故、捨てて行くとは何ぢやいな、
 恥しや合神變不思議の心猿に、駒も勇みて花や散るら
 ん。

晒女の落雁 (近江のおかれ) 作者櫻田治助

(常磐津との掛合)

誓紙の上も鵲の、橋裏に立つ笛竹も、一節切とは聞く
 つらさ、八聲の鶏に堰かれては、よいやなく／＼浮瑠璃
 物姫の移り香を唄寝衣ながらの浮瑠璃起別れ唄よい
 やな浮瑠璃ア、よいやな唄筆の一夜を縁結び合浮瑠璃
 野路の玉川萩越えて色ある水に晒し合唄晒して振
 を見せ参らせう／＼合浮瑠璃立つ波が／＼瀬々の網代に
 障へられて、流るゝ水を塞留めよ／＼合さつさ車の輪が
 切れて何思は何方にも合晒す細布手にくる／＼と唄
 晒す細布手にくる／＼といざや歸らん賤が庵へ。

石橋の晴嵐

天地の開初めし昔より、天の浮橋浮世の中に、橋の名
 所様々にして合水波の難を逃れては、萬民富めり潤ふも
 即ち橋の徳とかや、然るにこの橋は巖岬々たる岩石に、
 已れと架かる橋なれば、石橋と名附けたれ合時知るや
 牡丹花の今を盛りの花に來て、己がまゝなる蝶々の、狂
 ひ亂るゝその風情合實に一入の眺かな暫く待せ給へや
 影向の時節も今幾程にも過ぎじ獅子團亂旋の舞樂の
 砌牡丹の花房匂満ち／＼、大筋力の獅子頭、打てや囃せや

浮瑠璃留めて見よなら合茶種に胡蝶、梅に鶯松の雪、さ
 ては姉女が袖袂しよんがいな合色氣白齒の團十郎娘、強
 い／＼と名に振れし、お兼が噂高足駄唄まだ男には近
 江路や、晒し鹽の誰が颯らうと戀ぢやいや／＼相撲でな
 らば、相手選ばず渡合ひ、ありやりや／＼／＼よいやさ
 浮瑠璃四つに抱れて手事とやらで、二人しつほり汗掻い
 て、なげの情の取組が唄面白かるでは浮瑠璃ないかい
 な唄力試しの曲持ちは浮瑠璃石でもごんせ唄俵でも
 御座れ／＼に差切つて浮瑠璃五十五貫は何のその、中の
 字極めし若い衆も、女子にや出さぬ力瘤唄ぼんにほう
 やれ逢ふ夜はをかし、折を三上の文さへ人目、關の清
 水に心は濡れて浮瑠璃今宵堅田と老蘇の森と、返事信樂
 待せて置いて、まだな事ぢやと心で笑ひ、嘘をつくまの
 あた憎らしい唄更けて今頃三井寺は、何處の田上と寝
 くさつて、夢醒が井の鳥籠の山浮瑠璃此方は矢橋の一筋
 に、ぼんに粟津のかちごと思ひ大津は初秋に唄鏡の
 宿の盆踊り合浮瑠璃天の川星の契も岩橋の、明くる佗び
 しき葛城の、神ならぬ身は未かけて、よいやなく／＼合唄

牡丹芳／＼、黄金の薬現れて花に戯れ枝に臥し轉び、實
 にも上なき獅子王の、勢靡かぬ草木もなき時なれや、
 萬歳千秋と舞納め／＼獅子の座にこそ直りけれ。

○廂春嫩萬歳

文化十年十一月、市村座。作者鶴屋南北。作曲者杵屋六三
 郎。

三下り春を呼ぶ花の顔早や先駆けて合色増す梅の笑初め
 合此處に惠の御最負も、徳若水の水際は、しやんと目立つ
 姿のとりなりに、打ち連立ちて來りけるやあら樂しや
 新玉もの、年取る始の賑に合花の翳を頭に召して、
 綾瀬の刺繡の棲模様合蹴出しは春の駒下駄なんぞで、品
 やる振こそさすがに鶴の歩なれ、此處らに見惚れし浮れ
 男達を、ちよつと準へて一廓、やつと言つて響められたる
 は、誠にめでたう候ひけるか様申す若イ者ア、夜も晝も
 旦那方の、お傍で合太夫様の御取持ア彼方の隅ぢやア合
 お手が鳴る、アイと言つて答へれや、此方の隅ぢやお床入
 り合まつちやらこやまつちやらこや合まつちやらこと漕

出す、禿を叱つて隣の座敷へお茶持て参れ合奥は心の上
草履、續く騒ぎの浮れ唄松の内合いと色めく仲の町
合磨上げたる土地の地廻りそり唄好いた清掻江戸の花
かや強い奴には合向鉢巻合こりや又何の事始め君待合の
辻占や伊達と意氣地の比べこし振分けかぬる洗ひ髪合
他所の縫れを黄楊の櫛孝次郎横にもたるひざり言これ
男下に居やこなん故には幾度か吉四郎一人に誘られ言譯さ
へもなまじ流の憂き思ひ伊久四郎袖の縮さへ隠る程
に、泣いて明石の恨み言フドリ数へ見る合敷の一座の二
階にも合弾く三味線は四つの袖から袖に手を合常の戯と
無駄口交り七つ梅酒微酔機嫌合それくくやつとやア
八つの太鼓を合圖も包む合此處のつらさを聞分けもせて
漲面顔の憎てらし戯る、一實に壽の鶴龜は吉例變らぬ
この舞臺礎固き殿造り、百萬歳の御祝儀を、行く末廣
に舞ひ謡ふ。

○狂亂左當升

文化十年十一月、市村座。作曲者杵屋正次郎。

に見染めしその日より、何時かお傍へ夜の衣、着綿にし
て暖めて、逢瀬を菊の離れじと、思ふ甲斐なきつれなさ
は、届きかねたる縁の絲、まだ解けかぬる結び文投入
に俯向く花の振の袖、戀の重荷の置所なき身は遺瀨な
や何とせう、一人焦
る、片男波、袖も乾
かぬ憂き言の葉に、
岸を堰かる、捨小舟
此處らは氣轉の仲
立ち振りも、ぬらく
らものでは行かぬ鯨
の丸め役合捕へ處な
き口説の縫れ、急く
な急きやるな浮世は
車え、廻逢ふ戀それ



縮めろさよいやな頼むぞえ君と我が浮名は四方に響く
瀧水白菊か合それにつれなき男山、まだ劍菱の氣強い事
に、エ、心時雨る、霰酒、一つ時酒七つ梅色深き早や

鼓唄、亂れ心や解けやらぬ、千筋の絲の黑白も知らぬ本
調子合闇路に結ぶさ、がにの、縁に引る、合小車の、廻
る因果の物狂ひ、よしや現に夢の花、散らくも分かぬ徒
心、浮氣思へば笹舟に乗せて合連れて行こもの神崎へ
二より、やんれ白波の打つや合鼓の川柳合水に合揉まれて
揉まれて水に合締めつ緩めつ寝こそ入りけれ、締めて寝
た夜の二人が伸の子寶合この頃の花冬籠り、春待つ花の
懐に、乳房尋ねん月の顔、わやくな空や時雨時三下り、
寺々の合鐘も亂る、霜夜の嵐合鳥と鐘とに思もあろが、
オ、時知らぬ月夜鳥めは合いつも鳴くしよんがえ合暫し
止りてくれよかし面白やつしども中戸に臥轉ぶ只狂亂の
有様は正體なくこそ見えにけり。

○今様姿程々

文化十年十一月、森田座。作曲者杵屋六三郎。

鼓唄、老せぬやく、薬の名をも菊の水、盃も浮び出でて
君に逢ふ夜の嬉しさを合願ふ心もまだ恥しく、酒を力に
言ふ事さへも、顔に紅葉は狸々の、姿やついの出立榮、初

後朝の何時しかに、長き契も枕の夢の、醒むると思へば
泉はそのま、合盡させぬ宿こそめでたけれ。

○正札附松元草摺

文化十一年正月、

森田座。作曲者杵

屋六三郎。

それ磯山覆ふ雲霧
や、只引幕の初霞、
蹴破る勢は鳴る瀧を
登る鯉龍の如くに
て、曾我の五郎時致
は、逆澤湯の重鎧、
輕けに引提け駈出す
は、目ざましくも亦
見えにけり、裾にし

つかり小林が合手を掛け烏帽子鶴の丸、左右の髭に天津
風合苦もなくやらじと力量に、引けども引けども動かば
こそ、時致笑つて合振放し、いらぬ腕立よしやその力あ

るとても、そりや行かぬ仁王立なる勢は草木も靡く合鬼神や合鬼を欺く小林も、今は心を和けてコレ申シ伊三郎野暮な力は奥の間の浮氣らしさの辛氣節合女子の愚痴な眞實が、届かぬ事か待つ夜半も伊四郎蒲團重ねて敷妙の枕の土俵化粧髪源太郎間夫に逢ふ夜の力水漏さぬ仲の文角力伊三郎人目を關の憂き思ひ煙草は憂を忘れ草煙比べん富士浅間そつと覗いてオ、コハそのマア顔は憎らしやと言うては又も取附いてえいやくと引けども押せども合これやどちやセリフ朝比奈力はそれきりかム「エイ髭が試の力瘤合落しやせぬかと撫廻し引くに止らば堪へて見よモサ〜」別足踏締め時致は時こそ來れ嬉しさよ合蛙の聲も身にぞ知る合今や遅しと夢の間も合忘れぬ父の仇敵討たんすもの飛上り合走行かんとする所を又もやらじと合引留むるコレ待ツタ止めて止まらぬナ無理酒に氣強い朝のひざり言合エ、何ぢやいな措かしゃんせ合肩に手拭染も構はぬ江戸自慢合構ひます妙でんす派手な所がわしや嬉しコレ止まらんせ合勇ましや互に争ふ勢は前代未聞當世無雙後代無二の評判は東に

並ぶ二見潟合此處にうつして神風や、惠も深く若者と、貴賤上下押並べて合恐れぬ者こそなかりけれ。

○拙業再張交

文化十一年二月、森田座。作曲者杵屋六三郎。市川團十郎四變化所作事。「達磨」酒醉侍」は常磐津の出しもの。

傾城 (きねぐの傾城)

「後朝を惜しむ姿のしをらしや合しやなら〜」と裾に朝日の色運ぶ合茶屋が軒端の浮立つ中に「憂きはものかはな九年何苦界十年花心合派手を島原出口に靡く、柳髪の跳元結や、三日の月宵にちらりと思せ振な、此方の待つ身を投島田合徒療附きし間夫のにくさに遺瀨がなうて、又も揚屋の文の敷伊三郎仇な心で何ぢややら、氣にもない事筆先で、嬉しがらせて笑うてそして、逢へばひざりて又泣かそとは伊三郎「あた憎らしい男面とは思へども顔見れば、恨みつらみも何處へやら、惚れた心の急がしく源太郎「冷たい足を謝つて、差込む頬を押す手さへ、入れ處なき肌と肌、締めて寝衣も何のその伊三郎「邪魔な枕

さてこそ末世に御神と拜まれますぞ難有き。

○それ〜の姿に〜つまつまつ三津再十二支

文化十一年三月、中村座。作曲者杵屋勝五郎。坂東三津五郎十二支の所作事。

子 小松曳

三下り「子の日する野邊の小松のなかりせば、千代の例に合何を例に引きてまし「春の御前の殿造り合磨上げたる光君合榮華の時と梅の香も合御簾に漏れ來る空炷の、追風誘ふ琴の音は合誰が清搔の聲清く合弘徽殿の細殿に佇むは誰々合朧月夜の語も合朧氣ならぬ合契より汲荒かりし須磨の浦沖の千鳥と年月を共に重ねし馴れ衣袖振る壺の囀を合思出せばしをらしや「松の二葉は嬉しい縁で妹脊離れぬ仲々に縁の愛し兒を合抱いて根松や千代の松合松の常磐は懐しい契色も變らぬ變らぬ色の憂き世に書く文の合墨の煙や峰の松さうぢやエ〜榮久しき宿の松「絲竹の聲媚さし局々の前渡り、めでたかりける時代かな。

と一つは捨てて、積られるとは知りながら、胸にある事睦言並立てたる世帯事「神に誓を木綿襷、結ぶ手管の誠わぬなき「戀の重荷のな島の内、送り迎ひに覺悟の誰であらうとしてこいな合棒鼻に括附けたる提灯の合日柄の約束して來たな高いも低いも色の道なアえ「八瀬の里では小原女が、小棲紫けのちよこ〜歩み合片手に牛の手綱引く、それ小坂合點ぢや合氣遣ふ岸の七曲、黒木買はんせんかいなと賣歩くえ、可愛らし「假初事の戯れも情に實や籠るらん、〜。

爲 朝

「南瞻部洲伊豆の國、名に大島に崇むなる、弓矢護りの御神、爲朝大明神と申し奉るは「野暮な昔の事かとよ合嵐に花の憎まれて紅葉時めく旗の色清盛さんの振ち上戸合何腹立てて源の合氏より育つ若武者を合浮世の外の島守りと流してとんとその頃は合鬼の住家や荒夷角髪目立つ殿振りを戀の邪魔ぢやと夕汐の合どつと押來る磯の波「外に類も荒事師鎮西八郎爲朝は「やらぬとかゝるを一掴み初夜の空打つ如くにて潔くこそ「古今獨歩の若大將

丑 大原女

二上り野道山道いそくと合越えて行手の春霞花の笑顔
 を三つ大や娘盛りの合可愛らし桃の花より柳が愛し
 合りに枝垂れてそして風にかしこと靡くものしよんが
 え合綱手も長く引く牛の合黒木買はんせ黒木買はしやん
 せんせぬかいな合連木買はしやんせぬかいな合可愛けれ
 やこそ男故合沈や麝香は持たねども梅が香移る棲紮け行
 くも戻るも柳が瀬暫し木蔭に休ひぬ三下り喜三郎花の都は
 さて色所御乳や乳母もそれぐに合喜八負うた子よりも
 抱きたい男晩にやいと知せて置いて無五郎更けて添寝
 も大原木買はい合大原木買はいこの方をば袖引かば合
 惚れて合見しよもの愛しい男大原木買はい大原木買はい
 合可愛くと夕月の枕に残る臙影二上りさつても此方の
 牛殿め村で一番黒の黒か上首尾忍ぶ夜は合包む頭も合
 六頭にほんに誓文天神様かけて合今度の合今度のすつと
 今度の合先の世迄も言うた言葉を違ふと合違へさんすれ
 や胸の火の炎に焦す時参りその夜も牛の講釋は合もうこ
 れぎりてこちや知らぬ合恥しや行く水清き賀茂川の堤

傳ひにいそくと都の町へと急ぎ行く

辰 乙姫

本調子沖津鳥合かもつく鳥と詠みたりし合神代ながらの
 湯津葛合下蔭廣き眞砂路に杏音響く出立は合かの龍王の
 乙姫合雲の鬢面花の顔合假名で譽めれば色盛り情盛りと
 白波の八重の隅にも世界がありて合愛し可愛いの妹春事
 別れし夫は故郷へ合着くか着かぬか合沖の船焦れ暮して
 るるわいな二上り閨の扇も繪空事合繪にも文にも書盡さ
 れぬ合こんな辛氣な縁と知るならば合一人寝よとの帯締
 めてと言ふのも愚痴かえ合又の逢瀬を指折り數へて待つ
 わいな頼むにえ松に音する磯嵐白波のく立つや汐風
 とうくと合鳴渡りたる名や聞ゆらん。

巳 江島詣座頭 (江の島座頭)

二上り深き恵を江の島さして合よく信心の願掛けに合運
 ぶ歩も合がつくりそつくり合がつくりそつくり石の角で
 蹴踏いてあいたし合その拍子に明かぬ目なれば常闇と
 申して色取法師で五合はちよるり引掛け山鳥浮れくた
 浮れざつとの坊合俺が女房はコノ夜仕事が過ぎて湯文字

十二ヶ月の所作事。

正月 官女の初若菜 作者櫻田治助

本調子天下太平合長久に合治る御代の松風合枝も鳴さで
 一入に縁も深き春の色梅より白む九重の合庭の氣色もい
 と榮えて實にも興ある風情かやこの殿はむべも富みけ
 り三枝の三つ棟四つ棟に五つ睦び月七種囃す雅び女の唐
 土の鳥が日の本へ渡らぬ先と手もたたく合とんと認諾
 もなき名は嫌よ今宵やいと三十一文字に他所の目目を
 こちや隠しだい手爾葉合して逢ふ戀ならば合嬉しき言
 ふに祝ひ歌人丸様へ願掛けて末長かれと一筋に祈る契も
 初若菜。

二月 戻駕籠稻荷詣 (富本)

三月 藪入の御殿結

三下り八重一重合色香争ふ花見月合吉野を此處に寫して
 し浅香の山の朝ほらけ霞の間より見渡せば合眺に飽か
 ぬ春景色、人の心も浮立つ空に、知らず知られずついで
 な、風が誘うてちらりと、櫻も雪と振袖の、可愛
 らしさの品形、一文金鬚に帯附きも、野暮のやの字の不

をコノエ綱をして張つかふえエイカノてもえいと言うた
 エイカノくえいさら合おつさら合行く道もおつと明手
 の片瀬村まつか春中に琵琶負うて杖を力に合來りける
 さらばこれから合奉納に此處らで一々一杯機嫌酒も熱爛
 鼻の先赤いは旗の平家琵琶これ聞けがしと合差聲に三下り
 入道相國さしも十戒を保つて合などと合せた調子竹一
 三疊鐘四黄鐘七が面倒取置いて仕方話でやつてくれよ
 かくて源平入亂れ意氣地比べの夜軍せうなら合又の御見
 と矢文にかけて、那須の與市が扇の的口説昂じて枕を投
 けて合景清が腕の骨三保の谷が首の骨えんやうんくえ
 いやくくうんと鍛引き合じつと押へて引留めて待し
 やんせ喜三郎エ、厚皮な男面如何に勤ぢや女郎ぢやとて
 も合枕二つに夜着せて喜八寝て解く帯に言譯も言ひ
 白みたる明の空鳥の鳴く音をこち草早や夕波の島山
 に社の燈火も光曇らぬ御神の御前にこそは籠りける。

〇傲三升四季俳優

文化十一年五月、市村座。作曲者杵屋六三郎。市川團十郎

束な、御轉婆者をア人様が、杜若氣取と何ぢやいな
誠に、拜むぞえ伊久四郎、ぼんに昨日の御夜詰にアノ十
種香や歌骨牌、孝次郎、果は芝居の話にも私が最負を知りな
がら伊四郎、じらしてそして憎らしい戀に一筆墨染櫻、合
何時か、とこの緋櫻を指折り枝に首尾鹽釜櫻、淺黄櫻の
心は嫌よ、合實な縁の絲櫻あらば妹脊の花櫻え、入相惜む
花の藪入り。

四月 初鯉の戯奴僕

三下り、一聲は彼奴が鳴いたか、合初鯉羽を生じて合飛ぶと
言うたと人には聞けど目前に、見るは始と跡追うて、や
つこらさつてもこれやどうぢやセリ、返せ戻せも何のそ
の、空吹く風の面憎や、合傳聞く唐土の楊弓とやら云ふ
入は雲居の雁を射て落す、頼政殿は鶴を射る我等も武士
の橋詰で夜鷹は手のものアノ、蒿セリ、とやうても弓矢に
事を缺き邊尋ねて合釣瓶竿、セリ、これもものに構へて一
つ晝中二つ不届三つ見捨て、行かれうものか、合いつそか
うして手取に抑へて合さつくれべい、蒿とろ、や棟上の
餅がぼんに廿四五足らぬとやうてそれ其處せ、合對ちや

よい、よんやな、躍りかけてぞ跡を慕ひて走行く。

五月 裾野の夢見草

六月 天王の御札配 (富本)

七月 齋日の閻魔王

八月 白服の揚屋入

川竹の、合流忙しき憂き身にも、合末を頼もの睦言が積る
と云ふも雪の縁、實にさうぢやえ、誠なき合勤する身と
分知らぬ、縁結ぶの下紐も解けると云ふは雪の縁、しん
にさうぢやえ、分も吉原今朝の白妙、

九月 山路の禿髻菊

鼓頭、關はなけれど何處へ釣るや七百年も昨日今日、谷
の流に影映す慈童と云ひし禿菊昔は玉の床の海今は深山
に紅葉を秋の錦と敷妙の枕の科と捨てられて合筆の形見
やにくのけをかくと過ぎにし菊の縁、その菊の酒敷添へ
て花の目許はこちや白菊の、顔は紅菊移るふ色の、姿も
何時かよろ、と猩々菊の面白や。

十月 夷講の熟醉夫 (富本)

十一月 男舞の神樂歌 (富本との掛合)

和光の影も明け、合映して昔男舞、派手な噂も在原の
合鳥帽子を假に紀の路なる、それは姿も玉津島、淨瑠璃、此
處津の國や住吉の、岸の姫松萬代も、變らで千早振る事
を、今瑞籬の、神樂月、淨瑠璃、我ならで誰とか徒な戀せじ
と、女子たらしした御手洗川の、浅い心をこちや白幣、ま
だな祈事木綿襦、淨瑠璃、かけてぞ願ふ神様の、忘れ草やら
エ、辛氣らし、浦の見る目も恥しと顔に茜の、さすがにも
淨瑠璃、口笛吹いて一奏、合既に拍子をとりに、舞、雪を
廻らす舞の袖合返す扇の折を得て淨瑠璃、あの山見さい、
この山見さい、淨瑠璃、雲の間に、間に、雲の、淨瑠璃、
空に行交ふ雁がねは墨繪ながらに、しをらしや、淨瑠璃、誰
が届けて文玉章の、羨し他所の色めは否認もあるに
孝次郎、ぼんに聞えぬ男氣と胸で恨んで又腹立て見てもや
つぱり逢うた時や、淨瑠璃、彼方此方ない事言うて無理に
私に、謝せ、惨い心が合尙愛しとは伊四郎、色の習で、淨瑠璃、
あろぞいな、伊久四郎、徒な浮世の中々に、淨瑠璃、粹な水仙室
咲の合梅の音締の睦言に互の胸を冬至梅、引手數多の琵琶
の花合ちよつと傍から水山茶花の、憎い八つ手であら

うとま、よ、深い濃茶の花なら嬉し淨瑠璃、それえ、
それが肝心寒椿、淨瑠璃、木々にも六つの花や咲くらん、
十二月 追儼の多聞天

本調子、既に一年忽に唯す追儼、豆の敷、三升の角も四隅
なる、合須彌の四州や四天王、毘沙門天の邪鬼踏從へし御
有様、さながら其角が今此處に、團十郎や鬼は外、目ざ
ましくも亦尊けれ、喚いてか、れば尊天は、降伏鎮護の
得物の御矛、押取り延べて邪魔外道、いで物見せんと言
ふま、に、利生は日々に難有き、その御最負の神徳に榮
ゆる芝居も十二月、打納めたる禮は内、萬々歳とぞ祝し
ける。

〇めりやすすがた見

文化十一年十一月、森田座。作曲者杵屋六三郎。

三下り、つらや男はどうした胸の、廣い世界に私一人、合物
思はする徒情、分も涙の軒の端、我が身にかゝる雨催ひ
濡れぬ先こそ露をも厭へ、今更何の黄檯紅葉、連なる枝
の憂やつらや、沈む願の底深き水や空なる月の姿見、

○大津葦原張其九繪彩四季櫻
浮世畫色入

文化十二年三月、中村座。作曲者杵屋勝五郎。中村歌右衛門四季九變化所作事。

奥女中

三下り「文の便は他所目を忍べ、雁が嫉めば燕が恨む」ま
だ初空の風寒く、残る雪間を踏分けて、様を思へば徒歩
跳足「百夜も通へ思の的は、ア、當れとのやの字結びも
目に立つ娘、一人寝勝ちに年月も、廻る車のやつくん車
の、我からと戀に引かれて焦れ寄る千蔵「待つ身なりや
こそ紅差して、妻と言う字も恥しく、包む笑顔に袖屏風
孝次郎「覺みし夜着もそれなりに、嬉しい膝を割り髷の、
亂る、宵を清水へ、願ひ掛けたる夕霞五人「誰そや誰ぞ
扮して立てる合小車の、袖の匂ひも媚めかし合玉垂の内
やゆかしき、内ぞゆかしき合一夜鸚鵡の契もと、千束の
文を遣羽子の、盡きぬ思を敷へ唄「突羽根の合「一子に
二子、見初めては、他所に移さぬ眞實も合出雲で結ぶ縁
の絲合隣き易さの心根を、問うつ問はる、口説さへ合惚

の程遠く道を辿りて分けて行く道を辿りて分けぬらん。

丁 稚

「ありやりやんくくりうといな、ありやりやんくく
ありやりやんりうといな合りうとけん酒だりむくれ、又
いさんに使はれて、濟まぬ幾世の帳面も合通ふちろりか
酒樽下けて、ぶらく合鼻の先合水の垂る様な前髪も、
ちと不細工で我ながら、思へば鬼の念佛に合煮ても焼い
ても色氣より、喰氣に廻る新道を、騒ぎちらして来りけ
る「日當りの、此處で遊の仲間入、大阪煎も一掴み、爲
着の袖に隠し藝二上り伊久四郎「あんなんこんなん女が大事
か、はくらくりうだいこさんちや、ばんえいえぞえんめ
い、びんくるりりい、ちやうかんきう合きうつうえい、
すうつえい、サアすんころくちよか、はつたらきうさの
りうせんしやう合すいしゆでりうちや、すいすゆでりう
ちや、ゆるるつてん、そつてんえい合まつはかんけのな
すうすんべん、すべらんしよ、みやうくくだに見世繁昌
ちうちゆかよかもに、ちんがらもそく、かはよかそふぢ
やわいなハアハア伊久四郎「エ、恐らしいどうぞいの、そ

れたが負の女氣は夜半の軒端の梅の風「一村雨と春雨の
振袖翳す肘笠も霞や雲の三重の帯。

老女

木蘭子「古の錦の袂引替へて、今は襦袢に來し方を、思へ
ば親の窓の内「御乳や乳母の癖として、脊に子を負ひ寝
させて置いて、狗の子くと言うたものなれば、目な掛
けそよ、花の踊は一踊り千蔵「此處な子はいたいけな事
言うた、殿が欲しいと謡うた三下り「つてもさても和御
寮は踊子が見たいか、踊子が見たくば北嵯峨へ御座れの
合北嵯峨の踊は葛籠帽子をしゃんと着て、踊る振が面白
い、吉野初瀬の花よりも、紅葉よりも戀しき人は見たい
事よの、處々お詣りやつて、疾う下向召されよ「おのれ
やれく皺面白髪になるとても合心で年は寄るまいし、
元氣な事なら持つてこい、今時の若い者に何のやい、エ
エ滅多に負けてよいものかと、戀に腰をそらいた、腰を
戀にそらいた、どうした拍子で寄る年の千蔵「明けて口
惜しや、明けてめでたい事かいの合「「憂やつらや千蔵
「ア、恥しや我ながらッレ「物に狂ふと人や見ん人や都

んなお前の胸慾な、心と知らず手をくれと、言うた言葉
に尾を振るも、他生の縁の道家より、日向に圍ふ薬の屋
根、竹の柱の住居して、暮すも親御様持つのそんなよわい
ぢや御座んせぬ孝次郎「とうきたりく「これはざつぶり
とお清めに、朝の六つからすんく「合四谷赤坂廻町、
誘うて連れし愛敬はだらく落ちてお茶の水台町も屋敷
も一網に、芝の臺から神田の臺、八百八町四里四方、漏
れぬ御最負難有き、御利生く減相な御利生だ合すてき
な御利生だア、稻荷様く「と跳ものとはげもの、氣も
春の日の長屋中、初午祭る笛太鼓賑ふ聲の面白や。

雨乞小町

「引くも小車轟く車、女車の下簾合ちよつと透影愛しら
し合その袖口も色々の、重ねゆかしき小紫「染めて見染
めて通ふぢやないが、色に染れて車引く、よいくく
これわとな合其處で我等も車引くよ、なアアア締めろや
れ、よいさくくよいこれわのさ、よいとなア、樂深き
友達や木蘭子「理や合日本の本ならば照續く合雨を祈の合神
泉苑合神も憐れむ言の葉は千蔵「何を種として浮草の五人「

波の跡なき 偽を清むる水もたえぐに田面も潤る、民草を惠の誠通じてや孝次郎さりとては又天が下潤ほふ空に、雲間よりすはと夕立雷神、はらめく雨の音凄く、庭も波立つ有様は、歌の奇特ぞ類なき歌の奇特ぞ類なき

雷

二上り平假名で、加賀屋の加の字雷の、かの字に讀みと歌の徳、うまい最中を起されて、晝寝枕に張詰めて、響く太鼓もしつかりと、引付け取付けひつちよつた合西で鳴らそか合東で鳴ろか、思ふ圖星へ北山風に、雲の棧すつてんくく、てんころり合ちんがらくく、ちんがらもんがらちんがらこ、おひやりこひや合落ちし下界の不思議やな、凡そ天地に我ならで、音する者は夏の日星賣りも我が部類にて合外に何ぞと三筋なる、絲の音こそ怪しけれ孝次郎徒な爪弾き、水調子などと聞きしはこれなるか、さらば我等も彈語り千蔵何處にも戀慕れられつはある習合桂男のお月様伊久四郎稻妻と云ふ傾城にびつかりびくくびかりく光る姿に打込んで合雨やさめとぞ通はる、然る所に是非もなや孝次郎叢雲と云

ふ悪者め風の便に聞出して、ふわりく、ふわりくふつと月の邪魔にぞかりける五人月殿は出ようとし叢雲は出すまいと押合ひ揉合ひする程に、天氣の揉めると云ふ事はこの時よりぞ始りける、さんさ音もよく合打つや太鼓の拍子取り合どんつくやくどんくどんつくや私が目につく臍瓦毛のけもない振で何時の間に突いてやりたい合白の臍合縁か綴蓋鍋の臍合ならにやつれのきすばしりの臍が沸した茶々飲んで合慾張り姿様がわくせくと眞芋の臍を繰り溜めて小金もちつくり臍喰つたをかしいぞえかくては果しいざさらば身の置所定めんと浅草さして急ぎける。

槍持奴 (常磐津)

月の辻君 (常磐津)

傾城 (天下るの傾城)

千蔵三下り鼓頭天下る、紫雲の小袖絲竹の、聲も身に染む雪の照り三五の月かそれならぬ合二八十六で文付けられて四五の二十なら一期に一度私や帯解かぬ辛氣え富士の根と開く扇も春の興名も様々に咲く花の霞隠れの

梅が香に合深山嵐も頼まれてめでたく戦ぐ松と竹合鼓も時の御萬歳、折を笑顔につこりと、愛敬ありける新玉の、年立つ姿伊達姿、男たらしを手持つて、かの楊貴姫か上草履合履いて箔屋の箱梯子、後尻漏る、間夫の聲誠に嬉しう候ける、花一盛り櫻時花の廓に花の雲鐘は上野か浅草か合人聲霞む夕暮に、見世清搔に引かれ来る合土手の春草踏み分くる合草に音せぬ塗鼻緒、エイエイ戀をせうなら新吉原の廓に名取りの優姿、ありし昨夜の約束に、ちよと月聞き格子先、逢ひに來たがどうぞいの合孝次郎この鉢巻は過ぎし頃、所縁の筋の紫は、抓りし跡のひざり言、口説も戀の花の雨千蔵杏葉牡丹の傘は何處の女郎めが合差させくさつたしんぞしみる、合腹が立つわいな伊久四郎禿が便待合の辻占茶屋箱枕千蔵蒲團一つに寝る宵を孝次郎恩に煙管や煙草盆五人當り任せに投節も孝次郎しんぞ命を二世かけし二重廻りの雲の帯、解けて屏風の五月關合植をい、植をい、早乙女合尙も田をば植ゑたなら、笠買うて着せうよ合笠買うてたもるなら、尙も田をば植ゑうよ合月も笠着て時鳥、鳴く

や五月のさ、濁り合裾や小褌を濡らした、濡れりや思に乾しもしよが合末は山田の山田の末は、落水しよんがえ合差せば漕がる、差さねば淀む、何處へ差そやら岸の船合棹の雫の露散りて、萩の初風天の川水調子文月の星逢ふ夜を羨みて残る思の螢狩、團扇の風も袖吹きて、面白いやないかない、サア合そよと涼しき夕暮に、便忘れず來る人を合言はず心に待乳山、逢うて恨の竹門を、言うたら胸も隅田川面白いやないかないサア合稻穂拾ひて雁二つ合女夫暮すが仲田圃、土手の夜風が櫛子漏來て山谷で微に紙砧、誰そや行燈の影更けて、玉姫あたるの狐火も、ちらく、と見えみ見えすみ、引四つ過ぎから間夫の晝、來やしやんせ、空定めなき一時雨三下り花笠や合梅の浪華も何のその合花の東の花の時花の紐さへ結んで解けて祇園守の締括りそれが浮世の花ぢやいな合花笠や合花の合句も何のその合花の姿の花の顔花の袖さへ合重ねて連れて舞ふや舞鶴諸翼それが浮世の花ぢやいな、花の中なる冬牡丹暫く待せ給へや、影向の時節も今幾程にも過ぎじ、清涼山の床の山、重なる蒲團峨

峨として、幾重巖の重ね夜着、空灶き煙る谷の木蔭に、面白き景色かな。獅子團亂旋の舞樂の砌、牡丹の花房句満ちく。大筋力の獅子頭、打てや囃せや牡丹芳く。黄金の薬現はれて、花に戯れ枝に臥轉び、實にも上なき獅子王の、勢靡かぬ草木もなき時なれや、萬歳千秋と舞納む。合萬歳千秋と舞納め、獅子の座にこそ直りけり、

○八重霞櫻花掛合

文化十二年三月、市村座。作者櫻田治助。作曲者杵屋正次郎。嵐三五郎八變化所作事。

融

木蘭子。實にや名は千賀の浦曲と云ひながら、遠き東の陸奥を、映して此處に都なる、鹽釜櫻一人の、眺に飽かぬ景色かな。伊十郎。賤が手業を汲みて知る。汐馴衣假に着て。源太郎。夜毎渚に打寄する。汐をいざや汲まうよ。合伊十郎。蟹の子が憂きをも今ぞ知られけり、戀の重荷の上越して、肩につれなきいとなみく。の吉四郎。辛苦を他所に娛

○五節句の櫻草娘鬘髻

文化十四年三月、河原崎座。作曲者杵屋正次郎。

彌生の空もにぎくと、合邊の野邊に櫻草、飽かぬ眺の色々を、荷ひ連れたる花の市。合花の振袖初櫻、月ならさぞな十三夜。やの字結びの可愛らし。上野飛鳥も及ばぬ花の、櫻々と招かれて、花に呼る、得意先、愛想媚くとりなりも、連れに成田屋オ、恥しや、なんほ他所目にお茶つびい杜若娘とあじやらにも、そんな悪戯誰が付けて、颯らしやんすか。合。商ひ口の艶も構はぬ満更な、野暮ぢやごんせぬア、つがも、なかくと。合誘ふ水なら若紫の、道も一つに來りける。色も染井の花畑。合物になりぞな種蒔いて、とほけた振で何方へも。合當つて巳待は池の端、合。泥龜泥龜。合。目高金魚の隣り見世、月の八日や十二日、木挽町にも夕薬師、御眞言にはおんころく、いろはにほの字の清書も、合點そわかであらうがの伊十郎。エ、措かしやんせ、そんなそのしんなしふでは何時の事、私やちらしの玉盡し伊四郎。仰書にもほめられて、お

みし、ア、うたての己が心やと獨りごちして三下り。見渡せば、波に漂ふ水鳥の、霞を分けて出船の、人目籠が島隠れ、通ふ千鳥の幾夜か戀に。合。焦れ浮寝の床の海、ちりく。ちりやちりくと、鳴いて明石の恨みて須磨の。合。風情もかくはあら面白や、雪を廻らす雲の袖。差手引手の舞の扇を、三日の月影を遊魚は釣針と疑ひ、雲上の飛鳥は弓と驚く、鐘の聲々に我も暫しは悠然として、大臣はそのま、舞臺深くぞ入り給ふ。

傘 (一本足)

三下り。罷出でたる某は、破れ傘何時濡れたやら、人目蛇の目も私や白張の、色にや心を紅葉傘、そつこで差せ乾せ六郎兵衛、よい日傘に花嫁御行列揃へてお腰入れ。縁も長柄と振つて振込め。

○琴朝顔

文化十三年五月、中村座。作曲者杵屋勝五郎。

二上り。露の干ぬ間の朝顔に照す日影のつれなさに合。方。哀れ一村雨のはらくと降れかし。

師匠さんの御褒美がうれしうてくきつと覺えて合。あるわいな。仰書にも何やかかの、立文に書く千代萬。御婚禮にもお供して、こちや行くものを。三十一文字の腰折も、つい見習うて針仕事縫うて、着せたや鶴龜付けて、愛しいものに進せましょ。そりや誰に。イ、エお前の事ぢやない雑祭に殿達は、お邪魔三月白酒に、酔はしやんしたかオ、をかし、笑顔彩る櫻草、花に浮れて面白や。春雨の合。降りみ降らすみ音もせずして濡れかゝる。合。ても濡れよなら濃紫の葦草。合。露の浮名もつい土筆。合。忍ぶその夜は人目堤を行違ふ、雁に燕に問うて見や。合。花を見捨て、行く雁は、ほんに憎いぢやないかいな、しやほんに。浮立つ色や合。花の袖、花に寄來る一奏、岩井でもその市川と名に負ふ江戸の花見月。

○五節句の禮獅最負物 (新獅子)

文化十四年三月、河原崎座。作曲者杵屋正次郎。

鼓唄。花も紅葉もこき交せて。賑ふ今日の神勇め、盛り浮立つ江戸の花。合。紫匂ふ袖袂。合。誰も三升の戀ひ仲は、お

房と縁の綱五郎二人連れたる女夫獅子、桃や柳の彩り彩る綾錦、分きて柳のしなへてもつれて面白や、夏は時鳥卯の花香る朝ほらけ、花橘の香を留めて合草蒲は軒の夫定め合くるり合くるりくるりくるり、車に乗せて重荷の實に、戀は曲者伊十郎、咲揃ふ花の木蔭に見えつ隠れつ比翼の蝶の合蝶の翼の白粉も合派手に浮名の花より花に、移り氣は浮氣らしいぢやないかいな、盛り眩ゆき花の笑合紅を差すがに風俗も合徒になさじと誠を見せて、粹なとりなり合ほんに思の深見草、オ、名取草合待たば岩間に合しどけなく、しどけ形振幼き獅子の、遊び戯れ友呼交す、摺れつ纏れつ合彼方へ誘ひ、此方へ寄りついとをしをらしき風情なり、秋の眺や合通天の合はしたなく散る紅葉は、眞間の織橋ま、にして合千束の橋や文反故取散したる亂れ橋合私語の橋何時かその合漏れてや他所に岩橋嫌よ合常磐の橋の千代かけて、今を盛りの冬牡丹匂満ち、大筋力の獅子頭實にもなき獅子團亂旋もかくやらん萬歳千秋と舞納め、萬歳千秋と舞納め、獅子の座にこそ直りけれ。

三世を一つ前、二重心は夏近き、蚊遣りにくゆる一炷の伽羅のかをりに一睡、鳴る鐘に二階廻りの聲更けて合燈火くらき屏風かけ、人待つ襟の長廊下、障子の紙を吹く風も、白粉の香になまぐさき合夜は丑三つや過ぎぬらん

座頭の木琴

二上り、按摩見物御最負様の、張りの強いを杖にして、浮きに浮かる、座頭の坊、呼んだ座頭は左か右か、中の中座敷、それがこちらの當り前、ほんに當り前、うしろへぞつと戀風の、身にしむ聲のそ、り節三下り、様は山谷の三日月様よ、宵にちらりと見て見ぬふりの、手拭深き夕化粧、夜目か遠目か吉田町、風が身にしむうき勤め伊久こづまほら、足曳の、山下駄の音ちんがら合ちんがら、石につまづきやがつくりそつくり、がつくりそつくり主に合あいたしころんで膝頭、ち、ちつともそつとも大事な、寒さ厭はぬ柳蔭、喜聲は聞いても見ぬ戀の、月にも迷ふ闇路とは、知らぬ振してどうぞいのエエ、伊久あんまりな、あんまはりひねるといふも色の癖、さりととは、やつてくりよ合やつて皆さん御存じの、又

○怪談の俳優に七變化、深山櫻及兼樹振の容姿をやつして

文政元年三月、都座。作曲者岸屋勝五郎。尾上菊五郎四季七變化の所作事。

傾城 (闇の夜の傾城)

三下り、闇の夜に吉原ばかり月夜かな、月ぢや、春霞、立てるやいづこ三吉野の、花ぢや、しやんと小褌をとり、みがかく姿も白玉椿、合櫻に匂ふ五所紋日待乳の山風に合袖の梅が香酔さまし、うつ、の夢を上草履合露に音せぬ花曇、雨の簑輪の濡れ燕、晴かす夜をいたづらな合この女郎めとしけりくさつて口舌もつれて悪たいの、初音を春の時鳥合ほぞんかけたる命さへ、惜しうなるのもこなん思へば道理ぢやえ、伊久ま、になるなら此の里を暗闇にしていつ迄もきぬ、知らぬ重ね夜着布團を戀の山の宿、とへば浮氣な花川戸、これは廓に隠れなき合間夫の名取の日和下駄、土手の往來の喧嘩ざた、相手變れど川添の合堤の櫻咲く花に、風がけ込みし屋形舟、こりや又何のこつた、何の事ぢやいな、二世と

木琴の拍子どり、ひとり葦を雲雀がくどく心づくしのつくと、思へば酒がすぎなやら、仇な蕨が手を出して、野邊で逢ふ時や若草枕さいの、逢はぬその夜は心がじれて、向ふ鏡の月かけは、晴れても胸が曇るやら、味な氣になる移り香を、側に寝る夜は枕が便り、さいのさいの合更けて小雨の雲深き、在りし姿もあらず不思議や、異形となつて忽ちに、消えて行方はなかりけり。

小袖物狂ひ (保名)(清元)

蝦蟇仙人

三下り、谷水の盡きぬ齡を山人の、住家の松にくらぶらん、我もその合昔のやどを見下せば合雲を幾重の峰高く、ある夜は霧に袖を貸し合また水草をなれ衣、所定めす西東、飛行自在も風次第合おどろに亂す合黒髪の長き月日を小車の、巡りめぐるもいさ白雲の、浮世の塵も程遠く、酒は霞の酔心、面白やさらば太鼓の曲撥どんつくどんつくどんつくどん、とんきんなんきん、さひれんきやう、やうりうし、楊柳子南天龍膽金銀花、咲いたえ咲いたえ合咲いた盛りにナア海棠臘梅沈丁花合桃花櫻桃、

たりけんすんでいうつくるめて、ひすいちゆやんくわ
んこうせんせい 面白や木葉衣に雲の袖、霧に紛れ
て行き方も、そこ路岩根に失せにけり。

玉藻の前 (常磐津)

仕事師

三下り見かけより胸のおほとり東子男の意地をたて前歸
り股引ならでくつろぎは、五分も仲間の頭分、どこのい
づくのどなたでも、微塵けちりん怖いとも、しらのきほ
ひは合たが身でも、鵜雁股屋の棟へ、上げて下繩がつし
やうで、お目出た酒のうき心、浮きに浮かれて来りける
見渡せば、朝日まばゆき毛氈の、西も東も花の顔賑ふ
御代の木遣節三下りこの町のナア、鶯の若い衆は、勇みに
勇んで向ふ奴はぶんなくれ、逃げるやつは構ふなよんや
ナア 伊久おきやがれ、いけどうせちがれあれ見ろ
三味線、身がるで肩からぶんなくれ、如才はなくともは
やすぎえ、中の綱からかけろえや、やんれうて打つたるも
かけやれよいこれわのナア、やんれうて打つたるも
のには何々、神樂の太鼓か合七種なづなか たんく狸

の腹鼓合田舎で田をうつ、おん百姓よいくくやナア、
よい聲かけやれよいこれわのナアやア、しめろやれ江戸
の水井戸の水の競ひ肌、勇みに勇んで急ぎ行く。

振袖の骸骨 (むすめ)

二下り逢うて恨みのかすくいはば、初夜の鐘を聞く時
に、兼ねて忍ぶの合圖はあれど、餘所に待たる、花心、
塵も積りしまくらがの、こがれて更けて逢はぬ夜に合喜三
言はず語らぬ我が心合亂れし髪をとき櫛の、ト方とへ
ば幾度も、どうでも男は合悪性者 伊久末の堅めのナア
あの誓紙さへ、偽りか嘘か誠かどうもならぬ程エ、面憎
や合喜三ふつつり情氣せまいぞと嗜んで見ても情なや、
なぜ女子には何かなる、恨みくくかこつのも、東育ち
夢つい新枕、かはす彌生の桃の盃、とるやとりく、雛祭
合これも女夫か軒の菖蒲に添ひし蓬の早や五月雨の、雨
に水増す天の河原を歸るは牛のお七夕合星にたとへて見
るや菊月菊の花、咲く花のたもとに色ぢや、一二三四と
んと受けたるはづみにはづみし球の数、つくや拍子の面

舞

白や三下りあふぎとの合名さへ嬉しき合詞、晚にかなら
ずかなめぞと合しめて契りし袖扇、あはねば胸も櫛扇の、
こがれて一人間の内、よいやさく、合秋の扇とおく露
を、裾にうつして手に取りて合女の地紙はづかしき、便
り待つべし花扇よいやさく、合隔てぬ心神かけて、誓ひ
し伊勢のみだあふぎ、わしや忘れまいもの舞扇、扇々と
重ねては、美しいぢやあるまいか、千代萬代の末を待つ
鼓喜三あは恨めしや心から、闇浮に残る妄執の輪廻流
轉も恐ろしき、罪障の雲晴れやらぬ、漂ふ身こそ定めな
や勇ましや、百鬼夜行を降伏の、勇猛の袈裟結びあけ
合降魔の衣まくり手に、八つ目の草鞋ふみしめて合心に
たゆみ長刀に、いで物見せんといふまゝに合神力佛力加
はりて、いづくに化生のあるべきと、祈りくしその骨
柄、けに金剛力千人力、古今無雙の若者やと、貴賤上下
に至る迄、高き譽を菊五郎。

○三升猿曲舞

文政二年十一月、河原崎座。作曲者杵屋六三郎。通稱「猿

三下り猿が参りて此方の御知行、ウタ木調子マア猿めでたき
能仕る合踊るが手許及びなき、水の月取る猿澤の、池の
小波悠々たり、指手引手の末廣や月に譬へし止観の窓
合此方のお庭を見上れば、片割れ月は宵の程可愛可
愛いとさよえ合騙して置いて合松の葉越しの月見れば、
暫し曇りて又冴ゆる、明日は出ようずもの船が出ようず
もの合思たけもなくお寝る君よの孝次郎船の中には何と
お寝るぞ、苦を敷寝の楫枕伊四郎、晩の泊は御油赤坂に
吉田通ればナア二階から招く、しかも鹿の子の振袖が合
奴島田に丈長掛けて、先のが品やる振込めさ合手際見
事に投草履、ありやんりやりや合こりやんりやりや合粹
な目許にころりとせ仇者め合止めて止まらぬ戀の道、馬
場先退きやれ合色めく飾の伊達道具、昔模様の派手奴、
これ構はぬの始なり、毬の庭にも猿の神、鹿の猿の馬櫛
神合猿と獅子とは文殊の侍宿、時しも聞く冬牡丹花の
富貴の色見えて榮ふる御代とぞ祝しける。

○石橋

文政三年四月、作曲者杵屋六左衛門。通稱「外記の石橋」

「これは大江の定基出家し寂照法師にて候、我入唐渡天の望候て、只今思ひ立ち候、これは早や石橋にて候、向は文殊の浄土清涼山にて候程に、この邊に休らひ橋を渡らばやと思ひ候、松風の花を薪に吹添へて、雪をも運ぶ山路かな、樵歌牧笛の聲、人間萬事様々に、世を渡行く業ながら、餘りに山を遠く來て、雲又跡を立隔て、入りつる方も白浪の、谷の川音雨とのみ、聞えて松の風もなし、實に誤つて半日の客たりしも、今身の上を知れつ、妻木脊負うて斧擔け、岩根烈しき岨傳ひ、小篋を分けて歩來る、如何にそれなる山人、これは石橋にて候か、さ候候これは石橋にて候よ、向ひは文殊の浄土にて、清涼山とぞ申すなり、よく、御拜み候へ、我が身の上を佛慮に任せ、橋を渡らばやと思ひ候、暫く候、その昔より名を得給ひし高僧貴僧と聞えし人も、此處にて月日を送り給ひ、難行苦行捨身の行にてこそ橋をも渡り給ひしか

獅子は小蟲を喰はんとて、先づ勢をなすところ聞け、我が法力のあればとて、容易く思ひ渡らん事、アラ怪しの御事や、謂れを聞けば難有や、尙々この橋の謂れ詳しく御物語り候へや、語つて聞かせ申すべし、それ天地開關の以來、雨露を下して國土を渡る、これ即ち天の浮橋とも云へり、その外國土世界に於て、橋の名所様々にして、水波の難を逃れては、萬民富めり世を渡るも即ち橋の徳とかや、然るにこの石橋は巖岨々たる岩石に、己と架かる橋なれば、石橋とこそ名附けたれ、實にこの橋の有様は、その面纜にして、尺よりは狭う渡せる長さ三丈餘り、苔は滑りて足も堪らず、谷の若干深き事數千丈とも覺えたり、遙かに峰を見上ぐれば、雲より落つる荒瀧に、霧朦朧と闇うして、下は泥犁も白波の、音は嵐に響合ひて、虚空を渡る如くなり、橋の景色を見渡せば、雲に聳ゆる粧は、譬へば夕陽の雨の後、虹をなせるその形、又弓を引ける如くにて、神變佛力にあらずしては、進んで人や渡るべき、向は文殊の浄土にて、常に笙歌の花降りて、笙笛琴箏篋夕日の雲に聞ゆべき、目前の奇

特あらたなり、暫く待たせ給へや、影向の時節も今幾程によも過ぎ、獅子團亂旋の舞樂の砌、獅子團亂旋の舞樂の砌、牡丹の英、勾滿ち、大筋力の獅子頭、打てや、囃せや牡丹芳、黄金の藥現れて、花に戯れ枝に伏し、轉び、實にも上なき獅子王の勢ひ靡かぬ草木もなき時なれや、萬歳千秋と舞納め、獅子の座にこそ直りけれ。

○月雪花名残文臺

文政三年九月、中村座。作曲者杵屋佐吉。坂東三津五郎七變化所作事。

浪枕月浅妻 (浅妻)

三下り、小波や合八十の湊に吹く風の、合身に染み初むる比叡嵐、千船百船艦を立てて、入るや岸根の柳蔭、この寝ぬる合浅妻船の浅からぬ合契の昔驪山宮合をも羯鼓の始りは合鞆羯國より傳來て唐の明皇愛で給ひ伊十郎、そりや言はいでも濟うぞえ合濟まぬ口説の言ひがかり千太郎、脊中合せの床の山伊十郎、此方向せて引寄せて振つて見ても漕ぐ船の吉四郎、徒し徒波浮氣面、合誰に契を交して色を、替

へて日影に朝顔の千太郎、花の臺の寝亂れし、枕恥し辛氣でならぬえ、筑摩祭の神様も、何故に男はそれなりに合沖津島山寄る波の寄せては返す袖の上、露散る足の花心二上り伊十郎、月待つとその約束の宵の月合ッレ高くなる迄待せて置いて、一人袂の移り香を、片破月と頼めても合伊十郎、水の月影流れ行く、末は雲間に三日の月、戀は曲者合忍ぶ夜の合軒の月影隠れても合餘る思の色見せて秋の蟲の音牙渡り、合閨の月さへ枕に通ふ、合鈴もりん、振鼓合しをらしや、弓の影かと驚きし、鳥は池邊の木に宿し、魚は月下の波に臥す、その秋の夜も今は早や、鐘も聞えて明方の、入るさの月の影惜しき、合月の名残や惜むらん。

狂亂雪の空解

作者 櫻田治助

(清元とのかけ合)

二上り唄、春日野の合雪間を分けて生出づる、草の僅に見えにし合君とかこちし言の葉は、閨の扇の物狂ひ、狂これは馴れにし思ひ人に、亂れ心のそれとも、行方もいさや白雪の唄、つらき道もせ現なく、淨瑠璃、枕物にや狂ふらん、三津五郎、針や篋の針枕々主こそ戀し、假初の唄、契

も二世と言ひ川竹のア、まゝならず、他所の眺となる鐘に、寝るも寝られず淨瑠璃「起きもせで轉枕の夢になと、相合枕手枕に、せめて寝な、ん長枕 唄「此方寄れ枕引寄せて淨瑠璃「ころり臥猪の草枕 唄「一人涙の袖枕淨瑠璃「形見の枕ぞ、唄淨瑠璃「よしなけれ唄「とても濡れよなら雨こそよけれさりとは雪とはほんに憎やの淨瑠璃「振つて冷たい女郎衆の心それも音せで何時しかに消ゆるばかりであるぞいな始の噂も眞實も惚れた證據にや愚痴になるどうかかうかと男氣を唄「疑ひ出して留度なくつい人様の話も傍へ付きもない淨瑠璃「宵の口説を車に積んで残る口説は船廻し 唄「あれ又じらして何ぢやいの淨瑠璃「飛んだ煙管の八つ當り唄「お前故では淨瑠璃「ないかい唄「な淨瑠璃「その痴話喧嘩も野暮らしい機轉喜助がお片付け唄「立てる屏風の蝶番ひ唄「蝶ならば春か秋か花にはあらで連れて誘うて、誘うて連れて、ちらりく、ちらりく唄「と淨瑠璃「雪に狂ふはそれや氣違ぢやあるまいか唄「それでも雪を六の花とは云はぬかえ淨瑠璃「我も胡蝶ぢやなつけんけれど、木毎に花ぞ唄「咲いて浮れてあら面白

妙の淨瑠璃「景色よの、笑ふとまゝよく唄「ちちつとも淨瑠璃「そつとも大事懐し面影の唄「其處か此處かと駈廻る風に吹雪の亂れ髪淨瑠璃「狂ひ狂うぞ文なけれ。

狸々雪の醉覺

本團子「潯陽の江の邊にて、く、又傾ける盃は「御酒と聞くく、名も理や浦風の合吹けども更に寒からじ、渚も白々と降積むや積れ合雪踏分けて遊ばん 鼓唄「二上り「それ雪は鵝毛に似て風に散り合人は鶴鬘を着て合袖を連ぬ合あら面白の景色かなく吉四郎「壽命長久積りたる道も外山も雪滿ちて合梢の色を見てあれば伊十郎「白きを上ぐる盃に、いざさらば酒を酌まうよ、蘆の葉の笛を吹いて狸々舞を舞はうよ、ッレ「客人も御覽せよ、雪に晴れたる川波に、羽打交す水鳥の、ばつと立つ波寄する波、寫さん筆も及びなき、潯陽の江の内の酒盛、友に逢ふぞ嬉しき、この友に逢ふぞ嬉しき「暫し微睡む枕の夢の、覺むると思へば波の鼓の、どうくと打ち老せぬ世々の例には、人も情も暖めて竹の葉の酒酌めども盡せじ、泉はそのまゝ、變らぬ宿こそ久しけれ。

寒行雪姿見 (まかしよ)

三下り「まかしよ、撒いてくりよ合まつかしよ方の門々に無用の札も何のその、構ひ馴染の御祈禱坊主合昔氣質は天満宮、今の浮世は色で持つ合野暮な地口繪箱箱から引出して來る酒の酔伊十郎「妙見様の七つ梅、不動のお手に劍菱のびんと白菊花筏、ッレ「差すと聞いたら思ふ相手に合あほつ切り煽る手許も足許も雪を凌いで來りける伊十郎「君を思へば筑紫迄、翼なけれど飛梅の粹が身を食ふこの姿吉四郎「ちよいとお門に佇みて合とごまかしてよいとこなり、ちよつとちよほくる口車、ッレ「春の眺はナ吉太郎「上野飛鳥の花も吉原花の中から、ッレ「花の道中柳腰合秋は俄にナ吉四郎「心もうかく、浮れ鳥の合九郎助稻荷の隅の長屋の合年増が目につきすつと上つて合門の戸ぴつしやり千太郎「縮りやすぜえ吉四郎「あれあの聲を今の身に、思淺黄の手拭に千太郎「紅の付いたが腹が立つッレ「其處を流しの神下し吉四郎「歸命頂禮敬つて申すそれ日本神々は、伊勢に内外の二柱夫婦妹脊の盃も、濟んで初會の床浦明神、哀愍納受一呪禮拜合屏風の外に新造が、

祭も知らずねの權現櫃子の隙間漏る風は、遣手に忍ぶ空部屋の小隅に誰を松尾明神、地色は坂本山王の合廿一二が客取盛り盛り、間夫は人目を關明神、歸命頂禮懺悔く、六根大せう拗ねて口説を四國には、中も丸龜名も高き、象頭山今度來るなら裏茶屋で、哀愍納受と祈りける「その御祈禱に乗せられて、でれんく、口法螺を、吹く風寒き夕暮に、酒ある方を尋行くく。

戀奴花供待

二上り「お先揃へて華に合見事に振込めさ、見事に振りやれ大鳥毛、花に振るなら合花吹雪合花の雪踏む足許、踵を踏付けて踏めや勇めや合拍子合せて七草の合大座配唄「お江戸一番振つて見事な男振合又とあるまい世界一杯、大手前、お草履搦んでしつかりと合任せて置けるのく合殿の宿入り「俺が旦那はナ合色取り男色も白馬白手綱轡嵌せてしやんごくと吉原通ひ合君に大門合仲の町唄「お敵は小棲しやなくと馴染の茶屋の縁の端、てんと白癩無骨者、旦那のお膝にとんとろりと合寄りか、り君の思しやる事なら、何でもく背くまい合最早お立ちかお

名残惜しさは限なし、せめて出口の茶屋迄私もお杉も送りましよ、私もお杉も送りましよ、せめて出口の茶屋迄、私もお杉も送りましよ、田圃危い又の縁は何時ぞいの合しんぞ待つにえ開いたく、合花笠が開いた、開く甘露の日照り傘、待てば月日も合長柄傘合ぢよん女郎様に差しかけて、振つて振込む八文字合差して行こやれその方様へ、さつさ行くぞ松葉の青笠もしやんと見事にそれ開いた合様が目許が網代笠、それでお顔に紅葉笠合賑しや花の袖振るお江戸の花槍、評判奴の振も雙六五十三次一跨け、足に任せて今にも直に、歸り新参元旦那、その時元の御最負を合請狀願ひ奉る。

○老松

文政三年、作曲者作者杵屋六三郎。

本調子次第實に治まれる四方の國、實に治まれる四方の國、關の屏鎖さで通はんこれは老木の神松の、千代に八千代に細石の、巖となりて苔のむす迄合松の葉色も時めきて、十返り深き縁の内、眠れる夢の早や覺めて、色

○唄淨瑠璃 不動

文政四年三月、中村座。作者瀬川如臈。作曲者杵屋六三郎。

實にや因位のその昔、法藏比丘の精進の願、只修行に寄るとかや、御痛はしや祐念沙彌、師の諫誨の身に染々、深き願も下總の、成田の里に日を重ね、捨身の苦行で殊勝なる一夜は深々と物凄く、見るも他所目に忍ばりよものか、曩謨三曼に愛想ぢやないが、共に願の籠り堂いとも高雄の御山より、降伏四魔の御誓ひ揺がぬ御名に一心不亂、金剛心ぞ頼もしき大智の光は火焰に現じ、哀愍護念の御誓ひ微妙の梵音を利劍の光、凡心轉じて聖智を増す、大聖不動の神通之力、祕密の眞言繰掛け、現生現世の御利益、仰ぐもおろか末の世に、六道能化の再來とて、祐くる天の加護力や、異域土蕃の果迄も、名譽の智徳ぞ隠れなきの祐念が心の内、難有しともなか、申すばかりはなかりけり。

○一奏今様邯鄲

文政四年十一月、河原崎座。作曲者杵屋勝五郎。通稱「今

香に更けし花も過ぎ、月に嘯き身は繋がる、合絲竹の縁に引れてうつらくと、長生の泉を酌める心地せり先づ社壇の方を見てあれば、北に峨々たる青山に彩る雲の棚引きて、風にひらり閃き渡る、此方には合翠帳紅閨の粧昔を忘れず、右に古寺の舊跡あり合晨朝夕梵の響絶ゆる事なき眺さへ、赤間硯の筆すさみ此處に司を記しけり二上り松と云ふ文字は變れど待つ言の葉の、その甲斐ありて積む年に合壽祝ふ常磐樹の調ぞ續く高砂の、名なる邊に住吉の、松の老木も若木を語る恥しさ、只變らじと深緑、嬉しき代々に相生の、幾瀬の思限り知られず、喜も理ぞかし何時迄も清き勇めの神々樂、舞樂を備ふるこの家に、聲も満立つ難有や三下り松の太夫の襦袢は、葛の模様は藤色の、愛し可愛も皆々男は偽ぢやもの合拗ねて見せてもそのま、他所へ、或夜密に付合の、雲の籬の掛言葉、エ、憎らしい木隠れに、晴れて逢ふ日を松の色豊に遊ぶ鶴龜の、齡を授くるこの君の、行末守れと我が神託の、告をしらす松の風富貴自在の繁榮も久しき宿こそめでたけれ。

機邯鄲」又は「義經の邯鄲」

次 第 浮世の戀に迷來て、思は何時か思晴らさん
吉野山 合去年の白雪踏分けて合入りにし人の舞の袖田
縁巫山の 合比翼枕 合今はなかく思の種よ合馴れし静
が一奏、此處に映して三吉野や、あら面白の景色よの
富士は麓よ戀の山、雪の素足の外八文字、振ると言ふの
は嫌な客 合開夫に逢ふ夜は積らんせ賤や賤の草環合
繰返し、昔男の舞扇 合あの山見さい合この山見さい合雲
のまにまに雲の 合天津少女の初花衣、實にも妙なる袖の
香や四季折々も榮華の夢の、飽かぬ眺の君が代や、今
様舞臺を賑はしき。

○七所御攝初鐵漿

文政五年三月、市村座。作曲者杵屋六三郎。市川門之助七

變化所作事。

西王母

作者 瀬川如臈

本調子桃李物言は下自ら市をなす、四季折々の時を得て、潤ふ春や三千年に、生るてふ桃の花盛り千歳送迎ふる年月は源太郎數へも果てぬ千代八千代、天津空

にも戀と云ふ 喜八「結ほれ草や浮草に、番の鴛鴦の岩枕、
四澤に満つる春の水、絲遊色も可愛らし「面白や折しも
彌生の花の曲水、粹な盃數々に、流れ廻りて岩角に手先
づ遮る水も温むや、御溝の水に近きは川竹吳竹の、竹に
生る、鶯の合ほうほけきやうとも囀るべいと、梅を見
捨てて隣歩きや桃の花 合雲の花鳥春風に合絲竹呂律の聲
澄みて「天の通ひ路少女の袖も、桃の媚ある三千年の、
齡捧ぐる大君の、今この御代に住める民こそ豊なれ」。

藪入娘

三下リ「花見時空晴渡る青傘に合積る吹雪か山櫻、雲の袖
裏緋の色映す花の姿の八重一重 合目許眩き御所櫻「戀の
重荷は露持つ花よ、それはさうかえ合焦るゝ人の手折
らば嬉し、散らぬ内エ、合しよんがいな、浮れ「て
霞の間より、見初めし色の花心 合「梅を忍びて櫻が許
へ、通ふは憎い匂ひ鳥 合移り香散つて朝露に、濡れた袖
ならせう事がないわいな 千懸「仇なりと名にこそ立てれ
櫻木の、初花染の戀ひ衣、思ふ身幅の逢ふ事違ふ 源太郎「
無理を結ぶの神様へ、愚痴な縁言巻返し、又繰返す我が

イ「ソレドウ「合「どうなとせはつばらめと唄ひ
来る源太郎「ヤア思へどならぬよ ッレ「ても見事な品者め
合ちよつと腰掛け一服の合煙草も薫る二人連れ、睨んだ
雲が附纏ひ合セリ「乗つて行かんせ酒手ぐるめの拳固で
やると、くどく言ふのを聞捨てて、歩む跡から手を叩き、
一文せがむ口拍子 合お家様旦那様、一文やつて下されま
せあるのないと仰しやる様な、御仁體ぢや御座りまん
せん、御結構な御参詣と、せがまれて財布の口の切離れ
乗地に浮いた相の手は、お杉お玉が弾く三味よ「相の山
から鳥様紺様花色様、これなく「晩の約束忍ぶにつらや
「殿さエ殿さ來べいとて脊戸のな小窓を細めに開けて開
けて待つ、忍ぶ田圃道やあじよだもさセリ「サアサその
氣で張込め「此方の思ふ程先や知らぬ 喜八「待つは
憂いもの面憎や、他所の姉さアと寝くさつて源太郎「又も
ちくべいぶん抜きやる、エ、腹の立つ何としようか、ど
うしようかいな「恨は知らでうっかりひよんな野良男合
隣歩きの酔醒めに合花野で暮す上の空、お前とならばヨ
何處「迄もヨ「松に下り藤や取附き引附きしんがみ附

思無五郎「そつと扇の窓の内、垣間見えにし面影は 喜八「
目に月影の宵を待つ、化粧化粧も何處へやら、胸の鏡の
包むに餘る源太郎「文の返事の幾度か、心で讀みて現ない
ぞやそれや片時も、忘れよものか蹴られて 喜八「恥し
ながら嬉しさを、聞かぬ振する耳にさへ、紅の色添ふ花
娘 合方「離れじと番の蝶の比翼紋 合方影と日向によれつ
纏れつ 合方「岩の小蔭にひらり己が羽風にくるりくる
「「扇車のまはれ「くるりくる「「合面白や
合「梅の合花笠色絲附けて合品よき振の枝垂梅合それさ
これさ廻るは風の手毬梅、くるり「合引くや車の病葉
に、悋氣の雨や袖濡れ「て 合相合傘に夜の梅見て移
り香の、言譯暗き闇はあやなし梅の花一重開けば七重八
重、のつと山路の朝日梅「月雪花や初時鳥、此處ぞ司の
名も高尾山、眺は四つの紅葉榮えて。

馬追

二下リ「跡の立場に馬引捨て、煽る酒手の一杯機嫌、浮れ
上戸の稚な唄「竹にサア雀はナアエ 合品よく止るナアエ
止めてサア止らぬヤンレナエ色の道かよナアエセリ「ハ
くよに思へどもナア、やんれてこヤアほんやらな、擬子
でちよいと行きや何の事はね合其處らで若い衆頼みます
中の「綱からこんへもしよ、これなアどてすべかちや
ん「尊いちやアねえか「やつとこせよんやサ「道草喰
うて髻髪子の馬に小附けは花の家苞。

〇おとづれ

文政五年十一月、森田座。作者吳山。作曲者杵屋作十郎。
本調子「許しなき人こそつらし文字の關合歸るか行くか雁
の合便を松の下時雨「濡れし袂や領巾振るの、泡沫ゆか
し合文の音信。

〇男帯

文政五年十一月、森田座。作者吳山。作曲者杵屋作十郎。
二下リ「解く事の合何時とは知らで新し帯、結びし縁も名
ばかりに合まだ綻びぬ室の梅「香やは隠る、袖香爐、そ
の振袖の末留めて、契は長き玉椿、千代に八千代に變ら
じと、女心の戀の慾合二人寝る夜の睦言に、鐘も恨まず
物かはと、鳥も憎まぬ長枕、ほんに嬉しき夢や合結ばん。

○外記節 猿

文政七年七月、杵屋三郎助作曲。

地ち一い罷出でたる某は、すんど氣輕な風雅者、日がな一日
小猿を脊せなに脊負ひ繋けてナ、姿如法やなん投頭巾なけづきん一い夜さ
の泊よまりは、合何處あつこが泊よまりぞ、那波か名越か合室あむろが泊よまりぞ、一い泊
を急ぐ後より地ち小猿廻せや猿廻し、オ、イ、と招かれ
て、立歸りたる半町餘り、立關構へし門の内、女中子供
衆とりふに、所望の言葉の下さるの小舞を始めけ
り一いヤラめでたやく、ナ、君が齡は長生殿の、不老門の
御前を見れば、黄金の花が咲きや亂る、合且那の御
前でお辭儀をせ、ころりと合ころりやく、やつころりと、
子持寝姿御目こもちねすがたにかけやすつても粹すいな品者め一いこれは浪華
にその名も高き、瓦橋とや油屋の、一人娘にお染とて、
年も二八の戀盛り合内の子飼こごいの久松と、忍びに寝油
を、親達夢にも白紋りサア浮名の立つは繪雙紙ゑごうし一い松
の葉越しの月見れば、暫し曇りて又牙ゆる地ち月は片割れ
宵の程、船の中には何とお寝るぞ、苦を敷寝の楳枕、飛

驛ざいの踊は一い踊り二上り一い五月五月雨苗代水に合裾あすそや袂たもとを濡
してしよんほりくと、植うゑゑいと、早乙女さといめ一い實けに面白や
踊が手元、辰巳午や春の小馬が鼻を揃へて参りたりと、
二上り一い猿さるに烏帽子くろぼしを着せ参らせて、勇む神馬じんまの手綱
取らしよ、手綱取らしよのんほのふいよえ木調子きてうし一いの幣
立て二の幣へい立て合猿は山王まさるめでたき、合獅子と
申すはすみくすみくすみ住吉八幡普賢文珠の召
されたる、猿と獅子とは御殊勝のもの、アレ音楽の聲諸
法實相と響き申せば、地より泉が相生して、天より寶が
降りたる、尙千秋や萬歳と、俵を重ね面々に、樂しうなる
こそめでたけれ、樂しうなるこそめでたけれ。

○復新三組蓋

文政七年九月、市村座。作曲者杵屋六三郎。坂東三津五郎
所作事。外題角書に「所作、改名の延壽齋が御目見えを祝
して」とあるによれば、初代清元延壽太夫延壽齋と改名を
祝したる出し物と思はる。

傾城 (初雁の傾城)

一い初雁に一言つけて玉章を、筆の禿に身をそめて、ねむ

りならひの夕ゆふより合一松は紅葉になびきあひ、露は桔梗
にあひどこと、だいて名古屋の帯二つ合かけし屏風にも
る風も、身にしむはだに書く文字を、さまとほらぬが勿
體なうて、胸で拜んで引締めて合一いやれて嬉しき枕がみ
朝の別れに口紅の、うすくなるのをなぶられてエ、一い
ろづくえ一い色といふ字をいつ書きそめて、はては廓くわくの口
癖に、うそも誠に散し書、しんき白紙面白さうに、浮氣
な夢を結び文、それが戀やら色ぢややら一い土手の千草の
露一い送り迎へに昇く駕籠の、たれであらうとしてこいさ
合立てる立てぬの息杖の、意氣地からむ葛かづら、長
い月日に縁を待つ、さうぢやい、恥かしや一い暮れて差
込む櫛子の月が、誰をのぞくかあれ螢火かエ、きりく
す、同じ籬にすが、きの、いと薄や音もゆかし一い袖に
残りし移り香ばかりを忘れかね、通ひくるわの八文字。

大山参り (清元)

雀 踊

一いヤア千代のはじめの一い踊、雀踊が所望ぢや、がつてん
か一い秋草の思ひにつれて咲亂れ、繁みにすだく蟲の音も

戀の道草踏分けて、色に染みかア、思ひぐさよ何とせう
一い花笠や笠にうはきの花の雨、濡れて一夜の惜し明方に
宵の口舌の今朝うき別れ、コレ待たしやんせ一い私やお前
に二世かけた、男ほしさに打附けて合いうたせうがにや
どこ迄も、こちやもらをぞえヤツト、誓文くつされそり
や櫛かみの葉のあつかまし一いそれも人目の跡や先、嗜んで見
ても情なやエ、そつくりと沖の石、人こそしらねあつか
はな、古手はよしに品物め、一い一つ夜着きて二人寝た、
夜は扱にくからぬ、風にみゆきの白粉とけて、りんきし
ののめあれ朝鳥、かはいくと啼いて別れて其の明けの
日は、なんのかのなき薄化粧、いはれたものぢやないわ
いな一い花の三つ組色まして、四方の眺めとなりぬらん。

○廓三番叟

文政九年正月、作曲。杵屋六三郎。

一いとうくたらりくら、たらりあがりららりとう二上り
一い千早振袖禿迄、その通ふ神昔より、久しかれとぞ願ふぞ
よやいちやどんどとや名ある末社に愛想の、凡そ千年の

鶴は、仕着の刺繡に留めたり、又萬代の池の龜は、床に三
盃の高時繪皆瀧のみは冷々として、夜の交際鮮に合浮れ
たり、朝の日の流連に潤す合てんと堪らぬ此處ぞ安心に
君を命と痴話やする一差差さう満座の中へおさへく喜
ありや、我がこの盃を外へはやらじと面白やへ向の人に
思ひ差し、嬉し顔なる鼠泣き合酔うた振して袖の梅、春
を告げ鳥微笑む聲の合笑ひ上戸やそりや華魁と威され
て、お、恐やつ引過ぎの船漕ぐ内に、後朝告げる鴉飛
合へあゝら物に心得たるアドの太夫さんにそつと忍んで
申さうよへ丁度寝入つてさへもしこのお文へ後と仰せ候
程にと読みかけて、今宵の首尾を待つぞえへ仰の如くこ
の情を立てる何より安けれど、先づ太夫さんのあの許へ
へサア便聞いたらその後座敷へ行くわいなへ否々おいで
なうては参るまじへ只一走り拜むぞえへまアあの方えへ
あゝらやうがましや内所の鈴の鳴る前にへ此方こそ合來
るかへと待つ辻占に合土手の四つ手の聲ゆかしくも、
櫃子迄出て呼子鳥たづきも知らね憎らしさ、アレ心なの
月の冴、浮いて寝られぬ船底枕、いつそ浮世ぢやないか

に乗せられて鐵五郎へ文も堅田の片便り心矢走のツレへか
こち言へ松を植よなら有馬の里へ植ゑさんせ、何時迄も
合變らぬ契搔取り棲で、よれてもつれつまだ寝が足らぬ
よい寝枕の、まだ寝が足らぬ藤に巻かれて寝と御座る、
ア、何としようどうしようかいナ私が小枕お手枕へ空も
霞の夕照に、名残を惜む歸る雁がね。

座頭 (清元とのかけ合)

(關三の座頭、又は、ヒヨツクリの座頭)

淨るりへひよつくりへひよつと罷出でたるやつが
れば、色にも酒にも目なし鳥、どつこいさうは虎の皮、
まはしの端は取られても、戀の手取のやさ法師、なかへ
その手ぢや参るまいへわるじやれナへ梅に驚垣に朝顔、
按摩針まんざらのいた中ぢやない一番角力で参るべい、
引すて負ひ投げ内無雙、獅子の洞入り洞返りエ、畜生め
と負けばらで、追へどたへどくるへと、ア、ほつと
したエ、まよ、外に廻るはなんであるへさやを廻ろ
か桑名を乗ろか、心二見の沖の石、かはく隙なき合雨の
宮やら風の宮淨るりへ千早ふる市手拍子揃へへまはる音

いな、思ひ草あゝ現なの戯れ事、賑ふ家の四季染に、月
雪花の三つ蒲團合廓の豊ぞ祝しける。

○歌へすへ餘波大津繪

文政九年九月、中村座。作曲者梓屋六三郎。關三十郎五變
化所作事。

藤 娘 作者勝井源八

三下りへ津の國の合浪華の春は夢なれや、早や二十年の月
花を、眺めし筆の彩も合描盡くされぬ數々に、山も錦
の折を得て、故郷へ飾る袖袴伊三郎 鼓へ若紫に十返りの
花を現す松の藤浪へ人目堰き笠、塗笠しやんと振擔けた
る一枝は合紫深き水道の水に、染めて嬉しき所縁の色の
合愛しと書いて藤の花エ、合しよんがいな、裾もほら
へしどけなく合へ鏡山人のしがよりこの身のしがを合
願る目のしほなき海に、娘姿の恥しや伊三郎へ男心の憎
いの、外の女子に神かけて、粟津と三井の約束も小四郎
へ堅い誓の石山に、身は空蟬の唐崎や、待つ夜を他所に
比良の雪暮れへ解けて逢瀬のあた妬ましいようもの瀬田

頭の二節は淨るりへ花に置く露へ小笹の霰淨るりへこほれ
やすさよへ我が涙淨るりへよんやサへよんやナ淨るりへ
またしてもしつこい、杖振上げて打たんとせしがイヤ
へこれでは行かぬと氣をかへてコイへへこ
れわんぢやいなそのやうに、わしをじらすが楽しみか、ぬ
しの毛色のよしあしは、目には見えねど初雪や、その足
跡の梅が香のへもれて慕ふも嬉しさの、聲で聞きしる
わしぢやものを、あんまりむごいと寄添へば淨るりへざれ
て添寝の仇枕へぞめきも通ふ紙砧合へ月に浮かる、
拍子どり淨るりへ身嫁ふる、よめ下女をふる、下女はナア
エ釣瓶の繩をふる、すいとこきや、いつかな構ふ事はねえ
へわしが願ひが叶ふならば合今の浮世に一人寝せず
寝もせまい淨るりへすいとこきやいつかな構ふ事はねえ淨
るりへせまい浮世ぢやへな淨るりへいかへいな淨るりへ我
等も浮れ座頭の坊チャへへまたまたわるじやれめが
杖と笛、盲さがしの身は四つばひ、跡を慕うて走り行く。

本調子へ秋の田の刈穂の庵の苦を荒みへ我が頼む人を空

しくなすならば イ本 合群來る雁の墨色よ、空に數書く
合飛礫、文字里の童の愛らしく囁す小唄の一節にアあの
山見さい 合この山見さい 合盛りの花か紅葉の錦霞の衣に
引替へて、切の籬に 合返咲きアばつと開くは紅白の、梅
に星見る 合宵の程、色も香もある心より 合戀には汝も忍
の亂れ 合限知られぬ憂き世の中よア、夢か現か 合叢雲に
ア烈しき風の松に響きてむらゝ時雨、翳す袖笠肘笠
に、行交ふ人も同じなる我が衣手は露に濡れつゝ。

奴 關三の奴

二上ア振つて振込む大鳥毛 合足並揃へてまかしよとな
ん、ありやんりやゝこりやんりやゝサアサよやまか
せエ、脇寄れ 合宿入り下馬先合點か派手な道中華魁達
の、外八文字に引替へて、裾はしつかと緋ぢ梨け、オ、
恥しの肌自慢、晩にや女郎衆に投げられな、ひらりと受け
て見事にさ、戀にや抜目も何のその 合浮れ拍子の伊達な
行列ア軒には三輪の杉印、槍の穂先ににゝゝ者よ 合手
許品よくくると振つて、石突しやんと 合持送り 拍子ア
酒機嫌伊三郎ア主のさ 合主の三階松の枝は千代にッレア

トサテナ伊三郎ア千代に八千代の舞の袖ッレアサアサつる
だんべ伊三郎アこのしよんでこえ伊三郎ア君は三夜の三日月
さんまよのッレア宵にちらりと見たばかりこれ申しゝ
此處な仇者めと言ふちや何でも此奴は此方からちよいと
仕掛けてやりかけ合エ、ひぞつて抓るかあいたしこ合
現なやア見よならゝそれ見よなら常磐の松よ 合千歳結
びて 合操の色も合變らで君に磯馴松とんと垣らば 合首尾
の松 合やつこののゝこの小松さつさ 合とても濡れよ
なら時雨の松よそれさ合それさそれゝそつこで濡れた
らどうとも 合志賀の松 合ア名残は盡きじ萬代の龜は君達
何時迄もア我も歸つて此處に礎。

船頭 (清元)

○月雪花蒔繪の卮

文政十年三、市村屋。作者櫻田左交。作曲者杵屋六三郎。

月の巻

木罫子ア野路の玉川萩越えて、色なる波と詠人の、俊頼卿
に引かへて、いざよふ月の品者に、冴えた仕丁の出立榮

伊三郎ア水の鏡に影宿る、姿を此處に狩衣のア主やゆかし
と振袖に、包む思のとけしなく、結ぶの神へねぎ事をア
掛け奉る白張に、烏帽子も氣軽ささく者、今日のお出で
は紺屋の使、とはどうでんす、色の事ぢやと取つてゐる
オ、さてそんなら明後日か、ハテさうであらうかいな、
忍び詣の歸り路も 合隈なき夜半に 雁の、薄墨に書く玉
章と、誰が夕紅葉織映えて、秋野の錦色々の 合色を染め
なす龍田姫 合姿もさぞな朝顔の、差手引手に小車の、花
を廻らす舞扇 合返す袂をちよと男郎花、何を紫苑の仇心
合萩の浮氣につい招かれて 合薄に露のこほれ萩 合羨し伊
三郎 ア千草結びにこちやよい殿と、縁定めて二世掛香の
嬉しさに孝三郎ア長柄の蝶の妹脊事、何時かゝとその鯛
を合ア待つに松蟲遺瀬がなうて若しや夢にも君蟋蟀と 合
五郎 ア中で螢の焦れて稻子蠶蠶ア寝もせで賤の遠砧二上
井手の山吹蛙が颯る、サツサそつこでどうぢやいな 合廻
る津の國卵の花香る、月が鳴いたか時鳥、武藏が調布野
路の萩、野田に千鳥よそれ高野ぢや 合飲めぬ水ア鎌倉見
たか江戸見たか、江戸は見たれど鎌倉名所はまだ見ない

合派手な振袖それそつこが花ぢやものアエ、其方ら迄憎
らしい合てもさつても和御寮は、誰の神の御胤にて、天
官 蠶をしやんと着て 合踊る振が見事え、吉野龍田の花
よりも、紅葉よりも戀しき君が殿造り、萩の枝折を知邊
にて、いざやとあるを留むる袖振り、桐原の駒ならで心
の手綱一筋に、月の玉銚跡にとほんと、これやどうぢや、
彼奴一人で取持ちを、科戸の風に入船は、しかも常陸
の鹿島浦、コレワイナア今年や世がよい豊年で、米が十
分色事も合ほやれほ穂に穂が咲くといな、オヤモサゝ、
ヤア、對の定紋どうしたへうりの瓢箪で合ヨイゝ戀を
知ざる鐘撞く野暮めは西の海、ヤレコレ其處らでこれわ
いなア可愛がられた竹の子も、今は抜かれて斜かれて、桶
の籬に掛けられて締められた伊三郎ア締めろやれアやれこ
れ其處らでこれわいな 合面白やアその戯れに興まして、
又明日も來ん名所の眺に飽かぬ風情かや。

○拙筆力七以呂波

文政十一年三月、中村座。作曲者杵屋三郎助。中村芝翫七

變化所作事。

傾城 (戀傾城、又は、芝翫の傾城)

本間子「戀と云ふ文字の姿を判じもの、解けて思の種となる、鐘は上野か浅草か、その約束を待つ宵の、風も浮氣な仲の町孝次郎「根こじて植ゑし合ッレ「初櫻つい移り氣な色も香も、止めて素足の八文字 合昨日の夢もそれなりに、袖に疊んで袂に忍ぶ、間夫の名宛を結び文合し」と書いて又返す「も筆に言はするは八重山吹を、投入れ床へ差込む臘月、櫃子迄來て行く雁に、ちよつと恨を言掛り孝次郎「言葉縫れて胸づくし合鶏の鳴く迄待たせて置いて、何處の女郎めとしけりくさつて 徒な 喜八「エ、手管がじやれか、そんなその野暮な口説は奥二階、禿が目くばせ吞込んで、味な素振の宵の客孝三郎「傾城の誠と雪に黒いはないものぞいの孝次郎「まだ言はんか仇口と合ふつつり抓れば振切る腕 ッレ「障子襖に訪れて 合廊下を滑る上草履孝次郎「櫛簪も何處へやら 喜八「戀諍うて互に思の増鏡 ッレ「わりなき仲の戯れや三下り孝次郎「風薫る合袂も輕き夏衣乾すてふ色と疑うた岸の卯の花咲くにつけ、

初音待たる、時鳥 ッレ「よい「よんやさ孝次郎「よんやさ 喜八「アレ聞の戸をほとくと、叩く水鶏に騙されて合枕も取らぬ蚊蠅の内、明けて辛氣な鵜飼船ッレ「よいよいよんやさ 喜八「よい「よんやさ ッレ「秋の三日月隈もなく合晴れて逢ふ夜の月の顔 合言ふも恥し廿日の月の残るのを合曉迄も待明す長月や「雪の肌の面はゆく、雲か霜の薄化粧、通ひ廓を見返りの、二本柳時雨れ「て。

ごみ太夫 (常磐津)

供 奴

二上り「してこいな合やつちやしてこい今夜のお供 合ちつと遅れて出かけたが、足の早いに我が折れ、田圃は近道見逸れまいぞよ、合點だ合振つて消しやるな臺提灯に、御定紋附でつかりと、ふくれた紺のだいなしは、伊達に着成したやつこらさ 合武家の氣質や奉公根性、やれさていつかな出しやしない 合餅や 戦 踵や臍に、富士の雪程あるとても、何時限らぬ 合お使は缺かさぬ正直 合正道者よ脇寄れ 合頼むぞ 合脇寄れと急ぎ廓へ 合一目散、息を切てぞ駈着ける「俺が旦那はな廓一番隠れない「、

丹前好み花車に召したる腰巻羽織きり、としやんと、しやんときり、高股立の袴附き、跡に下郎がお草履取つて、それさこれさ 合小氣味よい「六法振が孝次郎「浪華師匠のその風俗に似たか孝三郎「似たぞ似ましたりさて「ッレ「寛潤華麗な出立「おは文字ながらさる方へ、ほの字とれの字謎かけて、解かせたさの三重の帯、解けて寝た夜は許さんせ、ア、ま、よ浮名がどうなると、人の噂も七十五日、てんと堪らぬ 合小褌取りやつたその姿 本間子「見初め見初めて目が覺めた、覺めた夕の拳酒に 合ついつい「「「「差された杯はりうちゑいばまでんすくわいと 合言つて拂つた合はつた痲癖ちり「身柱、亥の目灸がくつきりと合捻切りお尻が眞白で、首掌のしつかと握つた石突こりや「「合成駒屋つとこよんやさ 拍子合方「浮れ拍子に乗が來て、ひよつくり旦那に捨てられた、狼狼眼で提灯を、點けたり消したり點したり、揚屋が門を行過る。

乙 姫 (富本)

浦島

添削舟屋三郎助

三下り「和田の原 合波路遙と夕風に、龍の都を出汐の 合寄するも八十の浦島が「跡に引る、戀ひ衣 合濡る、も夢と父母に法地の海の船唄や 喜八「沖の洲崎に 合蟹の小舟が誰戀風に 合一人焦れてよんやさ、ゆたのたゆたのしよんがいな 合磯邊離れて木曾路山、寢覺め心に迎來る 二上り「袖に梢の移り香散つて 合花や戀しき梯の 合さつと吹來る春風に、霞が生める初櫻、花の色香につい移り氣な、茶種は蝶の露の床 喜八「忘れかねたる比翼の蝶の 合情比べん徒櫻孝三郎「雪か 合雲かと峰の花孝次郎「せめて香の便もがなと思暮して 喜八「戀すてふ ッレ「空定めなき花曇り「うつ、白波 合幾世か戀に 合馴れし情も今ではつらや獨り寢のほんに思へばさりとほく、昔戀しき波枕うたてさよ「實にや七世の波路を越えて、蓬が浦の浦島が、盡ぬ契を語るいへづと。

瓢箪陰

(常磐津とのかけ合)

作者 瀨川如臈

淨り「筆に戲繪のたはむれや 合どつこい締めたぞ合しやんとこい「汝元來 合地震の孫ひこやしやごか、きし

やごか合しやくな身ぶるひ合鹿島の神の御夢想相傳受
 けて抑へる合よもやぬけじの合瓢箪ほつくりこ唄ほつ
 くり抑へて合ぬらりと抜ける合ぬらりほつくり合ほつ
 りぬらりと抜けたは合おかけの伊勢参り参り唄裸で道中
 雙六の合泊りは沼津わりや鯨髭が看板顔見せの、愛敬入
 道ぬれ坊主、ぬれはきしがた池の中、友朋輩の鯉鮒や、
 すつほんどん龜踊子の、鱈の合あてぶりうき拍子唄唄う
 は氣のんき川せり、春ながらまだ合ぞつとした合風は
 鯨のひれしぶき参り唄お寒からうと吉田屋の喜左な花色
 もみくちやな羽織似合はぬ大盡氣取り、鯨にいでは此
 胸が唄唄さめぬ心の内にもしばし、のむは由縁の合茶碗
 酒参り唄まだおさへのお手許は、しつこい飲手ぢやな
 いかいな、いゝや逃がさぬ昔もかゝるし例有り唄唄仙臺
 のく大川普請のあつた時合鯨一疋とらまへて、行水さ
 せて髭抜いて合頭中かぶせて袖無し羽織、青傘さ、せて
 飴賣りに合小唄踊りて出したれば合土平と名を附け評判
 男参り唄辻や町々お子さま方が合どちら向いても合土平
 くくと合土平というたとなぜ腹立ちやる合コノよいよ

いゝ合よいとまかせて小手がらみ唄唄かひなもちつて
 掴めばすべる参り唄抜ければ押込む後家ざやに唄唄合は
 ぬ相撲の参り四股ふみならし唄唄瓢箪鯨の根くらべ参り
 唄をかき珍し阿呆らし唄唄笑ふ烏あさとんび参り唄かけ
 たか唄唄逃げたか参り唄雲かすみ 両方唄外へはやらじと
 追うて行く。

石橋 (芝翫の石橋)

鼓唄唄それ十萬里の浪立つて、伯禹の跡を残し、二千歳
 の石橋となりんたり三下り唄雲覆ひかゝり苔むして合渡せ
 る長さ三丈餘り面は尺によも足らず、谷のそくばく深う
 して合向ひは文殊の淨土にて合紫雲たなびき常に世外の
 花降りて、笙笛琴篋篋聞ゆべき目前の奇特たえなりや。
 唄暫く待たせ給へや影向の時節も今幾程にもよも過ぎじ
 唄面白や巖岫々たる岩石に、牡丹の花の咲きみちて、夕
 日の雲のあかねさす富貴の色や深見草唄戯れ狂ふ合蝶の
 翼のひらりひらりくるりくるり合清涼山の峰高み、
 おのが友呼ぶ合獅子の勢唄花を目がけて背をふるひ合苔
 滑かなる石橋を、彼方へ飛退きこなたへ走り唄獅子圍亂

旋の舞樂の砌、牡丹の英にほひみちく大筋力の獅子
 頭打てや囃せや牡丹芳く唄黄金の藥あらはれて、花に
 戯れ枝に伏轉び、けにも上なき獅子王の勢ひ、靡かぬ草
 木もなき時なれや萬歳千秋と舞納め唄萬歳千秋と舞納
 め、獅子の座にこそ直りけれ。

〇めりやす 水かどみ

文政十一年六月、河原崎座。作曲者杵屋勝五郎。

唄とにかくに男の胸の解くに解かれぬ元結も、結うてか
 けたる解き櫛に合鬢のほつれのはらくと、袂に夏の雨
 催ひ唄曇る鏡に映して見たき心の内を合誰に晴れなん果
 しなき合涙の露の後毛もくどくとして萎る夕顔。

〇八重霞賤機帯

文政十一年六月、作曲者杵屋三郎助。

本調子唄名にし吾妻の隅田川合其武藏野と下總の眺隔てぬ
 春の色、櫻に浮ぶ合富士の雪合柳に沈む筑波山、紫匂ふ
 八重霞合錦を此處に都鳥、古跡の渡なるらん唄春も来る
 空も霞の瀧の絲、亂れて名をや流すらん唄笹の小笹の合

風厭ひ合花と愛でたるうなる子が合人商人に誘はれて合
 合行方何處と白木綿の神に祈の合道尋ね合浮きて漂ふ岸
 根の舟の合焦れく唄いざ言問はん我が思ひ子の合あり
 やなしやと狂亂の、正體なきこそあやなけれ唄船人これ
 を見るよりも、よい慰と戯の合氣違ひよくと手を
 打叩き合囃すにぞ唄狂女は聞いて振返り、ア、氣違と
 は合曲もなや唄物に狂ふは我ばかりかは合鐘に櫻の物狂
 ひ、嵐に波の物狂ひ、菜種に蝶の合物狂ひ合三つの横様
 を刺繍にして、愛し我が子に着せばやな子を合綾瀬川名
 にも似ず、心關屋の里離れ合縁の橋場の土手傳ひ、行き
 つ戻りつ合此處彼處合尋ぬる我が子は何處ぞや、教へて
 たべと夕汐に、船長尙も拍子にかゝり唄それその持つた
 る掬ひ網に合面白う花を掬ひなば合戀しと思ふその人
 の、在處を教へ参らせん唄何面白う花を掬へとか合いで
 く花を掬はん唄あら心なの川風やな、人の思も白波に
 合散浮く花を合掬集めん心して吹け合川風合沖の合鷗の
 ちりやちりく、むらく唄ばつと亂る、合黒髪取上げて
 結ふ人もなし唄船長今は氣の毒さ、何がなしほにと立上



り二上りもさても和御寮は誰人の子なれば合何程の子
なれば合尋ね彷彿ふその姿、見る目も憂しと諫むれば
音頭くと戯の、鼓の調引締めて合羯鼓を打つて見せ
うよ一面白の春の景色や筆にも如何で盡くさん霞の間に
は樺櫻雲と見えしは三吉野の、吉野の川の瀧津瀬や一風
に亂る、合絲櫻合愛し可愛の合稚兒櫻、慕ひ重ねし八重
櫻、一重櫻の花の宴、愛しらし一千里も香る梅若や一恵
を仰ぐ神風は今日ぞ日吉の祭御神樂君が代を合久しかれ
とぞ祝ふ氏人。

○角兵衛のちの月酒宴島臺

女太夫 仕事師

文政十一年九月、中村座。作者瀬川如臯。作曲者杵屋三郎

助。通稱「角兵衛獅子」常磐津とのかけ合。

淨瑠璃「神樂囃して町々廻る合同じ世渡り合梅咲くや唄
笠の内さへ覗かれて、人も見送る愛敬は、てんと合おて
んと天から落ちた合天人か淨瑠璃「わつちや嫌やの何馬鹿
らしい合とても色にはこんな身で、成駒屋ならそれこそ
は合「此方も首だけ濱村屋廻らしやんすな合世は情合旅

ぢやなければ道連れに、なるとはなしの合後や先淨瑠璃「
ゑつちり越後の合山坂越えて合来て見りやほんに合江戸
の花、何時も黄金の合眞盛り唄「花に浮れりや咽喉さへ
乾く合酒がな欲しやさりとては合まだくイヤハよいと
なく獅子の洞入り合洞返り合すめぢや互の思ふ事淨瑠璃
「岩木ならねば恥しの、森の鳥か驚ならせめて、一つ塙
にオ、嬉し唄「待ちな町々御最負の、若者育てる通り者
捌くは年の高麗屋、宵の仲人の合花に酒持せて、奥へ走
り行く淨瑠璃「こんなぶざまの眞實は、お前のお氣に入り
たさの、蟻の思も天とやら、どうで女房にやならぬけ
れど、せめて優しいお詞に、あまた女子ぢやないかい
な唄「言うてもおくれな月方の、田舎者ぢやとお騷りか
合思比べをせうならば、浅間の煙と煙草の煙やにはに惚
れた合正直男淨瑠璃「又嘘らしい眞顔で人を適も唄「ほ
んにさうなら山の奥淨瑠璃「千尋の海の離れ島唄「二人暮
さば都も同じ淨瑠璃「嬉しい世帯であるぞいな唄「あるは
嫌なり思ふは奈良の淨瑠璃「木賃の宿さへまだ取れぬ、遊
過して唄「風引いた合「うつかりのろさのお恥し淨瑠璃「

八百八品淨瑠璃「八百八町御最負の唄「お恵み願ふ淨瑠璃「
お取立て 両方「仰ぐ舞臺ぞ千代の壽

○六玉川琴柱の雁

文政十二年正月、河原崎座。作曲者杵屋六三郎。

ほんにちやかした獅子舞さん、わつちもそんなら地廻り
の、傳法肌でひやかしの「親兄弟に迄見放され、赤の他
人の傾城に、可愛がられう筈はなし獅之頭「オヤ聞いた様
だよ唄「籬の清搔合せつかいで合「搔廻したる合てんで
つ飛んだ間夫と客淨瑠璃「徒な戀路の色里通ひ、夜は軒端
に立盡し、エ、待つわいな合無理な首尾して逢うたが憎
いかえ、さりとては戀には粹も愚痴になる、これはごし
きの色の外唄「新發田五萬石荒そとまよ、新潟通ひが
止められよか「氣作悪性が浮世にや徳で合ねまり地藏へ
色の願、跣足参りの合土ふます淨瑠璃「内の合内儀殿痛癢
抑へて合夜間も晝間も三度栗唄「さのせ合さのせのせつ
せのせせつたら黄粉の合稗團子ついて欲し淨瑠璃「沖のエ
沖の題目波に浮んで合風に揺られて唄「朝日に輝く夕日
が棚引く淨瑠璃「南無妙法蓮華經唄「南無妙法蓮華經淨瑠璃
「あじよだか當世捻りが流行る合客と女郎衆の機嫌氣稜
も逆竹唄「幸濱三里を乗るとても淨瑠璃「米山三里を乗る
ものか唄「様はナハつ目のある鰻の性で淨瑠璃「ぬらりく
らりと合氣が多い 両方「國の訛の笑ひ草唄「身の生業は

「それ風雨とめて青空の、南に開く梅が香や、かつと
朝日の初霞、江戸紫の位山、高光たるこそゆゆしけれ
見あぐる方は山城に續く津の國花待ち得てぞ近江なる合
その陸奥の野田近く武藏にきほふ紀の國も、寄せて名の
るや花の春「幾千代の詠めはいつし變らねど、わきて嬉
しき年月や合思ひこめたる竹の代々、並ぶ二葉の松にま
つたる松の色合枝も榮ふる若緑、仰ぐにあかぬ時を得て
開く扇の要石「かくれ渚の潮満ち来れば合松の磯馴に打
ちかけの、餘勢も深く見かへりて合親の敵祐經と行かん
とせしが「待て暫しわが心二上り「いとに寄せぢや晒しの
や、晒す垣根の朝露に、ぬる、袂につや浮きて月も雲間
の袖の内「消えて跡なき風がつて、衣打つ音や夜なく
「ま見えそめしは昨日今日、つきぬ縁とてまた近江萩唄

いひたい事も山吹の、言はぬ色なる身のつらさ「せめて
うらみて陸奥の、鳴いて千鳥のわが思ひ、汲みやしつら
ん玉川の水。

○御歳玉海

老手遊

文政十二年正月、

河原崎座。作曲者

杵屋六三郎。通稱

「とんび奴」

「一聲は彼奴が鳴い
たか 合初鯉 合羽を生
じて合飛ぶといふ譬
は聞けども目前に見
るは始と跡追うてや
つこらさつてもこれ

やどうちや「返せ戻せも何のその空吹く風的面憎や 合傳
へ聞く唐の楊弓とやら云ふ人は雲井の雁を射て落す 合頼
政殿は鶴を射る我も武士の橋詰で夜鷹は手のものアノ鳶

長	芳村伊三	三	持盛	住田勝海
唄	国富嘉代八	唄	持盛	住田勝海
	寄田吉太郎	唄	持盛	住田勝海
		唄	持盛	住田勝海

江戸長唄集
舟二番目入
河原崎座
小川半助

と云うても弓矢に事を缺き邊尋ねて 合釣瓶竿セリ「これ
もんに構へて一つ晝中二つ不届き三つ見捨てて行かれ
うものか合いつそ移して手取りに抑へて合さつくれべい

「鳶とろゝや棟上の

餅がほんに廿四五足
らぬと言うてそれこ
せ合點ぢやよいく
よんやな躍りかけて
ぞ跡を慕ひて走行く

○吾妻八景

文政十二年四月、

作曲者杵屋六三郎

作。

木調子「實に豊かなる
日の本の、橋の袂の

初霞、江戸紫の曙 染や 合水上白き雪の富士、雲の袖な
る花の波 合自許美し御所櫻、御殿山なす人群の、薫に酔
ひし園の蝶、花の翳を垣間見に、青簾の小舟聲高輪に 合

二より「遙か彼方の 合時鳥、初音かけたか羽衣の、松は天
女の戯れを、三保に譬へて駿河の名ある臺の餘勢の彌高
く、見下す岸の筏守り、日を脊負うたる阿彌陀笠、法の
方への宮戸川流れ渡りに色々の、花の錦の浅草や、御寺
を他所に浮れ男は、何地へ外れし矢大臣、紋日に當る辻
占の合松葉 簪二筋の、道の碑露踏分けて、合む矢立
の隅田川、目に附く秋の七草に、拍子通はず紙砧 合三下り
「忍ぶ文字摺亂る、雁の玉章に 合便を聞かん封じ目を、
きりの渡に植さす舟も、何時越えたやら衣紋坂 合見世清
搔に引寄せられて合つい流連の朝の雪、積り積りて情の
深み、戀の關所も忍が岡の蓮によれる絲竹の、調懐しき
浮島の 合形なす許にももりせば 合「樂の音共に東叡より
も、風が降らす花紅葉、手に手合せて貴賤の誓ひ辨財
天の御影もる池の邊の尊くも廻りてや見ん八つの名所」

○其二番目九變化

天保元年三月、中村座。作曲者杵屋三郎助。中村芝翫九變
化所作事。

八島落官女の業(官女)

「見渡せば柳櫻に錦する、都は何時か故郷に、馴れし手業
の可愛らし二より「此所の在所はナ合このなこの濱
越えて合あの濱越えて 合すつとの下の下の關内裏風俗あ
だ媚きて 合小鯛買はんか鯛買やれ 合鯛買はんや鯛や コ
レ買うてたもいなう、ア、しよんがいな、如何にみすぎぢ
やよすぎぢやとでも、おまな賣る身は蓮葉なものぢやえ
徒歩跣足「其方思へば室と八島で鹽焼く煙 合立ちし浮名
も厭ひはせいで、朝な夕なに胸くゆるする 合楨を絶えて
やふつつりと、たより渚に捨小舟 合「心づくしの明暮に
合亂れしまゝの黒髪も合取上げていふかねごとの、生田
の森の幾度か、思ひ過ごして 合恥しく孝三郎「顔も赤間が
關せかれては、枕に寒き 合几帳の風も、今は苦漏る月影
に 新編「泣いて明石の蟹の袖 ヌレ「何時檜扇を松の葉
の、磯馴れ小唄の一節に三下り「友の 合ぞめきにそゝのか
されて合船の帆綱をかけぬが無理か合須磨よく「合いとど
戀には身をやつす「夜半の 合水鶏を砧と聞いて合立てし
金戸を明けぬが無理か 合須磨よく「合恨み勝ちなる床の
内合憂やつらや「波の哀れや壇の浦 合打合刺違ふ船軍

の懸引、浮き沈むとせし程に春の夜の波より明けて敵と見えしは群れ居る鷗、関の聲と聞えしは、浦風なりけり高松のく、朝嵐とぞなりにける。

うき世風流娘揃 (七夕娘)

三下り文月や一人は欲しき花娘、色の盛りのしどけなく、肌透過す辻が端、まだ蹈みも見ぬ戀の道、露の情に濡れぬがましよ合浮氣くと言うたが恨み合星の契の一夜は嫌よ、エ、こちや何の思のたけの千代八千代、かけて願の絲合より合細い合心と思はんせ 新編一妹脊祭の七夕様に、上げる色紙や短冊へ、思ふ殿御にどうぞと書いて、心で拜んでいろは假名、お師匠様の教へさんした百人一首孝三郎一女庭訓仕付け方、よう嗜んで合堅い娘と譽められて 新編一琴も習うて奥許し合あの三味線も合ひく絲の孝三郎一三は切れても二世の縁、抱いて音締めのどうもならぬ程合の手のッ忘れぬ一五百機や、繰出す絲の苧環に合萩の錦を織姫のこがれ松蟲露振る鈴蟲合りんく、恪氣も襪襦刺せてふ機織蟲の、きりはつたりてうく合丁度合圖に鳴く草雲雀 合招く手管の花薄一秋待つ星も早

は、湯ざめの風のこはけだつ、逃げる禪コレ待つた歌一そりや聞えぬぞえ約束の合宵からなせにこぬか星合お前を思ふばつかりに合娘盛りや合藝者衆、あだなる人の懐に合抱かれて寝たを忘れぬ一寺の踊の稽古さへ、その三味線の聞き覚え、膝にもたれてされ弾きに歌一三年なじみし猫のつま、あの嬢さんのおつしやつたは、ほんに男猫は一生に、ひえぬといふは主人一猫なで聲のあはれさは、耳を越す手の涙聲、その空涙此の頃の歌一くせにして置き鼻ぐすり合星にも濡れのしつほりと合そさま故なら合どこ迄も、のほりつめたる戀の山一星の空入り雲の帯歌一大入いびしの大の字く、一はつとくしやんと止つて向ふ梅、どつとほめたりくとかく雲井はま、ならぬ 雲にかけ橋なかとまよ、よ浮るり一飛んで行きたや天の川 合ちらりと宵の明星で 唄一おて、ん手管か浮るり一泣いたか 唄一笑つたか 浮るり一 世間知らずの 唄一夜中の明星 野暮な夜明けの明星 唄一しんに九曜に成るわいな 唄一そこせく、唄一ほれたほの字の 両方一はうき星一虚空をさして飛去りぬ。

や更けて、盆の賑ふ町々に二上り一長い一兩國橋や長い合お馬でやろかお駕籠でやろか合お馬も嫌よお駕籠も嫌よ、十六七に手を引かれて参りたや合十六七は絲屋の娘娘化粧して物好き詣り合宵の戻りに殿御を見初め合朝は嫁に品定めく縁ぢやもの一風も涼しと夕間暮、照添ふ軒の花燈籠、眺めしをらしさとの初秋。

一星長者の倉入 (夜這星) 作者 松本幸二

(常磐津とのかけ合)

淨瑠璃一星が娘か娘が星か、思ひ違ひの畜生め、色のてんからと、んがやきもち合か、アがこねどり婆ア星めが合きよろり合きよろく、眼、おやくく、合ま、のかはと流星、霞うす雲横ちよにかむり、今宵やいのと合夜這星 合足はふみともからだはおどる 合胸はわな、合胸ぶるひ歌一爪立つ足の合音さへて、耳に手をあて隣のかほちや合垣を隔てて延びる蔓、一そつと伸ばす手つかまれて、一聲ぎやつとぬくめ鳥歌一ちよつと抱く肌つき放し合ふつと脊を立て合ちよつかいに一茶釜が狸と還つたか、顔は瓢箪腰は白、ぞつと乳房の絞はだ

浅草に仁王の靈驗 (仁王)

一それ東都無雙の靈場と聞く金龍山の結構は、蔓並べし山門に一金剛力士の靈像をこゝにうつして合その勢ひ合さても世俗に言傳ふ仁王立ちとはこれならん一阿吽の形相尊くも、大悲を守護なす御眸怒つて左右に合跨りしは合如何なる天魔厄神も、恐れつべうぞ見えにける一花の彌生の花の雲 合鐘は上野か浅草に 合二天の利益ぞ有難き。

○六歌仙容彩

天保二年三月、中村座。作者松本幸二。作曲者杵屋六左衛門。中村芝翫(四世歌右衛門)小町役の岩井兼三郎(六世半四郎)との六歌仙の所作事。

僧正遍昭小町

(大薩摩淨瑠璃。後、義太夫に改む)

一さればにや窺窺たる上藤の大内山に時めきて、左近の櫻色ぞ濃き、歌鶯の囀も、實に日の本の譽かや一此處に僧正遍昭は、昔の花の合良峯と嵯峨の皇居に通ひ路の御纒に重き玉の露、その浮雲に障へられて一比叡のお山

に心澄む横川の杉の闇誘ふ、思の床にぞ着き給ふ地芝此
これは僧正通照と申す知照にて候ひし一受けなば受けよ玉椿、落ちて
が身に纏うたる色衣未永劫悔罰を

の末は芥とも、是非に小町に對面と、立寄り給ふを局達

の徒事と、驚かしぬる悲しさを、推量あれと折も折三三三郎

に合長掛捌き御所育ち、雲居に名をもオロシ揚御簾を

に散りもすれ合冬の風などかせん、さりとは生者必滅會

者定離三惡道を出でながら、尙も鬼畜に迷ひしが合志

賀の性空上人も合悟りかねてか戀の道、況してや我に於

てをや一人の常とは言ひながら、悟道知識もその色の

世合迷へば煩惱地悟れば菩提合分けて女犯は眼の迷ひ

情と云ふを知れぞかし佛も假に夜叉と云ひ得道あれや

て聞の扇本調子繪空事あらうたての御事やと拂へども

合尙も離れじと引かる、袖を合振切る手には合思の丈心

の餘りて言葉なく讀人知らずと歸らるゝ。

喜撰 (清元とのかけ合) 作者松本幸二

種珊瑚我が庵は芝居の辰巳常盤町、しかも浮世を離れ里

一辭で丸めて浮氣でこねて、小町櫻の詠にあかぬ、彼

奴にうっかり眉毛をよまれ、法師くはきつゝきの、

素見ぞめきで歸らりよか合わしは瓢箪合浮く身ぢやけれ

ど浮るりぬしは餘の取所合ぬらりくらりと今日も亦、浮

かれく来て來りける、若しやと御簾をよそながら合喜

撰の花香合茶の給仕浪立つ胸を押撫でて、しまり

なけれど鉢巻を、幾度しめて水馴棹ぬれて見たさに

手を取つて、小野の夕立えにしの時雨化粧の窓の

手を取つて、どう見直して胴ぶるひ今日のご見の初

昔合悪性と聞いて此の胸が、朧の月や合松の蔭

たしやお前の政所、いつか果報も一森と、ほめられたさ

の身の願ひ、ほれすぎ程愚痴な氣に浮るり心の底の

知れかねて、じれつたいでは浮るりないかいな、なぜ惚

れさせたこれ姉え、已惚すぎた悪じやれな、わつちも

そんなら、きほひ肌、五十五貫でやらうなら廻りなんし

え、ぐわらく、鐵棒に、合路次は締りやす、長屋の姉

えが鐵砲絞りの半襟か、花見の煙管ぢやあるめえし、す

てきに首にからんだは、廊下、油揚さらひ、お隣の花

魁へ知らねえ顔もすさまじい、何だか高い觀音さんの

一鳩は五重や三重の、塔の九輪へとまりやす、する

と言はれて浮いた同志、ヤレ色の世界に出家をとける

ヤレく、こまかにちよほくれ、愚僧が住家

は京の辰巳の世を宇治山とは人はいふなり、ちやく

ちや茶園の話すこい茶の縁の橋姫、夕の口説の袖の移り

香、花橋の名小島が崎より、一散走りに走つて戻れば、

内のか、あが悋氣の角文字、牛も涎を流る、川瀬の、く

どけば内へ我がからこがる、螢を集めて手管の學問、唐

も日本も廊の戀路が山吹流しの水に照り添ふ旭のお山、

僧正と地行かんとするを押留め暫しくと宣ふを、側か
ら寄つて局達、あはれ知識の御身にて、戀ひ詫び給ふぞ
はしたなき、歸らせ給へ、地僧正様衣の袖を打拂ひ、
花咲くと上邊、地一小町御前を打見やり、御法の場にぞ、
歸らる、一小町は跡を見返り、悲しと思ふ心根を、
衣紋に含むばかりにて、局引連れ入り給ふ。

業平 小町

鼓、一梓弓引けば元末本調子、我が方へ、合夜こそ勝れ戀の

道、忍の亂れ限りなき、合野にも山にも春霞、立つ名厭は

じさりとは、靡き給へと木綿垂の、神に眞實を明

石濁合幾夜か通ふ浦々千鳥鳴いて、合濡れなん涙の雨に、喜

平、一い、や曇らじ胸の月、花の色香の、合情は仇に

移りにけりな、徒な、我は戀慕の闇々と、戀死

なん身も惜しからじ、厭はぬ我が身ながら、合なう、現な

の人ぢやえ、今宵扇のその約束を、合忍ぶ心の細殿に

合月の扇の、合御簾漏れて、薫もゆかし七重八重九重翳す

合誰が花扇、合待つ身は長き檜扇と焦れ焦る、思もほんに

白扇、胸に疊んで、合一人氣を、合紅葉、合扇の、合遺瀬もなう

れさせたこれ姉え、已惚すぎた悪じやれな、わつちも

そんなら、きほひ肌、五十五貫でやらうなら廻りなんし

え、ぐわらく、鐵棒に、合路次は締りやす、長屋の姉

えが鐵砲絞りの半襟か、花見の煙管ぢやあるめえし、す

てきに首にからんだは、廊下、油揚さらひ、お隣の花

魁へ知らねえ顔もすさまじい、何だか高い觀音さんの

一鳩は五重や三重の、塔の九輪へとまりやす、する

と言はれて浮いた同志、ヤレ色の世界に出家をとける

ヤレく、こまかにちよほくれ、愚僧が住家

は京の辰巳の世を宇治山とは人はいふなり、ちやく

ちや茶園の話すこい茶の縁の橋姫、夕の口説の袖の移り

香、花橋の名小島が崎より、一散走りに走つて戻れば、

内のか、あが悋氣の角文字、牛も涎を流る、川瀬の、く

どけば内へ我がからこがる、螢を集めて手管の學問、唐

も日本も廊の戀路が山吹流しの水に照り添ふ旭のお山、

誰でもかれでも二世の契りは、平等院とや、さりとはこ

れはうるさいこんだに、歸命頂禮どら如來、衆生

手だての歌念佛、釋迦牟尼佛も床いそぎ、だいて涅

三六九

繁の長枕、睦言がはりのお經文唄唄なまいだくく合

なぜに届かぬ我が思ひほんにササ淨りりり忍ぶ戀には如來ま

で、来て見やしやんせ阿彌陀笠、黄金の膚で難有や唄唄

なまいだくく合なぜに届かぬ我が思ひ、ほんにサ、こ

ゝに極まる樂しさよ淨りり難波江の片葉の蘆の結ほれか

りアレハサ、コレハサ唄唄とけてほぐれて逢ふ事もま

つにかひある合ヤンレ夏の雨淨りりヤアとこせ、よいや

な唄唄ありやりや淨りりこれわいな唄唄このなんでもせ

淨りり住吉の岸べの茶屋に腰打かけてヨイヤサ、コレハ

サ唄唄松でつろやれ蛤を、逢うて嬉しき合ヤンレ夏の月

淨りりヤアとこせ、よいや唄唄ありやりや淨りりこれわ

いな、このなんでもせ淨りり姉さん音上かえ、島田金谷

は川のあひ、旅籠はびたでお定まり唄唄お泊りならば泊

らんせ、お風呂もとんくわいてある障子も此頃張りか

へた合疊も此の頃かへてある合お寢間のお伽をまけにし

て淨り。草鞋の紐のあだどけの、結んだ後の一夜づま歌

唄唄あんまり憎うも合あるまいか、ても淨りりさうだろ

くさうである歌唄住吉様の岸の姫松目出たさよ、いさ

盡きしなく、榮ふる國の風俗を、三十一文字にその言草の

いづれ劣らぬ合歌聖合六歌仙とて雲居の空に合高き譽ぞ

残しける。

○姿花后雛形

天保三年九月、市村座。作者劇神仙。作曲者梓屋勝五郎。

澤村調升五變化所作事。長唄にては小鍛冶名高し。

小鍛冶

稻荷山三つの燈火明かに、心を磨く鍛冶の道、小狐丸

と末の代に、残すその名ぞ著るきそれ唐土に傳へ聞く

龍泉太阿はいさ知らず、我が日の本の鍛工、天國の座

神息が、國家鎮護の劔にも、優りはするとも劣らじと、

神の力の相槌を、打つや丁々しつていこり、他所に聞

くさへ勇ましき打つと云ふそれは夜寒の麻衣、遠の砧

も音添へて打てや現の宇津の山、鄙も都も秋更けて、降る

や時雨の初紅葉こがる、色を鐵床に火加減湯加減秘密

の大事、燒刃渡しは陰陽和合、露にも濡れて薄紅葉、染

めて色増す金色は、霜夜の月と澄優る、手柄の程ぞ類な

めの御祈禱清めの御祈禱、天下太平國土安穩目出たさよ

黒主 小町

三下り言の葉に、外記唄やはらぐ國と神代より合名に大伴

の黒主と合小町櫻の色はえて、目出たき御代の歌合、詠

じて君を仰がんとまかなくに合何をたねとて浮草の合生

ひ茂るてふ合水底に、うつろふ月のくもらじツミ桂男の

心まばゆき鏡山、いざ立寄りて御簾の間のゆかしき人

の花の香に合迷ふもつらき戀風がぞつと身にしむすが

らも、嬉しい縁の歌合せ合筆のすさみの墨色も、薄いは

嫌よあだ事に、解けぬや露の玉、掛けても袖はよも濡

れじ詠和歌の浦曲の藻鹽草く、打ちかけて洗はん

染めにし筆も浮草の、流れて消ゆる夕霞、花の打衣合掛

烏帽子合廻らす袖や波返り面白やく、合天の川瀬に洗

ひしは、秋の七日の衣なり合穎川に耳洗ひしは合濁れる

世をぞ澄しける合春の歌を洗うては、霞の袖を解かうよ

合冬の歌を洗へば合袂も寒き水鳥の上毛の霜に洗はん、

時雨に濡れて洗ひしは、紅葉の錦なりけり濁の眞砂や

き清光凛々麗しき、若手の業物切物と、四方にその名は

響きけり。

○めりやす 雪の梅

天保三年十一月、中村座。作者中村故一。作曲者梓屋六左衛門。

本調子色も香も合皆白妙の雪の梅合上邊は解けて肌寒き

香中合せの合枝の態筒へ持たせて投入れの直な心を合ア

レ憎らしい一人合眺めて合辛氣やつらや合無理に咲せ

しまだな手の内。

○初子日

天保四年三月、作者劇神仙。作曲者梓屋六三郎。

本調子驚の初音の今日に袖連れて、曳くや小松の千代の

影、心長閑けき春遊び合野邊はまだうら若草の妻定め、心

の帯は何時の間に、解けて他所目はつれなく見せて、知

らぬ振して白雪の、アノしらくしい顔わいな、忍び車

の通ひ路も、合曇る夕を思へばほんに、粹な月夜であり

ながら、軒の霞の引く袖に、惜む別れのある事も、知ら

で憎さの百千鳥、聲に明行く窓の戸の、はしたないのも
戀の癖なまめかし二上り一咲初めし梅をえにしの始にて、
翳す櫻の色も香も、花で濟む世を浮氣に拗ねて、氣儘ら
しさの枝振も折りてゆかしき花活の合水も濁らぬ末かけ
て、梅と櫻の花心羨し一東風そよぐ門松に、追羽根の音
手毬唄合添へて盡せぬ萬代の聲。

○めりやす 月の隈

天保五年七月、森田座。作曲者杵屋佐吉。

木罫子一冬ならで月のけはひの物凄き雲間漏れ来る稻妻
は、それかあらぬかきらくと合野邊に亂る、夜半の
霜、心鍛へし胸の劍を八重一重、隔て垣根のしかな草合
こほれ易さよ風の白露。

○めりやす 井筒

天保五年九月、森田座。作曲者杵屋佐吉。

一紫の水に逢うたる燕子花、開くや花の五丁町、露に零
る、この涙合夏書の夢は濃い墨と、ならぬ契の薄墨か、夜
目には讀めど讀めかぬる合濡れて寝よとの時鳥、暫く空

だ打てや打て、打つは太鼓が取持ち顔か、拗ねて裏向く
水道尻に合お神樂齋麥なら少し伸びたと囃されて、ちん
／＼鴨の床の内、たんたん狸の空寝入り、抓つた後の所
縁の色に、打つて變つた仲直り、あれはさこれはさよい
聲かけや、よいやなしどもなや三下り一人目忍ぶは裏茶屋
に、爲になるのを振捨てて、深く沈みし戀の淵、心がら
なる身の憂さは、いつそつらいぢやないかいな合逢はぬ
昔がなつかしや一獅子に添ひてや戯れ遊ぶ浮立つ色の群
りて、夕日花咲く靡景色、目前と貴賤現なり一暫く待た
せ給へや、宵の約束今行く程に、夜も更けじ合獅子團
亂旋の舞樂もかくや、勇む末社の花に戯れ酒に伏し、大
金散らす君達の、打てや大門全盛の、高金の奇特現れて
靡かぬ草木もなき時なれや、千秋萬歳萬々歳と豊に祝す
獅子頭。

○やれ 衣

天保六年三月、森田座。作曲者杵屋佐吉。清水の清玄尼岩

井半四郎。唄淨瑠璃。

に告げにけり。

○俄獅子

天保五年十月、作曲者杵屋六三郎。

二上り鼓唄一花と見つ五町驚かぬ人もなし、汝も迷ふや様
々に合四季折々の戯は、紋日物日の掛言葉合蝶や胡蝶
の禿俄の浮れ獅子合見返れば花の屋臺に見えつ隠れつ色
々の姿優しき仲の町一合心盡しのナその玉章も、何時か渡
さん袖の内、心一つに思ひ草、よしや世の中合狂ひ亂る
、牝獅子牡獅子の彼方へひらり、此方へひらり、ひらく
／＼合忍ぶの峰か重ね夜具、枕の岩間瀧津瀬の、酒に亂
れて足もたまらず合他所の見る目も白浪やキヤリヤア秋の
最中の月は竹村、更けて逢ふのが間夫の客ヨイ／＼クド
キ辻占みごと繰り返し、何故この様に忘れぬ、恥しい
程愚痴になる一と言ふちやア無理酒に何でも此方の待人
戀のナ戀の山屋が豆腐に鏡、締のないのでぬらくらふ
はつく嘘ばかりヨイ／＼ヨイヤナクドキ一宵から待たせて
又行かうとは、エ、餘など膝立直し一締めろヤレたん

一筑波山合紫霞む夕暮は合響くや他所の鐘が淵合水之行
方の水や空合翼遙に雁の鳴きて歸るか故郷の便ゆかし
き春の風。

○めりやす 旅衣

天保七年七月、市村座。作曲者杵屋勝左衛門。善知鳥安方

瀧夜又姫市川九藏。

一陸奥の外が濱邊に打つ波の、千々に碎くる物思ひ一胸
安からぬ身と知らで合誰が安方と呼子鳥一親は空にて啼
く聲聞けば、案じ過しの小夜風に、零る、露の玉簾一巻
き納めては巻き返す合御宣の文も心には、諦めて見ても
まゝならぬ、愚痴な女子の亂れ髪、昨夜の蟲の身を焦す
それも戀やらア愛しらし風や、寒き窓の戸に、霜か氷
か澄渡る、水に離れて鴛鴦鳥の、思交さすつらき劍羽。

○めりやす 律の調

天保七年七月、市村座。作曲者杵屋勝左衛門。

一連れてさ渡る雁がねは合琴柱に落つる聲々、草葉に結
ぶ朝露は合真砂に茂る白玉か、月の砂は明かに、岸は緑